千葉県八千代市

上　谷　遺　跡

（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

― 第３分冊 ―

２００４

大成建設株式会社

八千代市遺跡調査会

序　　文

八千代市は千葉県の北西部に位置し、東京への通勤圏内として様々な住宅団地が造られてまいりました。特に昭和20年代末からの八千代台団地の計画・造成・建設と30年代初頭の入居開始は、今となっては小規模な住宅団地となってしまいましたが、全国に先駆けて造られた「団地」として「住宅団地発祥の地」の記念碑的なものとなっております。その後、昭和40年代にはいると、数多くの住宅団地が造成され、人口の増加はめざましいものがありました。これに伴い八千代市の姿は、純農業地帯から住宅都市へとその趣を変えてまいりました。

一方、住宅としての発展に伴う宅地開発などによって失われていく埋蔵文化財を保護するために、発掘調査等を行いその保護に努めてまいりました。そして八千代市の大地には、およそ３万年前の昔である旧石器時代から多くの人々が暮らしを営んできたことが、これらの発掘調査によって次第に分かってきております。また、新川流域の奈良・平安時代のムラの跡からは数多くの墨書土器が出土しており、全国的にみても八千代市はその出土数において有数の地となっております。

このようななかで、八千代市の北東部の保品・神野・米本地区にわたる地区に「(仮称) 八千代カルチャータウン」の開発が計画されたのは、昭和40年代のことと聞いております。しかしこの開発事業予定区域内には、多くの遺跡の所在が知られておりました。そして、これら埋蔵文化財の保護のために、その取り扱いについて、関係諸機関による慎重な協議が重ねられてまいりました。その結果、遺跡の一部を現状保存し、保存の困難な地区についてはやむを得ず発掘調査を行い、記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は八千代市遺跡調査会の手により、昭和63年３月から平成11年３月にかけて行われました。この長い期間に調査を行った遺跡は９遺跡34地点に及び、旧石器時代から中世・近世に至る貴重な成果を得ることができました。そして平成11年度は整理作業の準備期間にあて、平成12年４月より順次、本整理作業を進めておるところです。

本書はこの９遺跡のうち、上谷遺跡の発掘調査の成果の一部をまとめたものです。上谷遺跡では主に旧石器時代から縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代の人々の暮らしの跡が残されておりましが、その調査の成果を５地区に分け、５分冊によって報告することとなっております。今回、ここに報告いたしますⅢ地区では、特に奈良・平安時代のムラの跡から、その当時の人々の暮らしに伴う遺物も数多く出土しております。また、土器に文字を記した墨書土器と呼ばれるものが数多く出土し、当時の人々の暮らしの一端が明らかとなってまいりました。この成果をまとめた本書が、学術資料としてはもとより、文化財保護に広く地域の歴史に興味を持たれる方々によって活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまでの長い期間にわたってご協力いただきました大成建設株式会社をはじめといたしまして、数々のご指導・ご助言をいただいた千葉県教育委員会等の諸機関並びに関係諸氏に厚くお礼申し上げます。また、発掘調査及び整理作業に従事された方々に深く感謝いたすところです。

平成16年８月

八千代市遺跡調査会
会　長　三浦　幸子

例　　言

1．本書は、『千葉県八千代市上谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』である。
2．上谷遺跡を５つの地区に分割し、各地区ごとに報告する予定である。報告書は、上谷遺跡で５分冊となる予定である。
3．本書は、上谷遺跡全５分冊のうちの第３分冊である。本書で報告する地区は、上谷遺跡のⅢ地区である。
4．上谷遺跡は、千葉県八千代市保品字上谷1786他外に所在する。
5．上谷遺跡の発掘調査及び整理作業は、大成建設株式会社の委託により、千葉県教育委員会・八千代市教育委員会の指導のもと、八千代市遺跡調査会が実施した。
6．発掘調査の実施期間、調査面積等については、第１章に記載した。
7．整理作業及び報告書刊行作業は、初期整理及び整理の一部を武藤健一・蒙茂美が行い、その後の整理を朝比奈竹男・宮澤久史が担当し、平成14年11月１日～平成15年８月31日までの期間実施した。
8．本書の執筆・編集は朝比奈竹男が行った。
9．本書の図版作成及び編集・レイアウト作業は、一部を除き、DTP(Desktop Publishing=コンピュータによる版下作成)システムによるデジタル化を図り、伊勢田めぐみ（株式会社東京航業研究所）が担当した。
10．発掘調査における航空写真及び遺構図・全測図・地形図の作成は、要航業株式会社・株式会社東京航業研究所が行った。
11．整理作業及び報告書刊行作業におけるDTPシステムによるデジタル化作業全般において、株式会社東京航業研究所の協力を得た。
12．遺物の実測図及びトレース図の作成については、一部を除き株式会社東京航業研究所に委託した。
13．上谷遺跡の内容については本書をもって正式報告とし、年報その他において公表された内容と相違する点については、本書の記述により訂正させていただくものとする。
14．発掘調査に伴う出土品及び図面・写真等の記録類は、八千代市教育委員会が保管している。
15．出土文字資料の判読・解説については、国立歴史民俗博物館平川南教授にご指導をいただいた。
16．発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の機関及び諸氏をはじめとする多くの方々からご指導、ご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。（五十音順・敬称略）

千葉県教育庁文化財課　八千代市教育委員会　（財）千葉県文化財センター　（財）千葉市教育振興財団埋蔵文化財センター　（財）印旛郡市文化財センター
青沼道文　阿部寿彦　安藤広道　大沢　孝　小笠原永隆　小川和博　小倉淳一　柿沼修平
川端弘士　菊池健一　黒沢　浩　郷堀英司　関口達彦　佐藤順一　田形孝一　高花宏行
田川　良　田中英世　仲村　浩　平川　南　深谷　昇　藤岡孝司　峰村　篤　村松　篤
山岸良二

凡　　例

1．遺構番号は発掘調査時には、遺構種別ではなく調査地区ごとの通番号を付与した。遺物の注記、図面・写真への記録はこれによった。しかし、本書では遺構別に通番号を新たに付与し直したこの遺構番号については、第1章に新旧番号の対照表を掲載したので参照していただきたい。

2．本書の挿図において使用した地図は以下の通りである。いずれも一部改変・合成して使用している。

図1　国土地理院発行　1/25,000地形図　「小林」「佐倉」「白井」「習志野」（平成12年発行）

図2　大成建設株式会社発行　1/40,000　Y．K．プロジェクト　空中写真測量図（昭和63年発行）

3．本書の挿図において、方位の表示のないものについては、公共座標に基づく座標北を上としている。

4．本書の遺構実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 図中及び本文中における方位は、公共座標に基づく座標北を示している。

(2) 縮尺率は原則として以下のとおりとするが、これ以外のものについては、図中に示したスケールを参照されたい。

住居跡　1/80　掘立柱建物　1/80　方形周溝墓　1/100　土坑　1/50　溝　1/50　炉穴　1/50

(3) 住居跡平面図に使用した一点鎖線は、床の硬化範囲を示している。

(4) 遺構実測図で使用した波線は、推定復元線を示している。

(5) 遺構実測中のスクリーントーンの表示は原則として以下のとおりであるが、個々については実測図脇に表示した凡例を参照されたい。

(6) 竈のある住居跡にあっては、長軸と短軸の距離及び方位は、各コーナーから対角線に線を引いた上で住居の中心を出し、その中心の壁間での計測値を出した。また、主軸は煙道にて計測した。

5．本書の遺物実測図における用例は以下のとおりである。

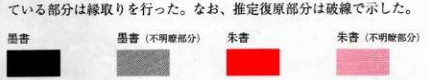
(1) 縮尺率は原則として以下のとおりであるが、個々については図脇に示したスケールを参照されたい。

土器実測図　1/4　土器拓影図　1/4　土製品　1/3　石器・石製品　1/2　1/3　1/4

鉄器・鉄製品　1/4　銅製品　1/2　支　脚　1/4

(2) 遺物実測図中のスクリーントーンの表示は以下のとおりである。

(3) 墨書・朱書は以下のスクリーントーンで表現した。墨書・朱書は不明瞭な部分が多いため、明瞭な部分はベタ塗りで、不明瞭な部分は20%のトーンをかけて処理した。さらに文字の輪郭がはっきりしている部分は縁取りを行った。なお、推定復原部分は破線で示した。



6．本書の遺物写真における用例は以下のとおりである。

(1) 写真図版中における遺物番号は、本文中における遺物番号と一致している。

(2) 写真図版中の遺物写真縮尺は、墨書土器等を除き、概ね遺物実測図と同じとした。

7．墨書土器の判別にあたっては、赤外線投射カメラによってモニター観察を行った。また、報告書の写真作成については、文字判読を優先したため一部コンピュータによって画像処理を行った。

8．本書では土器に刻まれた文字のうち、土器の焼成前に刻まれたものを「箆（ヘラ）書」、土器の焼成後に刻まれたもの「線刻」として区分している。

9．鉄製品及び銅製品は、株式会社東京航業研究所が、X線による撮影後、写真から実測を行った。

10．遺構図において、平面図及びセクション図に実測時期の異なりから若干の相違があるが、セクション図は現場作成図を優先させている。

目　　次

序　文
例　言
凡　例
目　次
挿図目次
表目次
写真図版目次

第１章　上谷遺跡Ⅲ地区の概要・・・・・・・1
第１節　上谷遺跡Ⅲ地区の調査の経緯・・1
第２節　上谷遺跡Ⅲ地区の概要と調査の概要・・5
第２章　遺構及び遺物・・・・・・・・・・9
第１節　縄文時代・・・・・・・・・・・9
第１項　竪穴住居跡・・・・・・・・・9
第２項　炉穴・・・・・・・・・・・・16
第３項　土坑・・・・・・・・・・・・34
第２節　弥生時代・・・・・・・・・・・50
第３節　奈良・平安時代・・・・・・・・64
第１項　竪穴住居跡・・・・・・・・・64
第２項　掘立柱建物跡・・・・・・・・194
第３項　土坑・・・・・・・・・・・・207
第４節　中世以降・・・・・・・・・・・223
第３章小　結・・・・・・・・・・・・・・・228
第１節　縄文時代・・・・・・・・・・・228
第１項　炉穴・・・・・・・・・・・・228
第２項　中期初頭の遺構について・・・229
第２節　奈良・平安時代・・・・・・・・233
第１項　上谷遺跡Ⅲ地区の墨書土器・・・・・・・・234
第２項　長文墨書土器について・・・・238

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

図 1　上谷遺跡位置図（1/50,000）・・・・1
図 2　（仮称）八千代カルチャータウン開発
　事業関連遺跡地形図・・・・・・・2
図 3　上谷遺跡本調査地区割図・・・・・・2
図 4　上谷遺跡Ⅲ地区遺構配置図・・・・・3
図 5　上谷遺跡基本土層図・・・・・・・・5
図 6　上谷遺跡Ⅲ地区
　縄文時代遺構配置図・・・・・・・7
図 7　A180・・・・・・・・・・・・・・・10
図 8　A181・・・・・・・・・・・・・・・11
図 9　A183・・・・・・・・・・・・・・・13
図 10　A183（2）・・・・・・・・・・・・14
図 11　A184・・・・・・・・・・・・・・・15
図 12　F127,F128,F129,F130・・・・・・・17
図 13　F131・・・・・・・・・・・・・・・18
図 14　F132・・・・・・・・・・・・・・・19
図 15　F133・・・・・・・・・・・・・・・20
図 16　F134・・・・・・・・・・・・・・・22
図 17　F134（2）・・・・・・・・・・・・23
図 18　F135・・・・・・・・・・・・・・・24
図 19　F136,F137,F138,F139・・・・・・・25
図 20　F136,F137,F138,F139（2）・・・・・26
図 21　F140,F141,F142,F143・・・・・・・27
図 22　F144,F145・・・・・・・・・・・・29
図 23　F146・・・・・・・・・・・・・・・30
図 24　F146（2）・・・・・・・・・・・・31
図 25　F147・・・・・・・・・・・・・・・32
図 26　F148,F149,F150・・・・・・・・・・33
図 27　D116,D117,D119,D121・・・・・・・35
図 28　D122,D124,D126・・・・・・・・・36
図 29　D127,D129,D133,D134,D136・・・・・38
図 30　D150,D155・・・・・・・・・・・・40
図 31　D157,D159,D161・・・・・・・・・41
図 32　D162,D163,D165・・・・・・・・・43
図 33　D164,D166,D167・・・・・・・・・44
図 34　D168,D169,D170・・・・・・・・・46
図 35　D171・・・・・・・・・・・・・・・47
図 36　D175,D176,D178・・・・・・・・・48
図 37　D180,D181,D182・・・・・・・・・49
図 38　上谷遺跡Ⅲ地区
　弥生時代遺構配置図・・・・・・・・51
図 39　A146・・・・・・・・・・・・・・・53
図 40　A146（2）・・・・・・・・・・・・54
図 41　A147・・・・・・・・・・・・・・・57
図 42　A151・・・・・・・・・・・・・・・59
図 43　A151（2）・・・・・・・・・・・・60
図 44　A152・・・・・・・・・・・・・・・62
図 45　A152（2）・・・・・・・・・・・・63
図 46　上谷遺跡Ⅲ地区
　奈良・平安時代遺構配置図・・・・・65
図 47　A125・・・・・・・・・・・・・・・67
図 48　A125（2）・・・・・・・・・・・・68
図 49　A126・・・・・・・・・・・・・・・71
図 50　A126（2）・・・・・・・・・・・・72
図 51　A127・・・・・・・・・・・・・・・74
図 52　A127（2）・・・・・・・・・・・・75
図 53　A127（3）・・・・・・・・・・・・76
図 54　A127（4）・・・・・・・・・・・・77
図 55　A128・・・・・・・・・・・・・・・80
図 56　A128（2）・・・・・・・・・・・・81
図 57　A129・・・・・・・・・・・・・・・83
図 58　A129（2）・・・・・・・・・・・・84
図 59　A130・・・・・・・・・・・・・・・85
図 60　A130（2）・・・・・・・・・・・・86
図 61　A131・・・・・・・・・・・・・・・87
図 62　A132・・・・・・・・・・・・・・・88
図 63　A132（2）・・・・・・・・・・・・89
図 64　A133・・・・・・・・・・・・・・・91
図 65　A133（2）・・・・・・・・・・・・92
図 66　A134・・・・・・・・・・・・・・・94
図 67　A135・・・・・・・・・・・・・・・95
図 68　A135（2）・・・・・・・・・・・・96
図 69　A136・・・・・・・・・・・・・・・98
図 70　A136（2）・・・・・・・・・・・・99

図71 A137a・b・・・・・・・・・・・・・ 102
図72 A137a・b（2）・・・・・・・・・・ 103
図73 A138・・・・・・・・・・・・・・ 104
図74 A138（2）・・・・・・・・・・・・ 105
図75 A139・・・・・・・・・・・・・・ 107
図76 A139（2）・・・・・・・・・・・・ 108
図77 A140・・・・・・・・・・・・・・ 110
図78 A140（2）・・・・・・・・・・・・ 111
図79 A141a・b・・・・・・・・・・・・・ 112
図80 A141a・b（2）・・・・・・・・・・ 113
図81 A142・・・・・・・・・・・・・・ 115
図82 A142（2）・・・・・・・・・・・・ 116
図83 A143・・・・・・・・・・・・・・ 117
図84 A143（2）・・・・・・・・・・・・ 118
図85 A144a・b・・・・・・・・・・・・・ 119
図86 A145・・・・・・・・・・・・・・ 121
図87 A145（2）・・・・・・・・・・・・ 122
図88 A148・・・・・・・・・・・・・・ 123
図89 A149・・・・・・・・・・・・・・ 125
図90 A150・・・・・・・・・・・・・・ 127
図91 A153・・・・・・・・・・・・・・ 129
図92 A153（2）・・・・・・・・・・・・ 130
図93 A154・・・・・・・・・・・・・・ 132
図94 A154（2）・・・・・・・・・・・・ 133
図95 A155・・・・・・・・・・・・・・ 135
図96 A156・・・・・・・・・・・・・・ 137
図97 A156（2）・・・・・・・・・・・・ 138
図98 A157・・・・・・・・・・・・・・ 140
図99 A157（2）・・・・・・・・・・・・ 141
図100 A158・・・・・・・・・・・・・・ 142
図101 A159・・・・・・・・・・・・・・ 144
図102 A160・・・・・・・・・・・・・・ 146
図103 A160（2）・・・・・・・・・・・・ 147
図104 A161・・・・・・・・・・・・・・ 149
図105 A161（2）・・・・・・・・・・・・ 150
図106 A162・・・・・・・・・・・・・・ 152
図107 A162（2）・・・・・・・・・・・・ 153
図108 A163・・・・・・・・・・・・・・ 157
図109 A164・・・・・・・・・・・・・・ 158
図110 A164（2）・・・・・・・・・・・・ 159
図111 A165・・・・・・・・・・・・・・ 161
図112 A166・・・・・・・・・・・・・・ 163
図113 A167・・・・・・・・・・・・・・ 165
図114 A168・・・・・・・・・・・・・・ 167
図115 A169・・・・・・・・・・・・・・ 169
図116 A169（2）・・・・・・・・・・・・ 170
図117 A170・・・・・・・・・・・・・・ 171
図118 A170（2）・・・・・・・・・・・・ 172
図119 A171・・・・・・・・・・・・・・ 174
図120 A171（2）・・・・・・・・・・・・ 175
図121 A172・・・・・・・・・・・・・・ 177
図122 A173・・・・・・・・・・・・・・ 178
図123 A174・・・・・・・・・・・・・・ 180
図124 A175・・・・・・・・・・・・・・ 181
図125 A176・・・・・・・・・・・・・・ 183
図126 A177・・・・・・・・・・・・・・ 185
図127 A177（2）・・・・・・・・・・・・ 186
図128 A178・・・・・・・・・・・・・・ 188
図129 A178（2）・・・・・・・・・・・・ 189
図130 A179・・・・・・・・・・・・・・ 190
図131 A179（2）・・・・・・・・・・・・ 191
図132 A182・・・・・・・・・・・・・・ 192
図133 A182（2）・・・・・・・・・・・・ 193
図134 B047・・・・・・・・・・・・・・ 195
図135 B048・・・・・・・・・・・・・・ 196
図136 B048（2）・・・・・・・・・・・・ 197
図137 B049・・・・・・・・・・・・・・ 198
図138 B050・・・・・・・・・・・・・・ 199
図139 B051・・・・・・・・・・・・・・ 200
図140 B052・・・・・・・・・・・・・・ 201
図141 B052（2）・・・・・・・・・・・・ 202
図142 B053・・・・・・・・・・・・・・ 203
図143 B054・・・・・・・・・・・・・・ 204
図144 B055・・・・・・・・・・・・・・ 205
図145 D105,D107,D010.D011・・・・・・ 208
図146 D112,D113,D114,D120,D123・・・・ 209
図147 D125・・・・・・・・・・・・・・ 211
図148 D128,D130,D131,D132・・・・・・ 212
図149 D139,D140,D141,D142,D143,D144・・ 215
図150 D145,D146,D147,D148,D149,D152・・ 216

図151　D151,D154,D158,D160,D172,D173・　218
図152　D174,D177,D179,D183・・・・・・　221
図153　上谷遺跡Ⅲ地区
　　中世以降遺構配置図・・・・・・・222
図154　D103,D104,D106,D108,D109・・・・224
図155　D115,D118・・・・・・・・・・・　225
図156　D135,D137・・・・・・・・・・・　226
図157　D184・・・・・・・・・・・・・・　227
図158　縄文時代早期遺構配置図・・・・・　230
図159　縄文時代中期
　　五領ヶ台期遺構配置図・・・・・・232
図160　出土文字資料検出遺構配置図・・・　234
図161　上谷遺跡Ⅲ地区出土文字
　「得」「万」「福」を出土する遺構・・・　235
図162　上谷遺跡Ⅲ地区出土文字
　「竹」「竹野」「野」を出土する遺構・・　236
図163　上谷遺跡Ⅲ地区出土文字
　「大」「大家」「家」を出土する遺構・・　237
図164　長文文字資料出土遺構図・・・・・　239

表　目　次

表1　上谷遺跡新旧遺構番号対照表・・・・6
表2　A180遺物観察表・・・・・・・・・・11
表3　A183遺物観察表・・・・・・・・・・14
表4　F134遺物観察表・・・・・・・・・・22
表5　A146遺物観察表・・・・・・・・・・54
表6　A147遺物観察表・・・・・・・・・・58
表7　A151遺物観察表・・・・・・・・・・60
表8　A152遺物観察表・・・・・・・・・・63
表9　A125遺物観察表・・・・・・・・・・69
表10　A126遺物観察表・・・・・・・・・・72
表11　A127遺物観察表・・・・・・・・・・78
表12　A128遺物観察表・・・・・・・・・・81
表13　A129遺物観察表・・・・・・・・・・84
表14　A130遺物観察表・・・・・・・・・・86
表15　A131遺物観察表・・・・・・・・・・88
表16　A132遺物観察表・・・・・・・・・・90
表17　A133遺物観察表・・・・・・・・・・93
表18　A134遺物観察・・・・・・・・・・・95
表19　A135遺物観察表・・・・・・・・・・97
表20　A136遺物観察表・・・・・・・・・・100
表21　A137a.b遺物観察表・・・・・・・・・103
表22　A138遺物観察表・・・・・・・・・・106
表23　A139遺物観察表・・・・・・・・・・109
表24　A140遺物観察表・・・・・・・・・・111
表25　A141a.b遺物観察表・・・・・・・・・113
表26　A142遺物観察表・・・・・・・・・・116
表27　A143遺物観察表・・・・・・・・・・118
表28　A144a.b遺物観察表・・・・・・・・・120
表29　A145遺物観察表・・・・・・・・・・122
表30　A148遺物観察表・・・・・・・・・・124
表31　A149遺物観察表・・・・・・・・・・126
表32　A150遺物観察表・・・・・・・・・・128
表33　A153遺物観察表・・・・・・・・・・130
表34　A154遺物観察表・・・・・・・・・・134

表35　A155遺物観察表・・・・・・・・・・・136
表36　A156遺物観察表・・・・・・・・・・・139
表37　A157遺物観察表・・・・・・・・・・・141
表38　A158遺物観察表・・・・・・・・・・・143
表39　A159遺物観察表・・・・・・・・・・・144
表40　A160遺物観察表・・・・・・・・・・・147
表41　A161遺物観察表・・・・・・・・・・・150
表42　A162遺物観察表・・・・・・・・・・・154
表43　A163遺物観察表・・・・・・・・・・・156
表44　A164遺物観察表・・・・・・・・・・・160
表45　A165遺物観察表・・・・・・・・・・・162
表46　A166遺物観察表・・・・・・・・・・・164
表47　A167遺物観察表・・・・・・・・・・・166
表48　A168遺物観察表・・・・・・・・・・・168
表49　A169遺物観察表・・・・・・・・・・・170
表50　A170遺物観察表・・・・・・・・・・・173
表51　A171遺物観察表・・・・・・・・・・・175
表52　A172遺物観察表・・・・・・・・・・・177
表53　A173遺物観察表・・・・・・・・・・・179
表54　A174遺物観察表・・・・・・・・・・・180
表55　A175遺物観察表・・・・・・・・・・・182
表56　A176遺物観察表・・・・・・・・・・・184
表57　A177遺物観察表・・・・・・・・・・・186
表58　A178遺物観察表・・・・・・・・・・・189
表59　A179遺物観察表・・・・・・・・・・・191
表60　A182遺物観察表・・・・・・・・・・・193
表61　B047遺物観察表・・・・・・・・・・・194
表62　B048遺物観察表・・・・・・・・・・・197
表63　B049遺物観察表・・・・・・・・・・・199
表64　B052遺物観察表・・・・・・・・・・・202
表65　B053遺物観察表・・・・・・・・・・・203
表66　B054遺物観察表・・・・・・・・・・・205
表67　掘建柱建物跡一覧表・・・・・・・・・206
表68　D110遺物観察表・・・・・・・・・・・208
表69　D125遺物観察表・・・・・・・・・・・211

写 真 図 版 目 次

図版 1 上谷遺跡全景（南側から）
上谷遺跡Ⅲ地区遺構検出状況
図版 2 A180,A181,A183,D167,F127,F129,F130
F131,F132,F133,F134,F135,F136
図版 3 F137,F138,F139,F140,F141,F142,F143
F144,F145,F146,D138,F147,F148,F149
F150,D116,D117,D119
図版 4 D121,D122,D124,D126,D127,D129,D133
D134,D136,D150,D153,D155,D157,D159
D162,D163,D164
図版 5 D165,F150,D166,D167,D168,D169,D170
D171,D175,D176,D178,D180,D181,D182
A146
図版 6 A147,A151,A152,A125,A126,A127,A128
A129
図版 7 A130,A131,A132,A133,A134,A135,A136
A137
図版 8 A138,A139,A140,A141,A142,A143,A144
A145
図版 9 A148,A149,A150,A153,A154,A155,A157
図版 10 A156,A158,A159,A160,A161,A162,A163
図版 11 A164,A165,A166,A167,A168,A169,A170
図版 12 A171,A172,A173,A174,A175,A176,A177
図版 13 A177,A178,A179,A182,B047,B048,B049
図版 14 B050,B051,B052,B053,B054,B055,D105
D107,D110
図版 15 D111,D112,D113,D114,D120,D123,D125
D128,D130,D131,D132,D139,D140,D141
D142,D143,D144,D145,D146
図版 16 D147,D148,D149,D151,D152,D154,D158
D172,D173,D174,D177,D179,D183,D103
D104,D106,D108,D109
図版 17 D115,D118,D135,D137,D184
遺物 A180,A181,A183
図版 18 遺物 A183（2）,F129,F131
図版 19 遺物 F133,F134,F135,F136,F138,F140
図版 20 遺物 F144,F146,D124,D136,D162,D164
D169,D171,D180,D182
図版 21 遺物 A146,A147,A151,A125
図版 22 遺物 A125（2）,A126,A127
図版 23 遺物 A127（2）
図版 24 遺物 A127（3）,A128,A129,A130
図版 25 遺物 A131,A132,A133
図版 26 遺物 A134,A135,A136
図版 27 遺物 A137,A138,A139
図版 28 遺物 A140,A141,A142,A143,A144
図版 29 遺物 A145,A148,A149,A150
図版 30 遺物 A153,A154,A155
図版 31 遺物 A156,A157,A158,A159
図版 32 遺物 A160,A161,A162
図版 33 遺物 A164,A165,A166
図版 34 遺物 A167,A168,A169
図版 35 遺物 A169（2）,A170,A171,A172
A173
図版 36 遺物 A174,A175,A176,A177
図版 37 遺物 A178,A179,A182,B047
図版 38 遺物 B048,B049,B052,B054,D110
墨書土器・線刻土器・箆書土器（1）
図版 39 墨書土器・線刻土器・箆書土器（2）
図版 40 墨書土器・線刻土器・箆書土器（3）
図版 41 墨書土器・線刻土器・箆書土器（4）

第１章　　上谷遺跡Ⅲ地区の概要

第１節　上谷遺跡Ⅲ地区の調査の経緯

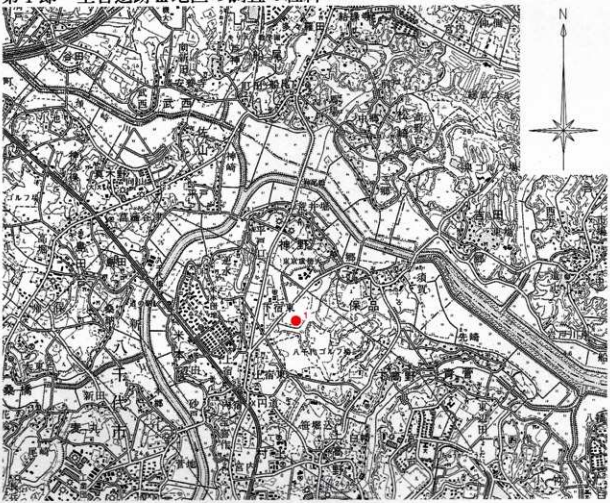


図１　上谷遺跡位置図(1/50,000)

上谷遺跡の発掘調査は、(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連区域内における埋蔵文化財発掘調査の一環として行われた。例言に記したとおり本報告書は『(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書』としては６冊目にあたり、「上谷遺跡」としては３分冊目となるものである。発掘調査を含めた事業全体の経緯等の詳細は、既刊の『栗谷遺跡－第１分冊－』及び『上谷遺跡－第１分冊－』を参照していただき、ここでは上谷遺跡Ⅲ地区の調査経緯について触れておきたい。

上谷遺跡の発掘調査は平成４年４月より10月にかけて第１次確認本調査を、また、平成７年７月から３月にかけて第２・３次確認調査を行った。そして平成８年度から10年度にかけて、第２・３・４次本調査を実施した。このうちⅢ地区の調査は第３次及び第４次本調査の一部がこれにあたり、調査面積は約21,400㎡であった。

調査区の設定にあたっては、上谷遺跡の報告書の第１分冊や第２分冊で触れたとおり、公共座標系に沿ってグリッドを設定した。100m方眼を大グリッド、10mを中グリッド、５mを小グリッドとして調査を進めた。表土層は重機による除去を行い、ソフトローム上面を遺構確認面とした。そして写真撮影や必要に応じた遺構図面をとりながら、遺構覆土の除去と遺構の精査を行った。記録写真はブローニー判モノクロフィルムを基本として、35mmカラーリバーサルフィルム等を適時に使用した。測量は、遺物については光波測距儀による測量を、遺構については航空測量を基本に行い、それぞれで補完することとした。

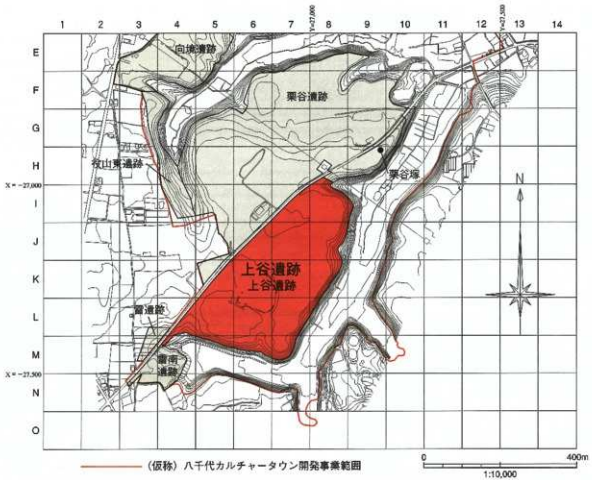


図2　(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連遺跡地形図

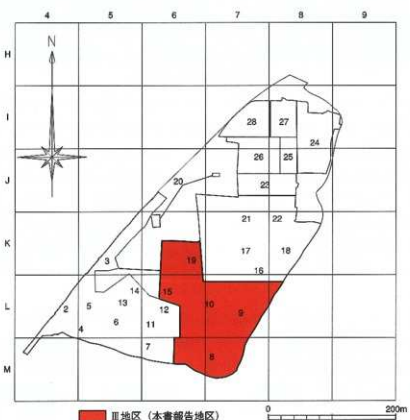


図3　上谷遺跡本調査地区割図

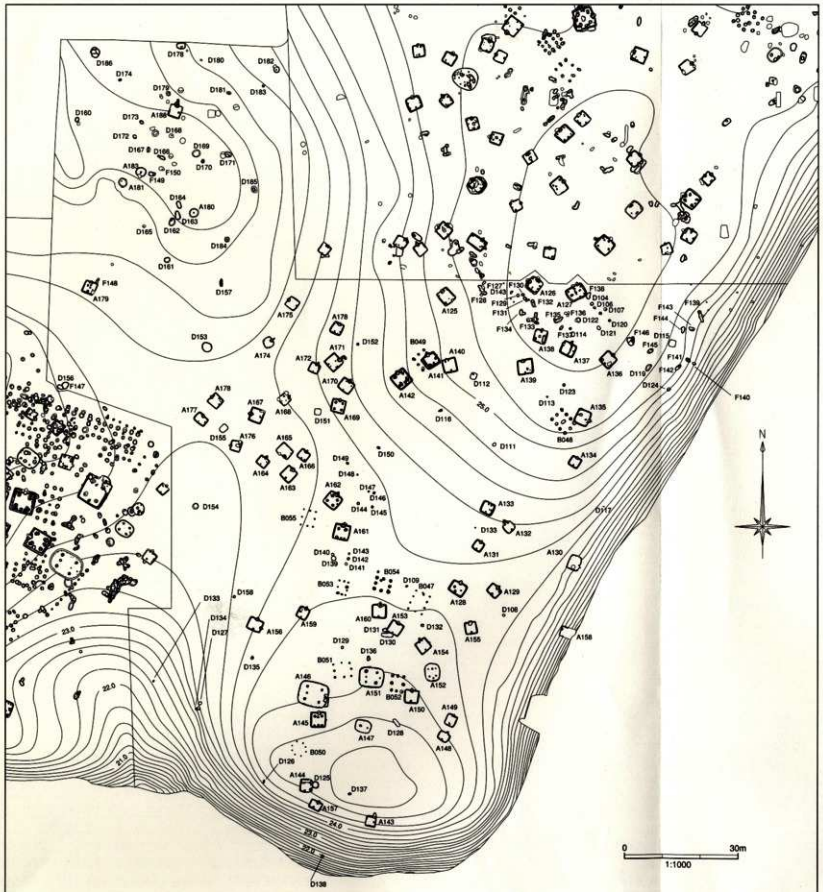


図4　上谷遺跡Ⅲ地区遺構配置図

第２節　上谷遺跡Ⅲ地区の概要と調査の概要

八千代市内では市域の北東にあり、かつての印旛沼に直接的に面した上谷遺跡は千葉県八千代市保品に所在する。地理的には下総台地の北西部に位置し、かつての印旛沼の南岸に立地している。

下総台地の地形は樹枝状に解析された谷津によって、谷津と台地が複雑に入り込む地形となっているが、特に八千代市の場合は谷津に対して南側が急斜面となり、北側が緩斜面となる傾向が指摘されている。そしてその谷津に面して各時代の遺跡が残されているが、八千代市の場合も例外ではなく、台地上を中心に各時代の数多くの遺跡の所在が知られていた。

上谷遺跡もそうした台地上に形成された集落跡を主体とした遺跡の一つであり、標高24～26mの大きな舌状台地の東側に形成された遺跡である。旧水田面との比高差は５～６mとなっている。本地区は上谷遺跡全体の調査区域からみると南東区にあたり、台地上は比較的に平坦であるが、水田面となる谷津とは急斜面となって落ちていく地形である。また、台地の東側から入り込む小支谷及び谷頭等によって、便宜的に台地西側に形成された栗谷遺跡とは区分されてきたところである。

上谷遺跡地区において検出した遺構は、縄文時代は竪穴住居跡３軒・炉穴25基・土坑27基であった。弥生時代は遺構検出が少なく竪穴住居跡が４軒であり、古墳時代の遺構は確認できなかった。また、遺構の主体的な時代となる奈良・平安時代では、竪穴住居跡54軒、掘立柱建物跡９棟、土坑36基が検出され、中世以降の遺構としては土坑10基が調査されている。

Ⅲ地区では各遺構の覆土から縄文時代の燃糸文系の土器片が出土している。この傾向はⅡ地区の報告でも触れているが、本調査においては検出できなかったが、遺構の存在を想定させるような出土であった。後世の時代・時期の遺構が数多く所在することから、やはり古い段階で失われたのかもしれない。また、縄文時代の炉穴は、Ⅲ地区にはいると遺構数が減少している。Ⅱ地区からの炉穴の繋がりの様子がうかがえる調査結果であった。

奈良・平安時代では、Ⅱ地区に比べ掘立柱建物跡の検出数が減少している。基礎的な集団単位の最低限の掘立柱建物跡である可能性があり、今後、他地区との比較の上で検討すべき資料を提示してくれている。また、本遺跡の出土遺物の特徴である墨書土器の出土は、Ⅱ地区に比べ減少していた。しかもⅡ地区に多く出土した「得」「万」は極端に減り、新たに「竹」が中心となる文字となるのか、出土文字が変化してきていることが捉えられた。

なお、本地区の基本土層は、第Ⅰ層表土層、第Ⅱ層黒色土層、第Ⅲ層暗褐色土層、第Ⅳ層ソフトローム漸移層、第Ⅴ層ソフトローム層である。上谷遺跡Ⅰ地区及びⅡ地区と変化はなく、遺構検出にあたっての遺構確認面は、第Ⅳ層あるいは第Ⅴ層とし、その面で行っている。

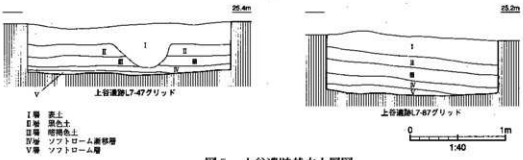


図５　上谷遺跡基本土層図

表1　上谷遺跡新旧遺構番号対照表

新番号	旧番号
竪穴住居跡	
A125	16-001
A126	16-006
A127	16-010
A128	9-001
A129	9-002
A130	9-003
A131	9-004
A132	9-005
A133	9-006
A134	9-008
A135	9-009
A136	9-010
A137A	9-011A
A137B	9-011B
A138	9-012
A139	9-013
A140	9-014
A141A	9-015A
A141B	9-015B
A142	9-016
A143	8-001
A144A	8-002A
A144B	8-002B
A145	8-004
A146	8-005
A147	8-006
A148	8-007
A149	8-008
A150	8-009
A151	8-010
A152	8-011
A153	8-012
A154	8-013
A155	8-014
A156	8-015
A157	8-020
A158	8-022
A159	10-001
A160	10-002
A161	10-003
A162	10-004
A163	10-005
A164	10-006
A165	10-007
A166	10-008
A167	10-009

新番号	旧番号
A168	10-010
A169	10-011
A170	10-012
A171	10-013
A172	10-014
A173	10-015
A174	10-016
A175	10-017
A176	15-001
A177	15-002
A178	15-003
A179	19-010
A180	19-011
A181	19-012
A182	19-013
A183	19-015
A184	15-004
掘立柱建物跡	
B047	9-017
B048	9-018
B049	9-019
B050	8-017
B051	8-018
B052	8-019
B053	10-018
B054	10-019
B055	10-020
土坑	
D103	16-030
D104	16-047
D105	16-048
D106	16-049
D107	16-050
D108	9-020
D109	9-021
D110	9-022
D111	9-023
D112	9-024
D113	9-025
D114	9-026
D115	9-027
D116	9-028
D117	9-029
D118	9-030
D119	9-036
D120	9-039
D121	9-040

新番号	旧番号
D122	9-041
D123	9-042
D124	9-043
D125	8-021
D126	8-023
D127	8-024
D128	8-025
D129	8-026
D130	8-027
D131	8-028
D132	8-029
D133	8-030
D134	8-031
D135	8-032
D136	8-033
D137	8-034
D138	8-035
D139	10-021
D140	10-022
D141	10-023
D142	10-024
D143	10-025
D144	10-026
D145	10-027
D146	10-028
D147	10-029
D148	10-030
D149	10-031
D150	10-032
D151	10-033
D152	10-034
D153	削除
D154	15-008
D155	15-018
D156	15-081
D157	15-083
D158	15-090
D159	19-018
D160	19-019
D161	19-020
D162	19-021
D163	19-022
D164	19-023
D165	19-024
D166	19-027
D167	19-028
D168	19-030

新番号	旧番号
D169	19-031
D170	19-032
D171	19-033
D172	19-034
D173	19-035
D174	19-036
D175	19-037
D176	19-038
D177	19-039
D178	19-040
D179	19-041
D180	19-042
D181	19-043
D182	19-044
D183	19-045
D184	19-053
貯穴	
F127	16-027
F128	16-028
F129	16-031
F130	16-032
F131	16-033
F132	16-034
F133	16-035
F134	16-036
F135	16-043
F136	16-044
F137	16-045
F138	16-051
F139	16-061
F140	9-031
F141	9-032
F142	9-033
F143	9-034
F144	9-035
F145	9-037
F146	9-038
F147	15-082
F148	19-017
F149	19-025
F150	19-026

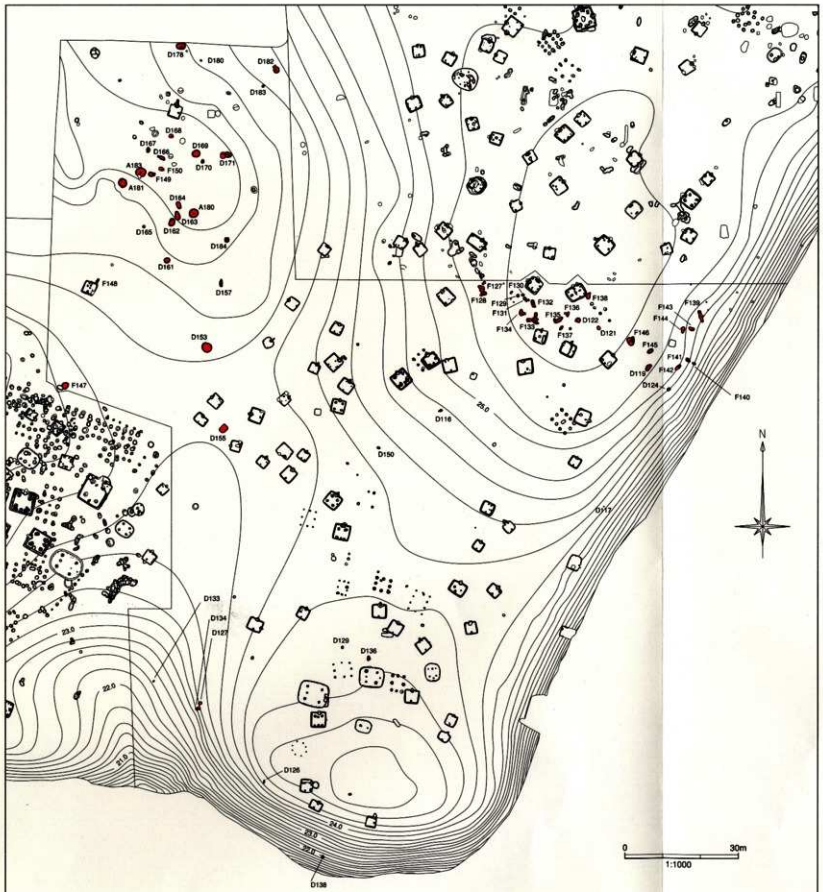


図6　上谷遺跡Ⅲ地区縄文時代遺構配置図

第２章　遺構及び遺物

ここに報告する上谷遺跡Ⅲ地区は、調査区16地区南端・９地区・８地区・10地区・15地区東側・19地区西側を対象としている。そして先述したように本地区では、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代、中世以降の遺構の検出があり、各時代の複合した遺構群を調査したこととなる。

本区における主体となった遺構は奈良・平安時代の竪穴住居跡群であったが、縄文時代中期の五領ヶ台期の竪穴住居跡を含めた遺構群も検出された。出土遺物はこれら遺構群に合わせるように、縄文土器（撚糸文系土器群・条痕文系土器群・中期初頭等）や奈良・平安時代の土師器・須恵器が主体を占めていた。そのため本書で報告する遺構及び遺物は、その時代・時期が中心となっている。

遺構はほぼ24～26mに所在するが、大きく３つのブロックに概括できるような検出状況であった。また、本報告書の第２分冊で報告したⅡ地区の遺構所在が、Ⅲ地区に入ると途絶えるような傾向が窺える。特に、炉穴は16調査区北側のⅡ地区から直接続く地区において検出されたものの、調査区中央から南側には殆ど検出されず、上谷遺跡北側の炉穴群の展開は途絶えたような印象をうける調査結果であった。また、今後に報告を予定している、Ⅳ地区との間に遺構の空白域が確認されている。縄文時代中期初頭の遺構群は本地区北西域において、竪穴住居跡とともに土坑も検出されており、Ⅱ地区の19調査区東側から続く傾向が示されている。

弥生時代は４軒の竪穴住居跡が検出されたが、当該時期の遺構とはⅡ地区とも、Ⅳ地区ともやや離れており、単位集団としての集落展開も示唆している。また、奈良・平安時代になると、Ⅱ地区及びⅣ地区にて数多く検出している掘立柱建物が９棟と減少している。墨書土器の出土もやや少なくなるが、16調査区南側はⅡ地区の文字の流れを引き継いでいたが、中央部分となると別の文字が多くなり、中心となるべき文字の変化が窺えるものであった。

以下に、時代別に遺構及び遺物を報告していくこととする。

第１節　縄文時代

上谷遺跡Ⅲ地区における縄文時代の検出した遺構は、竪穴住居跡４軒、炉穴25基、小竪穴を含む土坑26基であった。その主体は出土遺物などから早期・条痕文系土器群の遺構が多いが、中期初頭の竪穴住居跡を含めた遺構群も所在している。また、撚糸文系土器群の破片出土も多く、後世の遺構群によって損壊された、かつての遺構存在を窺わせるものである。

本Ⅲ地区の炉穴の所在は、16地区南端に偏在している。これはⅡ地区において報告した炉穴群のつながりとして捉えられる所在傾向を示していることとなる。そして報告が予定される、地区の間に炉穴の空白域が存在することを示す結果となっている。また、五領ヶ台期の遺構は10地区北側から19地区にかけて所在し、所在地域のある程度のまとまりをもって捉えることができた。

土坑は小竪穴を含めて概括したが、炉穴と判断するには不明瞭さが残るものも区分したため、その基数は多くなっていることを記しておくこととする。

第１項　竪穴住居跡

上谷遺跡Ⅲ地区における縄文時代の竪穴住居跡は、19地区西側を中心に４軒を検出することができた。いずれもその出土遺物から、中期初頭・五領ヶ台期の住居跡と捉えられた。検出した竪穴住居跡の軒数は少ないが、その周辺には小竪穴を含めた土坑を検出しており、当然ながら該期遺構の構成を知るために関連して検討すべきであろう。

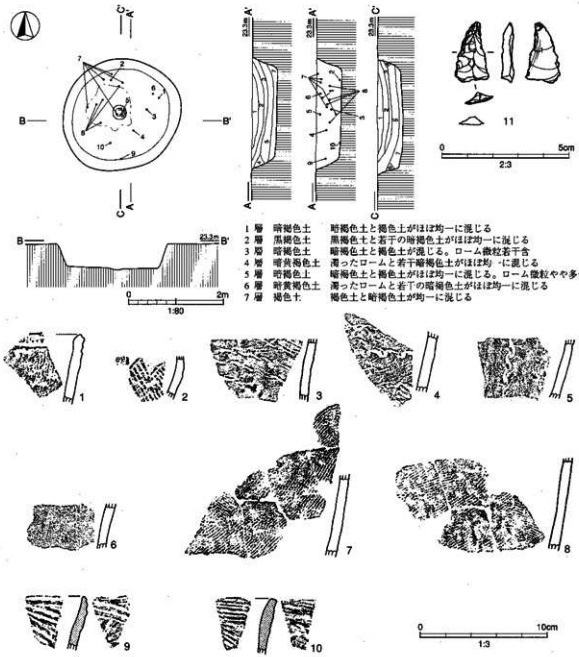


図7　A180

A180

検出地区　K6-70-3gにて検出した。

遺　構　長軸2.54m×短軸2.33m×壁高0.55m、長軸に対する主軸方位はN-72°-Eを示している。平面形が円形の竪穴住居跡であり、一見、盥状の住居跡である。床は壁際にやや高まりをもち、住居跡の中央部で少し凹む状態である。しかし凹凸があるというよりは、全体的には平坦な床面となっている。また、床はハードロームの地床であり、周辺の住居跡中央部に大きく硬化面を有するものであった。柱穴及び周溝は検出されなかった。炉は浅く凹んだ程度のものであり、ほぼ住居跡中央に設けられていた。そして赤化した火床上に、焼土が混じる暗褐色土を炉の覆土としていた。なお、本住居跡の覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　物　出土した遺物は、中期・五領ヶ台式土器片を主体とする。覆土上層から中層にかけて土器

片と黒曜石剥片等が出土したが、その量は少なく、また、覆土中層から床面にかけての出土は更に少なかった。

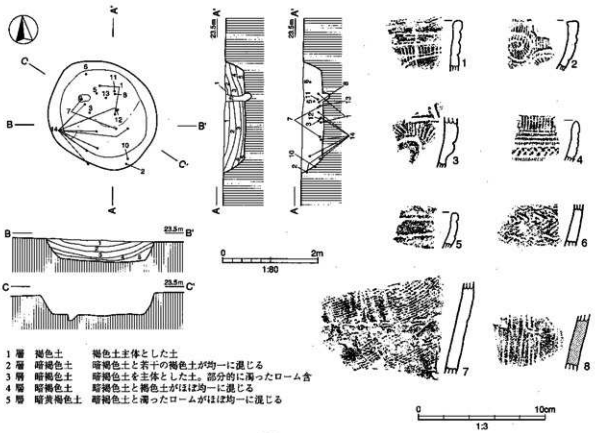
1・2は口縁部片であり、三角文を刻むものである。3～6は縄文を地文としてS字状結節文を縦に施文したものであり、7・8は破片であるため全容が窺い得ないが、全面に縄文を施文したものである。また、11は石鏃未製品であり、黒曜石製であった。一方、9・10は条痕文系土器群の野島式土器片であるが、竪穴住居跡埋没時の周辺からの流れ込みである。

所　見　出土遺物から、中期初頭の竪穴住居跡と捉えられた。一見、タライ状の住居跡である。本住居跡から出土した当該時期の土器片は多くはないが、折返口縁はもたないもののS字状結節文を施文したものが多い傾向が窺われている。

本住居跡と関連する当該時期の遺構としては、今までにⅡ地区においてD044が検出されているが、本遺構を含めて19調査区での検出傾向があることを指摘しておきたい。

表2　A180遺物観察表　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
11	石器 石鏃 未製品	長軸2.4×幅1.0×厚さ0.3 縦長の剥片の片面に、加工が施される				黒曜石



1 層　褐色土　褐色土主体とした土
2 層　暗褐色土　暗褐色土と若干の褐色土が均一に混じる
3 層　暗褐色土　暗褐色土を主体とした土。部分的に薄ったローム含
4 層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土がほぼ均一に混じる
5 層　暗黄褐色土　暗褐色土と薄ったロームがほぼ均一に混じる

図8　A181

A181

検出地区　L6-32-3g、L6-42-1gにて検出した。

遺　構　長軸3.46m×短軸3.43m×壁高0.42m、主軸方位はN-20°-Eを示している。平面形は円形であり、一見、タライ状の竪穴住居跡である。床はやはり住居跡中央がやや凹んだ、ハードロームの地床であった。そして全体的に硬化面を有し、特に住居跡中央から南東側の硬化が著しいものであった。柱穴や周溝は検出されなかった。また、炉も検出されなかった。壁の立ち上がりは急であるが、崩れた様子を窺わせ、ややひらいて立ち上がっているものである。

覆土は、壁の崩壊流れ込みであろうか床面直上層に暗黄褐色土が堆積するほかは、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　覆土上層から中層にて若干出土したが、下層から床面にかけては殆ど出土していない住居跡である。

1～3は沈線によって梯子状、渦巻状区画された中に沈線を連続して引くものである。3は沈線に沿って三角文を、4は押引きされた沈線に沿って鋸歯状文が施文される。5は押圧縄文、6・7は結節文を施文する。8は早期・条痕文系の野島式土器片であり、流れ込みである。

所　見　炉等が検出されなかったが、床に強い硬化面が確認できたこと等から、竪穴住居跡と捉えることとした。出土遺物から縄文時代中期初頭の遺構とされようが、当該時期の遺構は上谷遺跡Ⅲ地区のD044をはじめ、形状として盤状の遺構が多いようである。

A183

検出地区　K6-59-1gにて検出した。

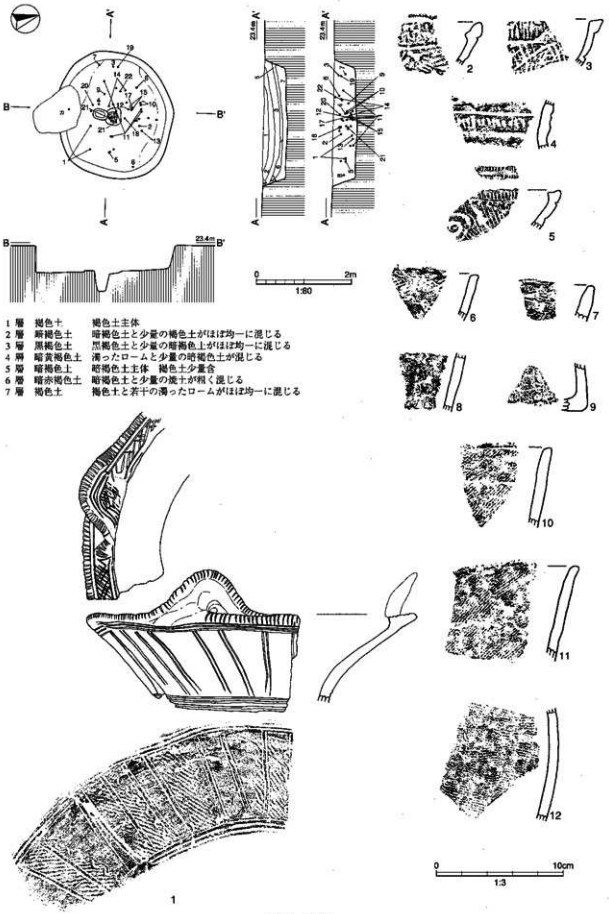
遺　構　長軸2.66m×短軸2.36m×壁高0.42m、主軸方位はN-73°-Eを示す。平面形は円形の竪穴住居跡である。床はやはり住居跡中央がやや凹むハードロームの地床であり、全体的に硬化面を残している。しかし壁際の硬化は、住居跡中央部に比べやや弱いものとなっていた。炉は浅く住居跡中央に設けられていたが火床の赤化はなく、炉の覆土には焼土が殆ど認められなかった。また、柱穴及び周溝は検出されなかった。

覆土は色調的には、下層は褐色土を主体としてローム色の強い層が、上層には黒褐色土や暗褐色土等やや暗くなる層が堆積しており、住居跡は自然堆積による埋没であった。

遺　物　覆土上層～下層にかけて出土しているが、床面直上層からの出土は殆どなかった。しかも出土量は多くはなかった。

1は推定口径305mm、現存高120mmとなっている深鉢の口縁から頸部の大形接合片である。口縁内部にも沈線によって斜格子状に施文され、口唇は刻み目を連続して施している。口縁直下から頸部にかけて半截竹管によって区画し、枠内に無文と結節文を繰り返す土器である。2～5は沈線によって渦巻きや梯子状に区画した中に線を引き三角文をはいするものである。6～12・14・15は結節文を施文するものであるが、6・7・12・15は横に8・9は縦に配され、10・11・14は縄文のみであった。また、本住居跡では黒曜石の石器及び剥片が多く出土しており、16・17は石鏃、18・19楔形石器、20は石鏃未製品であった。21は石核である。写真図版に掲載したが実測ができないような剥片・砕片も多く出土している。

所　見　本遺構は炉や柱穴が無く竪穴住居跡とは捉えにくい面もあるが、床の遺構全体に及ぶような硬化面や遺物の多さから住居跡と判断し、出土遺物から中期初頭と捉えられるものであった。また、黒曜石の剥片の多さは石器工房跡と係わりがあるのかもしれないが、砕片の出土は決して多いものではなかった。



1 層　褐色土　　褐色土主体
2 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の褐色土がほぼ均一に混じる
3 層　黒褐色土　黒褐色土と少量の暗褐色土がほぼ均一に混じる
4 層　暗黄褐色土　湧ったロームと少量の暗褐色土が混じる
5 層　暗褐色土　暗褐色土主体　褐色土少量含
6 層　暗赤褐色土　暗褐色土と少量の焼土が所々混じる
7 層　褐色土　　梅色土と若干の湧ったロームがほぼ均一に混じる

図9　A183

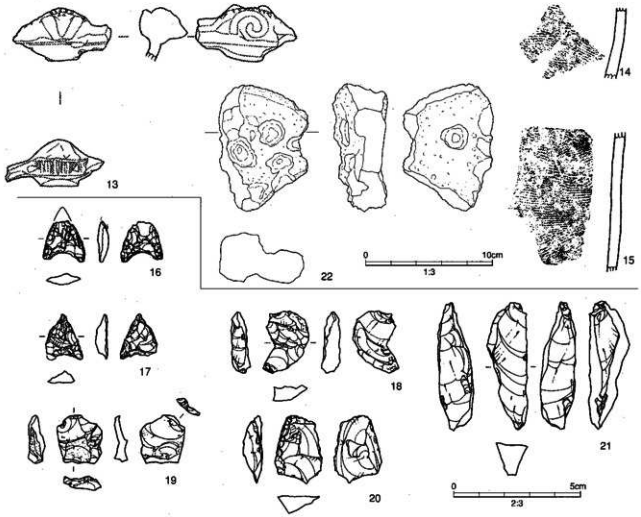


図10　A183（2）

表3　A183遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
16	石器 石鏃	長軸(15.5)×幅16.5×厚さ4 やや抉り深い　先端部欠損　表面の右脚部の剥離面平坦 (素材面の可能性)			2/3	黒曜石
17	石器 石鏃	長軸18×最大幅(14.5)×厚さ5 先端部がバルブにあたるため、ぶ厚いものとなる 右側縁と基部に調整による潰れが顕著にみられる			略完形	黒曜石
18	石器 楔形石器	長軸24.5×幅15.5×厚さ5 ややねじり気味に加撃されたもの			略完形	黒曜石
19	石器 楔形石器	長軸19×最大幅17.5×厚さ6 底面に供雑物多い			略完形	黒曜石
20	石器 石鏃	長軸27×幅18.5×厚さ7 横長の剥片の天頂から背面に側縁加工が連続的に行われる			未製品	黒曜石
21	石器 石核	長軸51×幅16×厚さ12 角柱状、4枚の剥片をとったことが窺うことができる石核 打面はなし(剥片側につく)			略完形	黒曜石
22	石器 多孔石	長軸101×短軸75×厚さ40　重量199.2g 両面に多数の凹みが残されている			断片	石皿からの転用か？

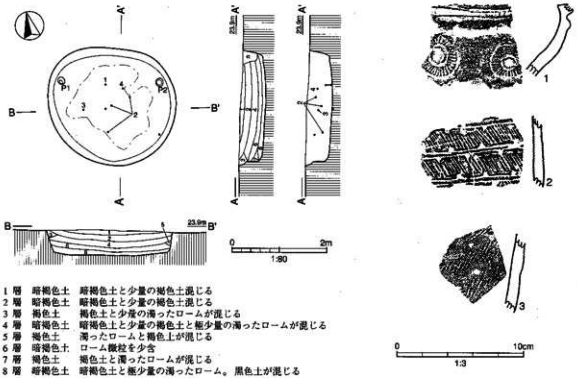


図11　A184

A184

検出地区　L6-63-4gにて検出した。

遺　構　長軸2.65m×短軸2.46m×深さ0.50m、主軸方位はN-78°-Wを示している。平面形は歪な円形の、竪穴状遺構である。坑底はハードロームの地床であり、中央付近に硬化した面を残している。床面から壁はやや丸みをもって立ち上がる。坑底には、北側の壁際に２基のピットを検出した。覆土は暗褐色土と褐色土との互層となった自然堆積である。炉等の燃焼施設は検出されなかった。

遺　物　出土した遺物は極めて少なく、覆土上層から５～６点、坑底から１点出土したのみである。遺構規模からいっても、極めて少ない出土遺物である。

１は口唇を欠く口縁部片で同心円の、２は横に沈線区画され沈線沿って鋸歯状に、３は胴部片で縄文の施文である。いずれも中期初頭の土器である。

所　見　本遺構は出土遺物から、中期・五領ヶ台期の遺構と捉えられた。当初、規模の小さな竪穴住居跡の可能性もあり炉及び柱穴の検出に努めたが、柱穴状のピット２基が検出されたのみであった。また、坑底は床状の硬化した面を残しており炉が失われた竪穴住居跡とも考えられるが、住居跡としてよいか判断に迷う遺構である。

五領ヶ台期の遺構は既にⅡ地区のD044を検出しており、本遺構は、D044に近似する遺構でもある。D044の遺構規模は長軸2.47m×短軸2.16m×壁高0.43mであり、出土遺物もやはり極めて少なく、五領ヶ台式土器片２点と礫２点のみの出土であった。遺構規模は本遺構が一回り大きくなるものであるが近似し、出土遺物の少なさも同様の遺構である。異なる点は、D044では坑底にピットは検出されていないことである。

本地区においては当該時期の竪穴住居跡も３軒検出しており、また、この後に報告する小竪穴状の土坑もあり、五領ヶ台期の小規模な集落を構成する遺構の一つとして捉えておきたい。

第2項　炉　穴

本地区における縄文時代の主体を占める遺構は炉穴であり、25基の検出をみた。本地区に入ってその検出基数を減少させ、Ⅱ地区からの繋がりの16調査区南端にその分布主体をおいており、本地区の南側にはその姿を窺うことはできなかった。しかし次に報告するⅣ地区には炉穴群が検出されており、本地区が当該遺構の空白区域となっていることが指摘される。しかし条痕文系土器群は他の時代の遺構覆土からも顕著に出土しており、他の時代の遺構構築時に破壊された可能性も指摘しておきたい。

炉穴は、多くの場合に重複した遺構となっているが、このため平面形は意識的に捉えて記載した。平面形の複雑化に伴い、火床の新旧関係を捉えることは難しかった。火床は主に壁寄りに検出されることが多かったが、その上層に焼土層が確認されなかったものもあった。また、重複した遺構のため火床が検出されなかった炉穴もあるが、覆土や周辺の遺構の状況から判断している。なお、炉穴から出土する条痕文系土器群については、野島式がその主体を占めるようであるが、他の時期の遺物も確認されており、上谷遺跡の全体の炉穴の整理をまって分類していきたい。

以下、炉穴について報告することになるが、重複した炉穴等は長軸・短軸方向が不明なものが多く、現状の形状から意識的に計測している遺構もあることを断っておきたい。

F127

検出地区　　L7-42-1gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.15m×短軸0.65m×深さ0.10m、主軸方位はN-44°-Eを示している。平面形は楕円形を示す、凹み状の炉穴である。火床は炉穴西側の坑底にて検出した。覆土は、ローム色の強い褐色土が主体であった。遺物は、礫らに若干出土している程度である。

所　　見　　遺構状況及び遺物から条痕文期に属するものである。

F128 a・b

検出地区　　L7-42-1gにて検出した。

遺　　構　　2基の重複した炉穴である。

F128aは、長軸1.88m×短軸0.82m×深さ0.21m、主軸方位はN-61°-Wを示し、アメーバ状である。

F128bは、長軸1.50m×短軸0.92m×深さ0.19m、主軸方位はN-90°-Wを示し、長方形である。

検出された火床は焼土ブロックを主体とした1カ所であるが、覆土等にややまとまって焼土を含み、ピットを埋めながら2カ所において火を使用したことを窺わせる炉穴であった。

若干の遺物が出土しているが、散在して出土する程度である。

所　　見　　図示はできなかったが、火床は3カ所あったと想定している。条痕文期の所産である。

F129

検出地区　　L7-52-1g にて検出した。

遺　　構　　長軸0.82m×短軸0.71m×深さ0.10m、主軸方位はN-0°-Eを示している。平面形は方形であり、凹み状の炉穴である。坑底は北側に緩く傾斜している。焼土ブロック状の火床が坑底にほぼ中央に検出された。覆土はローム色の強い褐色土を主体としている。

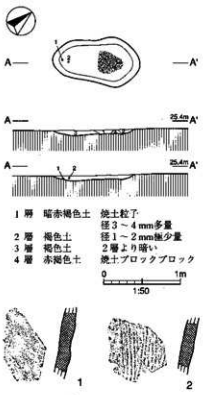
所　　見　　出土遺物もなく、その形状や火床の検出位置等から、炉跡の感じも否めない遺構である。しかし周辺の当該時期の遺構検出状況から、条痕文期の炉穴と捉えた。

F130

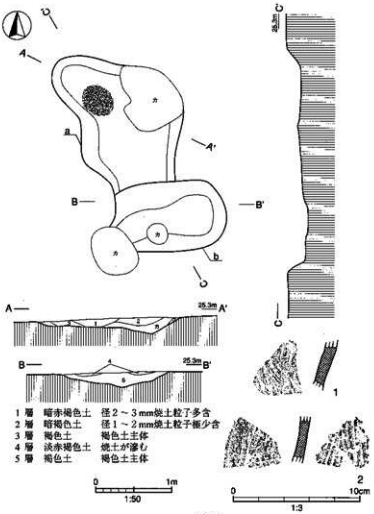
検出地区　　L7-52-1gにて検出した。

遺　　構　　長軸0.85m×短軸0.78m×深さ0.10m、主軸方位はN-8°-Wを示している。平面形は方形の凹み状の炉穴である。明瞭な火床は認められず南東壁際では極めて淡い焼土を含んでいるものであった。

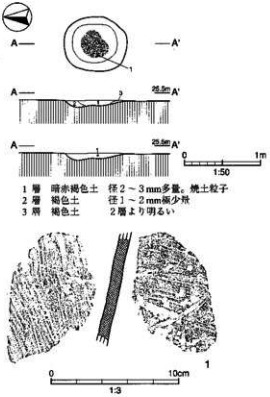
所　　見　　炉穴とすべきか迷う遺構であるが、焼土の検出位置等から条痕文期の炉穴と判断した。



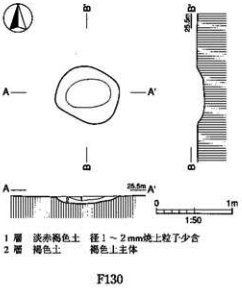
F127



F128



F129



F130

図12　F127・F128・F129・F130

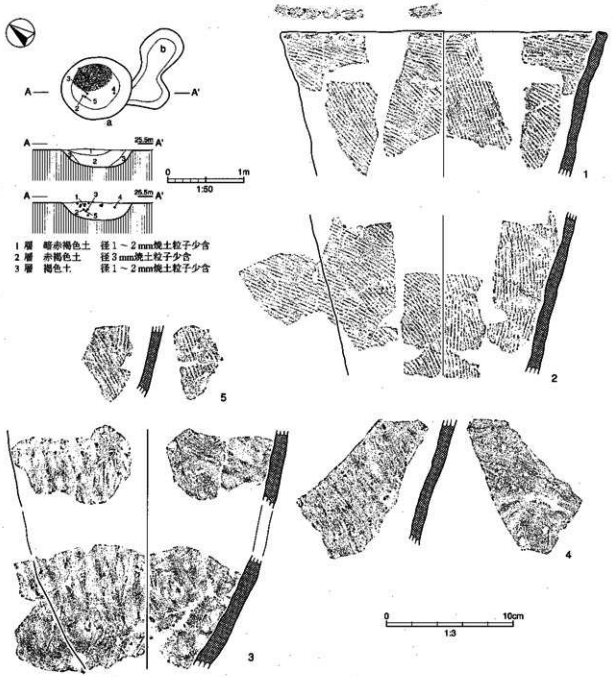


図13　F131

F131

検出位置　　L7-52-1・2・3・4gにて検出した。

遺　　構　　円形の炉穴ａ坑と、長楕円形ｂ坑の重複した炉穴である。

ａ坑は長軸0.91m×短軸0.82m×深さ0.22m、主軸方位はN-40°-Wを示している。ほぼ坑底が火床となる炉穴である。火床は強く赤化していた。

南東側のｂ坑は、長軸1.07m×短軸0.45m×深さ不明、主軸方位はN-87°-Eを示している。坑底西側に焼土が確認されているが、明確には火床とは捉えられないものであった。

遺　　物　　いずれもａ坑の炉穴から出土している。１・２・５は内外面とも細くていねいな条痕文を施文して、１は推定口径281mm、現存高106mmの深鉢の口唇に刻み目をいれた平坦な口縁である。内・外

面とも口縁は横に近い斜位に、それ以下は斜位に条痕文を施している。2・3は胴部片であり、2mは内外面と斜位に条痕文を、3は外面は斜位に内面は縦位に施文している。3・4は粗い施文の土器であった。

所　見　円形の炉穴は、炉穴としては形状が整いすぎている感じを与える遺構である。ほぼ正円に近い平面形と、坑底の形に沿って火床のある遺構であり、炉穴ではなく別途の遺構の可能性も検討すべきかもしれない。

また、出土遺物は円形の炉穴からのみであった。遺物分布図には掲載資料以外の出土ドットも掲示しているが、施文具の異なる両者の土器が混在しており、両者がほぼ時期的に同時に存在した土器であると捉えられるかもしれない。

なお、発掘調査当初には形状が不明瞭であり、両炉穴を通した土層図断面設定ができなかった。このため、両者の新旧関係は不明となっている。

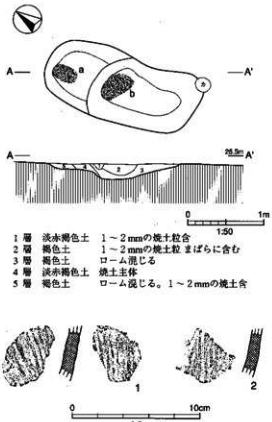


図14　F132

F132

検出位置　L7-52-4gにて検出した。

遺　構　長軸1.62m×短軸0.67m×深さ0.16m、主軸方位はN-14°-Wを示している。平面形は長方形である。炉穴のピットとしては2基あり、それぞれに火床をもつ重複した炉穴であった。掘込みは浅いが、坑底はb坑が深いものとなっている。また、それぞれ若干の凹凸ある坑底であった。火床もまた、それぞれの坑底の北壁側に片寄って検出した。共に火床は坑底の北側にあった。覆土は褐色土を主体としており、1～3層が南側の炉穴であり、4・5層が北側の炉穴の覆土と捉えた。

遺　物　遺物の出土は少なく、所属する炉穴との関係を明らかにすることができなかったが、胎土に繊維を含む、条痕文土器が出土している。1・2とも内外面ともていねいに条痕文を縦位に施す、胴部片である。

所　見　覆土の重複関係から、北側炉穴が古く、南側炉穴が新しい遺構と捉えられた。炉穴の形状及び火床位置の類似性から、時間的な経過はさしてないものと考えている。

F133

検出位置　L7-52-4g、53-1・3gにて検出した。

遺　構　火床は6カ所あり、複数のピットが重複した遺構である。このため全体の平面形はアメーバ状となっている。現状平面形の最大径をとると、長軸2.48m×短軸2.39m×深さ0.18m、主軸方位はN-87°-Eを示している。坑底は多少凹凸あるもので、火床a・b・e・fがハードロームであり、火床c・dがソフトロームであった。火床fに伴うピットが最も深く掘込まれていた。火床a・bは北側に深く、南側に浅くなる坑底である。火床fは西側が深く、東側で浅くなる坑底である。火床eは、坑底が火床

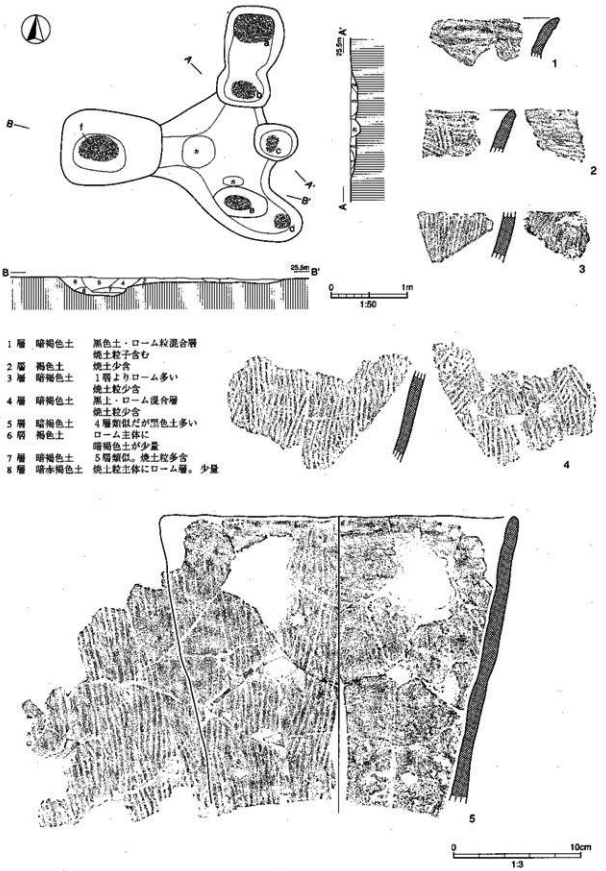

A
A'
B
B'
a
b
c
d
e
f
25.5m
1
2
3
4
0
1m
1:50
1層　暗褐色土　黒色土・ローム粒混合層
焼土粒子含む
2層　褐色土　焼土少含
3層　暗褐色土　1層よりローム多い
焼土粒少含
4層　暗褐色土　黒土・ローム混合層
焼土粒少含
5層　暗褐色土　4層類似だが黒色土多い
6層　褐色土　ローム主体に
暗褐色土が少量
7層　暗褐色土　5層類似。焼土粒多含
8層　暗赤褐色土　焼土粒主体にローム層。少量
5
0
10cm
1:3

図15　F133

となっていた。火床ｄは僅かに焼土ブロックが見られる程度であったが、他の火床は赤化していた。

覆土は、火床ｄと火床ｆに係わるものしか捉えられなかった。火床ｄに伴うものは２層であり、火床ｆに伴うものが１・３～８層であった。しかし覆土堆積状況から４・５・７層が火床ｆに伴わない新しい時期の所産と捉えられた。

遺　　物　　火床ａ・ｂ、火床ｄ、火床ｆに伴ってそれぞれ遺物は出土したが、出土した遺物は多くはなかった。出土の平面分布からでは、火床ａに伴うものが多く、次に火床ｂの遺物が確認されている。５はピットとしては火床ｄであるが、火床ｂとの重複する所から出土している。出土した遺物は、いずれも条痕文を施文するが、５は推定口径287㎜、現存高227㎜の口縁～胴部中位の破片である。外面はていねいな細かい条痕文を縦位に施文し、内面は縦位に粗に施文している。

所　　見　　大きくピットを捉えると火床ａ・ｂに伴うピット、火床ｃのピット、火床ｄ・ｅのピット、そして火床ｆのピットの４基に捉えることができるものであった。しかし火床ａ・ｂも、ピットして分離できるかもしれない。また、火床ｄに伴うピットは火床位置と平面形がことなり、失われた火床があったかもしれない。

F134

検出位置　　L7-52-2ｇにて検出した。

遺　　構　　長軸1.77m×短軸1.74m×深さ0.33m、主軸方位はN-88°-Wを示している。平面形はハート状であるが、２基の炉穴の重複である。火床はａ・ｂの２カ所を検出した。坑底は火床ｂから火床ａに向かって、凹凸をもちながら下っていくものであった。火床ａは、坑底の北壁寄りに残り、ハードロームの坑底から北壁中位までを強く赤化させていた。火床ｂは、坑底の南壁寄りに残り、やはりハードロームの坑底を強く赤化したものであった。

覆土は、複雑な堆積を示し、３基の土坑の存在を想定させるものであるが、捉えきれなかった。

遺　　物　　出土した遺物は多いが、火床ｂにともなう覆土が多かった。１～４が火床ａに伴うものと捉えられた。５以降は火床ｂに伴うものと捉えた。

１は土器片錘である。２～４は条痕文土器であるが、１は口唇が外に反る、無文に近い土器である。２は口縁内側を削いだようにして、外に反る感じを与えている。外面は斜位と縦位に施文し、内面は縦位であるが施文は粗となっている。４は内外面とも比較的丁寧な施文である。、

５・６は土器片錘である。７は粗く、８は丁寧に、いずれも縦位に施文する口縁片である。９は胴部の屈曲する部分であるが、条痕の方向を変えている。10～22はいずれも胴部片である。17は粗く施文するが、他は比較的丁寧な施文であった。23は石鏃である。

所　　見　　２基の重複した炉穴であるが、覆土から浅いピットの存在を想定できるものであった。しかし覆土の堆積が複雑であり、火床ａが古い可能性があるが、火床ａと火床ｂの新旧関係は捉えきれなかった。

火床の赤化はそれぞれ強く、このことは使用期間の長期性あるいは使用火力の強さを示しているものであろうか。上谷遺跡は条痕文期の炉穴群としては大規模な遺跡となっており、このことを含めて検討していく必要があろう。

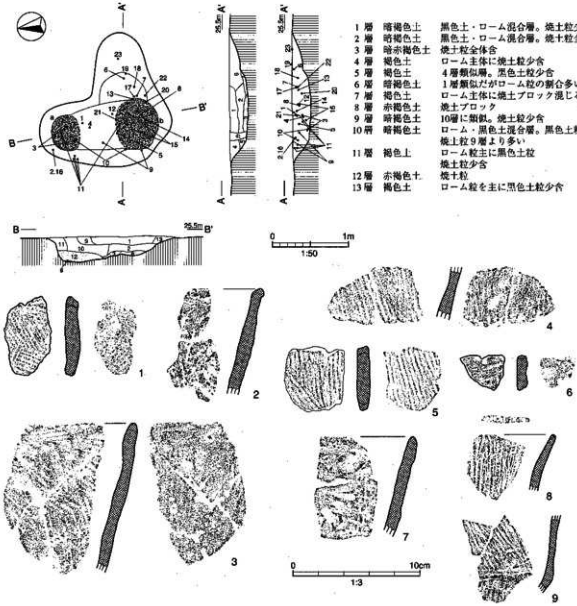


図16 F134

表4 F134遺物観察表 (単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成・形・調 整 等 の 特 徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土製品 土器片錘	長さ62×幅35×厚さ12 輪積み 胴部片を利用 不整形を呈する 切り込みは長軸一端のみ周縁の加工はほとんどみられない 外面 斜位、横位の条痕文	暗褐 普	普 繊維多 砂粒多含	略完形	火床a
5	土製品 土器片垂	長さ50×幅46×厚さ10 輪積み 胴部片を利用 方形を呈する 切り込み一対 周縁一部磨耗 外面 縦位、斜位の条痕文 内面 斜位の条痕文	暗褐 普	普 繊維多 砂粒多含	2/3	火床b
6	土製品 土器片垂	長さ(27)×幅(34)×厚さ(8) 輪積み 胴部片を利用 切り込み一端残存 外面 横位の条痕文 全体に磨耗 内面 ナデ	橙褐 軟	普 繊維少 砂粒多含	断片	
23	石器 石鏃	長さ21×幅16×厚さ4 重量0.6g 凹基無茎鏃	—	—	完形	黒曜石

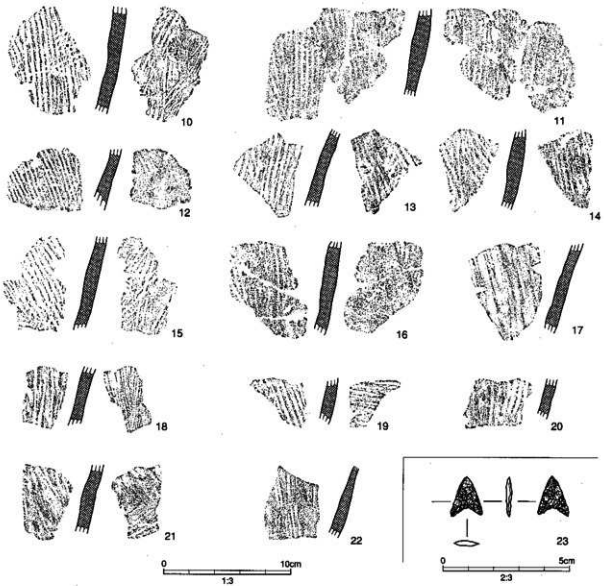


図17　F134（2）

F135

検出地区　L7-63-1ｇにて検出した。

遺　構　長軸2.00m×短軸0.84m×深さ0.19m、主軸方位はN-56°-Eを示している。歪な長楕円形に、楕円形がついた平面形である。基本的には２基の炉穴の重複であるが北西壁にて重複する土坑も検出された。炉穴はハードロームを５cm程掘込んだ坑底であり、その坑底に火床が２カ所検出された。炉穴の坑底は２カ所にわたって括れており、この括れが各火床に伴う炉穴の坑底を示しているのかもしれない。

火床ａは北東壁際にて検出し、火床の赤化はやや弱かった。また、火床ｂは坑底中央で検出し、火床の赤化は強いものであった。

覆土はやや複雑な堆積を示し、西壁際を暗褐色土によって充填している様にも見える堆積であった。

遺　物　火床ｂに伴うように炉穴中央から、北西壁寄りに出土している。火床ａに伴う遺物は無かった。１は器厚のある口縁片であるが、外面は縦に近い斜位に、内面は横位に施文している。２～６は胴部片であり、２・３は施文がやや粗いものである。４～６は比較的に丁寧な施文の条痕文土器である。

所　見　２基の炉穴の重複であるが、覆土より火床ａが古く火床ｂが新しいと捉えられた。またも火床ａが、ほぼ埋没した頃に火床ｂの炉穴が掘起こしているようである。若干の時間的な、前後関係を

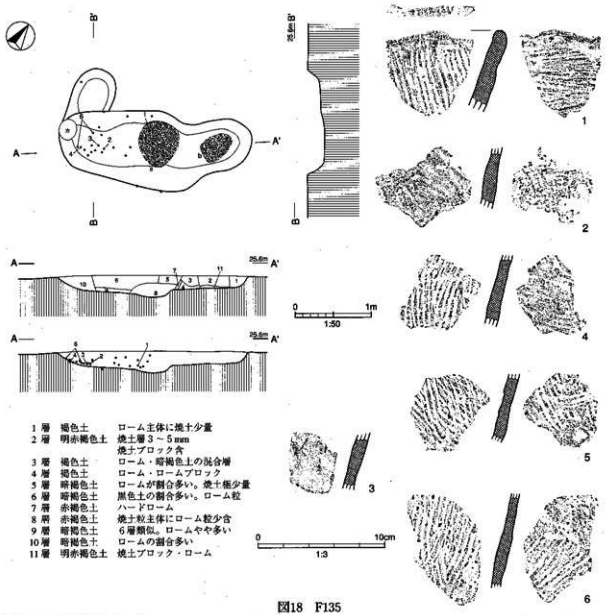


図18　F135

示していると考えている。

遺物は火床ａを中心に、若干の出土をみている。１～４は内外面ともていねいで細い条痕文を施し、５は太い条痕となっている。５は推定口径297㎜、現存高206㎜である。

所　　見　　火床ａ・ｂの新旧関係であるが、重複部に撹乱が入り、捉えることができなかった。他の重複した炉穴の例をみると、新しい炉穴には遺物が出土する傾向があり、それに従うなら、火床ａが新しいと言えようか。

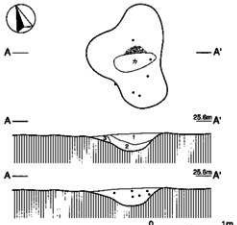
F136

検出地区　　L7-62-2・4ｇにて検出した。

遺　　構　　長軸1.10m×短軸1.05m×深さ0.18m、主軸方位はN-15°-Eを示している。平面形はテトラポット状である。炉穴の中央が撹乱によって失われているため、火床全てを捉えることはできなかった。坑底はハードローム直上であり、ハードロームが赤化した火床が検出された。覆土は褐色土の自然堆積である。

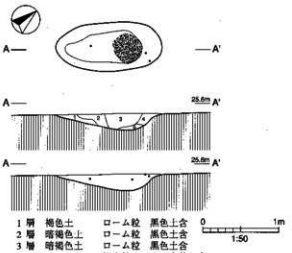
遺　　物　　若干の出土をみた。１～３ともやや粗い条痕文を施文している。

所　　見　　平面形は不整形であるが、坑底ほぼ中央に火床が検出された炉穴である。



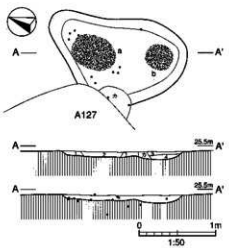
1 層　暗褐色土　ローム粒合多い
　　焼土粒少含
2 層　褐色土　ローム主体　焼土粒極少量
3 層　褐色土　2層と同じ

F136



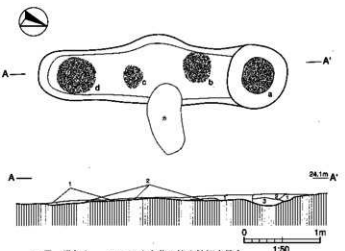
1 層　褐色土　ローム粒　黒色土含
2 層　暗褐色土　ローム粒　黒色土含
3 層　暗褐色土　ローム粒　黒色土含
　　焼土粒２～３m含体に含
4 層　褐色土　ローム主体に焼土粒２～３mm少所含
5 層　明赤褐色土　ロームブロック
　　焼土粒5～7mm含

F137



1 層　褐色土　ローム主体２～３mm大　焼土粒少量
2 層　暗赤褐色土　ローム　焼土粒混合層　３～５mm大焼土含
3 層　暗赤褐色土　焼土粒混合層　３mm大　焼土含
4 層　赤褐色土　焼土粒主体３～５mm大　焼土含

F138



1 層　褐色土　ローム土主体に焼土粒極少量含
2 層　暗褐色土　焼土粒・ローム粒混合層
3 層　赤褐色土　焼土粒・ローム粒多含。２～３mm焼土含

F139

図19　F136・F137・F138・F139

F137

検出地区　L7-63-1ｇにて検出した。

遺　構　長軸1.11m×短軸0.51m×深さ0.17m、主軸方位はN-39°-Eを示している。平面形は楕円形である。ハードロームを５cm掘込み坑底とし、火床は北東壁際に検出された。しかし本炉穴には平坦な坑底が無く、西壁から緩く下り火床が一番深くなっている。そして東壁に向かって再び緩く傾斜して上がる断面形ある。覆土は複雑な推積をみせ、褐色土をみせ褐色度と暗褐色土を主体として推積している。

遺　物　若干の出土をみた。１は内外面とも横位に、２は外面を縦位に施文している。

所　見　火床を壁際に有する単独の炉穴である。Ⅲ地区において単独の炉穴は数少なく、単独であるにも係わらず、覆土は複雑な推積をみせている。

F138

検出地区　L7-72-1ｇにて検出した。

遺　構　長軸1.65m×短軸0.85m×深さ0.07m、主軸方位はN-20°-Wを示している。平面形は丸みの

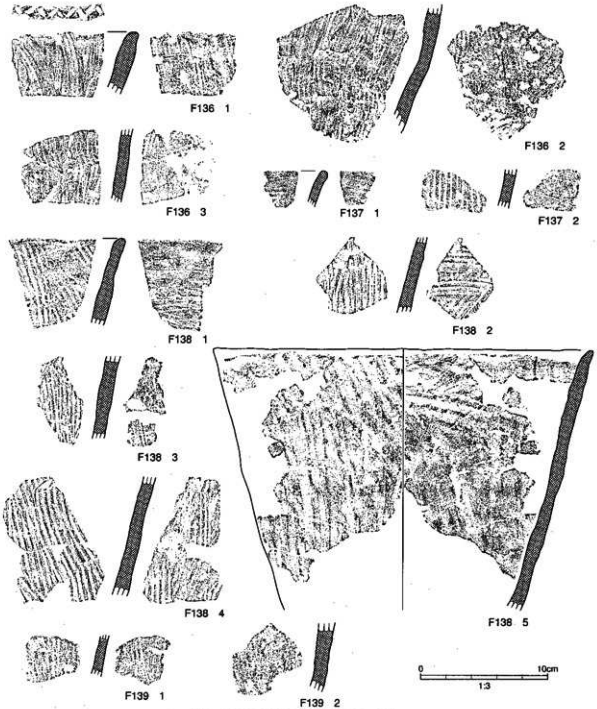


図20　F136・F137・F138・F139（2）

ある三角形状である。炉穴の西コーナーにおいて奈良・平安時代のA127と重複している。坑底はソフトロームであり、その坑底には火床が2カ所検出され、火床a・bともに赤化にしていた。坑底は火床aから火床bに向けて僅かな段差をもって下っている。覆土は、炉穴を掘込んだ後、褐色土を充填するように推積させ、焼土層を載せている。

遺物は火床aを中心に、若干の出土をみている。1～4は内外面とも丁寧で細い条痕文を施し、5は太い条痕となっている。5は推定口径297㎜、現在高206㎜である。

所　　見　　火床a・bの新旧関係であるが、重複部に攪乱が入り捉えることができなかった。他の重複した炉穴の例をみると新しい炉穴には遺物が出土する傾向があり、それに従うなら火床aが新しいと言えようか。

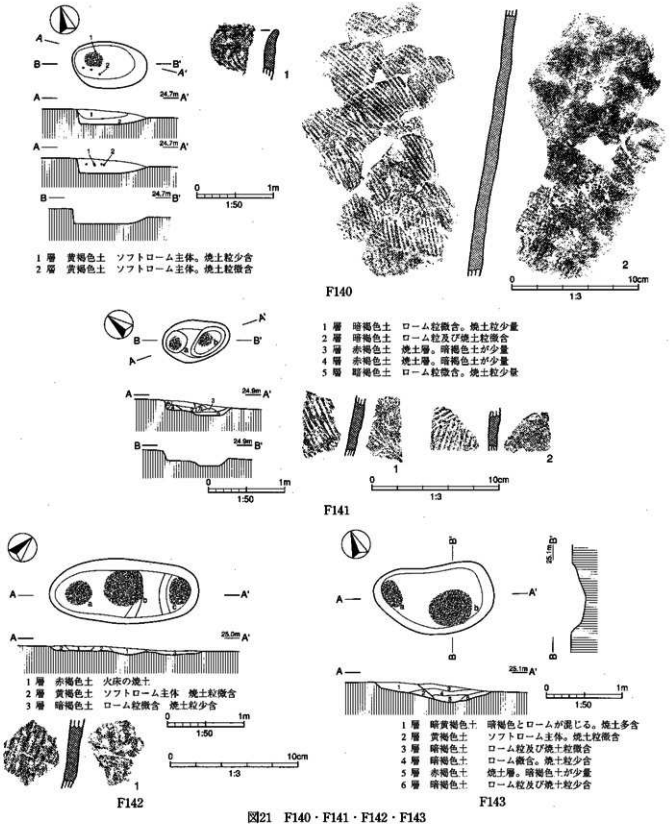


図21　F140・F141・F142・F143

F139

検出地区　　L7-92-4 g、L8-2-3 g、3-1 gにわたって検出した。

遺　　構　　長軸2.63m×短軸0.71m×深さ0.08m、主軸方位はN-18°-Wを示してる。平面形は長楕円形である。火床は4カ所検出し、それぞれ掘返しがあったようで坑底は緩やかな凹凸をもっている。北壁側にやや深い掘込みをもつ火床aが所在する。火床aと火床cは赤化ているが、火床bと火床dは赤化が弱かった。掘込みが浅く覆土が捉えにくかったが、火床aの覆土を掘って火床bがつくられていた。

遺　　物　　攪乱の出土であった。1・2とも粗く条痕文を施文している。

所　　見　　炉穴規模や主軸方位は全体の形状の中でとったが、本来はそれぞれにとることができる炉穴と考える。平面形は括りがあるが、この括りが炉穴の一部を示しているのかもしれない。火床aを有する炉穴は、ほぼ遺構の中心に火床を有しており炉穴として捉えることに疑問もあることを述べておく。

F140

検出位置　　L7-94-3gにて検出した。台地の斜面部に位置する。

遺　　構　　長軸0.99m×短軸0.61m×深さ0.17m、主軸方位はN-68°-Wを示し、平面形が楕円の炉穴である。壁は西側がほぼ垂直に立ち上がるほど急であり、斜面部という立地の関係から東壁は緩やかになっている。うっすらと赤化する火床は、西壁に寄って検出された。覆土は自然堆積であるが、ソフトロームに焼土が混入し再堆積した感じを与えている。

遺　　物　　火床から浮いて若干の出土をみている。いずれも内外面ともに、条痕を施文したものであった。1は口縁が外反し無文部の下にやや斜位の条痕文を施し、2は外面は丁寧に、内面は粗く施文し、縦に接合した胴部片である。

所　　見　　壁寄りに火床を有する、単独の炉穴である。先述したが、上谷遺跡でも単独の炉穴は少ない。また、覆土も単純な自然堆積であり、火床の赤化も弱いことから使用期間は短かったと考えられる炉穴でもあった。

F141

検出位置　　L7-94-3gにて検出した。台地の斜面部に立地する。

遺　　構　　長軸1.40m×短軸0.90m×深さ0.15m、主軸方位はN-58°-Wを示し、2基の炉穴が重複した楕円形の炉穴である。火床はそれぞれ検出され2カ所となっている。しかしいずれもうっすらと赤化する程度の火床であった。出土した遺物はともに無かった。

所　　見　　各炉穴の火床の新旧であるが、覆土より火床bが古く、火床aが新しい炉穴と捉えられた。いずれも条痕文期に属するものである。

F142

検出地区　　L7-94-1・3gにて検出した。台地の斜面部に立地する。

遺　　構　　長軸1.95m×短軸0.86m×深さ0.09m、主軸方位はN-47°-Eを示し、平面形は長楕円形の炉穴である。火床から3基の重複と捉えられた。火床はいずれもうっすらと赤化する程度であった。坑底は3基の重複のため、やや凹凸のある凹み状の炉穴である。遺物は条痕文土器片が若干出土しているが、1はやや粗い施文の土器片である。

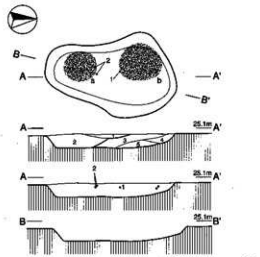
所　　見　　いずれも条痕文期に属するが、火床の新旧関係は火床b・cより火床aが古く、火床b・cの新旧関係は捉えきれなかった。なお、調査時において掘り過ぎる等、不明瞭な炉穴であった。掲示した平面図では図示できなかったが、火床b・cそれぞれに別個の浅いピットが伴っていたと想定できる炉穴である。

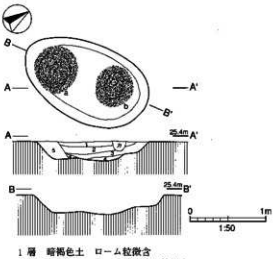
F143

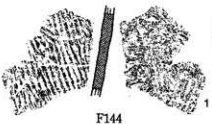
検出地区　　L7-93-3gにて検出した。台地の斜面部に立地する。

遺　　構　　長軸1.58m×短軸0.90m×深さ0.19m、主軸方位はN-70°-Eを示し、平面形は中が折れた楕円形である。火床は2カ所検出され、火床aが西壁際に、火床bは坑底から更に浅く掘り込まれたピットを火床としていた。いずれの火床もうっすらと赤化する程度であった。覆土は1・2層が火床aに、3～6層が火床bにそれぞれ伴うものであった。

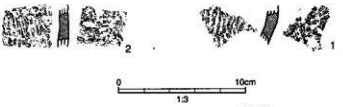
所　　見　　火床の新旧関係は、覆土より火床aが古いと捉えた。条痕文期に属するものである。







F144



F145

図22　F144・F145

F144

検出位置　L7-93-3gにて検出した。台地の緩斜面部に立地する。

遺　構　長軸1.74m×短軸1.16m×深さ0.17m、主軸方位はN-15°-Eを示し、平面形は北壁側に広がる不整楕円形である。掘込みは、比較的しっかりとした炉穴である。火床は２カ所検出された。覆土から火床ｂの廃絶後、自然堆積によって埋没した後、堀返されて火床ａが営まれたものと捉えられた。火床ａの赤化は強く、火床ｂはうっすらと赤化した程度であった。遺物は、条痕文系土器片が若干出土している。１・２とも外面は比較的丁寧な条痕文を縦に施文するが、内面は施文するもののやや粗い土器片である。

所　見　本遺構は条痕文期に属するもので、火床の新旧関係は、先述したように、火床ｂが古く火床ａが新しいものと捉えた。

F145

検出地区　L7-83-4gにて検出した。

遺　構　長軸1.73m×短軸1.04m×深さ0.25m、主軸方位はN-60°-Eを示し、掘込みかが比較的しっかりした、楕円形の炉穴である。火床は２カ所検出され、いずれも赤化の強いものであった。覆土はいずれも焼土の混入したもので、５層は掘り過ぎかもしれない。火床ａの焼土を僅かに残した後、火床ｂが含まれている。その後、自然堆積により埋没した炉穴である。遺物は条痕文系が若干出土した。１は胴部下半から底部付近であるが、条痕文の施文は粗いものである。

所　見　条痕文期に属する遺構である。火床の新旧関係は、覆土から火床ａが古く、火床ｂが新しいものと捉えられた。

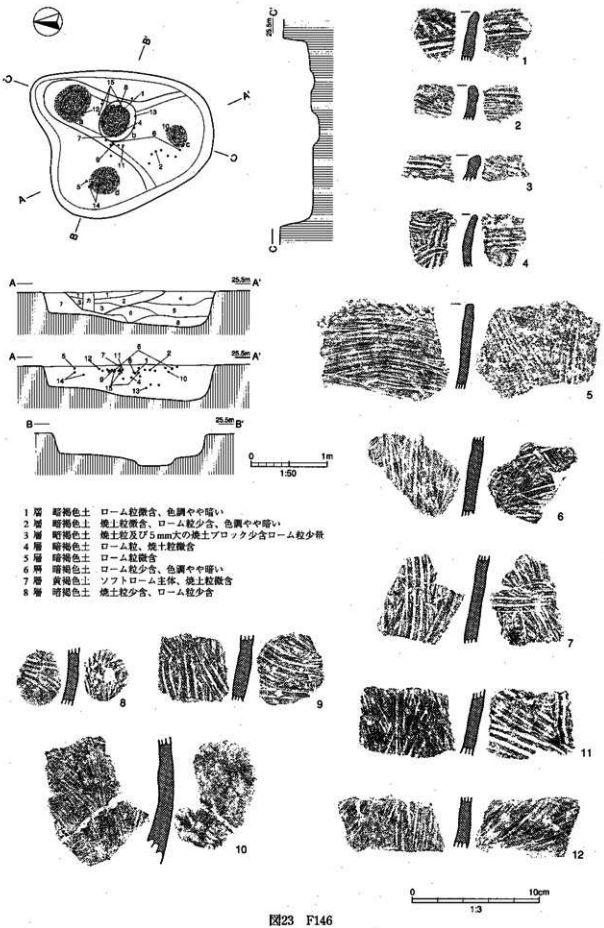

1 層　暗褐色土　ローム粒微含、色調やや暗い
2 層　暗褐色土　焼土粒散含、ローム粒少含、色調やや暗い
3 層　暗褐色土　焼土粒及び5mm大の焼土ブロック少含ローム粒少量
4 層　暗褐色土　ローム粒、焼土粒微含
5 層　暗褐色土　ローム粒微含
6 層　暗褐色土　ローム粒少含、色調やや暗い
7 層　黄褐色土　ソフトローム主体、焼土粒微含
8 層　暗褐色土　焼土粒少含、ローム粒少含
0　1m
1:50
0　10cm
1:3

図23　F146

図24　F146（2）

F146

検出地区　L7-83-2gにて検出した。

遺　構　長軸2.52m×短軸2.05m×深さ0.43m、主軸方位はN-21°-Eを示し、重複するため平面形は不整形をしている。炉穴としては、掘込みの深い遺構である。坑底は北壁から南壁にかけて次第に下るものである。火床は４カ所検出されたが、火床ａ・ｂは炉穴の坑底の更に浅い皿状のピット内に所在した。火床ａ・ｂの赤化は強く、火床ｃ・ｄはうっすらと赤化する程度であった。覆土は火床ｃ・ｄに伴うものしか捉えられなかったが、火床ｃが自然埋没後、掘返され１～３層が堆積したものと捉えられた。

遺　物　本炉穴に伴う出土遺物は多く15点を図示したが、大半は火床ｃ・ｄに伴うものと判断された。１～５は口縁部片であるが、１は口唇直下で少し折れるように外に僅かにひらき、２は口唇が丸みを有し内弯気味となる。３は口唇を削いだように外側にひらき、４は外反している。５はほぼ直立して口唇が平坦になものと、様々な口縁部の土器が出土している。いずれにしても口縁部外面は横位の条痕文となっている。６～15は深鉢の胴部片である。いずれも比較的ていねいな条痕文が施されている。

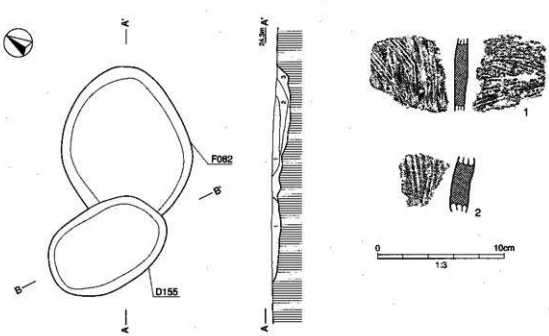
所　見　火床が４カ所あり、平面形状からも本来はいくつかのピットを持つ炉穴の重複である。火床の新旧関係は、火床ｃが古く、火床ｄが新しいことは覆土の堆積状況から捉えられたが、火床ｃ・ｄと火床ａ・ｂのそれぞれの新旧関係は捉えきれなかった。条痕文期に属する遺構である。

F147

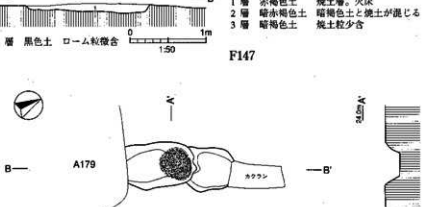
検出地区　L6-34-2gにて検出した。

遺　構　長軸1.95m×短軸1.69m×深さ0.19m、主軸方位はN-24°-Eを示し、平面形はやや角を持つ卵形である。遺構確認時に既に火床を検出しており、土層図においては火床というより、火床下の被熱硬化した部分である。遺物は、早期・条痕文系が稀に出土している。

所　見　遺物等から、本遺構は条痕文期に属する。なお、火床下も２・３層の存在により掘込まれていることがわかり、火床等は失われているが、別の炉穴が存在したことを窺わせるものであった。



F147



F148

図25　F147・F148

F148a・b

検出地区　　L6-41-2g・L6-42-1gにて検出した。

遺　　構　　2基の炉穴が南北の長軸方向に連結したような状態を示す炉穴であり、現状の平面形は長楕円形である。また、南側は奈良・平安時代の竪穴住居跡であるA179によって損壊を被っている。

F147aは、長軸(0.51)m×短軸0.57m×深さ0.10m、主軸方位はN-29°-Eを示している。確認面が低かったためか、炉穴にしてははっきりしすぎる印象を与える遺構である。しかし形状から炉穴と判断した。

F148aは、後世の竪穴住居跡に南壁側が壊されているるが、掘込みがはっきりしており、覆土は焼土を多く含んでいた。火床は、北壁際のF147bとの重複部に検出されている。また遺物の出土はなかった。

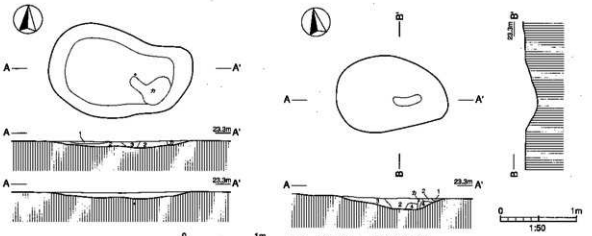


図26　F149・F150

F147bは、長軸0.90m×短軸0.61m×深さ0.20m、主軸方位はN-29°-Eを示している。火床は不明瞭であるが、坑のやや北側に焼土が付着したように確認され、坑底のハードロームは火熱を被った痕が認められた。坑底は凹凸があり、全体として凹み状のピットであった。遺物の出土はなかった。

所　　見　　2基の炉穴の重複であるが、覆土からはその新旧関係は捉えきれなかった。いずれにしても条痕文期に属するものである。

F149

検出地区　　K6-59-3gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.89m×短軸1.23m×深さ0.10m、主軸方位はN-88°-Eを示し、平面形は歪んだ長方形である。ソフトロームの坑底は比較的平坦であるが、全体として凹み状の炉穴であった。確認面で焼土が滲んでいたため検出されたが、火床は明確に捉えることができなかった。

覆土は、やや複雑な堆積を示していた。また、遺物は出土していない。

所　　見　　火床は明確にし得なかったが、形状等から条痕文期の炉穴として捉えた。浅い凹み状の炉穴であるため、覆土の堆積状態が捉えにくかった面はあるが、やや複雑な堆積は再利用された可能性をもつものである。

F150

検出地区　　K6-59-3gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.47m×短軸1.02m×深さ0.16m、主軸方位はN-70°-Wを示している。平面形は角の尖った卵形である。遺構検出時において焼土が滲んでおり炉穴と判断したが、ハードロームの坑底には、火床は特に認められなかった。坑底は平坦を殆ど意識していない小さなものであり、断面は緩やかに坑底に下ってゆくものであった。覆土は上谷遺跡の炉穴特有の複雑な堆積状況を示していた。遺物は出土していない。

所　　見　　火床は明確にし得なかった。しかし、遺構確認面で焼土が滲んでいたこと、覆土が本遺跡の縄文時代早期・条痕文期の炉穴特有の複雑な堆積状況を示すこと、また、形状等から条痕文期の炉穴と捉えた。火床が明瞭でなく、遺構確認面での滲んだ様に焼土の包含する炉穴はⅢ地区においても検出されているが、使用期間の短さと使用場所の限定があったことも考慮すべきかもしれない。

第3項　土　坑

本地区における縄文時代の土坑は、先述したように34基の検出をみた。遺構の検出状況はⅢ地区においては散在しており、その検出遺構数は多くはない。しかし少ない遺構であっても、特に16調査区南側と19調査区西側にその分布は多く、15調査区東側にもややまとまりをもった検出状況であった。

土坑の時期的な遺構分布の傾向は、16調査区南側においては早期条痕文期の炉穴との関わりからか、当該時期の土坑が多い傾向が窺われている。また、15調査区東側及び19調査区西側では、竪穴住居跡の検出と関連するためか、中期・五領ヶ台期の土坑が検出されている。

土坑の用途についてであるが、殆どの土坑において明瞭にできなかった。凹み状の土坑も多く、また、遺物の出土もみない土坑もあり時期を明確にもできなかった。ただ、陥穴D157が15調査区において、1基のみ検出した。D157の陥穴はⅢ地区の広い台地に単独で検出された状況となっており、他の報告地区との関連も今後、考慮すべきことかも知れない。

なお、本来、土坑とは一線を画するであろう小竪穴や炉穴とは判断できない遺構も、本項では土坑として取り扱っている。このため報告する土坑の遺構数は、全体として少ないながらも、報告基数が多くなっていることを記しておく。以下に、縄文時代の土坑について報告することとする。

D116

検出地区　L3-35-1・2gにて検出した。

遺　構　長軸1.18m×短軸0.53m×深さ0.17m、主軸方位はN-72°-Eを示している。平面形はアメーバ状であり、東側は一段テラス状になっていた。坑底はやや傾斜するもので、壁は坑底よりやや急に立ち上がっている。覆土は暗褐色土の自然堆積であり、その上に坑の外にあふれるように、火床とは呼べないが、焼土範囲が認められた。出土した遺物はなかった。なお、北側の小ピットは攪乱である。

所　見　一見、炉穴と迷う遺構であった。しかし焼土範囲がピットの外側にはみ出していること等から、炉穴ではなく土坑と捉えることとした。出土遺物がなく時期は不明であるが、周辺の遺構の状況から、条痕文期の可能性を指摘しておきたい。

D117

検出地区　L7-78-1gにて検出した。

遺　構　長軸0.67m×短軸0.66m×深さ不明、主軸方位はN-15°-Eを示している。小ピットを伴うが、本遺構に伴うのか不明である。計測値は、焼土の分布域として捉えられたものであるが、火床と呼べるものではなかった。また、本遺構に伴う遺物も確認できなかった。

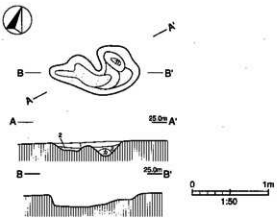
所　見　土坑と扱ってよいのか疑問がある遺構であるが、土坑自体が浅く遺構検出時に失われたものと判断した。本来は凹み状の土坑であり、それに伴う焼土散布であったと考えられるものである。所属時期は不明であるが、縄文時代の遺構と捉えた。

D119

検出地区　L7-84-3gにて検出した。

遺　構　長軸2.06m×短軸1.16m×深さ0.33m、主軸方位はN-37°-Eを示している。平面形は丸みを帯びる二等辺三角形状である。長軸方向に凹凸のある坑底であり、壁は坑底から丸みをもって立ち上がっている。覆土は、黒褐色土を主体とした自然堆積であった。本土坑から出土した遺物はなかった。

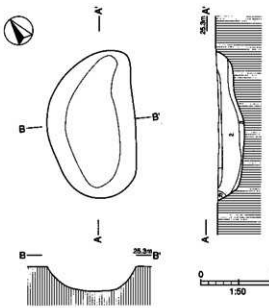
所　見　用途不明の土坑である。周辺の遺構等から条痕文期に属する遺構かもしれない。



1 層　暗黄褐色土　湧ったロームと暗褐色土を含む焼土粒が小粒子細かく緻密な層
2 層　暗黄褐色土　湧ったロームと暗褐色土を含む焼土粒が数点粒子細かく緻密な層

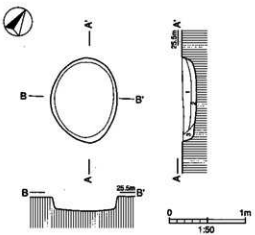
D116

D117



1 層　黒褐色土　ローム粒及び炭化粒少含
2 層　黒褐色土　ローム粒少含
3 層　暗褐色土　ローム粒及び径5～10mm大のロームブロック少含

D119



1 層　暗褐色土　ローム粒及び焼土粒微含
2 層　暗褐色土　ローム粒及び焼土粒微含
　　上層より色調やや明るい
3 層　黄褐色土　ソフトローム主体。焼土粒微含

D121

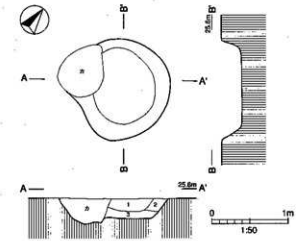
図27　D116・D117・D119・D121

D121

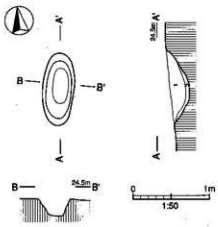
検出地区　　L7-73-1gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.13m×短軸0.88m×深さ0.17m、主軸方位はN-58°-Eを示している。平面形は、円形に近い楕円形である。壁の立ち上がりは急であり、坑底は平坦な土坑であった。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積であるが、南壁側から若干の焼土が混入する黄褐色土が流れ込んでいた。遺物は条痕文系の土器片が出土している。

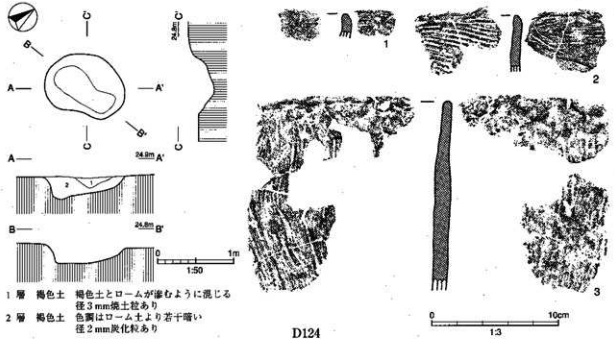
所　　見　　用途不明の土坑であるが、条痕文期の土坑として捉えられるものであった。



D122



D126



D124

図28　D122・D124・D126

D122

検出地区　　L7-63-3gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.36m×短軸1.17m×深さ0.27m、主軸方位はN-25°-Wを示している。平面形はほぼ円形であり、掘込みのしっかりした土坑である。坑底は平坦であり、壁は坑底から急に立ち上がっている。覆土はローム粒を少し含んだ、黒褐色土と暗褐色土が交互に自然堆積したものであった。また、本土坑から出土した遺物は無かった。なお、西壁際には攪乱がはいり、全容は不明である。

所　　見　　時期を判断すべき遺物の出土がないため、所属時期の決定について不明確にならざるを得ないが、覆土等の状況から縄文時代の土坑と捉えた。なお、所属する時期は不明である。また、本土坑の用途も不明である。

D124

検出地区　L7-94-2g、L-95-1gにて検出した。

遺　構　長軸1.09m×短軸0.80m×深さ0.24m、主軸方位はN-59°-Eを示している。平面形は楕円形であるが、遺構の掘込面と坑底ではその長軸方向に異なりを見せている。全体的に北西壁側から南東壁側に傾斜を持つ壁ハードローム上部を坑底としており、南西壁際が最深部となっている。壁の坑底からの立ち上がりは西壁側が急であり、東壁側は少しなだらかになっている。

遺物の出土は本地区の土坑としてはやや多く、条痕文系土器片がピット中央にほぼ集中して出土していたが、その出土層は覆土上層が主体であった。1～3はいずれも条痕文を施文した口縁部片であるが、1・2は僅かに口唇にかけて内弯し、3はまっすぐに立ち上がっている。1は内外面とも斜位に施文し、2は内外面とも横位であるが、外面は比較的丁寧に、内面は粗く施文したものである。3はやや粗く内外面とも縦に条痕文を施した土器であった。

所　見　本来は、炉穴であったかもしれない。しかし火床が検出されなかったこと、特に、焼土のまとまりでの確認ができなかったこと等から土坑とした。

遺物は殆どが覆土上層からの出土ではあったが、出土していた。これら遺物から条痕文期の属する土坑と捉えた。

D126

検出地区　M7-61-1・3gにて検出した。

遺　構　長軸0.96m×短軸0.42m×深さ0.31m、主軸方位はN-12°-Eを示している。平面形は幅のない、細身の長楕円形である。坑底は平坦であり、この坑底から壁は緩い傾斜をもって立ち上がっている土坑である。長軸方向の断面形は擂鉢状となっている。覆土は、ローム粒や炭化粒を含む暗褐色土の自然堆積であった。なお、遺物の出土は無かった。

所　見　時期を判断する遺物の出土はなかったが、覆土等から縄文時代の土坑と捉えた。時期は不明である。

D127

検出地区　M7-63-3gにて検出した。

遺　構　長軸1.03m×短軸0.74m×深さ0.13m、主軸方位はN-12°-Eを示している。平面形は隅丸長方形であるが、規模に対して深さのない土坑である。図示はできなかったが、坑底に浅い皿状のピットが認められた。壁は長軸方向はなだらかに、短軸方向は坑底から急に立ち上がっている。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積であるが、2層は人為的な投入乃至充填土の様子が窺えた。出土した遺物は無かった。

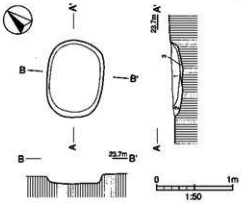
所　見　時期を判断すべき遺物の出土がなかったが、覆土等から時期は不明であるが、縄文時代の土坑と捉えた。

D129

検出地区　M7-1-3gにて検出した。

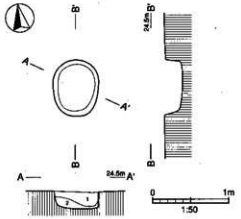
遺　構　長軸0.75m×短軸0.60m×深さ0.24m、主軸方位はN-16°-Eを示している。平面形は楕円形であり、坑底は平坦な土坑である壁は坑底から急に立ち上がっており、ほぼ垂直に立ち上がっている状態であった。覆土は、暗褐色土と黒色土の自然堆積である。出土した遺物は無かった。

所　見　時期を判断すべき遺物の出土はなかったが、覆土等から時期は不明であるが、縄文時代の土坑と捉えた。



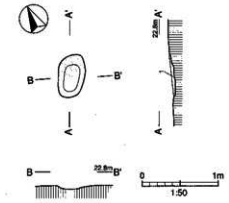
1 層　暗褐色土　ローム粒多含
2 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが粗く混合
3 層　黄褐色土　ソフトローム。暗褐色土が極少量混じる

D127



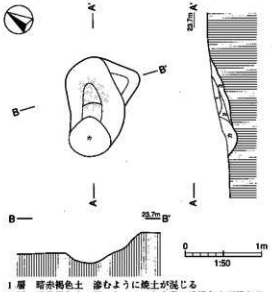
1 層　黒色土　ローム粒少含
2 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが混じる。ローム粒少含

D129



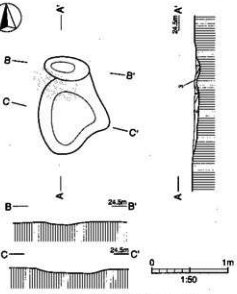
1 層　暗黄褐色土　微少量の暗褐色土が混じる

D133

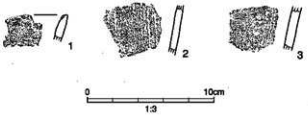


1 層　暗赤褐色土　滲むように焼土が混じる
2 層　暗黄褐色土　湿ったロームと少量の暗褐色土が混じる
3 層　暗黄褐色土　暗褐色土は極少量混じる

D134



1 層　暗赤褐色土　滲むような焼土が混じる
2 層　暗黄褐色土　ローム主体
3 層　赤色土　火床。ロームの赤化層



D136

図29　D127・D129・D133・D134・D136

D133

検出地区　M6-52-4gにて検出した。

遺　構　長軸0.55m×短軸0.34m×深さ0.09m、主軸方位はN-27°-Eを示している。平面形は隅丸長方形であるが、どちらかというと凹み状の土坑である。坑底と壁の境は明瞭ではなく、坑底中央が平坦であり、そこからなだらかに立ち上がっていく土坑である。土坑の中央から北壁側に火床というより、淡く赤変する程度のロームの焼土帯が認められた。覆土は汚れた様なロームに暗褐色土が混じるものであった。遺物の出土は無かった。

所　見　発掘調査時点では、赤変するロームの焼土範囲を認めたため、炉穴として扱った遺構である。しかし形状や赤変等を再検討すると、焼土化範囲を明確に炉穴の火床とは断定できなかった。このため土坑として扱うことにした遺構である。出土した遺物はなく、時期などを判断する資料に欠けるが、覆土等から条痕文期の土坑と捉えた。

D134

検出地区　M6-63-3gにて検出した。台地の斜面部に立地する。

遺　構　長軸1.32m×短軸0.74m×深さ0.41m、主軸方位はN-64°-Eを示している。平面形は、やや形の整わない楕円形である。台地平坦部から斜面部にかけて掘られ、長軸方向である斜面部に向かって、坑底が凹凸をもちながら下っていく土坑である。覆土は暗黄褐色土が自然堆積しながら、完全に土坑が埋没する前に火の使用が行われていた。、また、遺構検出時において、覆土上層には滲む様に焼土が散布していた。出土した遺物は無かった。

所　見　炉穴とも考えられた遺構であるが、炉穴とすべき判断材料が無いため発掘調査時より土坑としている遺構である。形状から２基の土坑の重複とも考えられたが、重複関係を捉えることができず、１基の土坑として扱っている。

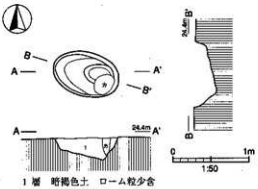
D136

検出地区　M7-11-2g、M7-12-1gにて検出した。

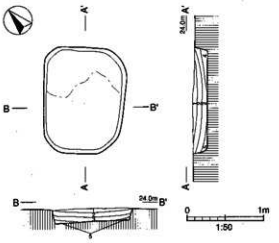
遺　構　長軸1.29m×短軸0.94m×深さ0.06m、主軸方位はN-4°-Eを示している。平面形は三角形であり、北側に楕円形の小ピットが浅く掘込んでいるが、深さに差は殆ど無かった。それぞれ浅い凹み状の土坑であり、凹凸のある坑底である。重複部に、ロームが赤化した火床が認められた。また、重複部からピット外側にかけて、焼土の散布が認められた。、覆土は、ローム主体の２層上に滲むように焼土粒を包含した褐色土(焼土の混入のため赤褐色となっている)であった。

遺物は、撚糸文系土器片が若干出土した。１はやや外に開く口縁で、２・３は胴部片である。１～３とも、撚糸文が間隔を置いて施文されている。稲荷台式土器である。

所　見　発掘調査時には、条痕文期の炉穴と捉えていた遺構である。しかしピット外に焼土が広がることや、出土遺物が撚糸文系土器群であることから、炉穴と断定できずに土坑として扱うこととした。



D150



D155

図30　D150・D155

D150

検出地区　　L7-16-2gにて検出した。

遺　　構　　長軸0.88m×短軸0.59m×深さ0.31m、主軸方位はN-72°-Wを示している。平面形は長楕円形であるが、坑底は長軸方向に、西壁から東壁にかけて凹凸をもちながら下っていくものであった。坑底からの壁の立ち上がりは、全体的に急である。また、坑底の東壁際に、浅いピットが認められる。覆土はローム粒を含む暗褐色土の一気の堆積であるが、自然堆積と捉えられた。遺物は出土しなかった。

所　　見　　遺物出土が無かったため、覆土の状態から縄文時代の土坑と捉えた。

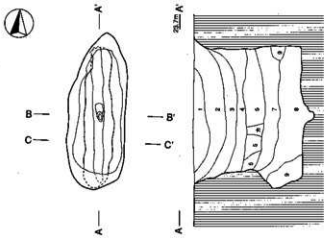
D155

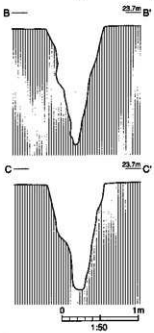
検出地区　　L6-75-2gにて検出した。

遺　　構　　長軸2.25m×短軸1.70m×深さ0.30m、主軸方位はN-43°-Eを示している。平面形は隅丸長方形である。ハードロームの坑底は、遺構中央から北壁にかけて1/3程、硬化する面を残していた。炉及び柱穴の確認を行ったが、検出されなかった。壁の崩落は他の遺構に比してやや大きいが、覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。なお、遺物は出土しなかった。

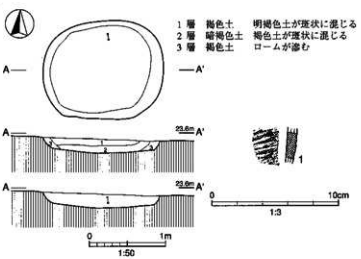
所　　見　　竪穴住居跡の可能性もあり、調査においては遺構内に残されるであろう燃焼施設や柱穴の確認作業を行った。しかし炉跡や柱穴は検出されず、坑底における硬化面が一部認められたのみである。このため、方形の小竪穴状の土坑と捉えた。

所属時期を決定すべき遺物の無いことや平面形が気になるが、覆土の状況等から中期・五領ヶ台期の所産かも知れない。

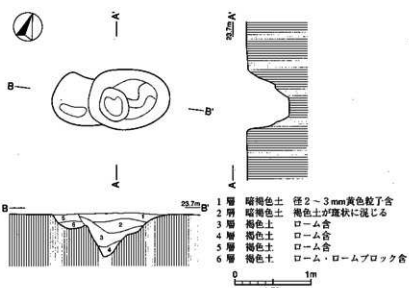




D157



D161



D159

図31　D157・D159・D161

D157

検出地区　L6-72-1gにて検出した。

遺　構　長軸2.08m×短軸0.73m×深さ1.58m、主軸方位はN-0°-Eを示している。平面形は、細身の長楕円形である。坑底はハードロームを深く掘込んでおり、ほぼ平坦なものであった。また坑底の中央に、更に掘込んだピットが検出された。坑底から約0.40m程度の高さで、南壁側は大きくオーバーハングしている。また、北側も僅かだが壁中位から坑底にかけてオーバーハングする土坑である。壁の崩れは西壁が少し大きくなっている。覆土は、5～7・9層が壁の崩落・崩壊層であり、1～4層が自然堆積と捉えられた。出土した遺物は無かった。

所　見　陥穴である。Ⅱ地区でも2基検出しているが、いずれも点在して検出されている。本遺構も栗谷遺跡が所在する台地の西側の谷津から、上谷遺跡に入り込む浅い谷津の谷頭付近に位置しており単独の検出であった。全体的な壁の崩壊は少なく、覆土中のロームの多さは人為的な投入を検討すべきかも知れない。なお、時期を決定すべき遺物が出土しなかったので、形状から縄文時代・早期の陥穴と判断したが、上谷遺跡全地区の整理の進展の中で明らかにしていきたい。

D159a・b

検出地区　L6-41-4gにて検出した。

遺　構　長軸方向に連接した2基が重複した土坑である。

D159aは、長軸1.06m×短軸0.78m×深さ0.56m、主軸方位はN-70°-Eを示している。平面形は楕円形である。壁から坑底に急激に下るが、北壁側と東壁側に2カ所のテラス状の段差を残している。坑底の最深部は西壁際であった。本遺構の覆土は1～4層であり、褐色土と暗褐色土を主体とした自然堆積である。遺物は出土しなかった。

D159bは、長軸(0.48)m×短軸0.69m×深さ0.19m、主軸方位はN-70°-Eを示している。平面形は長楕円形滋養を示している。壁は南壁側が坑底から急に立ち上がり、北壁側は緩やかになっている。本遺構の覆土は5・6層であり、ロームを含む褐色土を主体とした自然堆積であった。遺物は出土しなかった。

所　見　重複した2基の土坑であるが、D159bの埋没後に掘返してD159aが営まれた土坑である。そしてD159bもまた、遺構廃絶後に自然堆積によって埋没している。このことから2基の土坑の新旧関係はD159bが古く、D159aが新しい時期の所産である。いずれも関係する出土遺物が無いため、覆土等から縄文時代の土坑と捉えた。

D161

検出地区　L6-61-2gにて検出した。

遺　構　長軸1.60m×短軸1.40m×深さ0.18m、主軸方位はN-78°-Eを示している。平面形はやや歪な隅丸方形である。ハードロームの坑底は平坦であり、この坑底から急に壁は立ち上がっている。覆土は褐色土と暗褐色土の自然堆積である。遺物は出土しなかった。

所　見　覆土から縄文時代の土坑と捉えたが、時期は不明である。D155をやや小型化した様な近似する形状だが、浅い土坑である。そして本遺構もD155と同様、中期初頭の所産かも知れない。

D162

検出地区　K6-70-1・2gにて検出した。

遺　構　長軸2.22m×短軸1.52m×深さ0.19m、主軸方位はN-26°-Eを示している。平面形は丸みを帯びた長方形状であり、全体として凹み状の土坑である。ハードローム上部を坑底として、平坦な坑底から壁がなだらかに立ち上がる土坑である。また、坑底の北西壁際は三日月状に凹んでいる。覆土は1・2層の境がなだらかでないが、自然堆積である。

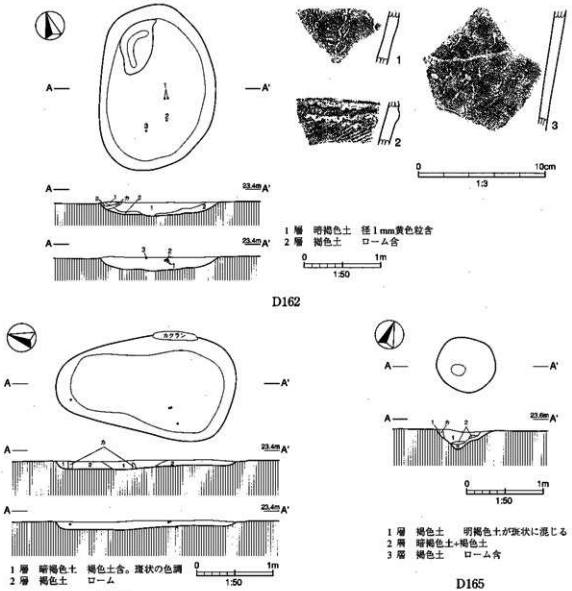


図32　D162・D163・D165

遺　物　本遺構から出土した遺物は、土坑としては多かった。深鉢土器片が主体をしめるが、実測できない黒曜石砕片も多くし出土している。また、図示した1～3はいずれもS字状結節文が施文される土器で、1は横に、2は斜位に、3は縦に施文されている。中期初頭の土器である。

所　見　平面規模に対して深さのない、凹み状遺構とも呼べるものである。出土遺物からは竪穴住居跡を示唆されるが、炉や柱穴・坑底の硬化等は確認できなかった。D161よりは規模が大きくなるが、近似する土坑である。本遺構が土坑なのか住居となるのかは、上谷遺跡の当該時期の遺構の全地区の整理をまって再検討したいが、中期初頭の土坑として報告しておく。

なお、黒曜石の多量の砕片の出土は、本遺構が石器工房跡とも想定されるが、石器や剥片の出土がなく断定できないものとなっている。

D163

検出地区　K6-70-1gにて検出した。

遺　構　長軸2.36m×短軸1.38m×深さ0.13m、主軸方位はN-18°-Wを示している。平面形は丸みを帯びた台形状である。平面規模に比べ深さのない、全体として凹み状の遺構である。ソフトロームの坑底

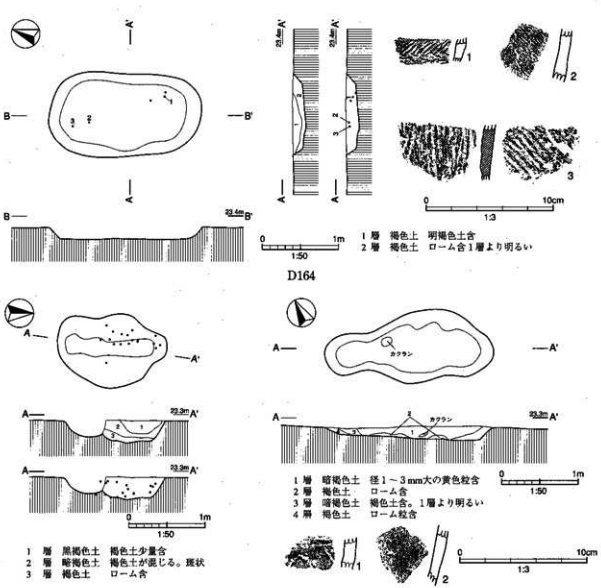


図33　D164・D166・D167

は、中央から北東側がやや低くなっている。壁は坑底から、やや緩やかに立ち上がっている。覆土は複雑な堆積であり、掘り返されているかも知れない。遺物の出土は稀であった。

所　　見　　覆土の堆積が複雑であり、調査では確認はできなかったが、2基の重複した土坑であったかも知れない。覆土等から縄文時代の土坑と捉えたが、時期は不明である。

D164

検出地区　　K6-69-2g、K6-70-1gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.99m×短軸1.01m×深さ0.18m、主軸方位はN-18°-Wを示している。平面形は、丸みを帯びた隅丸長方形である。全体的に平面規模より深さが無く、凹み状の土坑である。坑底はソフトロームであり、中央よりやや南寄りに低くなっていた。壁は、坑底からなだらかに立ち上がっている。

覆土は、褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　　物　　遺物は土坑の南側に偏在して出土するが、早期・条痕文系とS字状結節文を施す中期・五領ヶ台式がともに出土している。1は横位に、2は縦にそれぞれ結節文を、3は内面は斜位にやや太めの条痕文を施文したものである。出土傾向から、3は流れ込みと捉えた。

所　　見　　遺構の形状等から、一連の中期初頭の土坑として捉えた。坑底に硬化面等は確認できず、また、長方形状から竪穴状遺構とも捉えられなかった。

D165

検出地区　　K6-60-2gにて検出した。

遺　　構　　長軸0.77m×短軸0.71m×深さ0.26m、主軸方位はN-71°-Eを示している。平面形はほぼ円形である。ソフトロームの尖底気味の坑底となり、やや南側に偏っていた。壁は、狭い坑底から斜めに立ち上がっている。覆土は、褐色度を主体とした自然堆積であった。遺物は出土したが、ポイントや黒曜石剥片・砕片であった。

所　　見　　形状から、用途を判断しかねる土坑である。黒曜石剥片等の出土は、石器工房跡を想定させるが、ポイントの出土において本土坑が旧石器時代のブロックを壊していることを窺わせるものであった。関連する遺物が少ないため、時期は不明であるが、覆土等から縄文時代の土坑と捉えた。

D167

検出地区　　K6-58-1・2・3・4gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.44m×短軸1.00m×深さ0.30m、主軸方位はN-5°-Eを示している。平面形は検出面は不整形であるが、坑底は長軸の長い細身の長方形である。坑底は南から北へ向けて、凹凸を有しながら次第に下るものである。壁は坑底から丸みをもって急に立ち上がっている。

遺　　物　　出土は多かったが、図示できるものは無かった。中期初頭の縄文及びＳ字状結節文を施文する、深鉢胴部片が主体である。また、小片のため図示できなかったが、黒曜石の剥片も出土している。

所　　見　　土坑の南側を先行して発掘してしまったため、覆土堆積図及び遺物分布図を作成することができなかった。坑底からみると、２基の重複であった可能性が高い土坑である。しかし北側の遺物から、本土坑は中期初頭の所産と捉えることができた。

D168

検出地区　　K6-68-1gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.17m×短軸1.03m×深さ0.31m、主軸方位はN-12°-Wを示している。平面形はほぼ円形である。ハードロームまで掘込んで坑底としているが、坑底をあまり意識しないような土坑である。壁は、坑底から緩やかに立ち上がっている。覆土は一度堆積したものが掘り返された様な状態でもある。出土遺物は、稀であった。

所　　見　　出土遺物が無いため時期決定の根拠が不明瞭となるが、覆土等から縄文時代の土坑と捉えた。時期は不明である。なお、覆土２層は掘過ぎであったかも知れない。

D169

検出地区　　K6-58-4gにて検出した。

遺　　構　　長軸2.20m×短軸1.92m×深さ0.22m、主軸方位はN-71°-Eを示している。平面形はほぼ円形であり、竪穴状の土坑である。坑底はハードローム上面で平坦であったが、特に硬化面は認められなかった。壁は西側がやや丸みを帯びて立ち上がるが、全体として坑底から急に立ち上がる土坑である。竪穴状遺構としたことで調査時に床面を精査したが、炉や柱穴等の住居跡に伴うものは検出されなかった。覆土は、褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　　物　　出土遺物は30点余であり、本地区の土坑としては出土量の多い遺構である。中期土器片と、黒曜石剥片が主体を占めている。１は口縁部片で連続して三角文を刻むものである。２は沈線によって区画された中に刻み目を施し、沈線に沿って鋸歯状に施文している。３は縄文を、４はＳ字状結節文を施している深鉢の胴部片である。

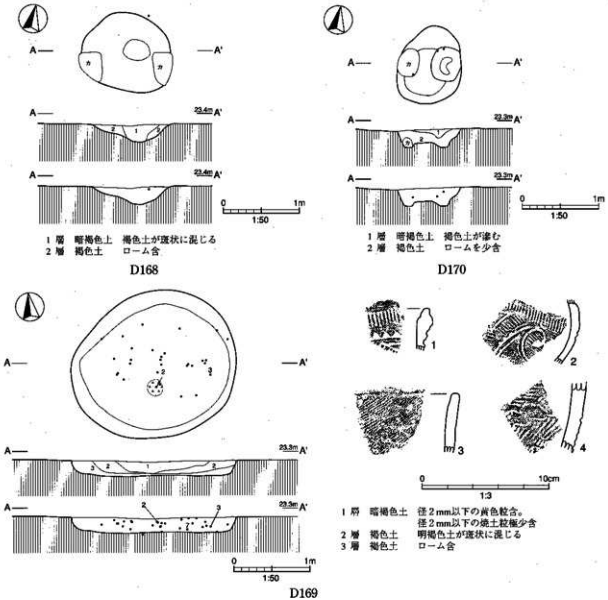


図34　D168・D169・D170

また、小片のため図示できなかったが、打面に加工痕ある剥片や微細剥離痕ある剥片、砕片等の黒曜石が10点出土していた。

また、住居跡中央よりやや南寄りに、小型のマガキの小ブロックが検出された。坑底より５～８㎝程高い位置に、一握り分の貝が廃棄されており、貝の堆積層厚はカキ殻の大きさで２～３㎝であった。

所　　見　　当該時期の遺構としては出土遺物も多く、竪穴住居跡の可能性も調査開始時点ではあったが、炉や柱穴、坑底の硬化面などが検出されなかったため、土坑として扱うこととした竪穴状遺構である。出土遺物の多くは坑底より高い位置からの出土であるが、中期初頭の土器片の出土であった。しかし小型のマガキの貝ブロックの検出が、本遺構の所属時期の想定を複雑化させている。

印旛沼沿岸では大きな貝塚を形成していないが、特に縄文時代中期の貝層形成は知られていない。八千代市域の貝塚にあったても縄文時代早期・前期と後期からの貝塚が知られているだけであり、縄文時代中期の貝層の存在は知られていない。当該時期の貝層が印旛沼の沼尻といわれる八千代市域に所在してもよいものなのかを併せて検討する必要がある。このため本土坑の所属時期を、当面は五領ヶ台期以前としておきたい。なお、貝の分類は検討事項を含めて「上谷遺跡－第５分冊－」にて報告したい。

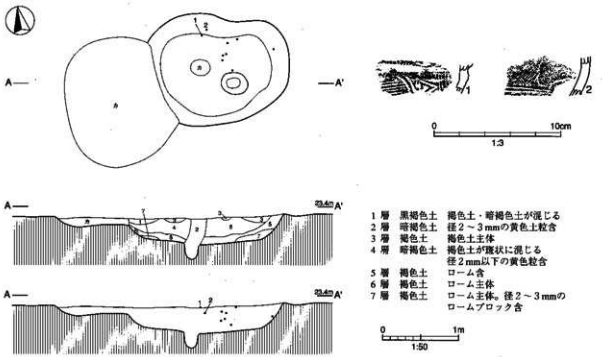


図35　D171

D170

検出地区　K6-68-4gにて検出した。

遺　構　長軸1.05m×短軸0.83m×深さ0.24m、主軸方位はN-5°-Eを示している。平面形は、やや歪んだ円形である。坑底はソフトロームであり、東壁際に坑底から更に浅いピットがハードロームまで掘込まれていた。壁は、坑底から波打つ様に立ち上がっている。そして覆土は褐色土を主体とした、自然堆積であった。遺物は若干出土したが、図示できるものは無かった。

所　見　用途不明の土坑である。覆土等から縄文時代の土坑と捉えた。

D171

検出地区　K6-78-4gにて検出した。

遺　構　長軸1.90m×短軸1.49m×深さ0.37m、主軸方位はN-83°-Wを示している。平面形は歪んだダルマ状である。一見、盤状の竪穴状遺構である。坑底はやや凹凸があるが平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。坑底に1基、柱穴状のピットが検出されている。覆土は、褐色土と暗褐色土を中心とした自然堆積であった。

遺　物　本土坑から出土した遺物は多くなく、点在して出土していた。

1は口縁部文様帯であり、沈線によって区画した中に刻み目を入れ、三角文を施す土器である。2は結節文を施した口縁部文様帯であるが、文様帯の下端に沈線を横走させて文様を区画したものである。

所　見　明確な柱穴と炉跡、硬化面が検出されなかったため、竪穴状遺構の土坑として扱ったが、縄文時代の竪穴住居跡のことも想定せねばならない遺構である。出土遺物から、縄文時代中期初頭の土坑と捉えた。

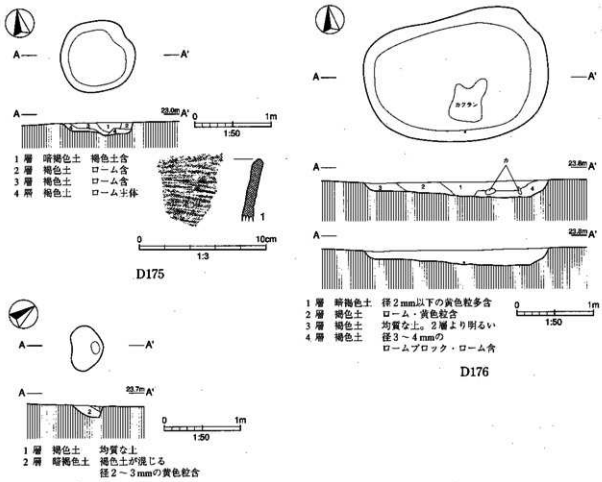


図36　D175・D176・D178

D175

検出地区　K6-46-3gにて検出した。

遺　構　長軸0.99m×短軸0.93m×深さ0.187m、主軸方位はN-89°-Wを示している。平面形はほぼ円形である。坑底はほぼ平坦であるが、やや凹みがある土坑である。壁は西が斜めに、東が垂直に立ち上がっている。覆土は、褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　出土した遺物は少ないが、縄文時代早期の条痕文土器片が出土している。小破片が多かった。1は深鉢の口縁部片であり、横位に条痕文を施しているものである。

所　見　縄文時代早期・条痕文期の土坑である。発掘調査時には炉穴として想定したが、坑底に火床が検出されなかったことから土坑として扱った。

D176

検出地区　K6-65-2gにて検出した。

遺　構　長軸2.44m×短軸1.74m×深さ0.33m、主軸方位はN-79°-Wを示している。平面形は隅丸長方形である。坑底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がる。覆土は褐色土を主体であった。遺物は縄文時代早期・条痕文土器片が僅かに出土しているが、小破片であり図示できなかった。

所　見　炉穴の覆土の堆積であるが、火床もなく、小竪穴状であったため土坑として扱った。

D178

検出地区　K6-66-3gにて検出した。

遺　構　長軸0.60m×短軸0.41m×深さ0.15m、主軸方位はN-52°-Wを示している。平面形は不整形で

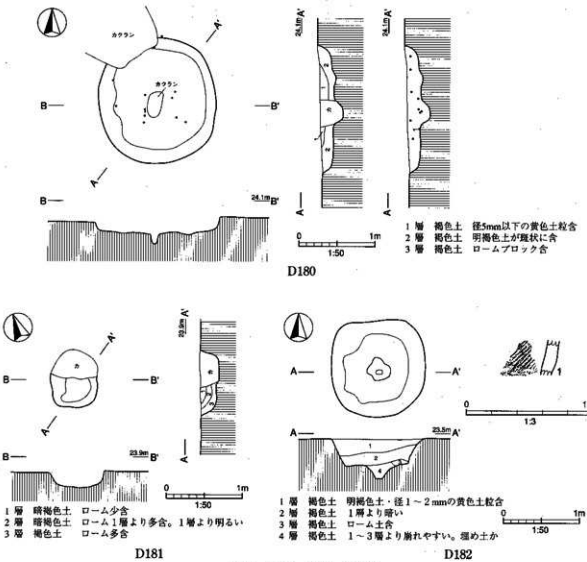


図37　D180・D181・D182

あり、遺物は出土しなかった。

所　　見　片側から掘込んだ様な土坑であり、間をおかずに埋没した状態であった。

D180

検出地区　K6-86-3・4gにて検出した。

遺　　構　長軸1.67m×短軸1.54m×深さ0.22m、主軸方位はN-9°-Eを示している。平面形は楕円形である。坑底はやや凹凸があるがほぼ平坦であり、壁は斜めに立ち上がる。覆土は褐色土を主体としていた。遺物は、条痕文が若干出土している。

所　　見　縄文時代早期条痕文期の土坑である。

D181

検出地区　K6-85-2・4gにて検出した。

遺　　構　長軸m（0.42）m×短軸0.62m×深さ0.20m、主軸方位はN-70°-Wを示している。

所　　見　出土遺物がないため、時期不明の土坑である。

D182

検出地区　K6-80-2・4gにて検出した。

遺　　構　長軸1.27m×短軸1.25m×深さ0.53m、主軸方位はN-1°-Wを示している。

所　　見　早期・条痕文期の土坑である。

第２節　弥生時代

本地区における弥生時代は、４軒の竪穴住居跡が検出されたにとどまった。Ⅱ地区の本時代の遺構も極めて少なかったが、本地区においてもその傾向は続いているといえよう。次回に報告する予定である隣接する地区には、柔い時代後期の竪穴住居跡がやや多く検出されているが、本地区との当該時期の遺構との間の距離も最低60m程はなれており、Ⅲ地区の弥生時代も、やや隔絶した感じを与える遺構検出状況である。

これら４軒の竪穴住居跡はⅡ地区南端に所在しており、隣接して検出された。台地先端から隠れるような標高24m付近に位置しており、単位集団的な竪住居跡のまとまりのようにも窺えるものである。また、検出された竪穴住居跡４軒は、長軸7.95～6.5mの比較的大きな規模の住居跡２軒と、長軸４m規模をもつ中型の住居跡２軒との、規模が大きく２分されるものでり、本地区の遺構数が少ないため、この分け方に意味があるのか即断はできないが、注目される規模であった。

また、本地区の特徴であるのか、遺構に伴う遺物の出土はその出土量が極めて少なく、遺構の所属時期が捉えにくい傾向がある。この傾向は破片自体に及び、出土遺物の大半が縄文土器片という竪穴住居跡もあった。八千代市域でも当該時期の遺構から出土する遺物は一般的に少ないが、それに比しても極めて少ない傾向が窺えた。この遺物の極端な少なさが、Ⅲ地区の特徴なのか、上谷遺跡全体の傾向なのかは、今後の資料の整理に待つしかないが、本地区の遺物出土傾向として捉えておきたい。

以下、竪穴住居跡について報告することとする。

A146

検出地区　M6-92-1・2・3・4g、M7-2-2g、M7-3-1gにて検出した。

遺　　構　長軸7.95m×短軸6.65m×壁高0.70m、主軸方位はN-75°-Wを示す、平面形がやや丸みを帯びた隅丸方形の竪穴住居跡である。規模の大きな、しかも検出面からの深さがある住居跡である。床はハードロームの地床であり、主柱穴に囲まれた範囲は床表面が損壊を被っていた。床の硬化は、かろうじてP3脇の極狭い範囲で検出した。柱穴はP1～4の主柱穴と、壁柱穴が検出された。主柱穴の覆土はいずれも黒色土主体であり、引抜かれた様子が窺えた。しかし柱穴覆土下部は突き固めれたようにしまりが残っていた。P5は出入口施設に伴うピットであり、その周辺と壁際は浅く掘込まれていた。炉はP1とP4の中間に営まれ、浅い掘込みであった。火床は赤化が強く硬化していた。住居跡の覆土は、暗褐色土の流入後、黒色土を主体とした自然堆積であった。

遺　　物　全体的に少なく、とくに住居跡東半は数点の出土であり、少ない出土遺物の中でもその出土傾向に偏在が見られた。しかし遺物の大半は、縄文時代早期・撚糸文系土器片や条痕文系土器片が主体であり、本住居跡に伴うものは極めて少なかった。

１は折り返し口縁下端に円形刺突を行ったもので、網目状撚糸文を施文したもの。２は頸部に輪積痕を残し、胴部に附加条縄文を、３は結節文の亀片である。４は高坏と思われる。22～24は磨耗痕や切れ込みを残す軽石であるが、砥石としての利用が考えられるものである。以上の７点が本住居跡に近い時期の遺物と判断されるが、いずれも床から高く浮いていた。５～13、13・14は縄文時代早期の土器片であるが、前者は撚糸文系であり、後者は条痕文系土器片であった。21の黒曜石の剥片もまた、縄文時代に属するものと捉えた。15～20は奈良・平安時代に属するものであり、16～20はいずれも土師器坏の墨書土器であった。

所　　見　本住居跡に関連するであろう出土遺物も床面からかなり高い位置から出土しており、所属時期を判断する資料に乏しい遺構となるが、遺構の形状等から弥生時代後期の所産と捉えた。

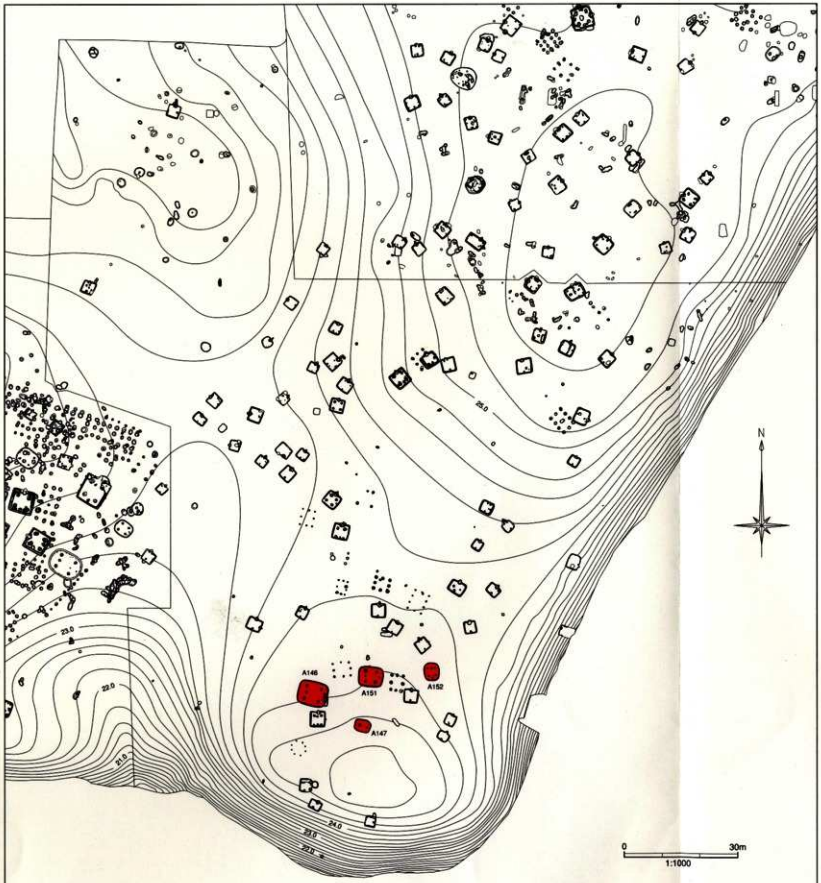
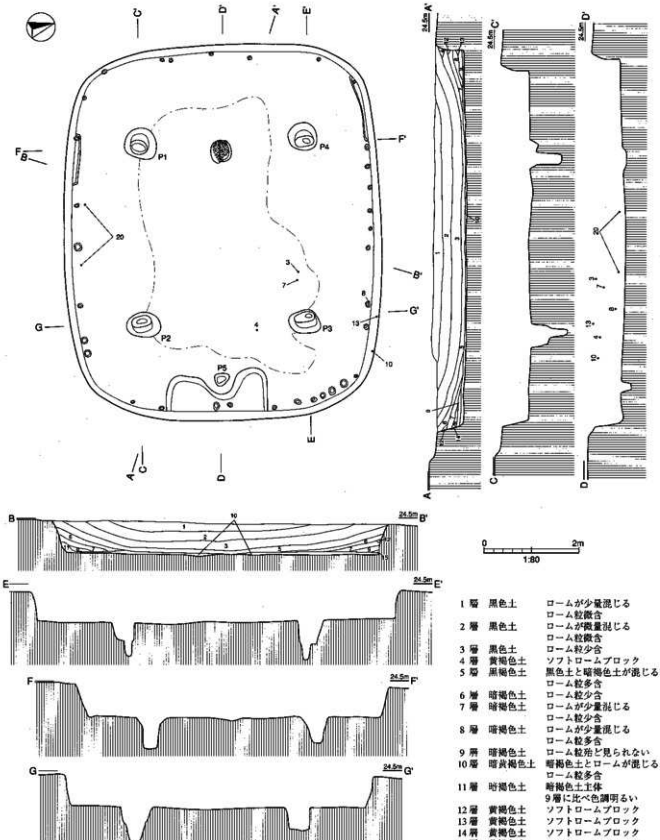


図38　上谷遺跡Ⅲ地区弥生時代遺構配置図



1 層	黒色土	ロームが少量混じる ローム粒微含
2 層	黒色土	ロームが微量混じる ローム粒微含
3 層	黒色土	ローム粒少含
4 層	黄褐色土	ソフトロームブロック
5 層	黒褐色土	黒色土と暗褐色土が混じる ローム粒多含
6 層	暗褐色土	ローム粒少含
7 層	暗褐色土	ロームが少量混じる ローム粒少含
8 層	暗褐色土	ロームが少量混じる ローム粒多含
9 層	暗褐色土	ローム粒殆ど見られない
10 層	暗黄褐色土	暗褐色土とロームが混じる ローム粒多含
11 層	暗褐色土	暗褐色土主体 9層に比べ色調明るい
12 層	黄褐色土	ソフトロームブロック
13 層	黄褐色土	ソフトロームブロック
14 層	黄褐色土	ソフトロームブロック
15 層	黄褐色土	ソフトロームブロック

図39　A146

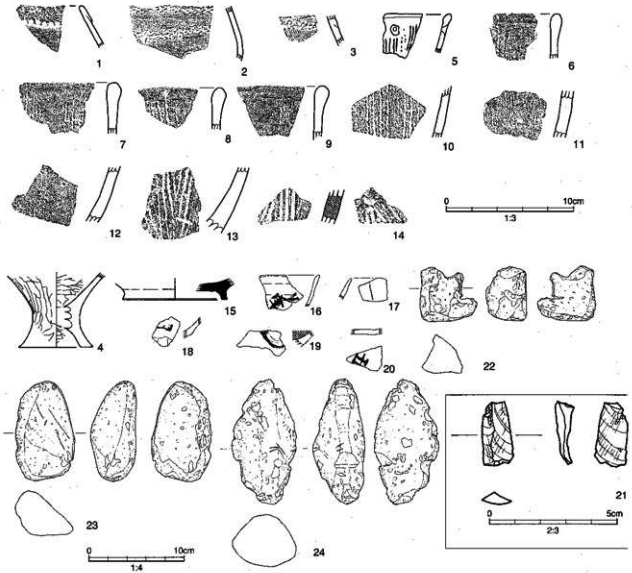


図40　A146（2）

表5　A146遺物観察表　（単位mm）

No.	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	－×－×－ 口縁折り返し　網目状燃糸文　下端に円形刺突　ヘラ磨き	橙褐 悪	砂粒 白色針状物質	口縁片	
2	弥生 甕	－×－×－ 頸部外面輪積み痕　内面ヘラナデ 胴部上半附加条縄文	暗褐 普	砂粒含	頸部～胴部片	
3	弥生 甕	－×－×－ 胴部上半　結節3段→ナデ→結節3段→ナデ 内面ヘラナデ	㊙暗褐 ㊙褐 普	砂粒含	胴部片	外面スス付着 赤彩
4	弥生 高坏	－×(78)×(78)　脚部「ハ」の字状 外面　脚下半縦ヘラ削り　脚部横ヘラ削り 内面　脚部縦横ヘラ削り後粗いヘラ磨き　脚部内面ヘラ削り	橙褐 普	粗砂粒 赤色粒含	体部～脚部	

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
5	縄文 深鉢	－×－×－　撚糸文　口唇肥厚　外面より孔を穿つ	褐 悪	粗砂粒含	口縁片	
6	縄文 深鉢	－×－×－　撚糸文	橙褐 普	砂粒含	口縁片	
7	縄文 深鉢	－×－×－　撚糸文　口唇肥厚	㊀暗褐 ㊁褐 普	粗砂粒 白色粒 多含	口縁片	
8	縄文 深鉢	－×－×－　撚糸文　口唇肥厚	暗褐 普	粗砂粒含	口縁片	
9	縄文 深鉢	－×－×－　撚糸文　口唇肥厚	㊀暗褐 ㊁橙褐 普	粗砂粒含	口縁片	
10	縄文 深鉢	－×－×－　撚糸文　口唇肥厚	㊀暗褐 ㊁褐 普	粗砂粒 白色粒 多含	口縁片	
11	縄文 深鉢	－×－×－　撚糸文	暗橙褐 普	粗砂粒 多含	胴部片	
12	縄文 深鉢	－×－×－　撚糸文	橙褐 普	砂粒 白色粒含	胴部片	
13	縄文 深鉢	－×－×－　撚糸文	㊀橙褐 ㊁褐 悪	砂粒 褐色粒含	胴部片	
14	縄文 深鉢	－×－×－ 胴部外面斜位・縦位、内面斜位の条痕文	暗赤褐 普	繊維含	胴部片	
15	須恵器 高台付皿	－×(110)×(22)　ロクロ成形　底部回転ヘラ削り　高台部緩く外反 内外面ナデ	灰白 悪	砂粒 小石含	底部片	
16	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形　内外面ナデ	褐 悪	粗砂粒 小石含	口縁片	墨書「□」 体部外面
17	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形　内外面ナデ	明褐 悪	粗砂粒 雲母含	口縁片	墨書「□」 体部内面
18	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形　体部下端ヘラ削り	橙褐 普	砂粒含	体部片	墨書「□」 体部外面
19	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り　体部内面ヘラ磨き	橙褐 普	砂粒含	体部片	墨書「□」 体部外面
20	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形　底部回転糸切り後外周ヘラ削り　内面ナデ	明褐 普	砂粒 赤色粒 雲母含	底部片	墨書「□」 体部内面
21	石器 剥片	長軸25×短軸13×器厚5　重量1.2g 小型の縦長剥片である				黒曜石

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
22	石器 軽石	長軸57×短軸59×器厚41　重量16.4g 断面三角形に近い不整な方形を呈する 全体に明瞭な研磨痕が残り一部強く凹む				砥石
23	石器 軽石	長軸106×短軸62×器厚47　重量40.3g 上端がやや尖った長楕円形を呈する　側縁部を含めて全体に良好な研磨痕が残り特に両面には平滑な部位が見られる				砥石
24	石器 軽石	長軸132×短軸67×器厚55　重量69.6g 両端が尖った長楕円形を呈する 両側縁に深さ５～10mmほどの粗い切れ込みを有する				砥石

A147

検出地区　M7-3-4g、M7-13-2g、M7-14-1gにて検出した。

遺　構　長軸4.17m×短軸3.36m×壁高0.51m、主軸方位はN-74°-Wを示し、平面形が東西に長い隅丸長方形の竪穴住居跡である。床はハードロームの地床であり、硬化するには至っていないがよく踏み固められていた。しかし炉とP1間の、住居跡中央の床は軟弱であった。柱穴は、主柱穴は検出できなかったが、壁柱穴を12カ所確認した。炉は住居跡中央よりやや西壁に寄り、浅い掘込みのピットとして設けられていた。炉の坑底のほぼ全体が赤化し、硬化した火床である。炉の覆土は、焼土粒を少しだけ含む黒色土であった。

なお、本住居跡の覆土は色調や包含物によって分層したが、色調的に大きく３つに分けることができた。各覆土のうち床面直上層や壁際には暗黄褐色土を、中層は暗褐色土を、上層は黒色土をそれぞれ主体とした自然堆積であった。

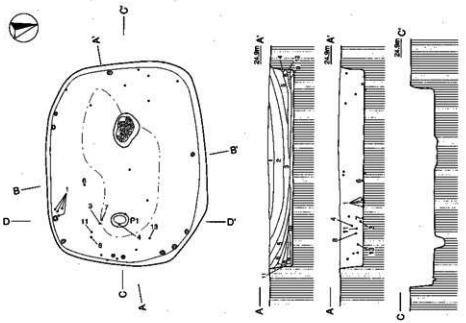
遺　物　覆土上層から床面にかけて若干出土するのみであるが、住居跡北側では中層から床面にかけての遺物の出土であった。また、出土遺物は縄文時代早期の撚糸文系土器片が多く、本住居跡に関わる遺物は少なかったが、本地区の弥生時代の遺構としてはやや多い出土点数である。

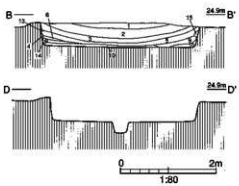
１は口唇部に附加条縄文を施し、頸部に輪積痕を残している。また、頸部と胴部の接合部に残した輪積みの段に、刻み目を入れた甕である。２～４は、口唇・口縁部に附加状縄文を施し、口縁部下端に角状の刺突を繰り返す甕である。５・６は輪積みの段に円形の刺突を繰り返す甕である。７～９は結節文から附加条縄文を施し、10・11は附加条縄文のみ残る甕破片である。以上の1～11が本住居跡に関わる遺物であるが、１・６・７の３点が床面から出土しているものである。

12～16は縄文時代早期の土器片で、12～15は撚糸文の土器片、16は条痕文土器片であった。いずれも流れ込みと捉えられた。

所　見　本住居跡は、先述したように本地区の弥生時代の遺構としては、当該時期の遺物のやや多い遺構であった。そして床面出土の遺物から弥生時代後期に属する遺構と捉えた。

また、本遺構は竪穴住居跡としては、Ⅲ地区の住居跡のうち中型の規模となるものである。大きな規模を持つA146やA151と隣接するが、囲われたような配置となっていることを指摘しておきたい。大型と中型の規模の竪穴住居跡がセットとして捉えられるかは、上谷遺跡全体の弥生時代の整理が終了していない現時点では何とも言えないが、今後、十分に考慮して整理を進めていきたい。





1 層	黒色土	暗褐色土が少量混じる
2 層	黒色土	ローム粒微含
3 層	黒褐色土	黒色土と暗褐色土が混じる。黒色土やや多い ローム粒微含
4 層	暗黄褐色土	崩れたソフトロームが暗褐色土に混じる
5 層	黒褐色土	黒色土と暗褐色土が混じる。暗褐色土やや多い
6 層	暗褐色土	ロームが少量混じる。ローム粒微含
7 層	暗褐色土	ロームが少量混じる
8 層	暗褐色土	ローム粒微含
9 層	暗褐色土	ローム粒微含
10 層	暗黄褐色土	暗褐色土とロームが混じる。ローム粒多含
11 層	暗黄褐色土	崩れたソフトロームが暗褐色土に混じる
12 層	暗黄褐色土	崩れたソフトロームが暗褐色土に混じる
13 層	暗黄褐色土	崩れたソフトロームが暗褐色土に混じる
14 層	暗黄褐色土	崩れたソフトロームが暗褐色土に混じる
15 層	暗黄褐色土	崩れたソフトロームが暗褐色土に混じる

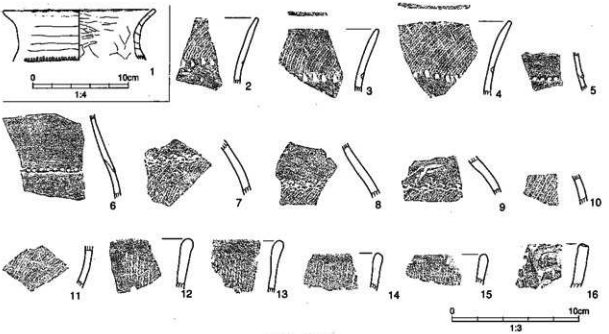


図41 A147

表6　A147遺物観察表　　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	160×－×(54)　口縁外反　内面ヘラ削り後粗いヘラ磨き 口唇附加条縄文か？　口縁～頸部輪積み痕 胴部との境に輪積み痕を利用した段を有し下端に刻み目	暗褐～ 暗赤褐 普	砂粒含	口縁～ 頸部片	
2	弥生 甕	－×－×－　口縁外反　口縁・口唇附加条縄文　下端に先端尖ったやや角状の工具による連続刺突　内面ナデ	暗褐 悪	粗砂粒含	口縁片	
3	弥生 甕	－×－×－　口縁外反　口縁・口唇附加条縄文　下端に先端尖ったやや角状の工具による連続刺突　内面ナデ	㊥暗褐 ㊦褐	砂粒含	口縁片	外面スス付着
4	弥生 甕	－×－×－　口縁外反　口縁・口唇附加条縄文　下端に先端尖ったやや角状の工具による連続刺突　内面ナデ	㊥暗褐 ㊦明褐 普	砂粒含	口縁片	
5	弥生 甕	－×－×－ 輪積み痕を利用した段の下端に円形の連続刺突 内面ナデ	暗赤褐 普	砂粒含	頸部～ 胴部片	外面スス付着
6	弥生 甕	－×－×－ 輪積み痕を利用した段の下端に円形の連続刺突 内面ナデ	暗赤褐 普		頸部～ 胴部片	外面スス付着
7	弥生 甕	－×－×－　胴部上半　結節２段→附加条縄文　内面ナデ	㊥褐 ㊦明褐 普	砂粒含	胴部片	外面スス付着
8	弥生 甕	－×－×－　胴部上半　結節２段→附加条縄文　内面ナデ	㊥褐 ㊦明褐 普	砂粒 橙色粒含	胴部片	外面スス付着
9	弥生 甕	－×－×－　胴部上半　結節２段→附加条縄文　内面ナデ	明赤褐 普	砂粒含	胴部片	外面スス付着
10	弥生 甕	－×－×－　胴部上半　附加条縄文　内面ナデ	明褐 普	砂粒含	胴部片	外面スス付着
11	弥生 甕	－×－×－　胴部上半　附加条縄文　内面ナデ	㊥褐 ㊦明褐 普	砂粒 橙色粒含	胴部片	外面スス付着
12	縄文 深鉢	－×－×－　口唇肥厚　撚糸文	橙褐 悪	粗砂粒 多含	口縁片	内面器面剥離 著しい
13	縄文 深鉢	－×－×－　口唇やや肥厚　撚糸文	㊥橙褐 ㊦褐 悪	粗砂粒 多含	口縁片	
14	縄文 深鉢	－×－×－　口唇やや肥厚　細かい撚糸文	㊥橙褐 ㊦褐 悪	粗砂粒 多含	口縁片	
15	縄文 深鉢	－×－×－　口唇刻み植物の茎束状の原体で曲線を描く	橙褐 普	石英 チャート 等小石多	口縁 片？	
16	縄文 深鉢	－×－×－　撚糸文	褐 普	粗砂粒含	胴部片	

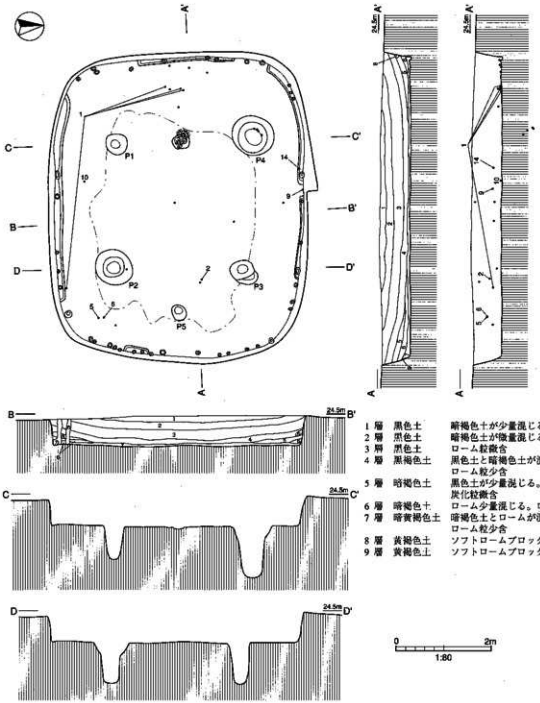


図42　A151

A151

検出地区　　M7-12-1・2・3・4gにて検出した。

遺　　構　　長軸6.54m×短軸5.45m×壁高0.67m、主軸方位はN-80°-Wを示す、平面形がやや丸みを帯びた隅丸方形の竪穴住居跡である。A146と同様、やや掘込みが深く、規模の大きな住居である。

床はよく踏み固められたハードロームの地床であったが、４本の主柱穴に囲まれた住居跡中央部では床面が壊れていた。柱穴は４本(P1～4)の主柱穴と40カ所の壁柱穴のピットが検出された。主柱穴の覆土はいずれも黒色土主体であったが、その状態から柱は引抜かれている様子がうかがえた。しかし柱穴覆土の中層から下部は、ロームが突き固められた様にしまりの強いものであった。P5は出入口施設に伴うピットであり、少量の黒色土を混入したロームを覆土としていた。炉はP1とP4の中間で検出された。凹み

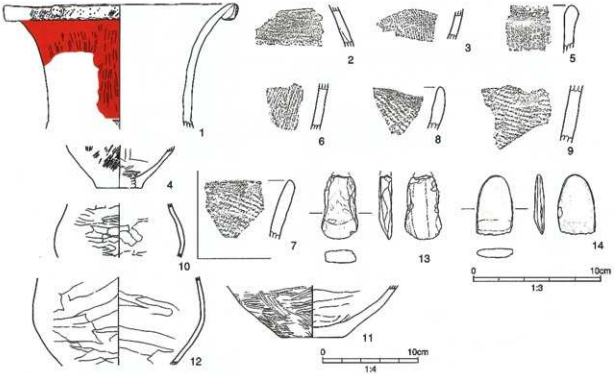


図43　A151（2）

状ともいえる掘込みの浅いピットに炉が営まれており、坑底から床面に張り出して、赤化が強い火床となっていた。炉の覆土に焼土は少なく、ロームと黒色土が覆土であった。住居跡覆土は暗褐色土の流入後、黒色土を主体とした自然堆積である。

遺　　物　　出土した遺物の層は覆土中層から床面であったが、弥生時代後期の住居跡としても非常にその出土量は少なかった。1は、頸部に赤彩された複合口縁の壺である。口縁には単節縄文を施文している。複合部下面には黄圧している。また、口縁部に貼付された円形浮文には刺突がある。2は頸部と胴部の境に残る輪積みを利用した段に、竹管具による連続刺突を残している。3は、附加条縄文を施文した甕である。4は、胴部下半から底部にかけて遺存する小型の甕であり、附加縄文が施文されている。13は刃部を一部磨いている扁平な石材を利用した片刃石斧である。典型的な石器ではなく、石斧状の石器として扱った方がよいものである。14は石斧に見間違えるが、扁平な石材を利用した敲石である。以上、1～4が本住居跡に係わるものであり、13・14は床面より高い位置で出土しており、弥生時代に属するか不明な点もある。5～9は縄文土器片であり、5～6は撚糸文系、7～9は無節縄文が施文された加曽利ｅである。また、10～12は土師器甕であり、いずれも流れ込みによるものである。

所　　見　　本住居跡に伴う出土遺物から、後期の所産と捉えた。なお、本住居跡は本地区においては隣接するA146とともに規模の大きな竪穴住居跡である。

表7　A151遺物観察表　　（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	(240)×－×(128)　複合口縁　口縁LRとRLの単節縄文が施文されるか？構成不明。複合部下面に押圧。複数の刺突を加えたボタン状貼付。 (残存２個)　頸部ヘラ磨き→沈線→RL単節縄文	橙褐 悪	粗砂粒 多含	口縁～ 頸部片	赤彩
2	弥生 甕	－×－×－ 輪積みを利用した段の下端に竹管状の工具による連続刺突 内面ナデ	褐 良	砂粒 小石微量 含	頸部片	

No.	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
3	弥生 甕	－×－×－　附加条縄文　内面ヘラナデ	暗赤褐 普	砂粒 橙色粒含	胴部片	
4	弥生 小型甕	－×50×(45)　胴下半附加条縄文　内面ナデ　胴下端ヘラ削り	暗橙褐 ～暗褐 普	砂粒含	底部片	内外面スス付着
5	縄文 深鉢	－×－×－　口唇肥大　撚糸文	⑧橙褐 ⑨暗橙褐 普	粗砂流 白色粒含	口縁片	
6	縄文 深鉢	－×－×－　撚糸文	⑧橙褐 ⑨褐 普	粗砂粒含	胴部片	
7	縄文 深鉢	－×－×－　無節縄文	橙褐 普	砂粒 赤色粒含	口縁片	
8	縄文 深鉢	－×－×－　波状口縁　無節縄文　内面磨き	橙褐 普	砂粒 赤色粒含	口縁片	
9	縄文 深鉢	－×－×－　無節縄文　内面ナデ	橙褐 普	砂粒含	胴部片	
10	土師器 小型甕	－×－×(57)　胴部断面楕円状 胴部ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ナデ	暗赤褐 普	砂粒含	胴部片	外面スス 微量付着
11	土師器 甕	－×(66)×(55)　部下半ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ナデ	橙褐 良	砂粒含	胴部～ 底部片	外面スス付着
12	土師器 小型甕	－×－×(93)　胴中央が張り下半すぼまる 胴上半～下半ナデ　内面強めのヘラナデ　胴下端ヘラ削り	⑧橙褐 ⑨暗赤褐 ～暗褐 普	粗砂粒 多含	胴部片	小型
13	石器 磨製石斧	長軸50×短軸28×器厚11　重量25.9g 片刃の磨製石器である。円刃状を呈する。刃部を中心に研磨が施されている。体部には敲打痕が施されている。			略完形	
14	石器 敲石	長軸54×短軸32×器厚23　重量62.9g 全体の形状など不明な点が残るが、残存部の上端を中心に敲打痕が残されており、敲石的な用途も考えられる。側縁部には研磨痕や擦痕も認められる。			略完形	

A152

検出位置　M7-22-34g、M7-32-12gにて検出した。

遺　構　長軸4.91m×短軸4.04m×壁高0.53m、主軸方位はN-6°-Wを示す、平面形がやや丸みを帯びた隅丸方形の竪穴住居跡である。床は踏み固められたハードロームの地床であるが、主柱穴間及び北東コーナーにかけて損壊しており、硬化面の検出はできなかった。柱穴はP1～P4の主柱穴と、壁柱穴が検出された。壁柱穴は18カ所が検出されたが、北壁及び東壁側の床が壊れているため、住居跡全体としては確認することができなかった。主柱穴の覆土はいずれもローム粒子を僅かに含んだ黒色土を主体としていたが、その状態から柱が住居廃絶時に引抜かれていた様子が窺えた。しかし柱穴覆土の中層以下は、人為的に突き固められている様子が窺えるものであった。P5は出入口施設に伴うピットと捉えられ、その南側の壁際にも浅いピットが掘込まれていた。炉は、P1とP4の中間に設けられ、炉ピット中央から炉外南側の床に広がって赤化した火床が認められた。浅い掘込みであった。住居跡の覆土は、暗褐色土の

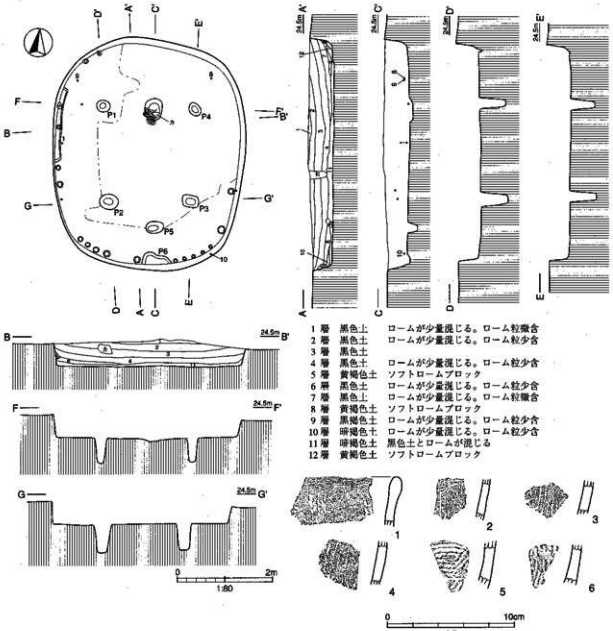


図44 A152

床面への流入後、黒色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　覆土下層より若干出土したのみで出土遺物は極めて少なく、しかも図示できる本遺構に伴う土器片は全くと言っていいほど出土しなかった。いずれも他の時代の遺物を図示したが、1～4は撚糸文系土器片であり、5・6は無節縄文を施文した土器片である。7は土師器の小型甕であった。8・9は定形的ではないが、磨石として使用している。また、10は剥片であり、すべて住居跡周辺からの住居埋没時における流れ込みと判断した。

所　見　本住居跡はA147と同様に中型の規模を有する住居跡であり、A147よりはやや大きくなるが形状等が近似する住居跡である。関係する出土遺物がなく、所属時期を決定することが難しい本遺構については、周辺の弥生時代後期の竪穴住居跡の遺構配置やA147と形状の類似性等から、弥生時代後期の所産と捉えられた。なお、A147との違いは主柱穴の存在の有無だけと考えている。

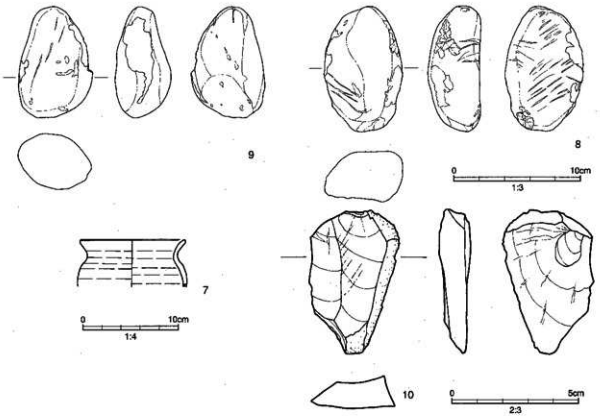


図45　A152（2）

表8　A152遺物観察表

（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	－×－×－　LR巻貝大　撚糸文　内面磨き	橙褐 良	粗砂流含	口縁片	
2	縄文 深鉢	－×－×－　撚糸文	㊥褐 ㊦暗褐 普	砂粒 赤色粒含	胴部片	
3	縄文 深鉢	－×－×－　撚糸文	㊥橙褐 ㊦暗褐 普	粗砂流含	胴部片	
4	縄文 深鉢	－×－×－　撚糸文	明褐 普	砂粒含	胴部片	器面磨耗
5	縄文 深鉢	－×－×－　無節縄文　内面弱く磨かれる	㊥黒褐 ㊦暗橙褐 普	砂粒含	胴部片	
6	縄文 深鉢	－×－×－　無節縄文	㊥暗褐 ㊦暗褐 普	砂粒含	胴部片	
8	石器 磨石	長軸99×短軸62×器厚40　重量340.0g 楕円形を呈する。全面に磨痕が見られる。特に表面と一側縁で顕著であり、極めて平滑である。側面には部分的に敲打痕も認められる。			略完形	
9	石器 磨石	長軸88×短軸58×器厚45　重量268.7g 不整な卵形を呈する。 全体に磨痕が認められるが、それほど明瞭ではない。			略完形	
10	石器 剥片	長軸57×短軸35×器厚13　重量26.1g やや不定型な縦長剥片である			完形	

第3節 奈良・平安時代

上谷遺跡Ⅲ地区において検出された奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡を主体として構成されている。遺構別にみると竪穴住居跡55軒、掘立柱建物跡9棟、土坑37基であった。遺構配置では竪穴住居跡が、大きく2つの環状に展開するものとして捉えられるようである。また、掘立柱建物跡はⅡ地区と比べその棟数を大きく減少させ、単位集団としての最低限の棟数となっているように窺える。

奈良・平安時代の遺構はⅡ地区から東の谷津に沿って広がる台地上に展開しており、次回に報告するⅣ地区との間に入る浅い谷頭に沿って主に所在し、Ⅳ地区との間には若干の遺構の空白帯が存在する様である。しかし上谷遺跡の整理が地区ごとに分割されている中で、全体の傾向から検討することが未だできず、遺構配置状況の概観だけにとどめておくこととする。

出土する遺物のうちⅡ地区では墨書土器等の出土文字資料が多かったが、Ⅲ地区に入ってその数を減らしている。また、Ⅱ地区で主体となっていた「得」「万」の字も減少し、数は多くはないが「竹」を中心とした文字へと変化している傾向が窺えた。後述するが、その検出遺構も異なり、集落の主体とする文字の変化を窺わせている。なお、墨書土器のうち、所謂「長文」の土器もⅢ地区ではⅡ地区に引き続き出土している。特殊な遺物としては、温石がⅡ地区に続いて1点出土している。

以下、遺構別に奈良・平安時代の調査の成果を報告することとする。

第1項 竪穴住居跡

上谷遺跡Ⅲ地区における奈良・平安時代の竪穴住居跡は、前回報告したⅡ地区と異なり、重複する遺構がやや少ないことが特徴としてあげられよう。また、Ⅱ地区からの流れからくる16調査区南側を中心とした竪穴住居跡群と、9調査地区、10調査地区に広がる竪穴住居跡群、また、9調査地区から8調査地区へ広がる竪穴住居群の3群とに大きく捉えることができるようである。そして環状に展開する竪穴住居跡群としても把握できるようである。一方、15調査地区東側と19調査地区西側には竪穴住居跡の検出は少なく、当該遺構の偏在がみられるようである。立地としてやはり台地上平坦部に多く、斜面部縁辺には少ない傾向であった。

次に、奈良・平安時代の竪穴住居跡の遺構及び遺物について報告していきたい。

A125

検出地区　L7-32-1・2・3・4gにて検出した。Ⅱ地区から直接につながる地区である。

遺　構　長軸4.18m×短軸3.63m×壁高0.51m、主軸方位はN-37°-Wを示す。平面形はやや竈方向に長さを有する隅丸方形である。床は住居跡の中央付近から出入口の南東壁にかけて、広く硬化面を残していた。周溝はほぼ全周するが、東壁際は住居の若干の拡張のためか、壁よりやや内側に巡っている。主柱穴はP1～P4であり、柱穴の覆土は柱の引抜きを示していた。煙道部の壁への掘込みの浅い竈の袖は左右で高さが異なり、左袖が高いものとなっていた。竈袖の内壁は赤化が強く、使用の頻度を窺わせるものである。住居跡の出入口脇にロームを主体として固めたような方形のベッド状の高まりを検出した。

床面と直上層からは竈壁から住居跡中央にかけて、暗褐色土と混合した焼土が認められた。これに伴う炭化材が壁から住居中央に向かって、壁上から投げ込んだような状態で検出された。壁際では炭化材はかなり床から浮いた状態であった。覆土にも住居廃絶後の火の使用の跡が残されており、その消火に伴う人為的投入土か覆土下層に堆積していた。覆土上層は暗褐色土を主体としており、下層の人為的投入後の自然堆積である。

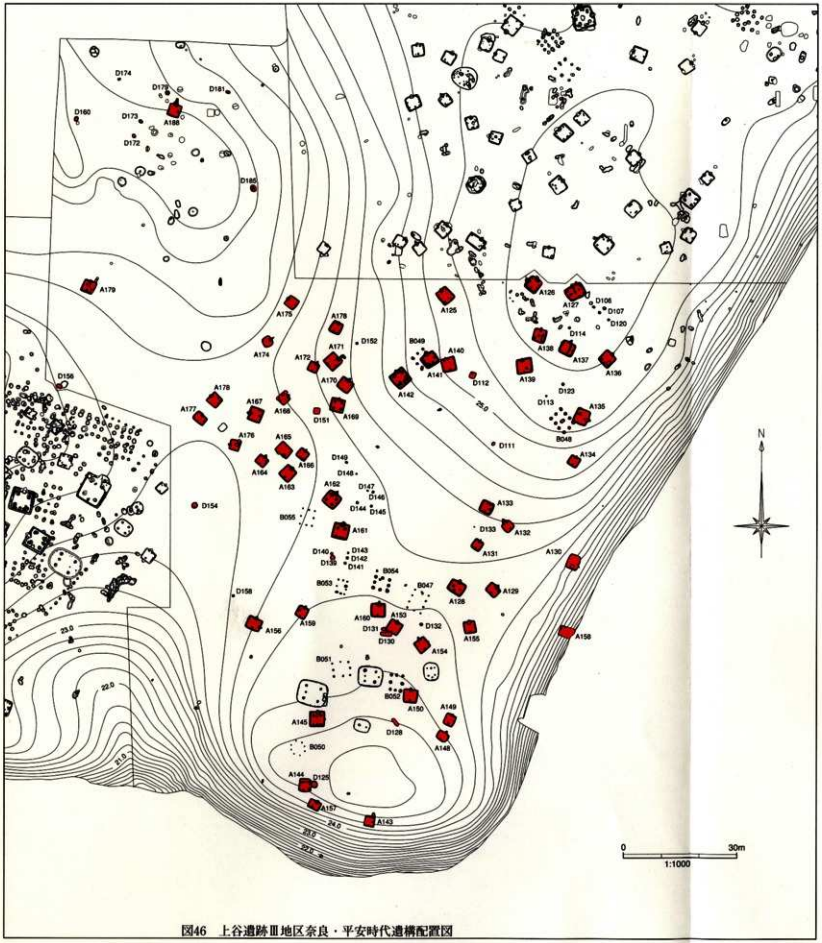
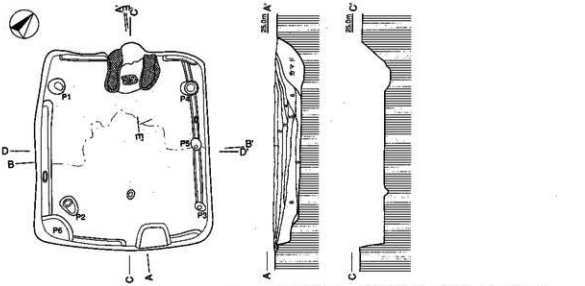
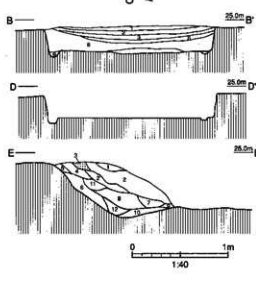


図46　上谷遺跡Ⅲ地区奈良・平安時代遺構配置図



1 層　暗褐色土　褐色土がほぼ均一に混じる。ローム粒数点含
2 層　暗褐色土　褐色土がほぼ均一に混じる。ローム数点含
3 層　暗褐色土　褐色土が混じる。ローム微粒数点含
4 層　暗褐色土　薄った白色粘土が粒一に混じる
5 層　黒褐色土　暗褐色土が混じる。部分的に薄ったローム有り
6 層　暗褐色土　褐色土がほぼ均一に混じる土の中に白色粘土含
7 層　暗黄褐色土　薄ったローム と暗褐色土が混じる
8 層　暗褐色土　暗褐色土主体　薄ったローム・黒色土・褐色土が粗く混じる。ローム微粒
9 層　暗褐色土　薄ったローム が混じる



1 層　暗褐色土　粘土・焼土滲む
2 層　褐色土　粘土混じる。径5mm以下の焼土ブロック粒含
2'層　褐色土　2層下位に土器が重なり層説明できず
3 層　黄白色土　砂質粘土主体。褐色土・焼土粒少含
4 層　暗褐色土　黒色の炭・炭化物・焼土混じる
5 層　褐色土　ローム混じる
6 層　淡赤褐色土　褐色土と焼土炭化物混じる
7 層　暗赤褐色土　焼土混じる
8 層　暗赤褐色土　7層に似るがより焼土が多く赤色味が増す
9 層　黒褐色土　焼土粒少含
10 層　褐色土　径2～3mmの焼土粒まばらに含
11 層　褐色土　径2～3mmの焼土ブロック・焼土粒多含
12 層　淡赤褐色土　焼土を主体。径1～2mmの焼土ブロック

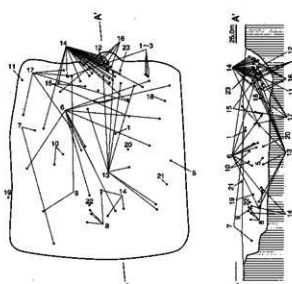


図47　A125

遺　物　出土傾向は平面的にも垂直分布としても、住居跡全体に散在した状態である。特に15は横倒しの状態であり、12は竈脇の消火層上部の出土である。1～3は床面より若干高い位置の出土であるが、3個を重ねた状態であった。竈からは12と14が重なって出土していた。14は底部を上にした状態であった。またⅡ地区の出土傾向が続き「得」と記された墨書土器が4点出土している。

所　見　住居廃絶後の、火の使用の消火による人為的投入による埋没住居跡である。しかし完全には埋没しておらず、浅い凹みとなって残った住居跡である。また、Ⅱ地区の当該時期の住居との直接的な繋がりを窺わせる「得」の墨書土器が出土していることは、上谷遺跡の集落展開を示唆していると言えよう。

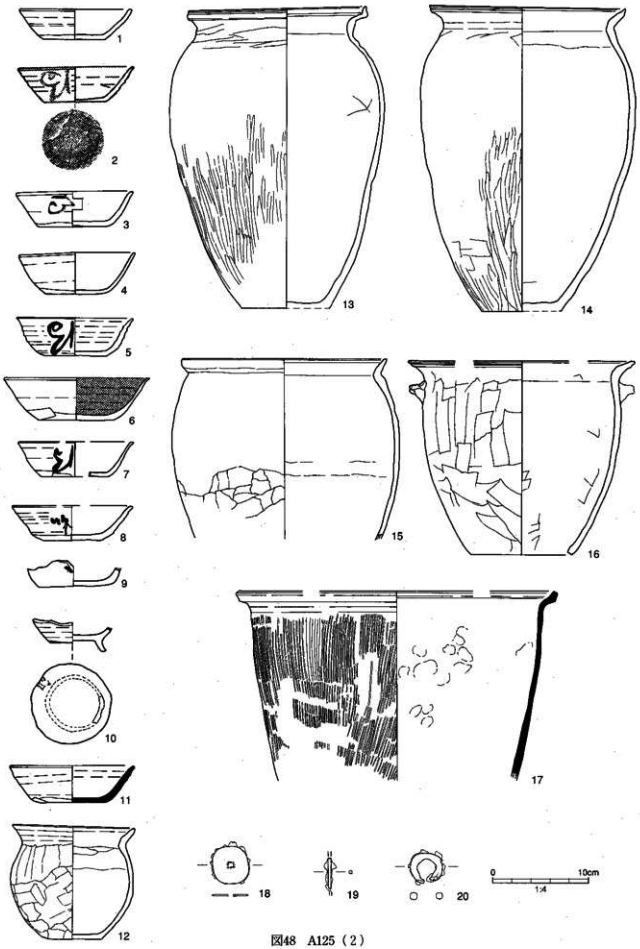


図48 A125（2）

表9　A125遺物観察表　　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	117×64×32　ロクロ成形　底部回転糸切り後底縁ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	橙褐 普	普	完形	
2	土師器 坏	121×65×35　ロクロ成形　底部回転糸切り後底縁ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	褐 普	普	完形	墨書「得」 体部外面逆位
3	土師器 坏	120×74×36　ロクロ成形　底部回転糸切り後底縁ヘラ削り 体部は直線的に立ち上がってゆく　体部下端ヘラ削り	㊦淡褐 ㊤褐 普	普	完形	墨書「得」 体部外面横位
4	土師器 坏	123×64×43　ロクロ成形　底部回転糸切り後底縁ヘラ削り	淡褐 普	普	完形	
5	土師器 坏	124×66×40　ロクロ成形　底部回転糸切り後底縁ヘラ削り	淡褐 普	普	完形	墨書「得」 体部外面逆位
6	土師器 坏	154×80×45　ロクロ成形　底部回転糸切り後底縁ヘラ削り 内面丁寧な磨き	㊦褐 ㊤黒 普	普	1/2	内黒
7	土師器 坏	(122)×(70)×37　ロクロ成形　底部回転糸切り後底縁ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	淡褐 普	普	1/4	墨書「得」 体部外面横位
8	土師器 坏	(126)×60×39　ロクロ成形　底部回転糸切り後底縁ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	淡褐 普	普	1/4	墨書「竹」 体部外面正位
9	土師器 坏	－×75×(28)　ロクロ成形　底部回転糸切り後外底ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	淡褐 普	普	体部～ 底部片	墨書「口」 体部外面
10	土師器 高台付坏	－×台部径(70)×24　ロクロ成形　底部回転ヘラ切り 内面丁寧な磨き	淡褐 普	普	体部～ 底部片	墨書「口」 体部外面
11	須恵器 坏	130×73×39　ロクロ成形　底部静止ヘラ切り　体部下端ヘラ削り	灰 普	普	1/2	
12	土師器 小型甕	127×62×120　胴部最大径130　輪積み　口縁外反　頸部「く」の字状 胴部中位が膨らむ　底部丸みをもつ 外面　口縁横ナデ　胴部ヘラ削り　(上半縦位・下半横位、斜位) 内面　ナデ	橙褐 普	普 砂粒多含	完形	
13	土師器 甕	187×93×320　輪積み　頸部屈曲　底部剥離　口縁受け口状　口唇部 直下に凹線状の調整　外面　口縁横ナデ　胴部上半ナデ　下半ヘラ磨き 内面　ナデ	橙褐 普	普 粗砂粒 多含	略完形	
14	土師器 甕	206×84×326　輪積み　頸部「く」の字状　底部剥離　口縁受け口状 口唇部直下に凹線状の調整　外面　口縁横ナデ　胴部ナデ　後中位より ヘラ磨き　内面　ナデ	橙褐 普	普 粗砂粒 多含	略完形	外面一部 スス付着
15	土師器 甕	217×－×(194)　輪積み　口縁受け口状　頸部屈曲 外面　口縁横ナデ　胴部ナデ　一部ヘラ削り 内面　ナデ	暗橙褐 普	粗 粗砂粒 多含	1/2	
16	土師器 甑	(240)×－×207　輪積み　口縁外反　胴部短胴突起（残存1カ所） 外面　口縁横ナデ　胴部ヘラ削り　底部単孔 内面　ナデ	橙褐 普	普 砂粒小含	1/2	
17	須恵器 甑	(340)×－×(203)　輪積み　口縁直立気味 外面　口縁ナデ　胴部平行タタキ 内面　ナデ　指頭痕	灰 普	普 砂粒小含	1/4 以下	

No.	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
18	鉄器 紡錘車	径39.5×厚さ2　重量110g				軸欠損
19	鉄器 釘	長さ(32)×幅3×厚さ3　重量2.2g			断片	鉄鏃の茎か？
20	鉄器 輪掛具？	長さ(32)×幅(34)×厚さ7　重量15.6g				女釘
21	土師器 坏	ロクロ成形	褐 普	普	体部片	墨書「□」 体部外面 未掲示
22	土師器 坏	ロクロ成形	褐 普	普	口縁片	墨書「□」 体部外面 未掲示
23	土師器 坏	ロクロ成形	褐 普	普	口縁片	墨書「□」 体部外面 未掲示

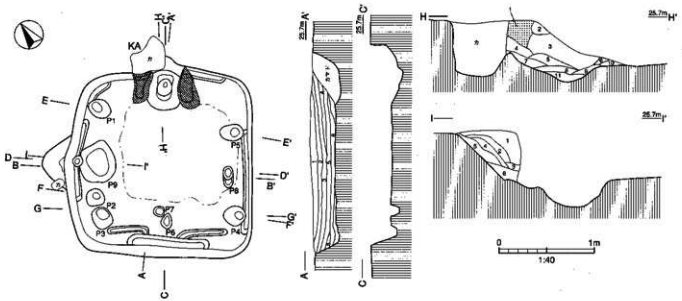
A126

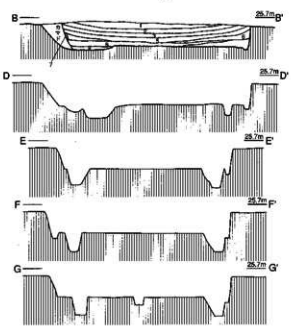
検出地区　L7-51-4g、L7-52-1gにて検出した。

遺　構　長軸3.93m×短軸3.86m×壁高0.45m、主軸方位はN-39°-Eを示している。平面形は残存する竈のKAに対して、横軸が少しだけ長い隅丸方形である。損壊したKBも一部検出され、竈の再構築と床面積の若干の拡張が行われた住居跡である。床は住居中央部から壁に向かってやや低くなる、ハードロームの地床である。周溝は断続的に巡るものであるが、不明瞭な所もあった南西壁で、壁よりやや内側に検出された周溝はKBに伴うものである。主柱穴はP1～P4であり、柱穴覆土や柱穴周囲の床面の損壊状況から柱は引抜かれたものと判断した。竈は北東壁にKAを、北西壁にKBを検出した。KAは竈の両袖が残り、袖の内壁は赤化していた。KBは壁に残された煙道部に粘土が僅かに残っていたが、住居拡張時に壊されたとらしく袖は残っていなかった。しかし、竈火床ピットであるP9は残っていた。覆土は、褐色土を主体とした自然堆積であった。また、床面に密着して焼土が、KA前や対面する出入口部付近に検出された。

遺　物　出土した遺物は土師器片を主体として、出土量は多かった。出土する傾向は、平面・垂直分布とも、密集しての出土である。3や7、鉄器類は床面付近からの出土であり、3は床に置かれたような状態で出土している。また、Ⅱ地区からの集落の繋がりと捉えられる「万」と記された墨書土器が出土した。一方、「竹野」と記された墨書土器も出土していた。なお、19・20は閂錠の差込金具の一部であろうか。

所　見　本住居跡は2基の竈の存在と周溝の巡り方から、拡張した竪穴住居跡と捉えられた。竈の損壊状況から、KBと内側の周溝が古い住居跡の範囲であり、KAが住居拡張後の新竈として構築され、使用されたものと捉えた。また、南東壁際の焼土の堆積から、住居廃絶後に火の使用が捉えられる住居跡である。覆土からはこの火の使用に係わる人為的堆積は窺われず、若干の不用材の焼却を行ったものであろうか。



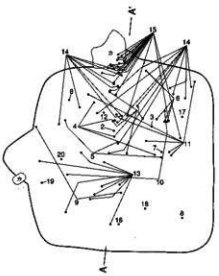


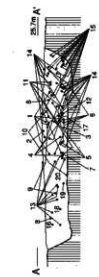
KA

1 層	黄灰白色土	粘土主体　炭化粒・焼土粒含
2 層	灰褐色土	粘土と暗褐色が混じる
3 層	暗褐色土	粘土・焼土粒少含
4 層	灰褐色土	焼土粒・炭少量含
5 層	赤褐色土	径１～２cm大の焼土ブロック多量
6 層	赤褐色土	焼土ブロック
7 層	暗褐色土	径１mm以下焼土粒子少量
8 層	赤褐色土	１mm大の焼土ブロック少量
9 層	褐色土	径２mm大の焼土ブロック少量 径１mm以下焼土粒子含
10 層	淡赤褐色土	焼土含

KB

1 層	暗褐色土	径１～３mm焼土粒少含 白色粘土が滲む
2 層	灰褐色土	粘土と褐色土が均一に混じる 径１cm大の焼土ブロック含
3 層	褐色土	赤色味帯びる粘土・焼土含
4 層	淡赤褐色土	径１～２cm大の焼土粒子多量含 暗褐色・黒色少（灰）少量含
5 層	暗赤褐色土	径１～２mm焼土粒子含
6 層	褐色土	径1mm以下ロームブロック 径１～２mm焼土粒子少含





1 層	暗褐色土	褐色土がほぼ均一に混じる
2 層	暗褐色土	褐色土がほぼ均一の混じる ローム微量含　自然堆積層
3 層	暗褐色土	褐色土多量含むローム微量含む
4 層	暗灰褐色土	薄った白色粘土少量
5 層	暗褐色土	褐色土がほぼ均一の混じる
6 層	暗褐色土	褐色土が主体となる土
7 層	暗淡赤褐色土	赤色化している層がみられる 白色粘土　カマド覆土
8 層	暗褐色土	暗褐色主体
9 層	暗褐色土	8層と同じ覆土であるが、少量の薄った ロームが混じった土。掘り方ではない

図49　A126

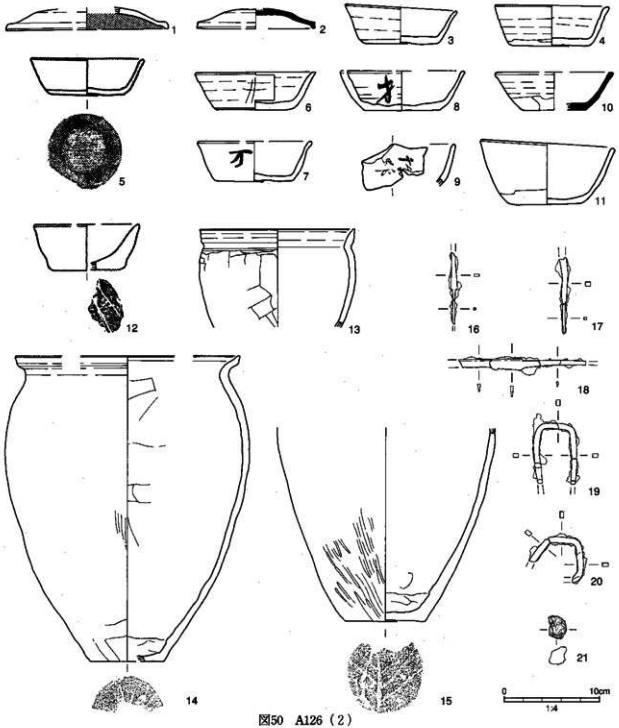


図50　A126（2）

表10　A126遺物観察表　（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 蓋	(170)×－×(22)　ロクロ成形 体部　外面削り　内面磨き	㈮褐 ㈯黒 普	普	1/5	内黒
2	須恵器 蓋	(123)×－×(20)　ロクロ成形	灰 普	普	1/5	

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
3	土師器 坏	118×77×39　ロクロ成形　底部静止糸切り後底縁ヘラ削り 体部直線的に立ち上がる　体部下端ヘラ削り	㊙褐 ㊙橙褐 普	普	略完形	
4	土師器 坏	119×80×43　ロクロ成形　底部回転ヘラ切り 体部直線的に立ち上がる　体部下端ヘラ削り	淡褐 普	普	略完形	
5	土師器 坏	118×78×38　ロクロ成形　底部静止糸切り後底縁ヘラ削り 体部直線的に立ち上がる　体部下端ヘラ削り	橙褐 普	普	1/2	外体・外底の一部にスス付着
6	土師器 坏	126×76×39　ロクロ成形　底部回転ヘラ切り　体部下端ヘラ削り	橙褐 普	普	略完形	線刻「井」 体部外面正位
7	土師器 坏	120×84×42　ロクロ成形　体部は直線的に立ち上がる 底部回転ヘラ切り	橙褐 普	普	1/3	墨書「万」 体部外面正位
8	土師器 坏	(130)×(80)×42　ロクロ成形　底部静止糸切り後底縁ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	淡褐 普	普	口縁～ 底部片	墨書「才」 体部外面正位
9	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	淡褐 普	普	口縁片	墨書「竹野」 体部外面横位
10	須恵器 坏	(124)×(68)×40　ロクロ成形　底部静止ヘラ削り　体部下端ヘラ削り	灰白 普	普 砂粒若干含	口縁～ 底部片	
11	土師器 鉢	140×80×65　ロクロ成形　底部ヘラ切り　体部下端ヘラ削り 内外面ともに磨きを施す	橙褐 普	普	略完形	
12	土師器 坏	(110)×(80)×48　手捏ね　底部木葉痕	普	普	口縁～ 底部片	
13	土師器 甕	164×－×(105)　輪積み　口縁直立気味　頸部強めのナデによる幅広の凹み　外面　口縁～頸部横ナデ　胴部ヘラ削り 内面　ナデ	褐 軟	普 砂粒小含	1/2	
14	土師器 甕	(237)×(78)×324　輪積み　底部木葉痕　全体的に器面の磨耗により残存面は少ない　口縁受け口状 外面　口縁横ナデ　胴部上半ナデ　下半ヘラ磨き　下端ヘラ削り 内面　ナデ　胴部下端に稜をもつ	暗褐 普	粗 砂粒含	1/4	
15	土師器 甕	－×84×(207)　輪積み　底部木葉痕 外面　ヘラ磨き　器面の磨耗が見られる 内面　ナデ　下端ヘラ削り　胴部下端に稜をもつ	橙褐 普	粗 粗砂粒 小石少含	1/4	
16	鉄器 鉄鏃	長さ(76)×幅5×厚さ2.5　重量58g			茎部分	
17	鉄器 鉄鏃？	長さ(81)×幅(5.5)×厚さ4.5　重量7.68g			茎部分	
18	鉄器 刀子	長さ(133)×幅11×厚さ3　重量11.3g 茎幅5×厚さ2			茎～ 刃部分	
19	鉄器 不明	長さ(64.8)×幅(45.5)×厚さ4　重量22.6g			断片	U字型鉄器 カンヌキ錠 差込金具

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
20	鉄器 不明	長さ(43)×幅(57)×厚さ4　重量15.6g				U字型鉄器 カンヌキ錠 差込金具
21	石器 軽石	長さ25×幅19×厚さ19　重量2.3g 明瞭な加工痕はみられず、形状も不整形。				砥石？

A127

検出地区　L7-51-4g、L7-52-1・3gにて検出した。

遺　構　長軸5.12m×短軸3.92m×壁高0.61m、竈KAの主軸方位は、N-42°-Wを示し、竈KBの主軸方位はN-53°-Wを示している。竈２基を検出した住居跡で、平面形は横軸の長い隅丸方形である。

床はハードローム上部の地床で、一部ソフトロームとハードロームの混合した床を検出した。また、床の硬化面は南東壁際及び竈壁際では若干硬化に劣っていたが、ほぼ住居跡全体で検出した。床にはピットが８基検出された。ピットの覆土より、すべて引抜かれているものと捉えられた。周溝は、それぞれかまど竈袖下から壁下を巡っている。また、住居跡中央に竈方向から短い溝を検出した。

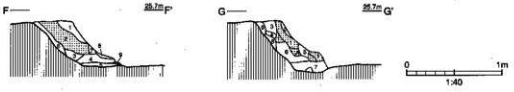
竈KAは、北西壁の北コーナー寄りに設けられ、天井部の遺存が確認され、土器の掛け穴も認められた。竈袖及び天井部は粘土主体で積み上げられ、内壁の赤化は極めて強かった。竈ピットはハードロームの硬い面まで掘込まれ、若干赤化していた。煙道は壁を掘込み、煙道部上部は一段テラス状となっていた。

KBも北西壁のほぼ中央に設けられ、左袖は一部遺存していたが、右袖は失われていた。天井部も煙道部で遺存していたが、竈焚き口は失われていた。

住居跡廃絶後、不用材の焼却行為が行われ、丸太状の炭化物及び焼土の堆積が認められた。覆土は、焼却行為の消火として人為的な土砂投入による消火層堆積後、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　遺物の出土は全体的に多いが、住居跡中央より竈に対面して右側に偏在して出土する傾向があった。

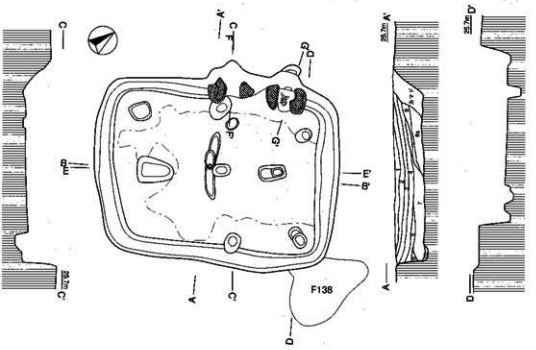
所　見　竈が２基併置された竪穴住居跡である。調査の過誤もあったためか、併置された竈であったのか、新旧関係も捉えにくいものであった。覆土からは住居跡の建替えも明確にできず、竈の遺存状態からも判然としなかった住居跡である。

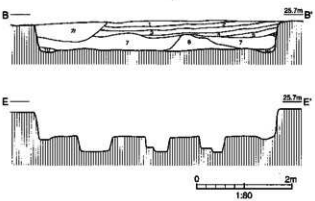


1 層　暗褐色土　粘土含
2 層　灰色土　粘土主体。暗褐色土含
3 層　暗灰褐色土　粘土と暗褐色土混じる。炭化物含
4 層　灰褐色土　径５mm焼土ブロック少含
5 層　淡赤褐色土　焼土が多むローム土含
6 層　灰褐色土　焼土粒子極少量
7 層　暗灰褐色土　粘土含
8 層　暗灰褐色土　粘土含
9 層　暗褐色土　焼土粒子・粘土含

1 層　黄灰白色土　砂質粘土主体
2 層　暗灰褐色土　粘土と褐色土が混じる
3 層　暗褐色土　粘土・焼土が少量含
4 層　暗灰褐色土　焼土・粘土含
5 層　暗褐色土　粘土・焼土粒少量含
6 層　暗灰色土+赤褐色土+黒色土
焼土と焼土ブロックが混じる
7 層　褐色土　径１mm大の焼土ブロック含
8 層　褐色土　粘土少量含
9 層　暗褐色土　ローム土混じる

図51　A127





1 層	暗褐色土	褐色土がほぼ均一に混じる ローム微粒含
2 層	暗褐色土	極少量の褐色土含 ローム微粒含　自然堆積層
3 層	暗褐色土	褐色土がほぼ均一に混じる ロームがやや多い。
4 層	暗褐色土	ロームが微粒含。
5 層	暗褐色土	ローム微粒含。
6 層	暗褐色土	ローム微粒含。　壁崩壊層
7 層	明褐色土	ロームの大きな粒。焼火層
8 層	暗茶褐色土	焼土層
9 層	暗灰褐色土	極少量のが均一に混じり合う 周溝覆土
10 層	暗黄褐色土	薄ったロームが混じる

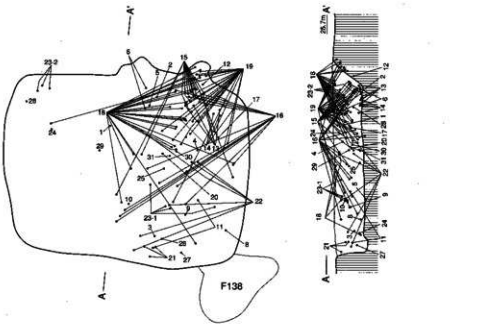


図52　A127（2）

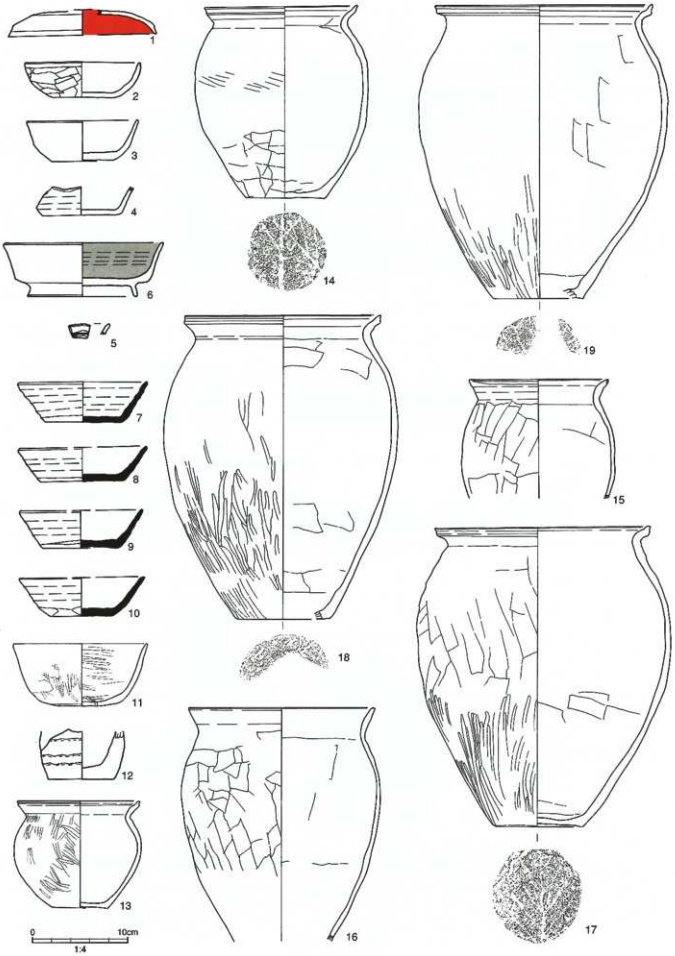


図53 A127（3）

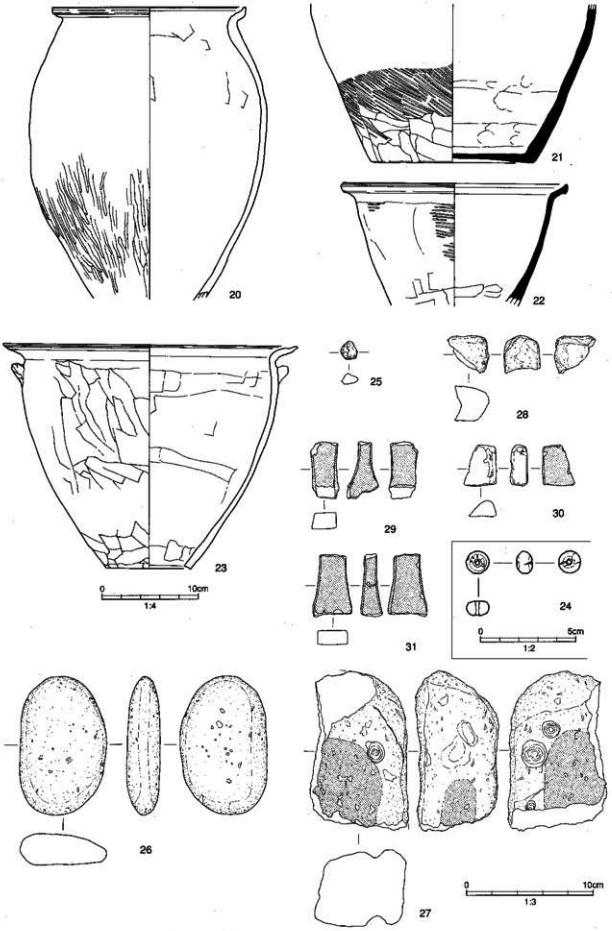


図54 A127（4）

表11　A127遺物観察表　　（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	(156)×－×27　ロクロ成形	赤褐 普	普	3/4	内外面赤彩
2	土師器 坏	121×67×38　ロクロ成形　底部静止ヘラ削り 外面　口縁ナデ　体部ヘラ削り 内面　体部丁寧な磨き	橙褐 普	普	2/3	
3	土師器 坏	118×64×43　ロクロ成形　底部回転糸切り後底縁ヘラ削り　体部ナデ	褐 普	普	2/3	
4	土師器 坏	－×80×(32)　ロクロ成形　底部静止ヘラ削り　体部下端ヘラ削り	褐 普	普	底部片	
5	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	褐 普	普	口縁片	墨書「□」 体部外面
6	土師器 高台付坏	(168)×台部径(116)×57　ロクロ成形　内面丁寧な磨き	㊙褐 ㊙黒 普	普	1/4	内黒
7	須恵器 坏	138×80×42　ロクロ成形　底部静止ヘラ切り　　体部下端ヘラ削り	灰 普	普 砂粒 雲母若干	3/4	
8	須恵器 坏	(136)×86×36　ロクロ成形　底部回転ヘラ切り　体部下端ヘラ削り	灰 普	普 砂粒若干含	3/4	
9	須恵器 坏	(130)×78×40　ロクロ成形　底部静止ヘラ切り　体部下端ヘラ削り	灰 普	普	1/5	
10	須恵器 坏	(132)×(66)×41　ロクロ成形　底部静止ヘラ切り　体部下端ヘラ削り	灰 普	普 砂粒若干含	1/5	
11	土師器 手捏ね	－×83×(65)　輪積み　底部丸みをもつ　小型壺を作る過程で変更したような作りである　内面ヘラ磨きしているので再利用ではない 外面　ヘラ削り後縦位　斜位のヘラ磨き　底部にも同様の調整 内面　横位ヘラ磨き	赤褐 普	普 砂粒多含	2/3	
12	土師器 坏	－×70×(51)　輪積み　底部木葉痕　体部輪積み痕あり	褐 黒	普	2/3	
13	土師器 小型壺	129×58×114　最大径134　輪積み　口縁外反　端部立ち上がる 口唇下に凹線状の調整　頸部「く」の字状　胴部中位膨らむ 外面　口縁横ナデ　胴部ヘラ削り後ヘラ磨き 内面　口縁横ナデ　胴部ナデ	暗赤褐 普	普 砂粒少含	略完形	黒斑あり 内面コゲ状付着
14	土師器 甕	160×84×206　最大径181　輪積み　底部木葉痕　頸部「く」の字状 口唇下に凹線状の調整 外面　口縁横ナデ　胴部上半ナデ　下半ヘラ削り 内面　口縁横ナデ　胴部ナデ	橙褐 普	普 粗砂粒 多含	略完形	口縁1/2欠損
15	土師器 甕	145×－×(126)　最大径161　輪積み　LJ縁外反 外面　口縁横ナデ　胴部ヘラ削り 内面　口縁横ナデ　胴部ヘラナデ	暗褐 普	普 砂粒多含	1/4	
16	土師器 甕	196×－×(247)　最大径(211)　輪積み　口縁外反 頸部緩やかな「く」の字状　胴部薄手の作り 外面　口縁～頸部横ナデ　胴上半は横位、以下は縦位のヘラ削り 内面　口縁横ナデ　胴部ナデ	暗赤褐 普	粗 砂粒多含	2/3 底部 欠損	外面スス付着
17	土師器 甕	227×95×318　輪積み　口縁受け口状　底部木葉痕　頸部屈曲 口唇下に凹線状の調整　胴部やや上半に膨らみ 外面　口縁横ナデ　胴部上半ヘラナデ　下半ヘラ磨き 内面　口縁横ナデ　胴部ヘラナデ	橙 褐砂粒多 小石少含	完形		

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
18	土師器 甕	206×100×322　最大径248　輪積み　口縁受け口状　底部木葉痕 頸部緩やかな「く」の字状 外面　口縁横ナデ　胴上半ナデ　下半ヘラ磨き 内面　口縁横ナデ　胴部ヘラナデ	橙褐 普	普 粗砂粒多 雲母多含	略完形	内外面スス付着
19	土師器 甕	228×(96)×311　最大径264　輪積み　口縁受け口状　底部木葉痕 口唇部下凹線状の調整 外面　口縁横ナデ　胴部上半ナデ　下半ヘラ削り 内面　ナデ　胴部下端に焼をもつ	橙褐 普	普 粗砂粒 多含	略完形	内外面スス及び コゲ状付着物
20	土師器 甕	205×－×(310)　最大径251　輪積み　口縁受け口状　頸部屈曲 外面　口縁横ナデ　胴上半ナデ　下半ヘラ磨き 内面　ナデ	褐 普	普 粗砂粒多 雲母多含	3/4	内面スス付着
21	須恵器 甕	－×170×(169)　輪積み　やや上げ底 外面　平行タタキ　下端ヘラ削り 内面　ナデ　輪積み痕及び指頭痕	青灰 普	普 砂粒少含	1/2	
22	須恵器 瓶	(235)×－×(131)　輪積み　口縁外反 外面　口縁横ナデ　胴部平行タタキ後ヘラ削りか？ 内面　ナデ	灰 普	普 粗砂粒 多含	1/4	
23	土師器 甑	(310)×(88)×(239)　輪積み　底部単孔　口縁大きく外反 頸部突起残存１カ所 外面　口縁横ナデ　胴部上半緩位、下半斜位のヘラ削り 内面　口縁横ナデ　胴部ヘラナデ　下端ヘラ削り	明橙褐 硬	普 砂粒少含	1/4 以下	
24	ガラス製 品 小玉	径12×孔径2.1×厚さ８　重量1.5g やや気泡を含む　全体に剥落あり	濃青色		略完形	
25	石器 軽石	長さ20×幅18×厚さ11　重量1.0g 明瞭な加工痕はみられず、形状も不整形。剥落あり				砥石
26	石器 磨石	長さ115×幅78×厚さ28　重量305.6g 楕円形を呈する。やや薄手の作りであるが、磨痕を残す。				砂岩
27	石器 石皿	長さ169×幅104×厚さ88　重量2290.0g 一部が残存。両面と側面の一部に研磨痕が残され、特に両面は大きく凹む。両面には１～２カ所に峰巣石状の凹みがみられる。				花崗岩 多孔石に転用
28	石器 砥石	長さ40×幅44×厚さ38　重量61.5g ２砥面？一部のみ残存				安山岩
29	石器 砥石	長さ61×幅30×厚さ33　重量54.6g ４砥面？上下欠損				凝灰岩
30	石器 砥石	長さ44×幅34×厚さ19　重量28.5g 砥石残片　台形状に近く体部を中心に磨痕を残す				凝灰岩
31	石器 砥石	長さ66×幅41×厚さ23　重量66.7g ４砥面　上下欠損				凝灰石

A128

検出位置　L7-39-4g、L7-40-1・3gに検出した。

遺　構　長軸4.45m×短軸3.47m×壁高0.54m、主軸方位はN-26°-Eを示している。平面形は竈に対して、横軸が長軸となる隅丸方形である。床はハードロームと黒色土の混合した床で、住居中央から出入口部までは火熱のため床面が損壊していた。かろうじてP1～P2、P1～P3にかけて硬化面を認めた。壁は床から、ほぼ垂直に立ち上がっている。主柱穴はP2とP3であり、壁柱穴は25基検出した。主柱穴は住居の中間に２本のみの検出であった。P1は出入口施設に伴うピットである。周溝は竈脇まで巡っている。

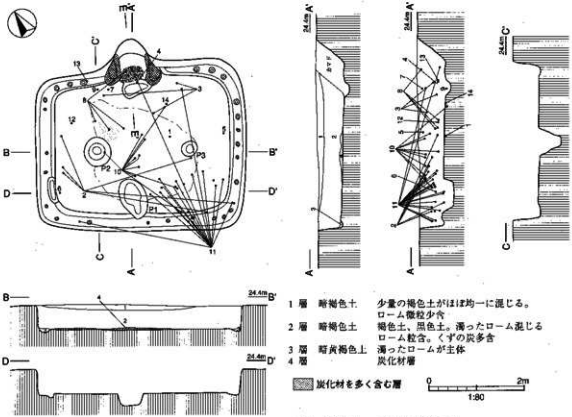


図55　A128

竈は北東壁に設けられ、壁を掘込んで煙道部としており、その立ち上がりは急である。袖の内壁は赤化していた。竈手前にピットが掘られていたが火床はその中ではなく、竈内の平坦面に赤化が強いものとして検出した。なお、覆土とも関係してくるが住居廃絶後に不用材の焼却が行われ、炭化材が住居跡中央の床面を中心として多量に検出されている。覆土は不用材の焼却に係わると思われる焼土と、暗褐色土の人為的な投入土であった。

遺　物　出土した遺物は土師器片を中心として、住居跡としては比較的多かった。また、土師器坏に記された墨書土器も、破片を含め 6点出土している。1の土師器坏は伏せた状態で床面から出土し、8の土師器甕は竈右袖脇にやはり伏せたように出土している。9須恵器甕は竈右前の床面から潰れた状態で出土し、14の刀子に流れ込んでいた。

所　見　住居廃絶後に、不用材の焼却と人為的な埋戻しが行われた住居跡である。人為的な投入土は、消火のためと考えられた。Ⅱ地区に人為堆積による埋没住居跡が多かったが、その傾向が引き続いて行われているようである。住居跡中央の床面の損壊と炭化材の分布はほぼ同じであり、この不用材の

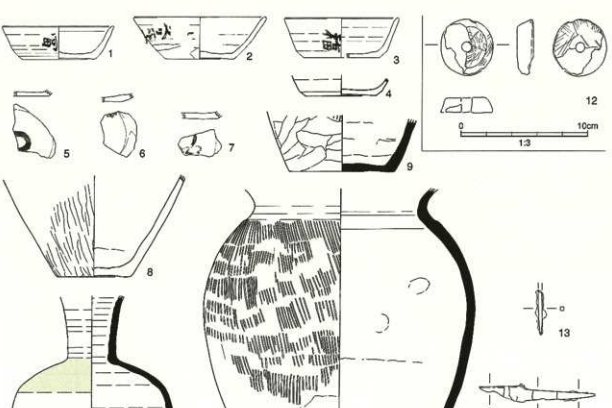


図56　A128（2）

焼却に伴い床面が損壊したものと捉えられた。また、覆土が人為的な投入土のため、出土遺物が住居跡の時期と同じとは即断できないが、床面出土の遺物から所属時期を捉えていきたい。

表12　A128遺物観察表　（単位mm）

No.	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	117×76×35　ロクロ成形　底部回転ヘラ削り 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	橙褐 普	砂粒含 雲母含	完形	墨書「冒」 体部外面
2	土師器 坏	140×72×45　ロクロ成形　底部ヘラ削り　体部外傾 外面　体部上半ナデ　下半ヘラ削り 内面　ナデ	灰褐～ 灰黒褐 普	粗砂粒含 雲母含	1/2	墨書 「□□」 体部外面
3	土師器 坏	(120)×(80)×42　ロクロ成形　底部回転ヘラ削り　体部下端より立ち上がる　外面　体部上半ナデ　下半ヘラ削り　内面　ナデ	褐 普	砂粒含 雲母含	1/3	墨書 「福」 体部外面
4	土師器 坏	－×72×(22)　ロクロ成形　底部回転ヘラ削り 外面　体部下半ナデ　下端ヘラ削り 内面　体部下端ナデ	橙褐 普	砂粒含 雲母含	体部～ 底部片	
5	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形　底部ヘラ削り	㊥橙褐 ㊦明褐 普	砂粒含 雲母含	底部片	墨書「□」 赤彩 共に底部外面
6	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形　底部ヘラ削り 外面　体部下端ヘラ削り 内面　体部下端・底部中央・底部縁ヘラ磨き	橙褐 普	砂粒含 赤色粒含	底部片	墨書「□」 底部外面

No.	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
7	土師器 坏	－×－×－ 外面　底部中央ヘラ削り後ヘラ磨き 内面　ヘラ磨き	暗赤褐 普	砂粒含 小石含	底部片	墨書「□」 底部外面
8	土師器 甕	－×78×(108)	暗褐～ 橙褐 普	粗砂粒含 雲母含	胴部～ 底部片	
9	須恵器 甕	－×110×(64) 外面　胴部下半　部タタキ目あり　ヘラ削り　胴部下端ヘラ削り 内面　胴部下半ナデ	暗橙褐	砂粒含 白色針状 物質含	胴部～ 底部片	
10	須恵器 長頸壺	－×－×(209)　ロクロ成形　頸部細め　肩部なだらかに落ちる	緑灰～ 灰褐 普	砂粒含 黒色粒含	頸部～ 胴部片	自然釉
11	須恵器 甕	－×170×(308)　やや長胴 外面　頸部横ナデ　胴部上半～下半平行タタキ　下端ヘラ削り 内面　頸部横ナデ　胴部ナデ及び指頭圧痕	灰褐 灰 悪	雲母含 白色粒含 小石含	1/2	
12	石器 紡錘車	上部径(320)×下部径(410)×高さ120　孔径8　重量22.0g 断面台形を呈する。各面ともよく研磨され、線状痕が残る。 下面には針状具でひっかいたような痕跡がみられる。			1/2	
13	鉄器 釘	長さ(47)×幅4×厚さ4　重量3.3g			先端	鉄鏃か？
14	鉄器 刀子	長さ(91)×幅10×厚さ3　重量11.3g　茎幅6×2			刃～茎	

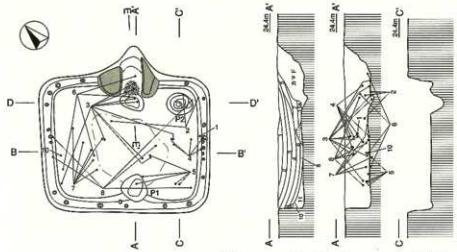
A129

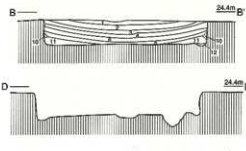
検出位置　L7-50-1・3gにて検出した。

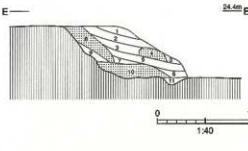
遺　構　長軸3.53m×短軸2.88m×壁高0.48m、主軸方位はN-45°-Eを示している。平面形は隅丸方形である。ハードロームと黒色土が混合した貼床で、住居中央部に硬化面を認めた。壁は、床からほぼ垂直に立ち上がっている。主柱穴は確認されなかったが、壁柱穴は23基検出した。床には２基のピットが検出され、P1は出入口施設のピットであり、P2は貯蔵穴と考えている。P2の覆土は焼土とローム粒子を少し含み、炭化粒を僅かに含む黒色土であった。周溝は竈袖下まで巡っており、住居跡を全周していた。竈は北東壁の中央に築かれ、壁を大きく掘込んで煙道部としている。竈袖は白色粘土に黒色土を混合させたものであり、袖の内壁は強く赤化していた。竈手前に小ピットが掘込まれているが、その立ち上がり僅かにかかるように火床が残されていた。火床は床面と同じ高さであり、若干凹凸があるものであった。極めて強く赤化していた。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積であり、各層とも粒子が細かく層にしまりがあった。

遺　物　比較的多い出土であり、260点を超える点数である。出土傾向には特徴はなく、住居跡全体からの出土であった。10の鎌は床より10cmほど浮いて出土している。

所　見　やや小型の竪穴住居跡であるが、竈の袖はしっかりとしたものであった。竈右の東コーナーに検出されたP2は調査時点ににおいて、検出位置等から貯蔵穴として捉えたが、覆土や坑底の複雑さから柱穴の可能性もある。







1 層　暗褐色土　ローム粒の微粒少含
2 層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の褐色土がほぼ均一に混じる ローム微粒少含
3 層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の褐色土がほぼ均一に混じる ローム微粒少含
4 層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の褐色土がほぼ均一に混じる ローム微粒少含
5 層　暗褐色土　暗褐色土と薄った白色粘土がほぼ均一に混じる
6 層　暗褐色土　ロームの微粒少含
7 層　暗灰褐色土　白色粘土と少量の暗褐色土ほぼ均一に混じる
8 層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の褐色土がほぼ均一に混じる ローム微粒少含
9 層　暗黄色土　薄ったロームが主体
10 層　暗黄褐色土　薄ったロームと暗褐色土が混じる
11 層　暗褐色土　焼土粒　炭微粒少含
11a 層　暗褐色土　焼土粒　炭微粒少含　カマドに近い為白色粘土が均一に混じる
12 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の薄ったロームが混じる

1 層　暗灰褐色土　暗褐色土と極少量の薄った白色粘土均一に混じる
2 層　暗灰褐色土　暗褐色土と極少量の薄った白色粘土均一に混じる
3 層　暗灰褐色土　暗褐色土と極少量の薄った白色粘土均一に混じる
4 層　灰褐色土　白色粘土のブロック
5 層　暗灰褐色土　暗褐色土と極少量の薄った白色粘土均一に混じる
6 層　暗褐色土　白色粘土た強く程度含
7 層　暗灰褐色土　暗褐色土と極少量の薄った白色粘土均一に混じる
8 層　暗灰色土　白色粘土のブロック
9 層　暗灰褐色土　暗褐色土と極少量の薄った白色粘土均一に混じる
10 層　暗赤灰褐色土　白色粘土、すすけた白色粘土、赤く変色した白色粘土が混じる
11 層　暗褐色土　暗褐色土主体の土　白色粘土粒は殆ど含まない

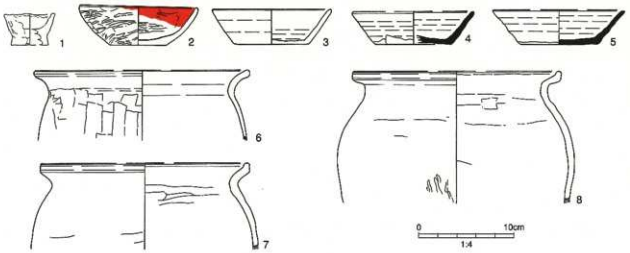


図57　A129

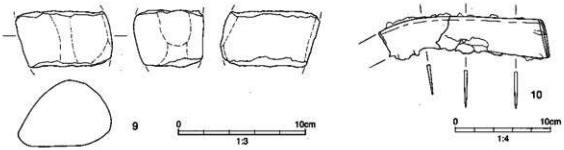


図58　A129（2）

表13　A129遺物観察表

（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 手捏ね	(53)×(39)×33 手捏ねによる坏状土製品　底部は平坦に仕上げられる	橙褐 悪	砂粒 白色粒	1/2	
2	土師器 坏	124×60×43　底部ヘラ削りの後、ヘラ磨き 口縁ナデ　器部体部～斜位のヘラ削り後上半ヘラ磨き 内面　口縁ナデ後ヘラ磨き　塊状を呈す　平底	暗橙褐～ 暗褐 普	砂粒 赤色粒	略完形	線刻「囚」 体部内面～底部 外面スス付着 赤彩
3	土師器 坏	126×80×38　ロクロ成形　体部外傾 口縁から体部下半ナデ　体部ド端ヘラ削り 体部内面　口縁ナデ	橙褐 悪	粗砂粒	略完形	
4	須恵器 坏	(128)×(80)×35　ロクロ成形　底部ヘラ削り 口縁～体部下半ナデ　下端手持ちヘラ削り 体部内面口縁ナデ　口縁端　やや内湾	灰褐 悪	粗砂粒	1/2	
5	須恵器 坏	(140)×(82)×37　ロクロ成形　底部ヘラ削り 全体内外面ナデ　体部外傾	灰褐 悪	粗砂粒 小石多	1/2	
6	土師器 甕	(225)×－×(74)　口縁外反 外面　口縁頸部横ナデ上半ナデ後、一部縦ヘラ磨き 内面　口縁横ナデ　上半ナデ	赤褐 普	粗砂粒	口縁片	黒斑有 内外面
7	土師器 甕	(220)×－×(92)　口縁受け口状　外面凹状線の調整 外面　口縁頸部横ナデ　上半ナデ 内面　口縁横ナデ　上半ナデ	橙褐 普	雲母 粗砂粒	口縁片	
8	土師器 甕	(220)×－×(139)　口縁端部つまみ上げられる 口縁頸部横ナデ　上半ナデ後、一部縦ヘラ磨き 内面　口縁横ナデ　上半ヘラナデ	暗赤褐 普	粗砂粒 雲母	口縁～ 胴部片	
9	石器 磨石	長軸×短軸45×厚さ52　重量296.9g 平面形は長楕円形に近いと思われる　厚みを持ち断面は三角形に近い 全体に磨耗や土の付着が激しく、研磨痕は不明瞭			1/2	
10	鉄器 鎌	長さ(180)×幅38.5×厚さ2　重量103.9g			茎部～ 刃部	

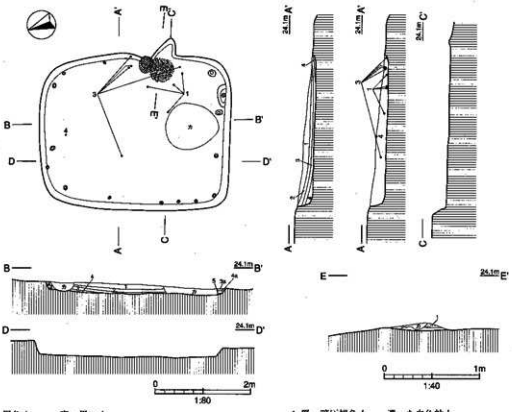
A130

検出地区　L7-69-2・3・4gにて検出した。

遺　構　長軸4.00m×短軸3.28m×壁高0.32m、主軸方位はN-116°-Eを示している。平面形は隅丸方形である。台地斜面部に位置する竈を斜面先端側に設けた住居であり、このため台地平坦部側と斜面部側によって掘込みの深さである壁高が異なるものである。示した壁高は最も掘込みが深い台地平坦部側の北西壁を示しており、斜面側の竈脇では10cmしか深さはなかった。

床はソフトロームの地床であり、軟弱ではないが硬化面は認められなかった。その床面には、焼土や炭化粒が散布していた。柱穴は確認できなかったが、壁柱穴を15基検出した。また、出入口施設に伴うピットは確認できなかった。南コーナー付近で壁柱穴とともに溝状の掘込みを検出したが、周溝とは捉えきれなかった。竈は斜面側の南東壁に、壁の中央よりやや南コーナーに寄って築かれていた。この構築場所のため竈の上部は失われており、左袖部のみの遺存であった。火床は床面と同じ高さであり、極めて強い赤化を示すものであった。煙道も掘込んだ壁の最奥で立ち上がるが、火床から煙道部にかけても平坦であった。なお、北西コーナーに2～3cmの厚さで、炭化粒も少し含んでいる黒色土と焼土の混合層が確認された。

覆土は色調より5層に分層したが、暗褐色土と黒褐色土が順次、自然堆積していくものである。そして1層は、色調として黒色が強くなっていた。



1 層　黒色土　真っ黒い土
2 層　黒褐色土　黒色土と暗褐色土が混じる
3 層　暗褐色土　暗褐色土とごく少量の濁ったローム部分的にごく極少量の黒色土が混じる
4 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の濁ったロームがほぼ均一に混じる
5 層　暗黄褐色土　濁ったローム少量の暗褐色土がほぼ均一に混じる

1 層　暗灰褐色土　濁った白色粘土
2 層　暗赤灰褐色土　濁った白色粘土と火熱を被けて白色粘土が赤く変色してしまったものが混じる

図59　A130

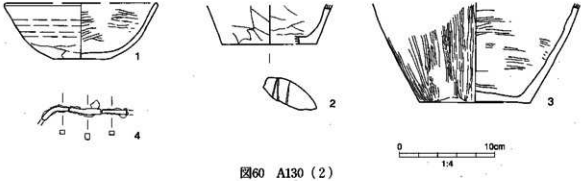


図60　A130（2）

遺　　物　　出土する遺物は80点余りと少なく、竈右袖前を主体とした出土傾向であった。また、破片が主体であり、大きく接合することも無かった。2の甕描土器片が出土している。

所　　見　　斜面部に立地するため壁高の差が大きく、このため住居跡の掘込みの深さを特定することができにくい遺構である。出土遺物も多くはないが、覆土の層厚の不均一さから、本来はもっと存在したのではないかと想定させる住居跡でもあった。完形遺物等が出土しなかったため、時期の判断のため意識的に図示したものである。

表14　A130遺物観察表　　（単位mm）

No.	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(162)×(60)×59　ロクロ成形　底部ヘラ削り 口縁～体部上半ナデ　下半ヘラ削り　腕状を呈する 体部内面ヘラ磨き	㊱橙褐 ㊲暗赤褐 普	砂粒	1/2	
2	土師器 甕	―×(100)×(42)　底部回転糸切り 外面　胴部下半下端ヘラ削り 内面　胴部下半ナデ　下端ヘラ削り	暗赤褐 普	粗砂粒 多	胴部～ 底部片	ヘラ書「口」 (底部外面)
3	土師器 甕	―×116×(106) 外面　胴部下半下端ヘラ削り後　縦ヘラ磨き　底部ヘラ磨き 内面　胴部下半ヘラナデ	㊱暗赤 ㊲褐 普	砂粒 白色粒 小石	胴部～ 底部片	内面　剥離
4	鉄器 不明	長さ(89)×幅6　重量7.9g 断片の接合　先端部　人為的に曲がっている				カスガイ？

A131

検出地区　　L7-39-3g、L7-48-2g、L7-49-1gにて検出した。

遺　　構　　長軸2.85m×短軸2.75m×壁高0.30m、主軸方位はN-35°-Eを示している。平面形は隅丸方形であり、やや小型の竪穴住居跡である。床はソフトロームと黒褐色土が混じり合った貼床であり、竈前から出入口まで細長く硬化面を認めた。主柱穴は検出できなかったが、壁柱穴を14基検出した。しかし出入口施設に伴うピットは、南西壁中央際に検出した。周溝はしっかりとした掘込みで、竈袖下まで掘込まれ、住居跡全体を巡っていた。竈は北東壁中央に築かれ、白色粘土と黒色土を混合させて袖は作られていた。また、竈袖の内壁は赤化していた。竈内に掘られたピットはやや凹凸ある坑底であり、その中に火床が検出されたが、火熱跡は認められたが赤化はしていなかった。壁をやや大きく掘込んだ煙道部は、竈ピットから急激に立ち上がっている。一方、竈右袖脇から東コーナーにかけて、床よりやや浮いた状態で黒褐色土に多量の焼土が混合した層厚10cmの焼土の堆積を検出した。

覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積であり、覆土上層は黒褐色土が堆積し、黒色が増している。

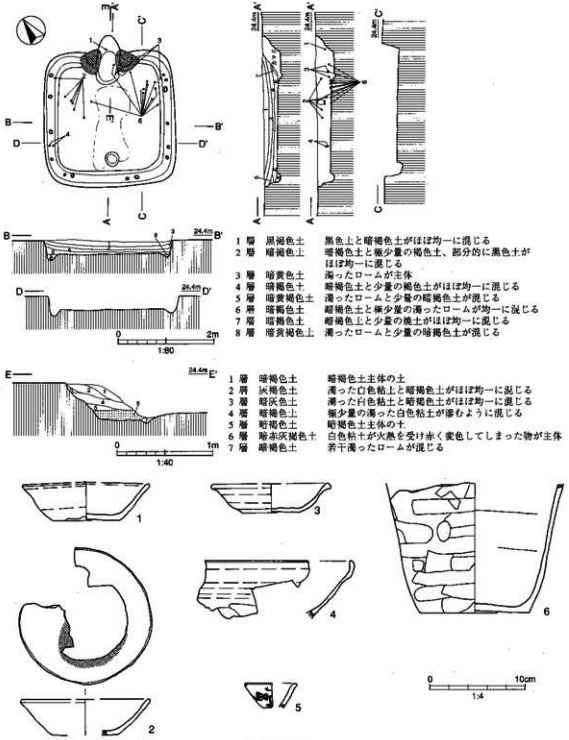


図61 A131

遺　物　出土した遺物は90点余りであり、住居跡中央から竈壁際に多く出土し、住居跡中央から西壁側には少ない傾向が窺われた。完形土器は出土せず、掲示した遺物は意識的に図示した。「冨」と記された墨書土器が出土している。

所　見　きれいに自然堆積して埋没した遺構であり、竈も天井部の崩落を除いて袖の遺存も良好な竪穴住居跡であった。住居廃絶後は穴として放置され、自然の埋没に任せたような状態を窺わせる住居跡である。そして完形遺物の出土もなく、接合する破片も少ないことから、壊れた土器等の廃棄場所にもなっていない感じをあたえる住居跡であった。

表15　A131遺物観察表　　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(132)×70×41　ロクロ成形 底部回転糸切り 体部下端未調整	褐 普	普	1/4	
2	土師器 坏	136×(62)×38　ロクロ成形 底部回転糸切り 内面にスス付着	橙褐 普	普	1/2	
3	土師器 坏	(127)×62×31　ロクロ成形 底部回転糸切りの後、周辺ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	褐 普	普	1/3	
4	土師器 椀	－×－×－　ロクロ成形 口縁直立する	褐 普	普	口縁片	
5	土師器 坏	－×－×－	淡褐 普	普	口縁片	墨書「冨」 体部外面横位
6	土師器 甕	－×116×(138)　輪積成形 胴部横位のヘラ削り	㋐褐 ㋑淡褐 普	普	胴部～ 底部	

A132

検出地区　L7-48-3・4g、L7-58-1・2gにて検出した。

遺　構　長軸2.95m×短軸2.68m×壁高0.52m、主軸方位はN-41°-Wを示している。平面形は隅丸方形である。床は暗褐色土にハードロームブロックが多量に混合した貼床で、軟弱な床となっている。主柱穴は検出されず、壁柱穴が5基検出されたのみである。また、出入口施設のピットは南東壁中央際で検出した。周溝は南西壁と南東壁の中央にのみ断続的に掘込まれていた。竈は煙道部のために壁を大きく掘込み、粘土と黒色土を混合させた土によって袖を築いていた。袖の内壁は赤化している。火床は平坦であり、赤化していた。覆土は黒褐色土を主体とした、自然堆積であった。

遺　物　覆土中層から下層にかけて、120点余りの出土をみた。また、床から少し浮いて5層中に投入された、貝と暗褐色土の混貝土層となった貝ブロックを検出した。ハマグリ等の鹹水性貝種で形成されたものである。

所　見　住居廃絶後に投棄された鹹水性の貝ブロックであり、上谷遺跡に近い印旛沼に係わらない貝ブロックであった。奈良・平安時代の出土貝層の構成種は八千代市域では基本的に鹹水性貝種であり、同様の結果が出たことになる。なお、貝の構成種等の分類については個別に行わず、上谷遺跡全体で行いたいと考えている。また、本住居跡では竈の煙道部の壁への掘込みが、極めて大きいものであった。

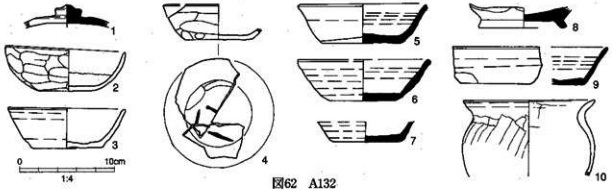
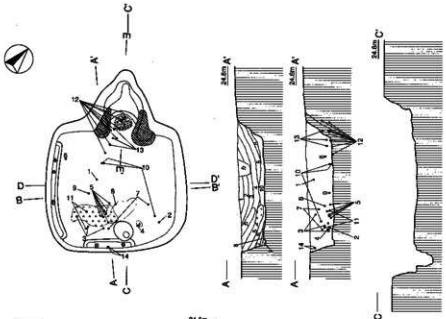
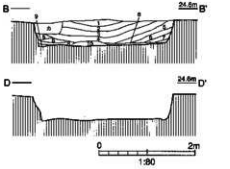
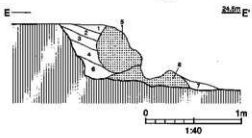


図62　A132





1 層	黒色土	黒褐色土が少量混じる
2 層	黒褐色土	黒褐色十土土体の土
3 層	黒色土	ローム粒少量
4 層	黒褐色土	白色粘土粒を微含
5 層	黒褐色土	ローム粒少量
6 層	黒褐色土	黒褐色土にロームが少量混じる
7 層	黒褐色土	黒褐色土主体の土
8 層	暗褐色十	黒褐色土ロームが混じる
9 層	暗黄褐色土	黒褐色十にロームが混じる
10 層	灰褐色土	黒褐色土と白色粘土が混じる 焼土粒、炭化粒微含



1 層	暗灰褐色土	暗褐色土と多量の白色粘土がほぼ均一に混じる
2 層	暗灰褐色土	暗褐色土と白色粘土がほぼ均一に混じる
3 層	暗灰褐色土	暗褐色土と少量の白色粘土がほぼ均一に混じる
4 層	暗灰褐色土	暗褐色土と少量の白色粘土がほぼ均一に混じる
5 層	灰色土	白色粘土ブロック。白色粘土純層に近いブロック
6 層	暗灰褐色土	暗褐色土と薄った白色粘土、すすけた白色粘土、 火熱を被り赤く変色してしまった白色粘土 ただし黒に近い赤が混じる
7 層	暗褐色土	暗褐色土と極少量の薄った白色粘土が混じる
8 層	暗赤灰褐色土	薄った白色粘土や火熱を被り赤く変色してしまった 白色粘土が粗く混じる

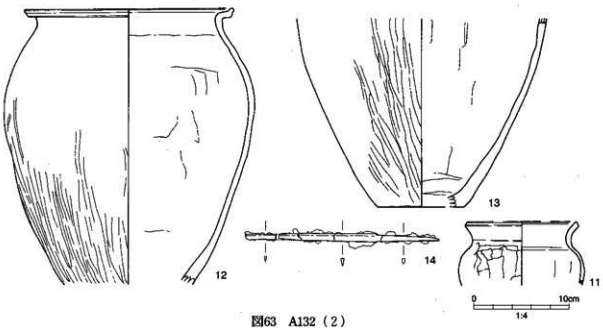


図63 A132（2）

表16　A132遺物観察表　　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 蓋	－×－×－　宝珠状の把手	灰色 普	普 白色砂粒	把手部	
2	土師器 坏	126×55×49　輪積　体部内湾して立ち上がり口縁部でほぼ垂直に立ち上がる　口縁ナデ　底部静止ヘラ切り 体部外面横位のヘラ削り　内面丁寧な磨き	橙褐 良	緻密	略完形	
3	土師器 坏	123×80×43　ロクロ成形 体部下端ナデ調整 底部回転ヘラ切り	褐 普	普	略完形	
4	土師器 坏	(118)×07×73 体部外面横位のヘラ削り　内面は丁寧な磨き 口唇ナデ	橙褐 普	普	口縁～ 底部	墨書「□」 底部外面
5	須恵器 坏	136×84×42　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部ヘラ切り	灰色 普	普	1/2	
6	須恵器 坏	(139)×75×43　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り　底部静止ヘラ切り	灰色 普	普 白色砂粒 若干	1/3	
7	須恵器 坏	－×68 ×(21)　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部回転ヘラ切り	灰色 普	普	底部	
8	須恵器 高台付坏	－×91×(22)　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り	青灰色 良	緻密	底部片	
9	須恵器 坏	－×－×－　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部静止ヘラ切り	明灰色 普	普	口縁～ 底部	
10	土師器 小型甕	(138)×－×(79)　口縁受け口状を呈しつつ 外面　口縁頸部横ナデ　胴上半縦ヘラ削り　下半　横ヘラ削り 内面　口縁頸部横ナデ上半ナデ　上端で外反	暗橙褐 普	砂粒 赤色粒	口縁～ 胴部	内外面スス付着
11	土師器 小型甕	(120)×－×(67)　口縁受け口状　外面凹線状に調整 外面　口縁～頸部横ナデ　胴部上半縦ヘラ削り　下半ヘラ削り 内面　口縁横ナデ　胴部上半ナデ	暗赤褐 普	砂粒 橙色粒	口縁～ 胴部	
12	土師器 甕	220×－×(292)　口縁外反端部つまみ上げ 外面　口縁ナデ頸部～胴部上半ナデ　外面　凹状に調整 胴部下半～下端ヘラ削り後、疎らに縦ヘラ磨き 内面　口縁ナデ　胴部上半～下端ヘラナデ	普	粗砂粒 雲母多	略完形	
13	土師器 甕	－×(90)×(199) 外面　胴部下半下端ヘラ削り後、縦ヘラ磨き 内面　胴部下半ヘラナデド端ヘラ削り	㋐暗橙褐 ㋑橙褐 普	粗砂粒	胴部～ 底部片	
14	鉄器 刀子	長さ(20.1)×幅8×厚さ3　重量16.68g 茎幅5×厚さ3			2/3	細身

A133

検出地区　L7-47-2g、L7-48-1・1gにて検出した。

遺　構　長軸3.60m×短軸3.32m×壁高0.57m、主軸方位はN-27°-Eを示している。平面形は隅丸方形である。床はハードロームに暗褐色土が混じる、よく踏み固められた貼床である。住居跡中央部にて硬化面を平面屈曲して認めたが、その脇では火熱により床表面が損壊していた。床には、焼土粒や炭化粒が散ていた。床面でピットを3基検出したが、主柱穴は不明であり、壁柱穴を確認したにとどまっている。P1・P3が出入口施設のピットであろうが、P2が柱穴としてよいか迷うものであった。ピットの覆土は暗褐色土であったが、P1はロームを多く含み、P2・P3は焼土粒子が包含されていた。周溝は、竈袖下まで巡っており、住居跡全体を巡るものであった。しかし南東壁では二重に周溝が巡っていた。

竈は北西壁の中央に築かれており、壁を浅く掘込み煙道部としていた。竈は袖の基礎部にロームが壁から張り出し、その上に白色粘土と黒色土を混合させたものを積んでいた。また、袖の内壁は赤化していた。火床は緩やかな傾斜を持ち、強く赤化していた。

なお、住居廃絶後に不用材などの焼却が行われ、壁から住居跡床中央に向かって炭化材が出土している。覆土は、住居廃絶時にこの不用材の消却による火の使用と投入土（7・8層）、覆土中層（5層以上）以上の暗褐色土を主体とした自然堆積によって埋没していた。7・8層からは炭化材を検出しており、焼土も混入しているものである。

遺　物　竪穴住居全体に散在して、遺物は出土している。2・3・4・7はいずれも床面から出土しているが、7は横倒した状態で、3は伏せた状態であった。1は竈右袖の外に置かれた状態であったが、竈の崩壊粘土で埋没していた。

所　見　本住居跡は、南東壁下に二重に巡る周溝より、住居の若干の拡張が行われていたことが捉えられた。また、それに伴う出入口の改替が行われたのか、P1・P3が平面配置上検討すべきことになる。竈等からの配置的にはP1であるが、、P3の覆土は焼土粒子を含み、住居廃絶時の覆土に近似することから、P1からP3への出入口施設の改替があったと考えたい。

本住居跡の住居廃絶時の不用材の消却に関わる投入土では、遺構が完全に埋戻されてはいなかったことが覆土の堆積状況から捉えられた。覆土中位まで埋め戻した住居跡はその後しばらく「穴」として放置され、自然の堆積に任せたような遺構であった。

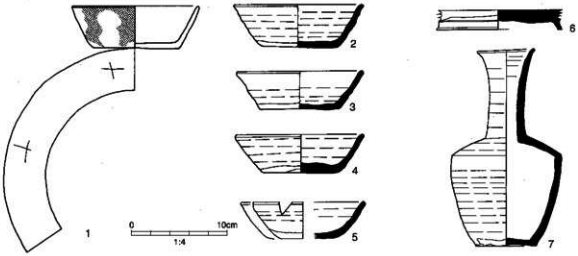
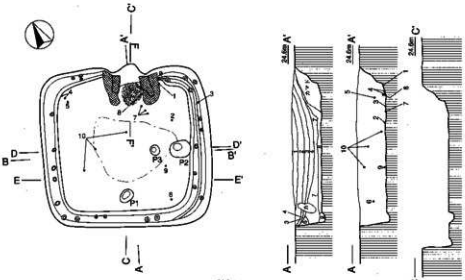
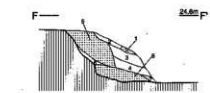


図64　A133



1 層	暗褐色土	暗褐色土と褐色土がほぼ均一に混じる
2 層	黒褐色土	黒色土と暗褐色土がほぼ均一に混じる
3 層	暗褐色土	暗褐色土と少量の褐色土が均一に混じる。 ロームの微粒が少含
4 層	暗褐色土	暗褐色土と少量の薄ったローム均一に混じる。 ロームの微粒が少含
5 層	黒褐色土	黒色土と暗褐色土がほぼ均一に混じる。 ロームの微粒が少含
6 層	暗黄褐色土	薄ったローム少量と暗褐色土が混じる
7 層	暗褐色土	薄ったロームや黒色土なども混じる
8 層	黒灰褐色土	黒色土と薄った白色粘土が少量混じる
9 層	暗褐色土	暗褐色土と薄ったロームが混じる

0 2m
1:80



1 層	灰褐色土	白色粘土ブロック。 白色粘土と大量の暗褐色土が混じり合ってブロックとなる
2 層	暗褐色土	少量の薄った白色粘土が部分的に混じる
3 層	暗褐色土	薄った白色粘土が滲むように含
4 層	暗褐色土	極少量の薄った白色粘土が滲むように含
5 層	灰褐色土	白色粘土ブロック。 白色粘土と暗褐色土が混じり合って構成されている
6 層	暗褐色土	滲むような微土、滲むような薄った白色粘土含
7 層	暗褐色土	暗褐色土と少量の薄った白色粘土が均一に混じる
8 層	暗赤褐色土	薄った白色粘土。 白色粘土が赤く変色したもの、すすけた白色粘土が粗く混じる

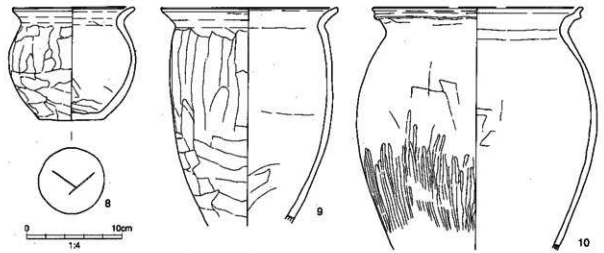


図65　A133（2）

表17　A133遺物観察表　　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	132×90×45　ロクロ成形 体部直線的に立ち上がる　体部外面にスス付着 底部静止ヘラ切り	褐 普	普	略完形	線刻 「+」「+」 体部内面
2	須恵器 坏	136×80×45　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部静止ヘラ切り	青灰色 良	緻密 白色砂粒 若干	完形	
3	須恵器 坏	136×80×45　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部静止ヘラ切り	灰色 良	緻密 白色砂粒 雲母微量	略完形	
4	須恵器 坏	136×78×41　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部静止ヘラ切り	灰色 良	普 白色砂粒 若干	4/5	
5	須恵器 坏	(130)×(67)×39　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部回転ヘラ切り	灰色 良	緻密	1/4	
7	須恵器 長頸壺	62×63×208　ロクロ成形　底部回転糸切り 口縁外反　肩部なだらかに落ちる	灰白色 普	砂粒 雲母	略完形	
8	土師器 小型甕	128×70×121　口縁外反　外面凹線状の調整　球胴状 外面　口縁頸部横ナデ　胴上半縦ヘラ削り　下半下端横ヘラ削り 内面　口縁頸部横ナデ　上半ヘラナデ　底部ヘラ削り	暗橙褐 普	粗砂粒 多	完形	墨書「囚」 底部外面
9	土師器 甕	186×－×(232)　口縁外反 外面　口縁頸部横ナデ　胴上半縦ヘラ削り　下半下端横ヘラ削り 内面　口縁横ナデ　胴上半ヘラナデ	暗赤褐 普	砂粒多	2/3	
10	土師器 甕	(221)×－×(256)　口縁　受け口状 外面　口縁頸部　横ナデ　胴上半縦ヘラ削り　下半縦のヘラ磨き 内面　口縁頸部　横ナデ　胴上半横のヘラナデ	暗褐 普	砂粒	1/3	

A134

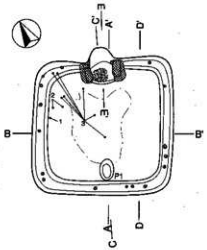
検出地区　L7-67-1・2gにて検出した。

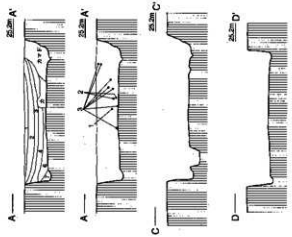
遺　構　長軸2.97m×短軸2.88m×壁高0.44m、主軸方位はN-28°-Eを示している。平面形は隅丸方形である床はハードロームに暗褐色土が混入した貼床であり、住居跡の中央に床面の硬化面を検出した。主柱穴は検出されなかったが、周溝内の壁柱穴は16基であった。しかし竈の対面壁側に、出入口施設に伴うピットが検出された。竈は北東壁中央に設けられており、壁を掘込んで煙道部がつくられていた。竈袖は白色粘土と黒色土の混合によって築かれ、竈差での内壁は火を被り赤化していた。竈ピットは緩やかに掘込まれ、坑底は多少の凹凸をもっていた。そしてこのピット内に、赤化した火床を検出した。煙道部は、やはりこのピットから急に立ち上がっていた。

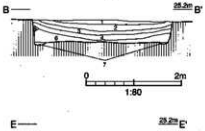
覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　竪穴住居跡としては少ないが、遺物は竈左袖の周囲に多い出土の傾向であった。1は床から20cmほど浮いていたが、口縁を上にして出土した墨書土器である。

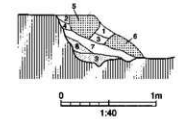
所　見　住居廃絶後に自然堆積によって埋没した竪穴住居跡であるが、ただ「穴」として放置されたのか、出土遺物は少なかった。



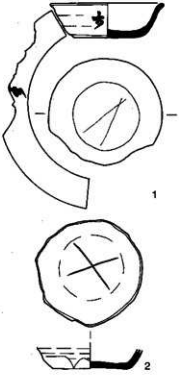


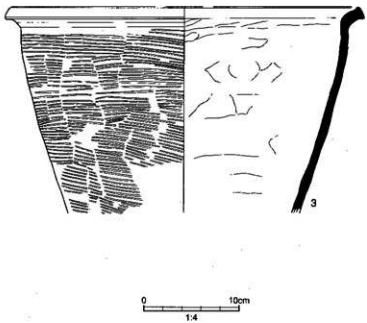


1 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の褐色土がほぼ均一に混じる
2 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の褐色土と極少量の薄ったロームがほぼ均一に混じる
ロームの大粒も数点含
3 層　褐色土　褐色土と少量の暗褐色土がほぼ均一に混じる。薄ったローム少量混じる
4 層　褐色土　褐色土と薄ったローム少量がほぼ均一に混じる。暗褐色土も
極少量均一に混じる。ローム中粒数点混じる
5 層　暗黄褐色土　薄ったロームが主体。暗褐色土少量混じる
6 層　暗褐色土　少量の褐色土が混じる。薄ったロームが極少量部分的に混じる
7 層　暗黄褐色土　薄ったロームが主体



1 層　暗灰褐色土　暗褐色土と薄った白色粘土少量がほぼ均一に混じる
2 層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の白色粘土少量がほぼ均一に混じる
3 層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土がほぼ均一に混じった土の中に薄った
白色粘土が帯びように極わずかに含
4 層　暗褐色土　暗褐色土と薄った白色粘土がほぼ均一に混じる
5 層　灰褐色土　白色粘土ブロック　純層ではなく少量の褐色土が混じる
6 層　灰色土　白色粘土ブロック　白色粘土がほとんどで暗褐色土は極わずか含
7 層　黒褐色土　黒色土と暗褐色土がほぼ均一に混じる。薄った白色粘土が帯びように含
8 層　暗赤灰色土　火熱を被り赤く変色した白色粘土
9 層　赤灰色土　薄った白色粘土や火熱を被り赤く変色した白色粘土



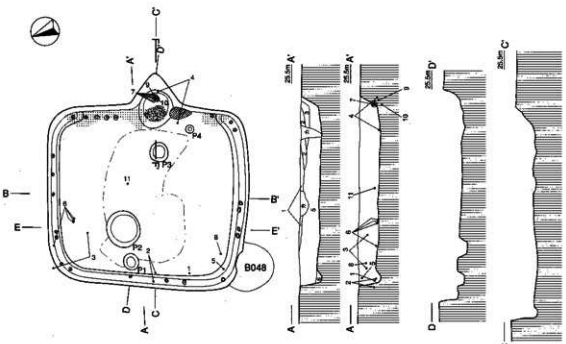


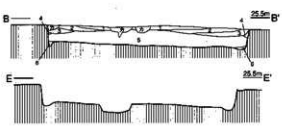
0　10cm
1:4

図66　A134

表18　A134遺物観察表　　(単位mm)

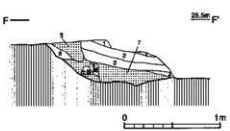
No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	119×72×37　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部回転ヘラ切り	灰色 良	緻密	4/5	篦書「×」底部外面 墨書「主」「主」 体部外面正位
2	須恵器 坏	―×81×―　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部静止ヘラ切り	灰色 普	普 白色砂粒 若干	底部片	篦書「×」底部内面
3	須恵器 甕	(376)×―×(220) 外面　口縁横ナデ　胴部平行タタキ　広口の甕 内面　口縁ナデ及び指頭圧痕	黒灰褐 悪	粗砂粒 赤色粒	1/3	





1 層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土がほぼ均一に混じる
2 層　褐色土　褐色土と少量の褐色土がほぼ均一に混じる
3 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の褐色土がほぼ均一に混じる
4 層　暗黄褐色土　濁ったロームと暗褐色土がほぼ均一に混じる
5 層　暗褐色土　消火層。暗褐色土は黒褐色土、濁ったローム等粗く混じる。焼土、炭含、床直上多含。中程は微粒含
6 層　暗黄褐色土　濁ったロームと暗褐色土混じる

0　2m
1:30



1 層　暗灰褐色　暗褐色土と濁った白色粘土がほぼ均一に混じる
2 層　暗褐色土　暗褐色土主体の層。白色粘土殆ど含まない
3 層　暗褐色土　部分的に濁った白色粘土が滲むように少量含
4 層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の濁った白色粘土ほぼ均一に混じる
5 層　灰褐色土　白色粘土ブロック。純層ではなく少量の褐色土が混じるブロック
6 層　暗赤灰褐色土　火熱を受けて赤く変色した白色粘土と、すすけた白色粘土、濁ったローム等ほぼ均一に混じる
7 層　暗赤灰褐色土　赤く変色した白色粘土と、濁った白色粘土、すすけた白色粘土が粗く混じる

図67　A135

A135

検出地区　L7-65-3・4g、l7-75-2gにて検出した。

遺　構　長軸4.20m×短軸3.78m×壁高0.38m、主軸方位はN-114°-Eを示している。平面形は隅丸長方形である。床はハードロームに暗褐色土が少量混入したもであり、竈前から竈対面の北西壁まで住居跡中央部の床では硬化面を検出した。床には4基のピットが検出されたが、P2～P4が柱穴かどうかは捉えられなかった。壁柱穴は23基を確認した。P1は出入口施設に伴うピットである。なお、P3・P4は、竈の調査時に検出したピットであった。周溝は竈壁のコーナーで途切れており、全周とはならなかった。

竈は南東壁中央に設けられ、壁をやや大きく掘込んで煙道部としていた。竈の袖は、右袖のみ小さく残っていた。白色粘土に黒色土が混じったものを積み上げており、袖の内壁は赤化が残っていた。竈ピットは浅く坑底に凹凸のあるもので、ピット北側に赤化した火床を検出した。煙道は急な立ち上がりであった。竈の左袖は失われていたが、壁には竈構築の粘土の痕跡が残っていた。竈のある壁には粘土が充填されたように、白色粘土が残されてもいた。また、床面直上層には多量の炭化材が検出され、周辺の覆土は黒褐色土に混合した焼土層が堆積していた。

覆土は、床面から上層まで、ロームを多く含む暗褐色土の人為的な投入土が堆積し、また、覆土最上層では暗褐色土の自然堆積であった。消火のための投入土であろうが、完全には住居跡を埋めていなかった。

遺　物　本地区の住居跡としては、比較的多い遺物の出土であった。出土する傾向は、覆土中層から上層にかけての出土が主体であった。4と9は支脚脇に伏せた状態で出土しており、10は竈火床から煙道部にずれて出土した。また、図示はしなかったが、本竪穴住居跡からは鉄滓が出土している。

所　見　竪穴住居廃絶後に、不用材の焼却を行った遺構である。そして完全に消却できないうちに投入土によって人為的に埋没した遺構である。先述したが、住居跡は人為的投入土によって完全に埋戻されたわけではなく、周辺の地形の中では凹みとなって残り、最後に自然堆積によって埋没したものであった。また、竈構築壁に粘土を貼り付けるように充填する例は上谷遺跡等でいくつかの類例があるが、その目的は捉えきれず、さらなる資料の増加に待ちたい。

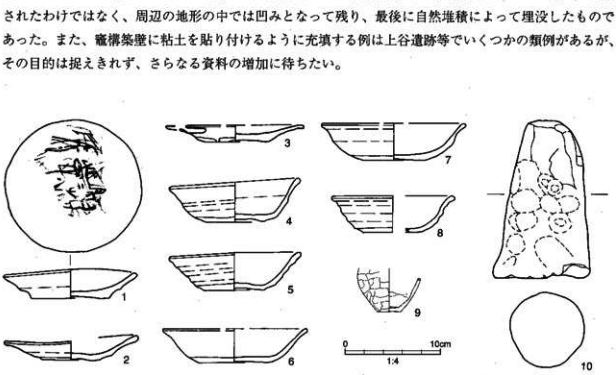


図68　A135（2）

A136

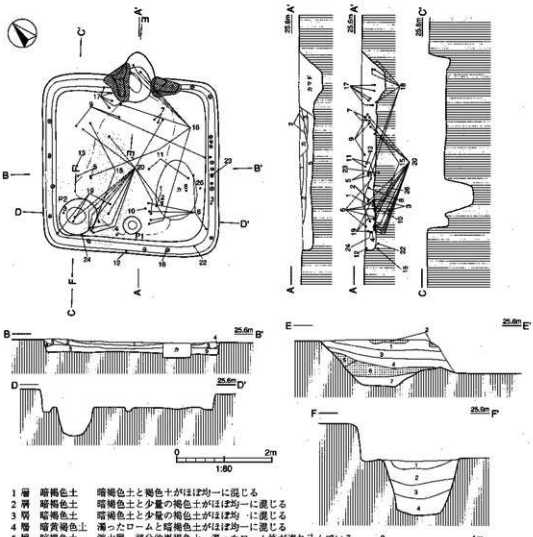
表19　A135遺物観察表　　（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 皿	140×81×31　ロクロ成形 体部は外反しながら一段稜を作り、さらに外反し立ち上がってゆく 内面は磨きが施され、中央が凹む　底部回転糸切り	淡褐 普	普	完形	内底墨痕有
2	土師器 皿	140×60×20 体部下端ヘラ削り 底部ヘラ切りの後、底縁ヘラ削り調整	橙褐 普	普	3/4	内面部分的磨き
3	土師器 皿	―×65×23　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部回転糸切り	橙褐 普	普	1/3	
4	土師器 坏	138×60×42　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部回転糸切りの後、ヘラ削り	淡褐 普	普	2/3	
5	土師器 坏	137×63×45　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部回転糸切りの後、底縁ヘラ削り	褐 普	普	1/2	
6	土師器 坏	(152)×79×37　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部回転糸切りの後、底縁ヘラ削り	褐 普	普	1/5	
7	土師器 坏	(152)×(62)×39　ロクロ成形 体部回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り	橙褐 普	普 白色砂粒 微量	1/4	
8	土師器 坏	(129)×(60)×39　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部回転ヘラ切り	淡褐 良	緻密	1/4	
9	土師器 小型甕	―×48×(96) 外面　胴上半縦ヘラ削り　胴下半横ヘラ削り底部内面 内面　上半下非ヘラナデ　底部内面ヘラ削り 平底の小さい底部胴部丸味をもつ	橙褐 普	砂粒	胴～ 底部片	
10	土製品 支脚	―×―×―　体部に指頭痕あり	淡褐 悪	粗	略完形	
11	鉄器 鉄滓	長さ37×幅54×厚さ37　　重量124.8g	赤褐色	砂粒含		未掲示

検出地区　　L7-73-2・4g、L7-74-1・3gにて検出した。

遺　　構　　長軸3.73m×短軸3.72m×壁高0.34m、主軸方位はN-47°-Eを示している。平面形は隅丸方形であるが、正方形に近い形状である。床はハードロームに暗褐色土が混じるもので、住居跡中央は良好な硬化面を残していた。しかし床面には２ヶ所、火床化する面があった。床から検出されたピットは２基であったが、主柱穴は検出されなかった。しかし壁柱穴は周溝内に19基確認した。P1は、出入口施設に伴うピットと捉えた。P2は、住居跡南西コーナーに位置し、床から大きく掘込まれロームと焼土粒子を少し含んだ覆土であった。周溝は竈袖下まで全周するものであった。竈は北西壁中央に設けられ、壁を大きく掘込み煙道部としていた。竈袖は白色粘土と混合によって築かれ、袖の内壁は赤化していた。竈ピットは少し凹凸のある坑底であり、ピット内に火熱跡が認められたが赤化はしていなかった。この火熱跡が残る部分が火床と捉えられるが、、赤化した火床は損壊し、火熱跡のみ残ったものと思われる。

住居跡床の中央から北西コーナーにかけて、炭化材と黒褐色土に少量焼土が混入した堆積土が検出された。そして覆土は床直上層から中層まで人為的な投入土によって埋戻され、その後、褐色土の自然堆



1 層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土がほぼ均一に混じる
2 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の褐色土がほぼ均一に混じる
3 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の褐色土がほぼ均一に混じる
4 層　暗黄褐色土　薄ったロームと暗褐色土がほぼ均一に混じる
5 層　暗褐色土　消火層、部分的黒褐色土、薄ったローム等が流れ込んでいる。焼土、炭は床直上に多い

1 層　暗灰褐色土　暗褐色土と少量の薄った白色粘土がほぼ均一に混じる
2 層　灰褐色土　白色粘土ブロック
3 層　暗褐色土　滲む程度の薄った白色粘土が部分的に混じる
4 層　暗褐色土　滲む程度の薄った白色粘土が部分的に混じる
5 層　暗赤褐色土　薄った白色粘土と火熱を受けて赤く変色した白色粘土薄ったローム、暗褐色土がほぼ均一に混じる
6 層　赤灰色土　薄った白色粘土と火熱を受けて赤く変色した白色粘土が主体
7 層　暗褐色土　暗褐色土と薄ったロームがほぼ均一に混じる

図69　A136

積であった。

遺　物　本地区の竪穴住居跡としては、出土遺物が多い遺構である。床直上の出土は少ないが、覆土下層の投入土中に多い傾向が窺えた。23の紡錘車は床周溝の床と同じ高さからし、逆さまとなって出土している。

所　見　住居廃絶後に、不用材の焼却を行った遺構である。そして完全に焼却される前に、人為的投入土によって埋め戻しが行われた住居跡でもある。しかし完全に埋めてはおらず、周辺からみると「不用な穴」として残ったような遺構である。なお、P2は検出位置から貯蔵穴であろうか。

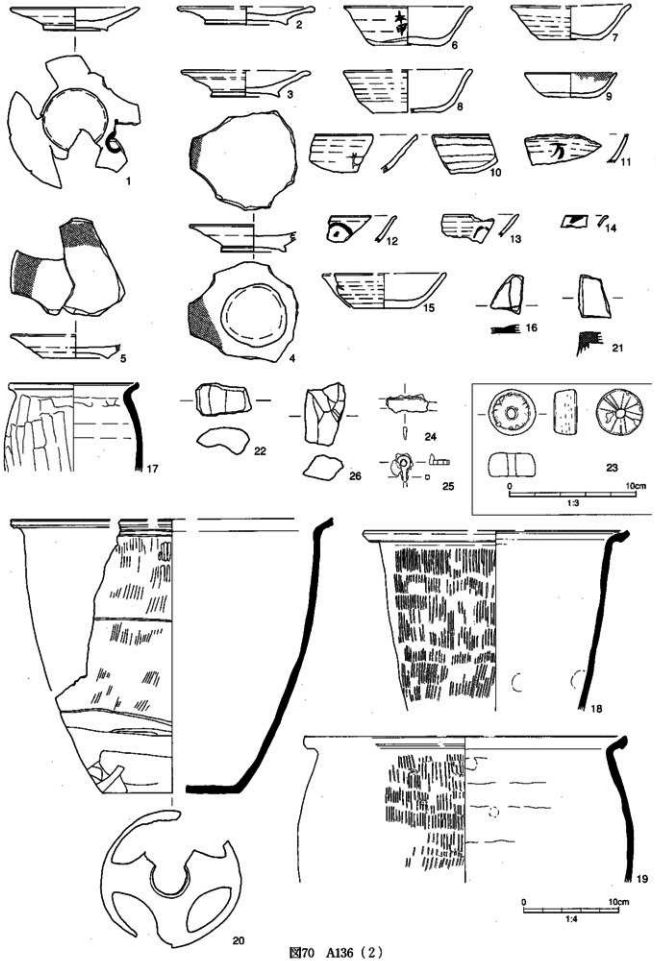

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
0
10cm
1:3
0
10cm
1:4

図70 A136（2）

表20　A136遺物観察表　　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高台付皿	136×台部径67×24　ロクロ成形 底部回転糸切り　底部外面スス付着	褐 普	普	3/4	墨書「□」 体部外面
2	土師器 高台付皿	144×台部径86×19　底部外面スス付着	褐 普	粗	4/5	
3	土師器 高台付皿	136×台部径86×19　ロクロ成形　底部回転糸切り 内面は丁寧な磨きを施す　底部外面スス付着	褐 粗	普	3/4	
4	土師器 高台付皿	(136)×台部径68×(29)　ロクロ成形 底部回転糸切りののち周辺ヘラ削り　内面は磨きを施す 体部外面、内面ともに一部スス付着	淡褐 普	普	2/3	
5	土師器 高台付皿	(136)×台部径68×(25)　ロクロ成形 底部回転糸切りののち周辺ナデ調整をし、高台部を作り出す 体部内面にスス付着	橙褐 普	普	2/3	
6	土師器 坏	134×72×41　ロクロ成形 底部回転糸切りののち、周辺ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	褐 普	普	4/5	線刻「田」 体部外面　正位
7	土師器 坏	(126)×(64)×37　ロクロ成形 底部回転糸切りののち周辺ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	褐 普	普	1/4	
8	土師器 坏	(136)×(72)×45　ロクロ成形 底部周辺ヘラ削り 体部下端ヘラ削り　内面磨きを施す	褐 普	粗	1/4	
9	土師器 坏	(96)×(52)×26　ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラ削り　内面は丁寧な磨きを施す　スス付着	淡褐 普	普	1/4	灯明皿
10	土師器	－×－×－　ロクロ成形 内面は丁寧な磨きを施す	褐 普	普	口縁片	線刻「□」 体部外面
11	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 内面は磨きを施す	淡褐 普	普	口縁片	墨書「万」 体部外面 線刻「□」 体部外面
12	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	橙褐 普	普	口縁片	墨書「◎」 体部外面
13	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 内面磨きを施す	褐 普	粗	口縁片	墨書「□」 体部外面
14	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 内面は磨きを施す	褐 普	普	口縁片	墨書「□」 体部外面
15	土師器 坏	(130)×63×37　ロクロ成形 底部静止ヘラ切り　体部下端ヘラ削り	橙褐 普	普	1/4	墨書「□」 底部外面
16	須恵器 坏	－×－×－	灰 粗	普	底部片	線刻「×」 底部内面
17	須恵器 小型壺	(136)×－×(94) 内面　横ナデ　外面　広縁頸部横ナデ 胴部上半縦ヘラ削り　口縁受け口状	灰 悪	砂粒 白色粒	1/4	

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
18	須恵器 甕	280×－×(182) 外面　口縁～頸部横ナデ口縁外反端部立ち上がる 内面　口縁横ナデ胴部ナデ及び指頭圧痕　胴部上半下半平行タタキ	灰茶褐 悪	砂 橙色粒	口縁～ 胴部片	
19	須恵器 甕	(340)×－×(155) 外面　口縁～頸部ナデ　胴部タタキ 内面　口縁横ナデ　胴部上半ナデ一部下半指頭圧痕	灰褐 普	砂粒 白色粒	口縁～ 胴部片	
20	須恵器 甑	(336)×(144)×(289) 口縁ナデ　胴部タタキ　底部5孔	黒褐 普	普	1/3	
21	灰釉陶器 水滴	長軸45×短軸23×厚さ10	灰緑 良	緻密	把手	
22	土製品 支脚	上部径(52)×残存高(35)	橙褐 不良	粗	断片	
23	石器 紡錘車	上部径30×底部径35×高さ19　　孔径6　重量43.6g 厚手の作りであり、断面は台形状に近い 全体に明瞭な使用痕が残されており、周縁部では破損も目立つ			完形	
24	鉄器 刀子	長さ(44)×幅13×厚さ3.5　重量7.2g			刀部	
25	鉄器 不明	長さ(30)×幅×厚さ5　重量5.58g			環頭部	女釘？
26	石器 砥石	長軸62×短軸32×厚さ26	青灰		断片	

A137a・b

検出位置　L7-63-2・4gにて検出した。

遺　構　住居の拡張に伴う2軒の重複した竪穴住居跡であり、各住居跡の床面は同じ高さであった。

A137aは、長軸4.01m×短軸3.63m×壁高0.52m、主軸方位はN-28°-Eを示している。平面形は、やや竈に対して縦長の隅丸方形である。床は、ハードロームに褐色土が混じるものであった。床は住居跡中央からA137bの遺存周溝をまたいで、竈対面の出入口施設に伴うP6まで硬化面を検出した。重複住居跡のためか、床は若干凹凸のあるものであった。竈KAは北西壁の中央からやや北コーナー寄りに設けられており、浅く掘込んだ壁を煙道部としていた。両袖は白色粘土を使って積み上げられ、床と同じ高さの平坦な火床であった。周溝はA137bの竈前で竈ピット等と重なるため不明瞭となっているが、KAの竈袖下まで巡り、住居を全周するものであった。覆土は床直上層中に火の使用が認められるが、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

A137bは、長軸3.65m×短軸不明×壁高0.52m、主軸方位はN-61°-Wを示している。平面形は、竈に対して縦長となる隅丸方形であろうと思われる。火床の残存から竈KBは東コーナーに設けられていた。袖も失われている。

住居跡の伴う柱穴はP1～P8まで8基のピットを検出したが、A137aに伴うものはP1～P3・P6～P8の6基と捉えられ、A137bに伴う柱穴はP3～P5と捉えている。

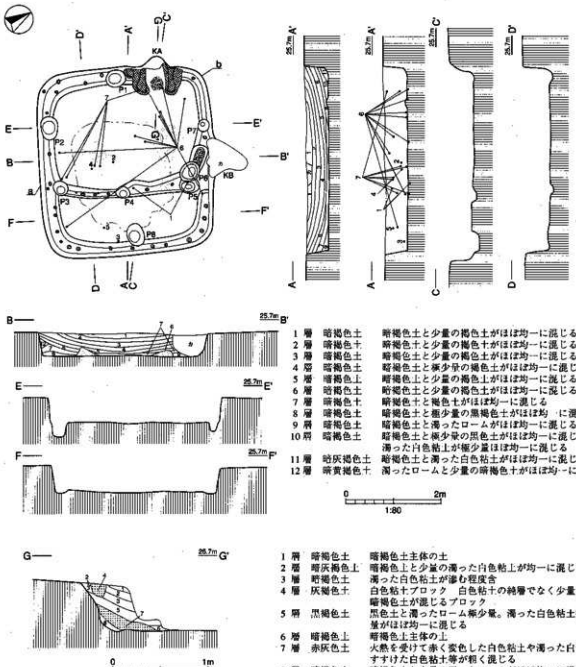


図71　A137a・b

遺　物　覆土中層から上層が遺物出土の傾向であるが、覆土の状態及び出土層位から全てA137aに伴うものと捉えた。

所　見　覆土の堆積状態や竈の遺存状況から、A137aが新しく、A137bが古い住居跡と捉えられた。また、KAにはA137bの周溝が巡っていないことから、A137aの竈新構築場所が当初から決めていた拡張住居と捉え、新旧関係を判断した。

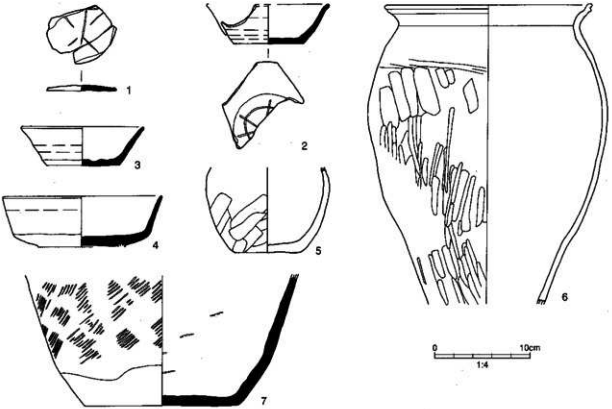


図72　A137a・b（2）

表21　A137a.b遺物観察表　（単位mm）

No.	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	－×－×－	灰色 普	普	底部片	線刻「四」 底部内面
2	須恵器 坏	(130)×(72)×42　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部静止ヘラ切り	暗灰色 并	緻密	口縁～ 底部	線刻「□」 底部外面
3	須恵器 坏	130×78×41　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部静止ヘラ切り	灰色 普	緻密	完形	
4	須恵器 高台付坏	166×(90)×54　ロクロ成形 体部は直線的に立ち上がる 底部回転ヘラ切りの後、周辺ヘラ削り　高台部欠損	灰色 普	緻密	1/3	
5	土師器 小型甕	－×70×(90)　ロクロ成形 胴部上半ナデ 胴部下半斜位のヘラ削り　底部回転糸切りの後、周辺ヘラ削り	㊀橙色 ㊁黒褐 普	普	胴部～ 底部	
6	土師器 甕	217×－×(317)　ロクロ成形 口唇をつまみ上げる胴部上半　幅広のヘラ削り 胴部下半　細かいヘラ削り	㊀褐 ㊁暗褐 普	并 砂粒若干	4/5	
7	須恵器 甕	－×160×(139)　輪積成形 胴部上半タタキ 胴部下半削り	灰色 普	普	胴部～ 底部	

A138

検出位置　L7-53-3・4gにて検出した。

遺　構　長軸3.62m×短軸3.50m×壁高0.22m、主軸方位はN-14°-Eを示している。平面形は隅丸方形であるが、やや東壁が広い台形状ともいえる。床は、ハードロームに暗褐色土が混じるが、良好な床である。住居跡中央に床面に硬化面を残している。主柱穴は検出されなかったが、壁柱穴は6基確認された。この他に、床に3基のピットを検出した。P1・P2の覆土は暗褐色土に焼土粒子と粘土粒子ががが混じっており、本住居跡に伴うものと捉えた。P3は構成の所産である。周溝は、断続的に掘込まれているだけであった。竈は北壁のほぼ中央に設けられていた。竈袖部の遺存は悪く、左袖の基礎部のみ床から2～3㎝を検出した。浅く掘込まれた竈ピット内は、火熱痕は残すものの赤化はしていなかった。おそらく掻き出し等によって、赤化した火床が失われたものと捉えられるものであった。煙道部も浅く凹み、火熱痕が認められた。また、住居跡北西コーナーに、黒色土と混合した焼土ブロックを検出した。覆土は黒色土主体の自然堆積であった。

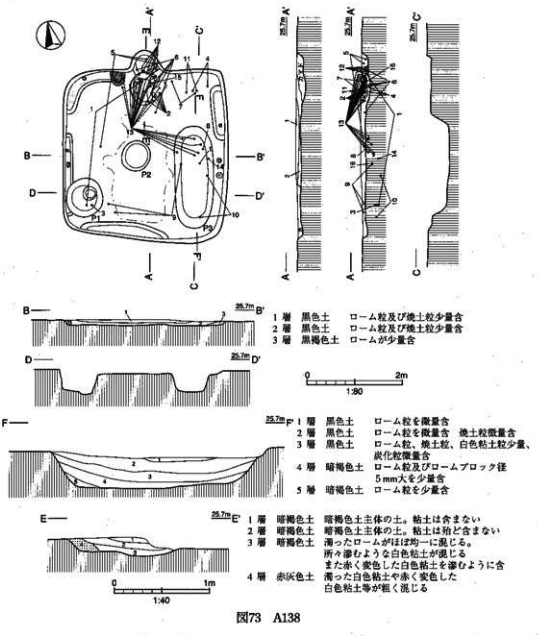


図73　A138

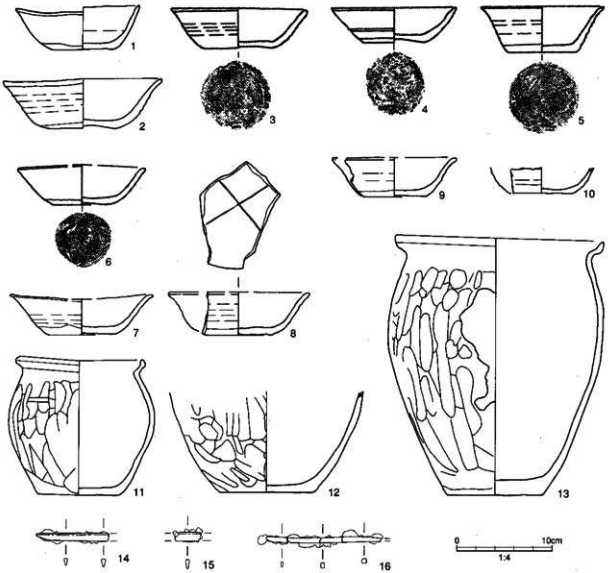


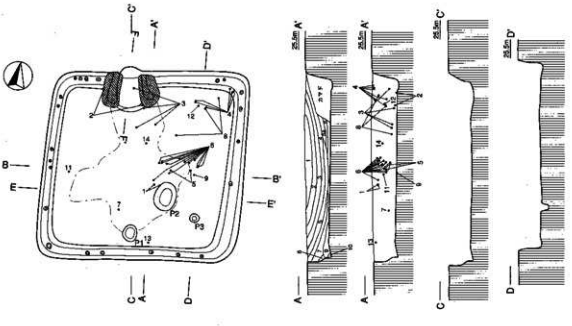
図74　A138（2）

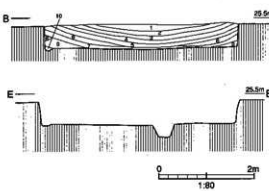
遺　　物　　本地区の住居跡としては、遺物の出土が多い遺構である。床面乃至直上層の出土がやや多い傾向が認められた。4・12はいずれも竈内の出土であり、4は伏せて12は竈天井崩落土の上に置かれた状態で出土している。

所　　見　　掘込みの浅い竪穴住居跡である。調査時はP1を貯蔵穴と捉えたが、坑底内にさらにピットが掘込まれるなど不明瞭なものである。また、P3はロームや焼土粒子を少し包含し、炭化粒も僅かに含む黒色土の覆土であり、床面での硬化が認められないため後世の所産とした。

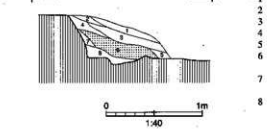
表22　A138遺物観察表　　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	129×66×42　ロクロ成形 底部回転ヘラ切り　体部下端ヘラ削り	㋐褐 ㋑橙色 普	普	略完形	
2	土師器 坏	166×66×52　ロクロ成形 底部回転糸切りの後、周辺ヘラ削り　体部下端削り	橙褐 普	普	略完形	
3	土師器 坏	143×72×42　ロクロ成形 底部回転糸切り	㋐褐 ㋑暗褐 普	普	完形	
4	土師器 坏	132×66×36　ロクロ成形 底部回転糸切り　体部下端ヘラ削り	橙褐 普	普	略完形	
5	土師器 坏	128×37×48　ロクロ成形 底部回転糸切り口縁部がやや外反する	橙褐 普	普	2/3	
6	土師器 坏	132×58×42　ロクロ成形 底部ヘラ削り調整　体部下端ヘラ削り	橙褐 普	普	1/3	
7	土師器 坏	150×70×38　ロクロ成形 底部回転ヘラ切り　体部下端ヘラ削り	褐 普	普	1/3	
8	土師器 坏	(148)×68×45　ロクロ成形 底部回転ヘラ切り　底部内面に凹みあり 体部下端ヘラ削り	㋐淡褐 ㋑褐 普	普	口縁～ 底部	線刻「×」 底部内面
9	土師器 坏	(132)×67×42　ロクロ成形 底部回転ヘラ切り　体部下端ヘラ削り	橙褐 普	普	口縁～ 底部	
10	土師器 坏	(108)×63×(32)　ロクロ成形 底部回転ヘラ切り　体部下端ヘラ削り	淡褐 普	普	口縁～ 底部	墨書「ﾆ」 底部内面
11	土師器 小型甕	(133)×84×143　ロクロ成形 口縁～頸部ナデ　胴部上半　縦位のヘラ削り 胴部下端斜位のヘラ削り	褐 普	普	4/5	
12	土師器 甕	－×100×106　輪積成形 胴部縦位のヘラ削り　胴部下端斜位のヘラ削り	褐 普	普	胴部～ 底部	
13	土師器 甕	212×100×271　輪積成形 口縁～頸部ナデ 胴部上半　縦位のヘラ削り　胴部下半　横位のヘラ削り	褐 普	普	1/3	
14	鉄器 刀子	長さ(76)×幅8×厚さ4.5　重量7.2g			刃先	
15	鉄器 刀子	長さ(27)×幅10×厚さ3.5　重量3.1g			刃部	
16	鉄器 不明	長さ(121)×幅5.5×厚さ5　重量13g			茎部？	





1 層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の褐色土がほぼ均一に混じる
2 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の褐色土が混じる
3 層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土がほぼ均一に混じる。部分的に焼土、炭の微粒が少量混じる
4 層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の褐色土がほぼ均一に混じる部分的に炭の微粒が少量混じる
5 層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の褐色土がほぼ均一に混じる部分的に炭の微粒が少量混じる
5a 層　暗灰褐色土　5 層と薄った白色粘土少量がほぼ均一に混じるカマドが崩れて流れ込み白色粘土混じる
6 層　暗褐色土　暗褐色土と多量の褐色土がほぼ均一に混じる
7 層　褐色土　多量の褐色土と少量の暗褐色土が均一に混じる薄ったロームが部分的に極少量混じる
8 層　暗黄褐色土　薄ったロームと暗褐色土が混じる
9 層　褐色土　多量の褐色土と少量の暗褐色土が均一に混じる
10 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の薄ったロームが混じる



1 層　暗灰褐色土　暗褐色土と多量の薄った白色粘土ほぼ均一に混じる
2 層　暗灰褐色土　暗褐色土と少量の薄った白色粘土ほぼ均一に混じる
3 層　暗灰褐色土　暗褐色土と少量の薄った白色粘土ほぼ均一に混じる
4 層　暗灰褐色土　暗褐色土と多量の薄った白色粘土ほぼ均一に混じる
5 層　暗褐色土　極少量の薄った白色粘土が波状に含
6 層　赤灰色土　火熱を受けて赤く変色した白色粘土や薄った白色粘土が混じる
7 層　暗褐色土　暗褐色土と薄ったロームがほぼ均一に混じる上の中に滲むように白色粘土混じる
8 層　黒褐色土　ロームの大粒、暗褐色土が極少量混じる

図75　A139

A139

検出位置　L7-54-1・3gにて検出した。

遺　構　長軸4.22m×短軸3.98m×壁高0.45m、主軸方位はN-12°-Eを示している。平面形は角のある隅丸方形である。床はハードロームに暗褐色土が混じる、踏み固められた床である。竈前から住居出入口はアメーバ状に、床が損壊していた。床面に3基ピットを検出したが、柱穴とは捉えきれなかった。壁柱穴は22基を確認した。P11は出入口に伴うピットである。周溝は、竈袖下まで全周していた。竈は北壁中央からやや北西コーナー寄りに設けられており、煙道部のための壁への掘込みは極めて小さかった。竈袖は白色粘土と黒色土が混合したもので、袖の内壁は赤化していた。浅い掘込みの竈ピットの坑

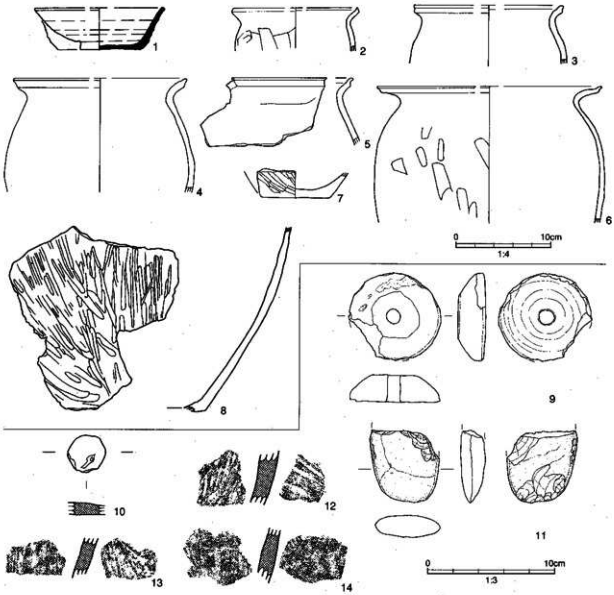


図76　A139（2）

底には赤化が認められず、火床は失われていた。また、竈前から住居跡中央の床面に、粘土に少量の暗褐色土が混合した砂が流れでていた。また、南東コーナー付近には覆土上層から中層にかけて、壁側から住居跡中央部に向かって傾斜して焼土が堆積していた。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　　物　　竈周辺にやや多く出土する傾向が認められた。一方、住居跡中央部にも多いが、後の投入廃棄された遺物が主体である。9の紡錘車は、床面から傾いた状態で出土したものである。

所　　見　　住居廃絶後に床面での火の使用が認められず、住居跡中央の床面の損壊が確認されている。これは住居廃絶後に放置され、気候等によって損壊したのではないかと考えられるものであった。類例をもって検討すべきかも知れない。

また、住居壁の掘込みが極めて浅い竈煙道部の事例が、Ⅲ地区の調査の中で検出されている。本住居跡だけではなくA140も同様であり、本地区の事例だけなのか、上谷遺跡のなかでどういう位置づけを行うのか、類例の増加をまって検討していきたい。

表23　A139遺物観察表　　(単位mm)

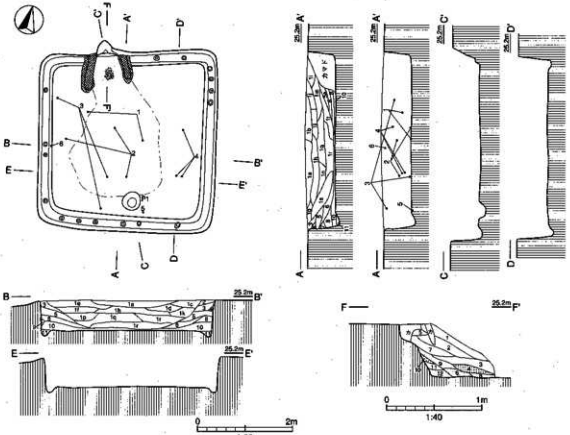
No.	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	138×86×44　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部静止ヘラ切り	灰 良	普 白色砂粒若干	口縁～底部	
2	土師器 小型甕	(134)×－×(45) 口縁～頸部　ナデ調整 胴部上半　縦位のヘラ削り	㊀黒褐 ㊁褐 普	普	口縁片	
3	土師器 甕	(156)×－×(90) 口唇をつまみ上げる(常総型) 口縁～頸部ナデ	褐 普	普 砂粒若干	口縁片	
4	土師器 甕	(182)×－×(120) 口縁ナデ　頸部ヘラナデ　ヘラ磨き	褐 普	普	口縁片	
5	土師器 甕	－×－×(72) 口唇をつまみ上げる(常総型) 口縁～頸部ナデ	褐 普	普	口縁片	
6	土師器 甕	234×－×(153) 口唇をつまみ上げている(常総型) 胴部　縦位のヘラ削り	㊀黒褐 ㊁褐 普	普	口縁～胴部	
7	土師器 甕	－×70×(27)　輪積成形 胴部下半　斜位のヘラ磨き 底部　木葉痕	褐 普	普	底部片	
8	土師器 甕	－×－×(194) 胴部上半　斜位のヘラ磨き 胴部下半　斜位のヘラ磨き	褐 普	普	胴部片	
9	石器 紡錘車	上部径35×底部径72×高さ22　重量109.2g　孔径10 厚手の人形の紡錘車であり、断面は台形状を呈する 全体に磨耗が激しく、使用痕は不明瞭である			略完形	
10	土製品 土製円盤	径39×厚さ13 貝殻条痕文土器片を利用表面の磨粒著しい	橙褐 普	普	胴部片	
11	石器 磨製石斧	長軸56×短軸54×厚さ17　重量88.8g 片刃の磨製石斧と思われるが、刃部を含めて全体に破損 や磨耗が激しく、磨痕や使用痕は不明瞭である			1/2	

A140

検出地区　　L7-34-1・3gにて検出した。

遺　　構　　長軸3.81m×短軸3.75 m×壁高0.59m、主軸方位はN-18°-Wを示している。平面形は丸みの少ない隅丸方形である。床面はハードロームに暗褐色土が混じるもので、竈前から出入口にかけての住居中央は硬化面を残している。床にピットは1基のみの検出であり、これは出入口施設に伴うものと捉えた。主柱穴は検出できなかったが、周溝内に壁柱穴が16基確認された。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。周溝は、竈袖下まで巡っており、住居に対して全周している。竈は、北壁のやや西寄りに設けられている。竈袖が細長く残るものであるが、竈袖は白色粘土を主体として暗褐色土が少量混じって築かれているものであり、内部は部分的に赤色していた。火床は床と同じ高さに検出し、赤化していた。壁を小さく掘込んだ煙道部は急に立ち上がるが、テラス状に残された部分に赤化はしていないが、火熱を被った痕が認められている。

覆土は一見複雑な堆積状況を示しているが、基本的には本竪穴住居跡は暗褐色土と黒褐色土を主体とした自然堆積であった。そして住居跡は、完全に埋没したものと捉えられる。しかし竪穴住居跡がほぼ



1a層　暗褐色土　暗褐色土主体
1b層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土が混じる
1c層　暗褐色土　黒色土と暗褐色土が混じる
1d層　暗褐色土　暗褐色土と多量の暗褐色土が混じる
1e層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土、ロームが粗く混じる
1f層　暗褐色土　暗褐色土と多量の褐色土が混じる
1g層　暗褐色土　薄ったロームと暗褐色土が混じる
1h層　暗褐色土　黒色土と暗褐色土、極少量の薄ったローム粒が粗く混じる
1i層　暗褐色土　暗褐色土主体の土でロームの小粒が散点混じる
1j層　暗褐色土　白色粘土と暗褐色土が粗く混じる
1k層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の黒色土が混じる
1l層　暗褐色土　暗褐色土と少量の黒色土が混じる
1m層　暗褐色土　暗褐色土と少量の黒色土、少量のロームの小粒が粗く混じる
1n層　暗褐色土　暗褐色土と少量の褐色土が混じる
1o層　暗褐色土　暗褐色土と黒色土、ロームの小粒が散点で粗く混じる
1p層　暗褐色土　暗褐色土と多量の褐色土、ロームの小粒が多量に粗く混じる
1q層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の黒色土、極少量の薄ったロームが粗く混じり合ったロームの小粒から大粒が散点混じる
1r層　暗褐色土　黒色土と少量の暗褐色土が粗く混じる
1s層　暗褐色土　薄ったロームと少量の暗褐色土が粗く混じるロームの微量が少含
1t層　暗褐色土　暗褐色土と極少量薄ったロームが粗く混じる
2層　暗褐色土　暗褐色土と少量の褐色土がほぼ均一に混じる
3層　暗褐色土　暗褐色土と少量の褐色土がほぼ均一に混じる
4層　暗黄褐色土　薄ったロームと暗褐色土が混じる
5層　黒褐色土　黒色土と少量の暗褐色土が混じる。ロームの微粒が多含
5a層　黒灰褐色土　5層と同じく白色粘土が均一混じる
6層　黒褐色土　黒色土と暗褐色土がほぼ均一に混じる。ロームの微粒が少含
7層　暗黄褐色土　薄ったロームと暗褐色土が混じる
8層　暗褐色土　暗褐色土と少量の褐色土がほぼ均一に混じる。ロームの小粒散点含
9層　暗黄褐色土　薄ったロームと暗褐色土が混じる
10層　暗褐色土　暗褐色土と少量の薄ったロームがほぼ均一に混じる
11層　暗黄褐色土　薄ったロームと暗褐色土が混じる

1層　黒褐色土　ローム粒及び白色粘土粒を少含
2層　黒褐色土　ローム粒及び白色粘土粒を微量含
3層　黒褐色土　ローム粒、白色粘土粒、焼土粒少含炭化粒微量含
4層　暗灰褐色土　白色粘土主体の土に黒色土が少量混じる炭化材、ローム粒少含
5層　灰褐色土　黒方と白色粘土が混じる ローム粒、焼土粒少含
6層　暗赤褐色土　黒色土と焼土が粗く混じる。ローム粒少含
7層　暗灰褐色土　黒色土とロームと白色粘土が混じる焼土粒、炭化粒微量含
8層　黒色土　黒色土のロームが少量混じる。焼土粒少含
9層　黒色土　白色粘土粒、焼土粒多含ローム粒、炭化粒微量含
10層　灰白色土　白色粘土主体　黒色土が少量混じる焼土粒少含
11層　黒色土　焼土粒、ローム粒少含
12層　黒色土　焼土粒微量含

図77　A140

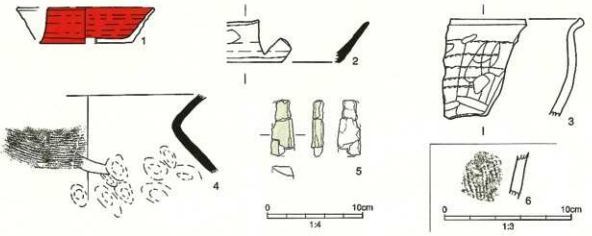


図78　A140（2）

埋没した後に、掘り返され、人為的に乱雑に埋戻されたことを覆土は示しており、この行為が複雑な堆積状況となったものと捉えた。

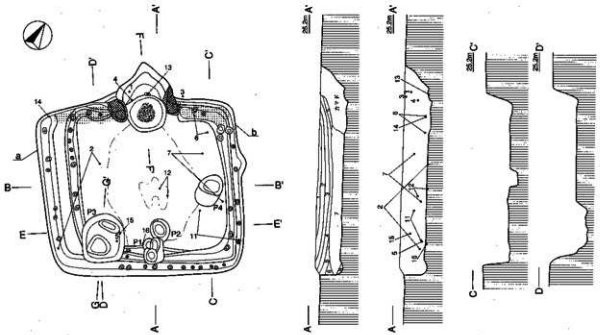
遺　　物　　本地区竪穴住居跡としても、出土遺物は少ない遺構である。出土する傾向は、覆土上層及び中層に点在するだけである。なお、完形土器の出土はなく小破片が多いため、意識的に実測しているものである。

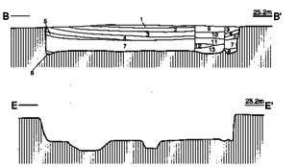
所　　見　　住居廃絶後に自然堆積によって埋没した住居跡であるが、大きく住居跡床面付近まで掘り下げられたものである。Ⅱ地区においても住居跡埋没後に再び掘り返された例を6軒検出しているが、本住居跡もその類例となってこよう。しかしⅡ地区の例は掘り返した後に火の使用等が伴っていたが、本住居跡ではその痕跡は認められなかった。Ⅳ地区・Ⅴ地区でもこの傾向があるのか、類例の増加を待ちたい。

また、本住居跡もA139と同じく、竈煙道部の壁の掘込みが極めて小さな遺構である。近接して2軒の、壁への掘込みが小さな住居跡を検出したこととなった。竈規模が、やや大きいことに係わるのだろうか。Ⅱ地区では検出しておらず、Ⅲ地区の傾向なのか、Ⅳ地区・Ⅴ地区とつながるのかは即断できないが、通常、奈良・平安時代の竈煙道部の壁への掘込みが深い住居跡と異なるものである。

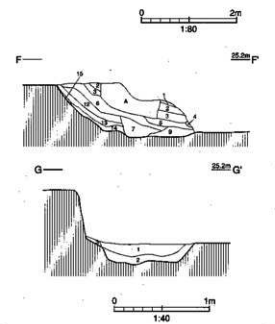
表24　A140遺物観察表　　（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(143)×(96)×37　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り 底部静止ヘラ削り	赤褐 良	緻密	口縁～ 底部	赤彩
2	須恵器 坏	－×－×42　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り　体部の一部にヘラ削りあり	灰 普	粗砂粒	口縁～ 底部	
3	土師器 小型甕	－×－×(122)　輪積み成形　輪積み痕あり 口縁～頸部ナデ　胴部上半　縦位のヘラ削り　下半斜位のヘラ削り	橙褐 普	普	口縁～ 胴部	
4	須恵器 壺	－×－×－ 頸部ナデ　胴部上半横位のタタキ 胴部内面タタキ調整時の指頭痕あり	灰 普	普	頸部～ 胴部	
5	石器 砥石	長軸(60)×短軸24×厚さ11　重量14.6g 全体に破損が著しく、3砥面のみ残存。 磨耗も著しいが、砥面は比較的粗い。			1/2	





1 層	暗褐色土	暗褐色土と多量の褐色土がほぼ均一に混じる
2 層	暗褐色土	暗褐色土と少量の褐色土がほぼ均一に混じる
3 層	暗褐色土	暗褐色土と少量の褐色土がほぼ均一に混じる
4 層	暗褐色土	暗褐色土と少量の褐色土がほぼ均一に混じる ロームの微粒が少量含
5 層	暗褐色土	暗褐色土主体の土
6 層	暗褐色土	褐色土と極少量の薄ったロームがほぼ均一に混じる 細かな炭の微粒が認められる
7 層	暗褐色土	消火層 褐色土や薄ったローム、褐色土が粗く混じる
8 層	暗黄褐色土	薄ったロームと少量の暗褐色土が混じる
9 層	暗褐色土	暗褐色土と多量の褐色土が混じる
10 層	暗褐色土	暗褐色土主体の土
11 層	暗褐色土	暗褐色土と少量の褐色土が混じる
12 層	暗褐色土	暗褐色土主体の土
13 層	暗褐色土	暗褐色土主体の土



A	黒褐色土主体	白色粘土粒、白色粘土粒、焼土粒を少含
1 層	黒褐色土	白色粘土粒を微量含
2 層	黒褐色土	白色粘土粒を少量、焼土粒を微量含
3 層	黒褐色土	基本的に2層と同じだが白色粘土粒が2層よりやや少
4 層	灰白色土	白色粘土ブロック
5 層	黒褐色土	基本的に3層と同じだが炭化粒微量含
6 層	灰褐色土	白色粘土と黒褐色土と少量の焼土が混じる
7 層	黒褐色土	黒褐色土に白色粘土と焼土が少量混じる。焼土粒少含
8 層	黒色土	白色粘土粒と焼土粒を微量含
9 層	黒色土	焼土粒を少量、ローム粒を微量含
10 層	黒褐色土	黒褐色土に白色粘土も少量混じる。ローム粒少量混合
11 層	暗赤褐色土	黒褐色土に多量の焼土が混じる。白色粘土も少量混じる
12 層	黒褐色土	黒褐色土に白色粘土と加熱によりパサパサ化したローム が少量混じる
13 層	黒褐色土	黒褐色土に火熱によりパサパサ化したロームが少量混じる 白色粘土粒及び焼土粒を微量含
14 層	暗灰褐色土	黒褐色土に白色粘土が少量混じる。焼土粒少量含
15 層	暗黄褐色土	火熱によりパサパサ化して崩れたロームの層に黒色土 が少量混じる

1 層	黒色土	炭化粒、焼土粒、白色粘土粒多含
2 層	暗褐色土	ローム粒及び径5～30mm大のロームブロック多含
3 層	暗褐色土	ローム粒少含

図79 A141a・b

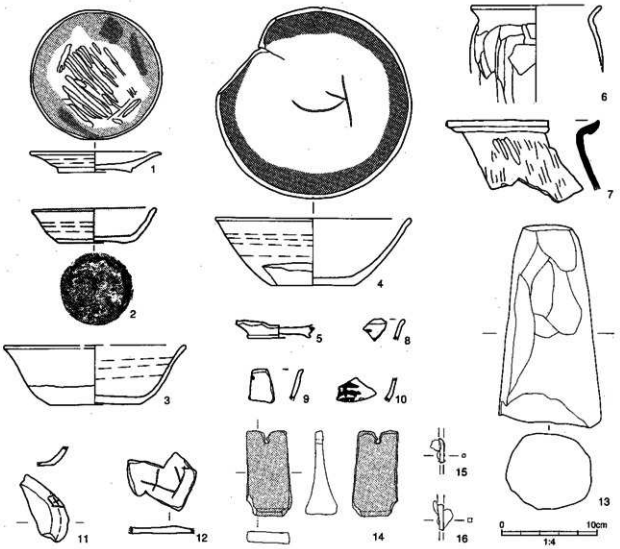


図80　A141a・b（2）

表25　A141a.b遺物観察表　（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高台付皿	138×77×22　ロクロ成形　底部回転ヘラ切り 体部内面に丁寧な磨きを施す　体部内面周囲にスス付着 灯明皿として使用か？	褐 普	普	完形	
2	土師器 坏	129×71×36　ロクロ成形　底部回転糸切りの後周辺ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	褐 普	普	完形	
3	土師器 坏	190×92×63　ロクロ成形　体部下端ヘラ削り	淡褐 普	普	1/4	
4	土師器 鉢	206×88×71　ロクロ成形　底部静止ヘラ削り　体部下端ヘラ削り 内面は丁寧な磨きを施す　内面スス付着	赤褐 普	普	略完形	線刻「万」 底部内面
5	土師器 高台付皿	ー×66×ー　ロクロ成形　底部回転糸切り 底部内面は丁寧な磨きを施す	淡褐 普	普	底部片	

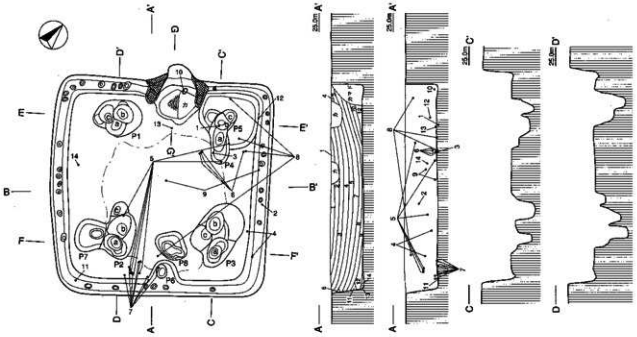
No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
6	土師器 小型甕	(136)×－×(102)　ロクロ成形 口縁～頸部ナデ　胴部縦位のヘラ削り	褐 普	普	口縁～ 胴部	
7	須恵器 甕	－×－×－ 口縁～頸部ナデ　胴部タタキ	淡灰 普	普	口縁片	
8	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	褐 普	普	口縁片	墨書「□」 体部外面
9	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	褐 普	普	口縁片	墨書「□」 体部外面
10	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	褐 普	普	体部片	墨書「□」 体部外面
11	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形　体部下端ヘラ削り	褐 普	普	底部片	線刻「□」 底部外面
12	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形　底部回転ヘラ切り	褐 普	普	底部片	線刻「□」 底部外面
13	土製品 支脚	上部径51×底部径106×高さ214　重量1085g 断面楕円形	赤褐 悪	粗	略完形	
14	石器 砥石	長軸91×短軸47×厚さ13　重量121.3g 体部が擬状に広がる４砥面。上部に孔を持ち、携帯用とも考えられる。 両面は特に滑らかである。			略完形	
15	鉄器 角釘	長さ(26)×幅4×厚さ3.5　重量2.6g			断片	鉄鏃茎か？
16	鉄器 角釘	長さ(26.5)×幅5×厚さ4　重量5.5g			断片	

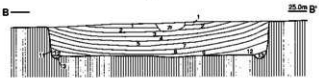
A142

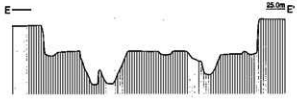
検出地区　　L7-14-3g、L7-24-1・2gにて検出した。

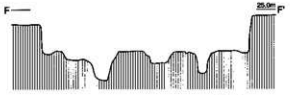
遺　　構　　長軸4.60m×短軸4.58m×壁高0.56m、主軸方位はN-38°-Wを示している。平面形は隅丸方形である。床はハードロームに暗褐色土が混合したものであり、主柱穴間の住居跡中央の床には硬化面が残されていた。床面には若干の粘土が散布している。主柱穴はP1～P4であり、覆土に粘土と焼土を含む黒褐色土であった。壁柱穴は周溝内に31基を確認した。また、主柱穴の改替が著しい住居跡である。P6・P8は出入口施設に伴うピットであるが、本ピットとも改替の著しいものである。周溝は竈袖下まで巡り、住居を全周するものである。竈は北西壁中央に設けられており、壁を掘込んで煙道部としている。竈袖は白色粘土が主体であり、袖の内壁は部分的に赤化していた。竈ピットは斜めに立ち上がる浅い掘込みで、そのピット内で検出された火床は強く赤化していた。煙道は竈ピットからの立ち上がる部分にテラスがあり、そこは赤化はしないが、火熱痕が残っていた。住居跡西コーナーは軟弱であり、ロームを多く含む床であった。

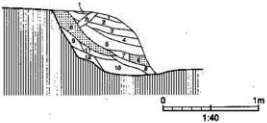
覆土は、包含物として全体的にロームが少なく、下層は暗褐色土を、中層は黒褐色土を、上層は黒色土をそれぞれ主体とした自然堆積であった。











1 層　黒色土　黒色土と少量の暗褐色土がほぼ均一に混じる
2 層　黒色土　黒色土と極少量の暗褐色土がほぼ均一に混じる
3 層　黒色土　部分的に滲むように暗褐色土が少量混じる
4 層　黒色土　黒色土と黄土の暗褐色土がほぼ均一に混じる
5 層　黒褐色土　暗褐色土が若干滲むように含
6 層　暗黄褐色土　湧ったロームと暗褐色土が混じる
7 層　黒褐色土　黒褐色土と極少量の暗褐色土がほぼ均一に混じる
8 層　暗褐色土　少量の褐色土が滲むように混じる。ローム微粒少量含
9 層　暗褐色土　ローム微粒少量含
10 層　暗灰褐色土　暗褐色土と湧った白色粘土がほぼ均一に混じる
11 層　暗黄褐色土　湧ったロームと暗褐色土が混じる
12 層　暗褐色土　暗褐色土主体の土
13 層　暗黄褐色土　湧ったロームと多量の暗褐色土が混じる
14 層　暗黄褐色土　湧ったロームが主体

0　2m
1:80

1 層　黒色土　ローム粒、白色粘土を少含
2 層　黒褐色土　黒褐色土に白色粘土が少量混じる
　　ローム粒及び焼土粒を微量含
3 層　黒褐色土　白色粘土粒、焼土粒少含
4 層　黒褐色土　白色粘土粒、焼土粒微量含
5 層　黒褐色土　白色粘土粒、焼土粒少含
6 層　灰白色土　白色粘土主体　黒褐色土が微量に混じる。焼土粒微量含
7 層　暗灰褐色土　黒褐色土と白色粘土が混じる。焼土粒多含
8 層　黒褐色土　焼土粒多含。白色粘土粒少含
9 層　黒色土　白色粘土粒、焼土粒少含
10 層　暗赤褐色土　黒褐色土と焼土が混じる
11 層　暗灰褐色土　黒褐色土に白色粘土、焼土が少量混じる
12 層　黒色土　黒色土にローム が少量混じる。焼土粒少含

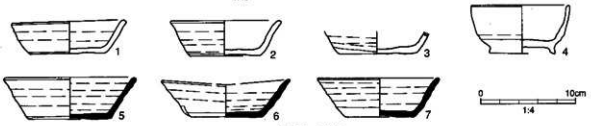


図81　A142

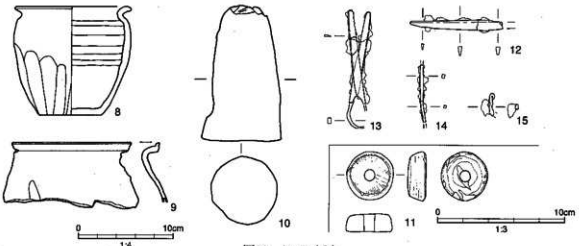


図82　A142（2）

遺　　物　　本住居の出土遺物は土師器を主体として、その出土量は多かった。竈ピットから煙道部立ち上がり部において10の支脚が出土しており、11は南コーナーの周溝上の床と同じ高さから置かれた様な状態で出土している。3はやはり床面に置かれた様な状態で正置で出土していた。

所　　見　　拡張した住居跡と思われたが、竈が1基のみであり、周溝も1条であることから柱穴位置の改替を行った竪穴住居跡と捉えた。最低2回の改替を行っているが、3回であったかもしれない。柱穴覆土から各柱穴を組み合わせると、各柱穴のbが古く、aが新しいものである。cについての新旧関係は捉えられなかったが、各 cも主柱穴として利用されており、3度の柱穴の改替が行われたことが窺われる。また、どの主柱穴に伴うかは明確であるが、出入口施設に伴うP6・P8も改替があり、P6が古くP8が新しいピットであった。

表26　A142遺物観察表　　（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	120×75×35　ロクロ成形　底部ヘラ削り　体部直線的に立ち上がる 体部下端ヘラ削り	㊥褐 ㊦赤褐 普	普	完形	
2	土師器 坏	116×73×37　ロクロ成形　底部回転ヘラ切り　体部直線的に立ち上がる　体部下端ヘラ切り	褐 普	普	完形	
3	土師器 坏	－×80×(24)　ロクロ成形　底部回転ヘラ切り　体部下端ヘラ削り	淡褐 普	普	底部片	
4	土師器 高台付坏	104×70×51　ロクロ成形　体部が直線的に立ち上がる	㊥橙褐 ㊦淡褐 普	普	完形	
5	須恵器 坏	139×85×44　ロクロ成形　底部静止ヘラ削り　体部下端ヘラ削り	青灰 普	普 白色砂粒 若干	完形	
6	須恵器 坏	134×77×39　ロクロ成形　底部静止ヘラ削り　体部下端ヘラ削り	灰 普	普 白色砂粒 若干	略完形	
7	須恵器 坏	128×72×41　ロクロ成形　底部静止ヘラ削り　体部下端ヘラ削り	灰 普	普	略完形	
8	土師器 小型甕	124×65×115　ロクロ成形 口縁～頸部ナデ　胴部縦位のヘラ削り	赤褐 普	普	4/5	

No.	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
9	土師器 甕	－×－×(63)　口唇つまみ上げ（常総型）	褐 普	普	口縁片	
10	土製品 支脚	－×84×(143)　重量690g　断面楕円形	褐 悪	粗	略完形	
11	石器 紡錘車	上部径30×底部径36×高さ15　孔径9　重量34.5g 厚手の作りであり、断面は台形状に近い。 全体に使用痕は顕著であり、周縁部では破損も目立つ。			完形	
12	鉄器 刀子	長さ(97)×幅10×厚さ4　重量11.5g			刃部	
13	鉄器 鉄	長さ(125)×刃部幅7×厚さ2　重量23g 把手部幅3×厚さ6			略完形	
14	鉄器 角釘	長さ(61)×幅4×厚さ3　重量3g			断片	鉄鏃茎？
15	鉄器 不明	長さ(24)×幅3×厚さ5　重量3.1g			断片	基部屈曲

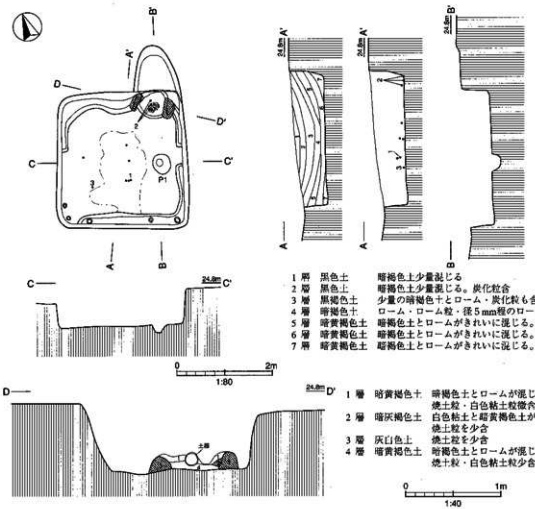


図83　A143

A143

検出地区　M7-16-1･2･3gにて検出した。台地の斜面部に立地する。

遺　構　長軸2.91m×短軸2.71m×壁高0.37m、主軸方位はN-30°-Eを示している。平面形は隅丸方形の竪穴住居跡である。床は硬化するまでは至らず、特に住居跡中央部の床はやや軟弱であった。床面からピットが1基検出されているが、主柱穴は不明であった。壁柱穴は、竈と対面する南壁下の周溝内等に5基確認した。周溝は、竈周辺や南壁では掘込まれているが断続的であった。竈は、北壁の西コーナーに設けられている。煙道部のための壁への掘込みは認められず、住居内に築かれた竈のようである。竈袖は白色粘土のみを使用してほぼ中央に火床が残されていた。竈右袖がつく壁は、住居跡掘込み面より下がったテラス状のロームの面となっており、竈袖と同じ高さとなっていた。なお、竈上には浅い長楕円形の掘込みが認められた。

覆土はロームと暗褐色土が混合したものであり、色調として大きく3つに分層される。1・2層の黒色土、3・4層の黒褐色土、5～7層の暗褐色土であるが、更に包含物などにより細分して捉えることができた。

遺　物　覆土下層より若干の出土をみる程度の住居跡であった。2は竈火床上に傾いて出土した。縄文時代早期の撚糸文系及び条痕文系土器も出土している。

所　見　西壁側が主面部を向いた住居跡である。竈右袖のロームを掘込んだテラス状の部分と、壁上の煙道方向のピットについては新旧関係を含め捉えられなかった。

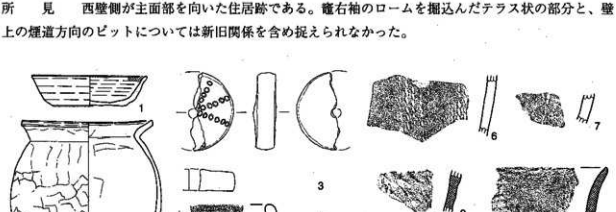


図84　A143（2）

表27　A143遺物観察表　（単位mm）

No.	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	122×78×33　ロクロ成形　全体内外面ナデ 底部静止糸切り後ヘラ削り　体部下端に稜をもち直線的に立ち上がる	橙褐 良	砂粒含	完形	口縁にススおよびタール状付着物
2	土師器 小型甕	138×77×165　口縁やや受け口状　上端部立ち上がる　口縁～頸部ナデ 頸部「く」の字状　胴上半縦ヘラ削り　胴下半～下端横ヘラ削り	暗茶褐 普	粗砂粒含	完形	内外面ススの付着
3	土製品 紡錘車	上部径(57)×底部径(58)×器厚17×孔径(5～7) 円柱形　削り後丁寧にナデ調整され器形を整えられる　上部には中心の孔より放射状に竹管状の工具により刺突列が施される　残存4列	暗褐 普	砂粒含	1/2	

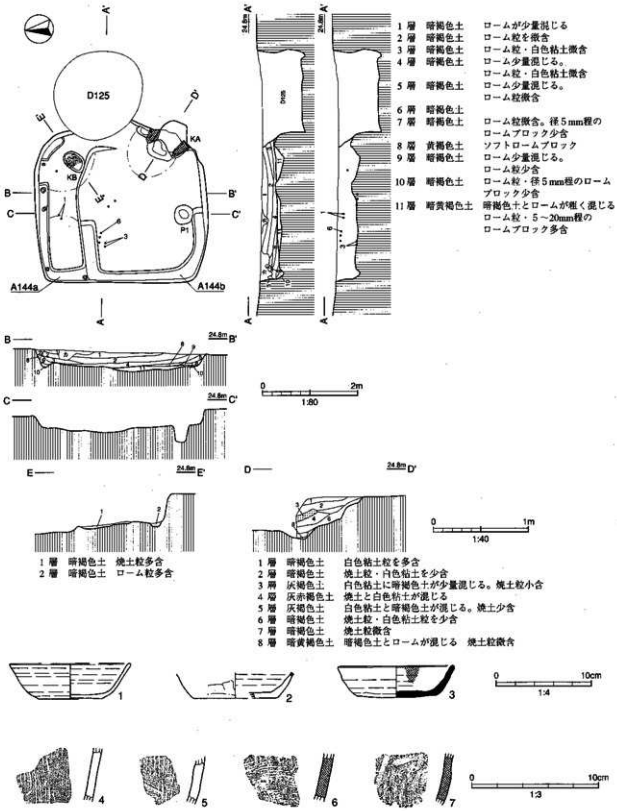

D125
KA
KB
P1
A144a
A144b
1 層　暗褐色土　ロームが少量混じる
2 層　暗褐色土　ローム粒を微含
3 層　暗褐色土　ローム粒・白色粘土微含
4 層　暗褐色土　ローム少量混じる。
ローム粒・白色粘土微含
5 層　暗褐色土　ローム少量混じる。
ローム粒微含
6 層　暗褐色土
7 層　暗褐色土　ローム粒微含。径5mm程の
ロームブロック少含
8 層　黄褐色土　ソフトロームブロック
9 層　暗褐色土　ローム少量混じる。
ローム粒少含
10 層　暗褐色土　ローム粒・径5mm程のローム
ブロック少含
11 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが粗く混じる
ローム粒・5～20mm程の
ロームブロック多含
24.8m
0　2m
1:80
0　1m
1:40
1 層　暗褐色土　焼土粒多含
2 層　暗褐色土　ローム粒多含
1 層　暗褐色土　白色粘土粒を多含
2 層　暗褐色土　焼土粒・白色粘土を少含
3 層　灰褐色土　白色粘土に暗褐色土が少量混じる。焼土粒小含
4 層　灰赤褐色土　焼土と白色粘土が混じる
5 層　灰褐色土　白色粘土と暗褐色土が混じる。焼土少含
6 層　暗褐色土　焼土粒・白色粘土粒を少含
7 層　暗褐色土　焼土粒微含
8 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが混じる　焼土粒微含
0　10cm
1:4
0　10cm
1:3

図85　A144a・b

A144a・b

検出地区　M6-95-3・4gにて検出した。

遺　構　2軒の住居跡の重複であり、竈2基は新しい住居跡に伴い改替したものである。

A144aは、長軸3.61m×短軸3.23m×壁高0.31m、竈KAの主軸方位はN-127°-Eを示しており、竈KBの主軸方位はN-39°-Eを示している。床はハードローム掘り込んだものであるが、覆土は硬化するまでには至っていなかった。特にA144bとの重複部は、貼床であり凹凸が著しい軟弱な床であった。柱穴は検出されなかったが、壁柱穴5基が周溝内等に確認された。周溝は住居跡中央から東壁に巡っていたが、南壁側はA144bと重複し不明瞭となっている。

竈は2基検出した。KAは南東コーナーに設けられ、竈袖は粘土を主体として積み上げられ、右袖の基礎は粘土を積み上げる土台としてロームを残していた。竈焚き口にピットが掘込まれているが、火床は検出されなかった。煙道部は壁を幅広く掘込んでいた。覆土は褐色土を主体とした自然堆積であった。KBは北東コーナーに設けられ、竈ピットと坑底に残された火床のみの検出であった。遺存状況からKBが古く、KAが新しいものと捉えた。

A144bは、長軸(2.90)m×短軸(2.72)m×壁高0.35m、長軸方位はN-39°-Eを示している。平面形は隅丸方形と想定されるが、A144aと重複のため不明瞭でもある。床はハードロームを掘込んで入るが、凹凸が著しいもので、A144aにより損壊している。主柱穴は検出できず、壁柱穴も確認できなかった。周溝は、やはり重複のため不明瞭であるが、東壁と南壁にのみ認められた。P1はA144bの出入口施設に伴うピットと捉えた。覆土は、A144aのため失われており不明である。11層はA144aの貼床となっていた。

遺　物　A144aは、住居跡中央から北側にて若干出土し、南側からの出土は認められなかった。また、A144bは11層中以下から出土したものを捉えた。

所　見　A144bは不明瞭な住居跡であるが、周溝の遺存及び覆土等からA144aとの2軒の重複と捉えた。11層を貼床と捉え、A144aによって、A144bの覆土及び床面が失われたものと捉えている。

表28　A144a・b遺物観察表　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(127)×66×38　ロクロ成形　底部回転糸切り後ヘラ削り 口縁～体部下半ナデ　体部下半ヘラ削り	橙褐 普	砂粒 雲母含	1/3	
2	土師器 坏	―×(90)×(28)　ロクロ成形　体部下半ナデ　体部下端・底部ヘラ削り	橙褐～ 灰茶褐 普	粗砂粒 雲母含	体部～ 底部	
3	須恵器 坏	122×84×34　ロクロ成形　底部回転糸切り後ヘラ削り　体部直線的に 立ち上がる　口縁やや外反　底部が大きく器高低め	青灰 普	粗砂粒 小石含	2/3	口縁内面 タール状付着物

A145

検出地区　M6-93-3・4gにて検出した。

遺　構　長軸4.18m×短軸4.06m×壁高0.68m、主軸方位はN-10°-Wを示している。平面形はほぼ正方形である。床はハードロームの地床でよく踏み固められた床ではあるが、竈前から主柱穴間は損壊した床面であり、周辺に比べてやや凹んだものとなっている。主柱穴はP1～P4であり、壁柱穴は周溝内に33基確認された。P5は出入口施設に伴うピットである。周溝は竈袖下まで巡り、住居に対して全周するものである。ただ、北西コーナーから西壁の中間まで二重となっていた。竈は北壁中央に設けられており、壁を掘込んで煙道部をつくっていた。竈袖は白色粘土が主体であり、袖内壁は赤化していた。浅い坑底

に凹凸ある竈ピット内に赤色硬化した火床が検出された。煙道部にも若干、火熱痕を残していた。また、住居跡中央のやや西壁寄りに、黒色土と混合した焼土が認められた。

覆土は下層から中層は暗褐色土主体であり、上層の1～3層は黒色土主体の、自然堆積による覆土であった。

遺　　物　覆土中層から下層に多く、上層には少ない傾向が認められた。特に3層は遺物の出土が少なく、覆土中の遺物出土の境界層となっていた。しかし住居規模からすると、少ない遺物出土である。

所　　見　本地区の竪穴住居跡としては正方形に近い形状を示す、例のない遺構であった。また、P6は主柱穴とは捉えきれなかった。

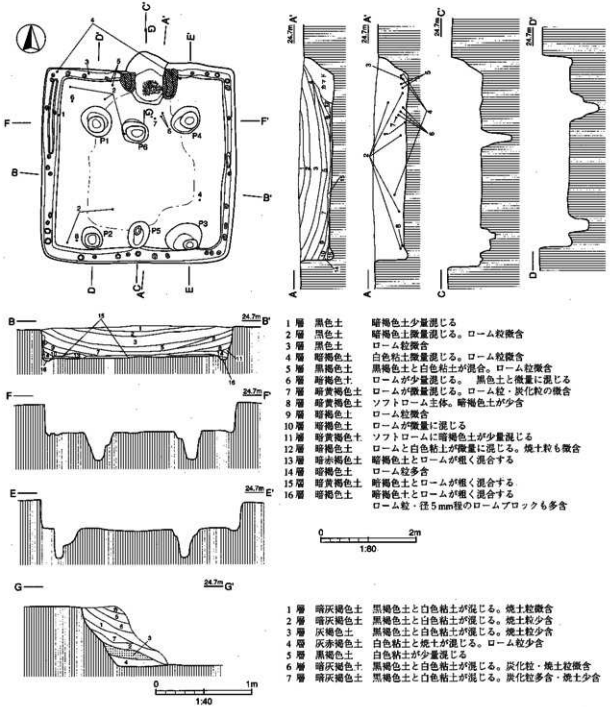


図86　A145

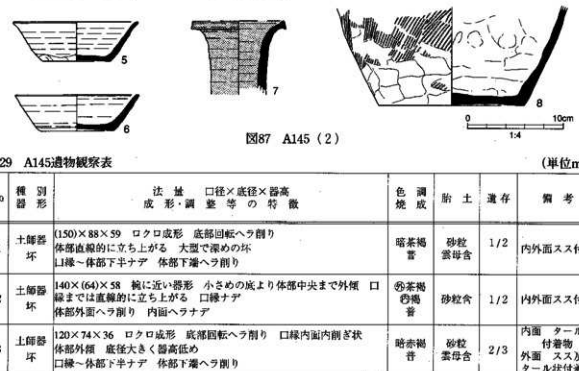


図87　A145（2）

表29　A145遺物観察表　　（単位mm）

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(150)×88×59　ロクロ成形　底部回転ヘラ削り 体部直線的に立ち上がる　大型で深めの坏 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	暗茶褐 普	砂粒 雲母含	1/2	内外面スス付着
2	土師器 坏	140×(64)×58　椀に近い器形　小さめの底より体部中央まで外傾　口縁までは直線的に立ち上がる　口縁ナデ 体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ	㊙茶褐 ㊐褐 普	砂粒含	1/2	内外面スス付着
3	土師器 坏	120×74×36　ロクロ成形　底部回転ヘラ削り　口縁内面内側ぎ状 体部外傾　底径大きく器高低め 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	暗赤褐 普	砂粒 雲母含	2/3	内面　タール状付着物 外面　スス及びタール状付着物
4	土師器 坏	126×74×41　ロクロ成形　底部回転糸切り後外周ヘラ削り　口縁外反 体部下端丸みを帯びつつ直線的に立ち上がる 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	㊙橙褐 ㊐褐 普	砂粒含	略完形	内外面スス付着
5	須恵器 坏	132×72×42　ロクロ成形　底部ヘラ削り　体部外傾　口縁外反 底部小さめ　器高高い 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	灰白 堅	粗砂粒 小石 雲母含	2/3	
6	須恵器 坏	130×76×38　ロクロ成形　底部ヘラ削り　口縁やや外反　体部外傾 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	灰茶褐 黒	小石 粗砂粒 多含	2/3	
7	須恵器 長頸壺	(100)×－×(78)　ロクロ成形　口縁外反	灰色かかった紫？ 良	砂粒 小石含	口縁～頸部片	内外面自然釉
8	須恵器 甕	－×(154)×(105)　輪積み 胴部下半タタキ　内面ナデ　一部指頭圧痕 胴部下端ヘラ削り	灰褐 黒	小石 粗砂粒 雲母含	胴部～底部片	

A148

検出地区　　M7-33-2g、M7-34-1gにて検出した。

遺　　構　　長軸3.20m×短軸2.51m×壁高0.51m、主軸方位はN-35°-Eを示している。横軸が長軸となる、やや幅広な竪穴住居跡である。

床はソフトロームが踏み固められた地床で、住居跡中央から南西壁出入口部まで硬化していた。床にはピットが1基検出したが、主柱穴は検出されず、周溝内に壁柱穴を14基確認しただけである。P1は出入口施設に伴うものである。周溝は竈袖下まで巡っており、全周する。竈は北東壁の中央よりやや東側に設けられ、壁をやや大きく掘込んで煙道部としていた。僅かに残る竈の袖は粘土主体で築かれ、袖内壁は赤化していた。竈ピットは無く、火床も検出できなかった。覆土は、黒色土を主体とした自然堆積である。

遺　物　出土遺物は少なかった。3は床面にてやや傾いて出土した。1は壁際で床よりやや浮いて、伏せた状態で出土している。2も床よりやや浮いて、正置の状態で出土している。

所　見　竈が攪乱を被るため、遺物の出土は殆どなく、竈全体も捉えることもできなかった。

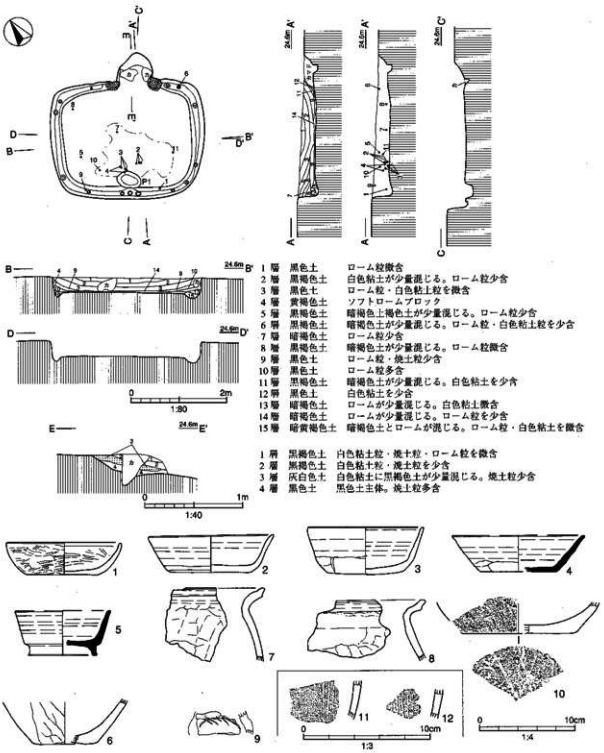


図88　A148

表30　A148遺物観察表　　（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	121×64×34　口縁内湾　体部下半まで外傾し丸みを帯びつつ立上がる 口縁ナデ　底部・体部ヘラ削り後ヘラ磨き　内面　ナデ後ヘラ磨き	㊙橙褐 ㊙褐 良	砂粒含	2/3	外面スス付着
2	土師器 坏	132×84×40　ロクロ成形　底部回転ヘラ削り　口縁やや外反 体部外傾　口縁～体部下半内外面ナデ　体部下端ヘラ削り	橙褐 悪	砂粒 赤色粒含	完形	
3	土師器 坏	122×80×50　ロクロ成形　底部回転ヘラ削り 体部下半外傾し、上部で弱く丸みを帯びつつ立ち上がる　器厚深い 口縁～体部下半内外面ナデ　体部下端ヘラ削り	橙褐 普	粗砂粒 赤色粒含	略完形	
4	須恵器 坏	(140)×(80)×(39)　ロクロ成形　底部ヘラ削り　体部外傾 口縁～体部下半内外面ナデ　体部下端ヘラ削り	灰褐 悪	粗砂粒 雲母多含	1/3	
5	須恵器 高台付坏	(100)×台形部(72)×48　ロクロ成形　底部回転ヘラ削り 口縁やや外反　体部傾き少ない　高台部下端でわずかに外反 内外面ナデ	黒灰褐 普	砂粒含	1/4	
6	土師器 甕	―×70×(47)　底部木葉痕 胴部下半～下端ヘラ削り　内面器面剥離のため調整不明	暗褐 悪	砂粒含	胴部～ 底部片	外面スス付着
7	土師器 甕	(192)×―×(79)　口縁外反　端部つまみ上げられる 頸部「く」の字状　常総型　口縁～頸部ナデ　胴部上半ヘラ削り 内面　頸部ヘラ削り　胴部上半ヘラナデ	暗褐 普	砂粒 多含	口縁片	外面少量スス付着 内面スス付着
8	土師器 甕	―×―×(66)　口縁外反　口唇つまみ上げる 頸部「く」の字状　口縁～頸部ナデ　頸部～胴上半ヘラ削り 内面　ヘラナデ	暗褐 普	砂粒含	口縁片	
9	土製品 不明	―×―×(25)　重量16.4g　一部が残存しているだけであり全体の形状などは明らかではないが小型の手捏ね上器の胴部破片の可能性も考えられる。横走・斜行沈線や指頭圧痕などが認められる	淡褐 普	砂粒含	断片	
10	土師器 甕	―×(90)×(25)　底部木葉痕 胴部ヘラ削り後ヘラ磨き　底部内面中央ヘラ削り	橙褐 普	粗砂粒 雲母含	胴部～ 底部片	

A149

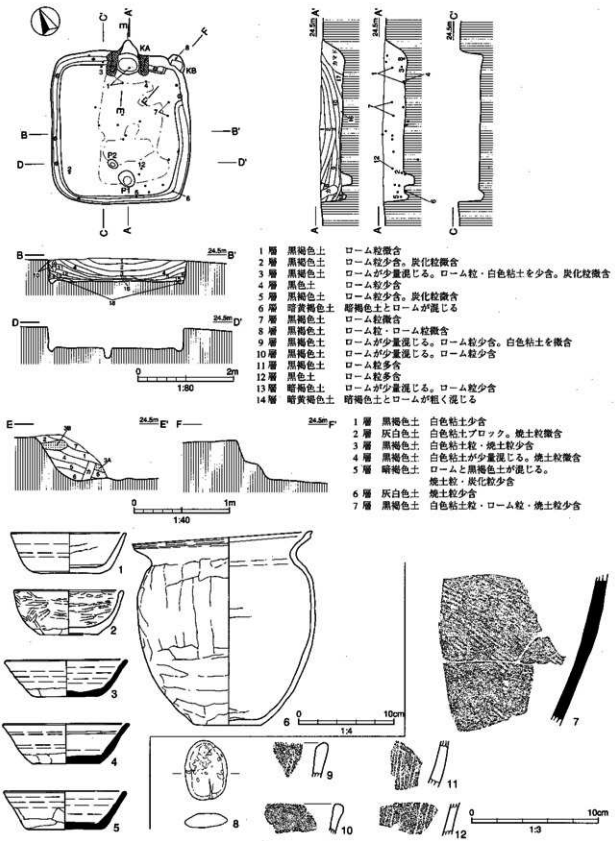
検出地区　　M7-33-1・2・3・4gにて検出した。

遺　　構　　長軸3.13m×短軸2.90m×壁高0.45m、主軸方位はN-26°-Wを示している。平面形は隅丸方形である。床はハードロームと黒褐色土が混合した貼床であるが、竈前から出入口かけての住居床面を縦断するように硬化面を残している。しかも出入口前は、極めて固く硬化していた。また、竈前の硬化面には、粘土粒子が散布していた。床面にはピットが3基検出されたが、主柱穴は不明である。壁柱穴は周溝内に8基確認されている。P1は出入口施設に伴うピットである。周溝は北東コーナーで一部途切れるが、竈袖下まで巡っている。竈は北東壁中央に設けられていた。竈袖は白色粘土のみで築かれており、竈袖の内壁は部分的に赤化していた。竈ピットは浅い掘込みであるが、ピット内には火床は検出されず、火熱痕も確認できなかった。また。壁を掘込んだ煙道部は、火熱を被った痕は捉えられたが、赤化することは無かった。北東コーナーの壁上に、テラス状の段が検出された。本住居跡に伴うものかは捉えられなかったが、被熱は認められなかった。

遺　　物　　全体的に出土遺物は少ないが、その中で覆土中層から床直上層に多く出土した。6は南コーナーの床面同レベルから正置で出土している

所　　見　　住居跡東コーナーに検出されたKBは、当初、竈と捉えていた。しかし火熱痕も確認でき

ず、竈ピット等も検出できなかったことから竈ではなく別途の遺構として捉えたが、階段状となるだけで不明瞭なものとなっている。



1 層　黒褐色土　ローム粒微含
2 層　黒褐色土　ローム粒少含。炭化粒微含
3 層　黒褐色土　ローム粒・白色粘土を少含。炭化粒微含
4 層　黒色土　ローム粒少含
5 層　黒褐色土　ローム粒少含。炭化粒微含
6 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが混じる
7 層　黒褐色土　ローム粒微含
8 層　黒褐色土　ローム粒・ローム粒微含
9 層　黒褐色土　ロームが少量混じる。ローム粒少含。白色粘土を微含
10 層　黒褐色土　ロームが少量混じる。ローム粒少含
11 層　黒褐色土　ローム粒多含
12 層　黒色土　ローム粒多含
13 層　暗褐色土　ロームが少量混じる。ローム粒少含
14 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが粗く混じる

1 層　黒褐色土　白色粘土少含
2 層　灰白色土　白色粘土ブロック。焼土粒微含
3 層　黒褐色土　白色粘土粒・焼土粒少含
4 層　黒褐色土　白色粘土が少量混じる。焼土粒微含
5 層　暗褐色土　ロームと黒褐色土が混じる。焼土粒・炭化粒少含
6 層　灰白色土　焼土粒少含
7 層　黒褐色土　白色粘土粒・ローム粒・焼土粒少含

図89　A149

表31　A149遺物観察表　　(単位mm)

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	122×70×43　ロクロ成形底部回転糸切り後外周ヘラ削り 体部直線的に開く　器高やや深い　口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り	赤褐 普	粗砂粒 多含	略完形	
2	土師器 坏	116×60×48　底部ヘラ削り　体部丸みを帯びつつ立ち上がる 坏というより椀に近い器形 内外面ナデ後ヘラ磨き　体部下端ヘラ削り	褐～ 暗赤褐 普	砂粒 雲母含	完形	内外面スス及び コゲ状付着物多
3	須恵器 坏	129×70×39　ロクロ成形　底部ヘラ削り　体部外傾しLl線開く 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	普	粗砂粒 小石多含	略完形	
4	須恵器 坏	134×72×42　ロクロ成形　底部ヘラ削り	灰褐 普	砂粒含	略完形	
5	須恵器 坏	129×80×40　ロクロ成形　底部回転ヘラ削り　体部直線的に外傾 口縁～体部下半ナデ　体部下半ヘラ削り	灰褐 普	砂粒含	完形	外面スス及び コゲ状付着物
6	土師器 甕	188×70×205　最大径胴上部(187)　口縁外反　外面凹線状の調整 頸部「く」の字状　胴部下端内面ナデ 口縁～頸部ナデ　胴部上半縦ヘラ削り　下半～下端横ヘラ削り	橙褐 普	砂粒含	略完形	
7	須恵器 甕	－×－×－　タタキ　内面ヘラナデ　一部に指頭厚痕	灰褐 普	小石 白色粒 多含	胴部片	
8	石器 石錘？	長軸47×短軸33×器厚11　重量28.8g 扁平な楕円形を呈する　長軸と短軸の一端に切り込みが認められるが、 対応する切り込みが認められず、切り込み痕跡も浅いことから石錘 としての機能を果たしたかは疑問が残る				

A150

検出位置　M7-22-2・4g、M7-23-1・3gにて検出した。

遺　構　長軸3.87m×短軸3.65m×壁高0.41m、主軸方位はN-7°-Eを示している。平面形は隅丸方形である。床はハードロームに暗褐色土が少量混合したものであり、全体的に踏み固められた床であった。竈前から出入口にかけて硬化面を検出し、特にP1の西側の床面硬化は著しかった。主柱穴は検出されなかったが、周溝内に20基の壁柱穴を確認した。P1は出入口施設に伴うピットである。周溝は、竈の右袖脇から巡り始め、竈左袖下まで住居跡壁下をほぼ全周している。竈は北壁の中央に設けられており、残存する竈袖は粘土に黒色土を混ぜたような材で積み上げていた。竈袖の内壁は部分的に赤化していた。壁を掘込んで煙道部としているが、火熱痕は認められなかった。竈内に掘込んだ竈ピットは緩やかな傾斜をもって坑底となっているが、坑底には火床は検出されなかった。

覆土は、下層の暗褐色土と上層の黒色土と、大きく色調によって二分されるが、包含物等によって分層した。自然堆積であった。

遺　物　本地区の竪穴住居跡としては、比較的に出土遺物が多い遺構である。床面出土の遺物としては8があり、2・15は竈内の出土である。破片を含む土師器坏4点と12の土師器甑が火床と思われる位置から少し浮いて、逆さに重ねた状態で出土している。輪羽口破片は床面から出土している。

所　見　竈内に重ねられた土師器坏の4点と土師器甑は、竈の支脚としての利用と考えられるものであった。また、竈の火床が失われていることは、竈内に堆積した灰砂等の掻き出しが行われ、赤化した火床が損壊したとも思える。

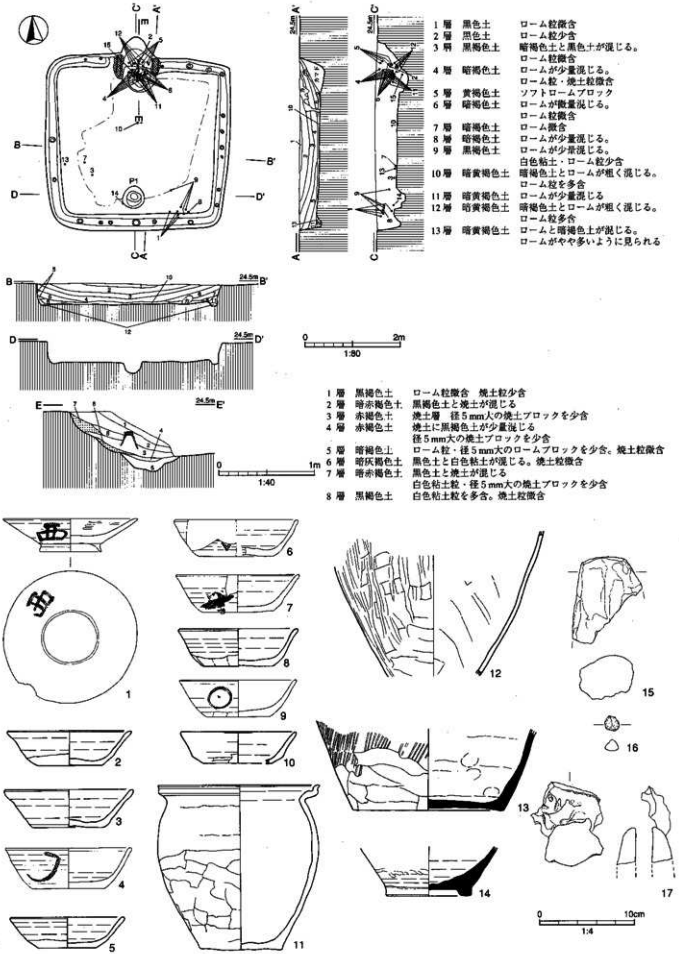
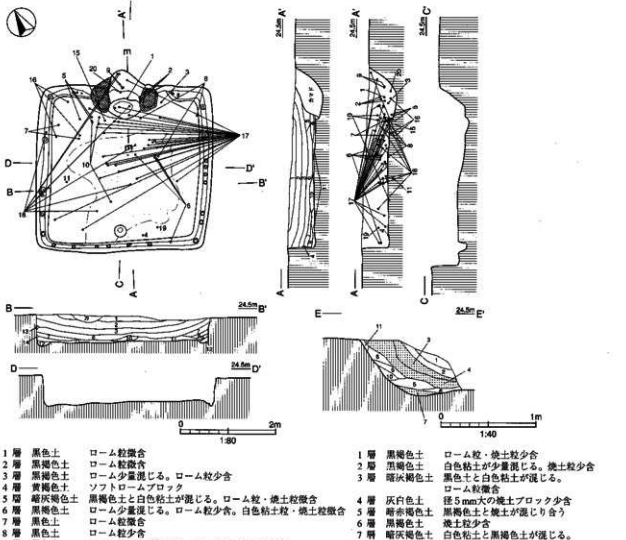

1 層　黒色土　ローム粒微含
2 層　黒色土　ローム粒少含
3 層　黒褐色土　暗褐色土と黒色土が混じる。ローム粒微含
4 層　暗褐色土　ロームが少量混じる。ローム粒・焼土粒微含
5 層　黄褐色土　ソフトロームブロック
6 層　暗褐色土　ロームが微量混じる。ローム粒微含
7 層　暗褐色土　ローム微含
8 層　暗褐色土　ロームが少量混じる。
9 層　黒褐色土　ロームが少量混じる。白色粘土・ローム粒少含
10 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが粗く混じる。ローム粒を多含
11 層　暗黄褐色土　ロームが少量混じる
12 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが粗く混じる。ローム粒多含
13 層　暗黄褐色土　ロームと暗褐色土が混じる。ロームがやや多いように見られる
1 層　黒褐色土　ローム粒微含　焼土粒少含
2 層　暗赤褐色土　黒褐色土と焼土が混じる
3 層　赤褐色土　焼土層　径5mm大の焼土ブロックを少含
4 層　赤褐色土　焼土に黒褐色土が少量混じる　径5mm大の焼土ブロックを少含
5 層　暗褐色土　ローム粒・径5mm大のロームブロックを少含。焼土粒微含
6 層　暗灰褐色土　黒色土と白色粘土が混じる。焼土粒微含
7 層　暗赤褐色土　黒色土と焼土が混じる　白色粘土粒・径5mm大の焼土ブロックを少含
8 層　黒褐色土　白色粘土粒を多含。焼土粒微含
0　2m　1:80
0　1m　1:40
0　10cm　1:4

図90　A150

表32　A150遺物観察表　　（単位mm）

No.	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高台付皿	140×高台径64×35　ロクロ成形　底部回転糸切り後周縁ヘラ削り 高台部やや外に開く　内面ナデ後疎らにヘラ磨き 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	橙褐 普	砂粒 雲母含	完形	墨書 体部外面「西」 体部内面「西」
2	土師器 坏	130×68×37　ロクロ成形　底部回転糸切り後周縁ヘラ削り 口縁外反　口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	明赤褐 普	粗砂粒含	完形	
3	土師器 坏	134×74×41　ロクロ成形　底部ヘラ削り　口縁やや内弯　体部直線的 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	褐～橙褐 悪	粗砂粒含	略完形	器面の剥離多 （被熱のため）
4	土師器 坏	132×75×43　ロクロ成形　底部回転糸切り後周縁ヘラ削り　口縁外反 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	褐～橙褐 普	砂粒 雲母含	略完形	墨書「　」 体部外面
5	土師器 坏	120×60×33　ロクロ成形　底部回転糸切り後周縁ヘラ削り 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	橙褐 普	砂粒 微色粒	略完形	
6	土師器 坏	130×76×39　ロクロ成形　底部回転糸切り後周縁ヘラ削り　体部外傾 底部広い　口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	橙褐 普	砂粒 雲母 赤色粒	略完形	墨書「□」 体部外面
7	土師器 坏	130×74×40　ロクロ成形　底部回転糸切り後周縁ヘラ削り　口縁外反 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	暗橙褐 普	砂粒 雲母含	略完形	墨書「□□」 体部外面
8	土師器 坏	(124)×72×40　ロクロ成形　底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 口縁外反　口縁～体部下半ナデ　体部下端手持ちヘラ削り	褐 普	砂粒 雲母 赤色粒含	1/2	
9	土師器 坏	(122)×64×39　ロクロ成形　底部回転糸切り後周縁ヘラ削り 部分的に手持ちヘラ削り　体部直線的に傾く 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り　部分的に手持ちヘラ削り	褐 普	粗砂粒 多含	1/2	墨書「□」 体部外面
10	土師器 坏	(120)×(70)×34　ロクロ成形　底部回転糸切り 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	普	砂粒 雲母含	口縁～ 底部片	
11	土師器 小型甕	168×85×176　最大径胴上半168　頸部「く」の字状　口縁外反 内面に屈曲を作る　外面凹線状に調整 口縁～頸部ナデ　胴部上半～下端ヘラ削り	暗茶褐 悪	粗砂粒 小石多含	略完形	
12	土師器 甕	－×－×(154) 胴部下半～下端ヘラ削り後粗いヘラ磨き　内面ナデ	明橙褐 普	粗砂粒 小石多含	胴部片	
13	須恵器 甕	－×156×(95)　輪積み 胴部下半タタキ　内面ヘラナデ 胴部下端ヘラ削り　内面一部指頭圧痕	暗灰茶褐 悪	砂粒 白色粒含	胴部片	
14	須恵器 長頸壺	－×(90)×52　ロクロ成形　底部回転糸切り 高台部浅く台部下面内傾	灰褐 良	白色粒含	胴部～ 底部片	内面高台部・内面一部に自然釉
15	土製品 支脚	長軸(90)×短軸(66)×器厚(44) 円錐形を呈すると思われる　頂部平坦 外面　面取り状に削り調整される	褐 普	砂粒多含	1/4	
16	石器 砥石	長軸16×短軸15×器厚12　重量1.7g 断面三角状を呈する　磨耗痕が見られる			小片	砥石？
17	鏃羽口	長さ(47)×最大幅(59)×孔径18 表面　鉄分付着し、鉄滓も付着する		砂粒含	先端部	



1 層　黒色土　　ローム粒微含
2 層　黒褐色土　　ローム粒微含
3 層　黒褐色土　　ローム少量混じる。ローム粒少含
4 層　黄褐色土　　ソフトロームブロック
5 層　暗灰褐色土　黒褐色土と白色粘土が混じる。ローム粒・焼土粒微含
6 層　黒褐色土　　ローム少量混じる。ローム粒少含。白色粘土粒・焼土粒微含
7 層　黒色土　　ローム粒微含
8 層　黒色土　　ローム粒少含
9 層　黒色土　　ローム粒が少量混じる。ローム粒・焼土粒微含
10 層　暗赤褐色土　黒色土と焼土が混じる。ローム粒微含
　　径5～10mmの焼土ブロック少含
11 層　黒色土　　ロームと焼土少量が混じる。焼土粒・ローム粒少含
12 層　暗褐色土　　ロームと黒色土が混じる。ローム粒微含
13 層　黄褐色土　　ソフトロームブロック
14 層　黄褐色土　　ソフトロームブロック

1 層　黒褐色土　　ローム粒・焼土粒少含
2 層　黒褐色土　　白色粘土が少量混じる。焼土粒少含
3 層　暗灰褐色土　黒色土と白色粘土が混じる。
　　ローム粒微含
4 層　灰白色土　　径5mm大の焼土ブロック少含
5 層　暗赤褐色土　黒褐色土と焼土が混じり合う
6 層　黒褐色土　　焼土粒少含
7 層　暗灰褐色土　白色粘土と黒褐色土が混じる。
　　焼土粒・炭化粒少含
8 層　黒褐色土　　白色土が少量混じる。
　　ローム粒・焼土粒少含
9 層　黒褐色土　　白色粘土粒と焼土粒少含
10 層　黒色土　　ローム粒・焼土粒・白色粘土少含
11 層　黄褐色土　　ソフトロームブロック

図91　A153

A153

検出位置　　M7-11-3g、M7-21-1gにて検出した。

遺　　構　　長軸3.6m×短軸3.49m×壁高0.52m、主軸方位はN-59°-Eを示している。平面形は隅丸方形である。床は暗褐色土とロームが粗く混在したもので、住居跡中央からP1にかけて硬化面を検出した。主柱穴は検出できなかったが、周溝内に25基の壁柱穴を確認した。P1は出入口施設に係わるものである。周溝は、竈右は竈手前、竈左は竈袖下まで住居跡の壁下を巡っており、ほぼ全周するものである。竈は北東壁中央に設けられており、竈袖は粘土を主体として積み上げられていた。竈袖の内壁は、部分的に赤化していた。また、竈ピット内には火熱痕が認められず、火床の位置は不明である。

本住居跡では住居廃絶後に黒色土を人為的に投入して不用材の焼却を行っており、住居跡南西壁から中央に向かって層厚10cmで炭化材と焼土の堆積を検出した。このため覆土には火の使用に係わる人為堆積が下層に捉えられ、その後の中層以上は黒色土・暗褐色土の自然堆積を示していた。

遺　　物　　本地区の竪穴住居跡としては遺物の出土は多いが、特に出土層は覆土中層から上層が中心

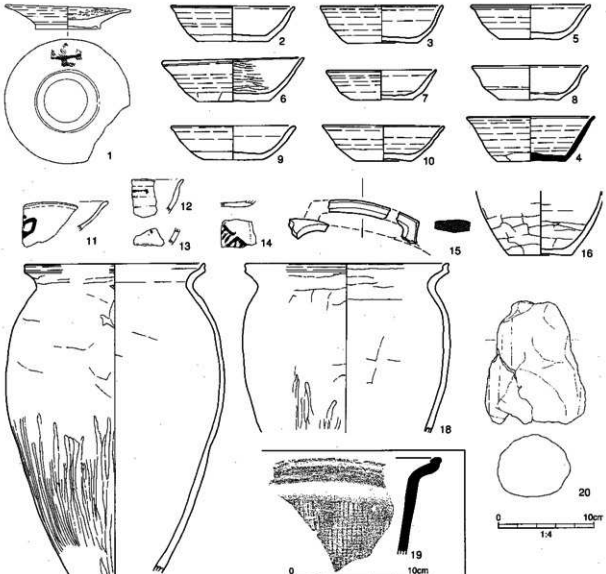


図92　A153（2）

であった。2は竈粘土上から伏せた状態で、4は床から正置で出土している。また。20は竈内から斜めに立っている状態で出土していた。

所　見　住居廃絶後、不用材の焼却を行った遺構である。しかし焼却後には人為的堆積により住居は完全に埋没しておらず、そこでは「穴」として残されていたようである。遺物の出土が、覆土中層以上に多いが、不用材焼却後から時間的経過があり、土器の流れ込みまたは、廃棄として捉えられよう。

表33　A153遺物観察表　（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高台付坏	132×台部径68×26　ロクロ成形　底部回転糸切り後ヘラ削り 外面　ナデ 内面　ヘラ磨き	橙褐 普	砂粒 赤色粒含	略完形	墨書「□」 体部外面
2	土師器 坏	130×74×38　ロクロ成形　底部回転糸切り後ヘラ削り　口縁外反 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	橙褐 普	砂粒 白色粒含	完形	

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
3	土師器 坏	130×72×40　ロクロ成形　底部回転糸切り後ヘラ削り　体部外傾 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	橙褐 普	砂粒 赤色粒含	略完形	
4	須恵器 坏	134×71×48　ロクロ成形　底部ヘラ削り　体部外傾 底部小さく器高深い 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	暗褐～ 暗赤褐 普	粗砂粒 雲母含	略完形	
5	土師器 坏	126×64×37　ロクロ成形　底部回転ヘラ削り　口縁屈曲 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	暗赤褐 普	砂粒含	略完形	内外面スス付着
6	土師器 坏	150×76×40　ロクロ成形　体部外傾 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	橙褐 普	砂粒 赤色粒含	略完形	外面スス付着
7	土師器 坏	116×66×31　ロクロ成形　底部回転ヘラ削り　口縁外反 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	橙褐 普	砂粒 白色粒 赤色粒含	略完形	
8	土師器 坏	(122)×62×37　ロクロ成形　底部回転ヘラ削り　口縁外反 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	橙褐 良	砂粒 雲母 白色粒 赤色粒含	3/4	
9	土師器 坏	(132)×60×36　ロクロ成形　底部回転ヘラ削り　口縁外反 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	明橙褐 普	砂粒 雲母 赤色粒含	2/3	被熱のためか 器面の磨耗激し い
10	土師器 坏	124×58×38　ロクロ成形　底部回転糸切り後ヘラ調り後ナデ 体部外傾　底部小さい 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	暗赤褐 普	砂粒 雲母 赤色粒含	1/2	
11	土師器 坏	(120)×－×(31)　ロクロ成形　内外面ナデ	㊥褐 ㊦橙褐 普	砂粒 雲母 白色粒含	口縁片	墨書「□」 体部外面
12	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形　内外面ナデ	橙褐 普	砂粒 赤色粒含	口縁片	墨書「□」 体部外面
13	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 体部下端　内面ナデ　外面ヘラ磨き	明褐 普	砂粒含	体部片	墨書「□」 体部外面
14	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形　底部回転糸切り後ヘラ削り	橙褐 普	砂粒 赤色粒含	底部片	墨書「□」 底部外面
15	灰釉陶器 提瓶	－×－×－ 残存は極めて少なく器形全体はうかがい知れない 把手の一部のみ遺存	緑灰褐 良	砂粒 白色粒 黒色粒含	胴部 及び 把手	
16	土師器 小型甕	－×64×(68)　ロクロ成形 底部　内外面ヘラ削り 胴部下半～下端　内外面ヘラ削り	暗赤褐	砂粒 赤色粒含	胴部～ 底部	
17	土師器 甕	190×－×350　長胴　口縁やや受け口状　頸部「く」の字状 口縁～頸部ナデ　胴部下半～下端ヘラ削り後粗いヘラ磨き	暗褐 普	粗砂粒 多含	口縁～ 胴部	
18	土師器 甕	(214)×－×(180)　長胴　口縁やや受け口状　口縁外面凹線状に調整 頸部「く」の字状 口縁～頸部ナデ　胴部下半ヘラ削り後粗いヘラ磨き	暗褐 普	粗砂粒含	口縁～ 胴部	
19	須恵器 甕	－×－×－　口縁外反　上端内屈 口縁～頸部ナデ　胴部上端タタキ	灰黒褐 不良	砂粒含	口縁片	
20	土製品 支脚	長軸(130)×短軸(104)×器高(66) 円錐形を呈すると思われる 磨耗が著しいが一部に面取り状の削り調整がみられる	褐 不良	砂質	1/2	

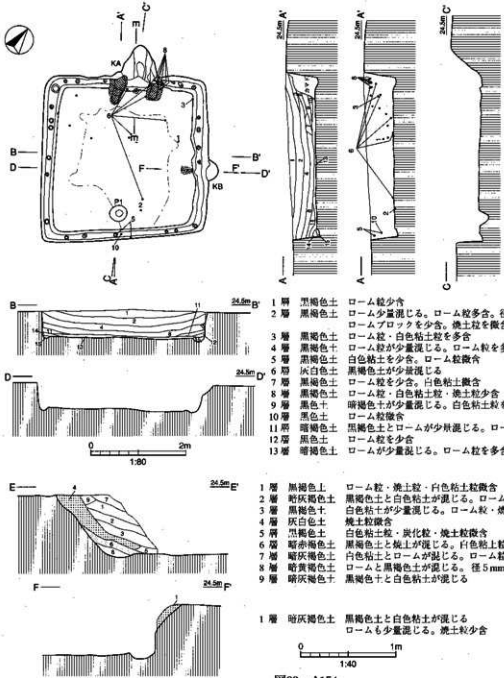


図93　A154

A154

検出地区　　M7-21-2・3・4gにて検出した。

遺　　構　　長軸3.51m×短軸3.43m×壁高0.56m、主軸方位はN-35°-Wを示している。平面形の基本形は隅丸方形であるが、北東壁に比べ南西壁が長い台形状となっている。床はハードロームの地床であり、竈前から対面する南東壁にかけて極めて良好な硬化面を残している。主柱穴は検出されなかったが、周溝内に23基の壁柱穴が確認された。P1は出入口施設に伴うピットである。検出された周溝は、竈KA・KBの下も掘られ、住居跡を全周するものであった。周溝は全体として掘込みが直線的であったが、しかし各竈下及びその周囲は崩れるような掘込みであった。特に竈KB付近の周溝の崩れは大きかった。

竈は２基検出した。竈KAは北西壁中央に設けられ、、竈袖は粘土を主体として積み上げられていた。竈ピットは無く、火床は床面からKB時の周溝上にわたって検出した。煙道部は壁を大きく掘込み、更に煙道部中央を長軸方向に更に一段掘込んでいた。煙道部には赤化はしないが、火熱痕を認めた。

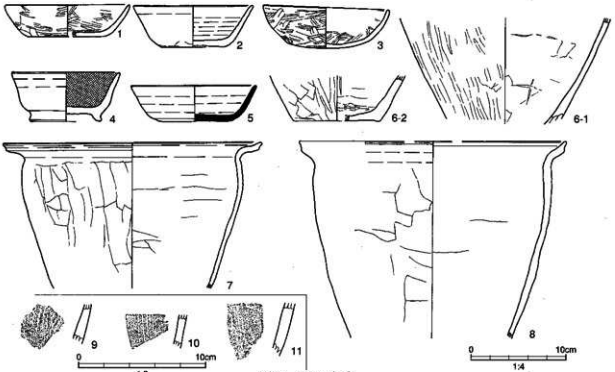


図94　A154（2）

KBは北東壁中央に設けられていたが、損壊しており、壁への煙道部の掘込みの一部と、火床の一部を検出したのみである。また、火床が検出したことにより竈と判断した。火床の煙道部側は、KAの構築時に掘込んだ周溝のため失われていた。火床は床面と同じ高さにあり、竈ピットは掘込まれていなかったことが捉えられた。

覆土は、黒色土と暗褐色土を主体とした自然堆積であったが、覆土からは遺構の重複は想起できないものであった。また、黒褐色土層にはロームを多く含む傾向が窺えた。

遺　物　出土した遺物は少なかった。1は床面から、口縁を上にやや傾いて出土した。9～11は縄文時代早期・撚糸文土器片である

所　見　竈2基の住居跡である。A154はKA使用時の最終形としての竪穴住居跡が検出されている分けであるが、壁の変則性や周溝の不規則性等が認められないため、住居の建替えや拡張はなかったと捉えた。そして周溝や竈の損壊状況から、竈の改替と捉えた竪穴住居跡である。

竈の新旧関係であるが、KB自体は袖も失われ火床が周溝によって損壊していること、この周溝にKB周囲では掘込みの崩れがあること、KAは周溝の上に築かれていること等から、KBの損壊後にKAを構築していると考えられる。特にKB周囲の周溝の崩れは、被熱によってロームが塊状化し、掘りにくかったことを窺わせている。

周溝が竪穴住居跡壁下を竈下を含めて、全周することは住居廃絶時の状態である。当初のKB構築に伴う住居跡では、周溝は竈袖付近から始まり、竈を除いて壁下に巡っていたのではないかと想定されるものである。そのためもKAの火床は周溝に載るように残されていた。そしてKBの損壊のためかKAを構築し、KBを除去した後、床面と同じ高さに残った壁下を掘込み、既存の周溝に繋げたものといえよう。

KBにともなう壁柱穴は不明である。KAの壁柱穴の追加は不明であるがKB内に掘込まれた壁柱穴もあり、多くの壁柱穴はKBからKAにいたっても再利用していたと考えたい。また、KBに伴う出入口施設であるが、KAに対してはP1の存在があるがKBについては出入口施設に伴うピットが検出されていない。KBに対面する様に周溝内に壁柱穴があり、もしかしたら階段状施設における支柱穴とも想定する必要があるだろう。

表34　A154遺物観察表　　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(130)×(80)×34　口縁やや立ち上がり気味　底部丸みをおびる 外面　口縁ナデ　体部ヘラ削り後粗いヘラ磨き 内面　体部ナデ後ヘラ磨き	暗茶褐 良	砂粒 白色粒 黒色粒含	1/2	
2	土師器 坏	(126)×64×44　ロクロ成形　底部回転糸切り　体部直線的 体部下端丸みをもつ 口縁～体部下半ナデ　体部ド端ヘラ削り	暗赤褐 普	砂粒 橙色粒 白色粒含	2/3	
3	土師器 坏	132×70×46　口縁やや内湾気味　丸底 外面　口縁ナデ　体部ヘラ削り　それぞれその後粗いヘラ磨き 内面　ナデ後ヘラ磨き	暗赤褐 普	砂粒 赤色粒 橙色粒含	4/5	
4	土師器 高台付坏	134×台部径74×53　ロクロ成形　体部直線的に立ち上がる 底部回転ヘラ切りの後高台部貼り付け 口唇部・接合部ナデ　体部内面丁寧な磨き	赤橙褐 良	緻密	略完形	内黒
5	須恵器 坏	131×77×39　ロクロ成形　底部回転糸切り　体部外傾 口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り	灰茶褐 普	砂粒 小石含	略完形	
6	土師器 甕	―×(90)×(126)　底部木葉痕 外面　胴部下半～下端ヘラ削り後ヘラ磨き 内面　胴部下半ヘラナデ　胴部下端ヘラ削り	暗赤褐 良	雲母 粗砂粒含	胴部～ 底部片	内外面スス付着
7	土師器 甕	(270)×―×(155)　口縁大きく外反　端部ややつまみ上げられる 口縁～頸部ナデ　胴部上半ヘラ削り　内面ヘラナデ	橙褐 普	砂粒 小石 赤色粒 白色粒含	口縁～ 胴部片	
8	土師器 甕	(280)×―×209　口縁外反　上端つまみ上げられる 外面凹線状に調整される 口縁～頸部ナデ　胴部上半ヘラナデ	橙褐 普	粗砂粒 雲母含	口縁～ 胴部片	

A155

検出地区　M7-31-3g、M7-41-1gにて検出した。

遺　構　長軸3.27m×短軸3.23m×壁高0.42m、主軸方位はN-9°-Wを示している。平面形は隅丸方形である。床はハードロームに黒色土が少量混入するもので、全体的に踏み固められた床である。住居跡中央から東壁側、及び中央から西壁側にかけて硬化面を検出した。竈前からP1にかけては、床面が損壊していた。また、北東コーナー付近は若干低くなっている。主柱穴は検出されず、周溝内に21基の壁柱穴が確認された。P1は出入口施設に伴うものである。周溝は、竈袖下まで巡るものと思われる。竈は北壁中央に設けられ、大きく撹乱を被っており、竈右袖と煙道部の一部が残っているだけであった。粘土に黒色土が混入したものが竈袖として積み上げられており、袖の内壁は一部赤化していた。煙道部は幅広いが、掘込みの奥行きは浅いものである。竈ピットや煙道部の大半、そして竈左袖は撹乱のため失われており、火床もこのため確認できなかった。

住居跡中央から出入口にかけて、床面から10cm程の層厚で、炭化材と真っ赤になった焼土が検出されている。その一部はP1を覆っていた。住居廃絶後に、不用材の焼却が行われたものと捉えた。

覆土はこの炭化材の焼却行為を示しており、住居廃絶後に若干の黒褐色土の自然堆積が認められ、その後に不用材の焼却が行われていた。そして再び、黒褐色土を主体とした自然堆積によって埋没している住居跡であった。

遺　物　遺物の出土は少なかった。1・6が床面から出土していた。1は壺の内側を壁に向け、壁に寄りかかるような状態で、6は口縁を上にしてやや斜めに出土している。また、墨書土器「竹」が1点出土していた。なお、縄文時代早期・撚糸文片が流れ込んで出土している。

所　見　住居廃絶後、暫くして不用材の焼却が行われた竪穴住居跡であるが、この火熱を被ること

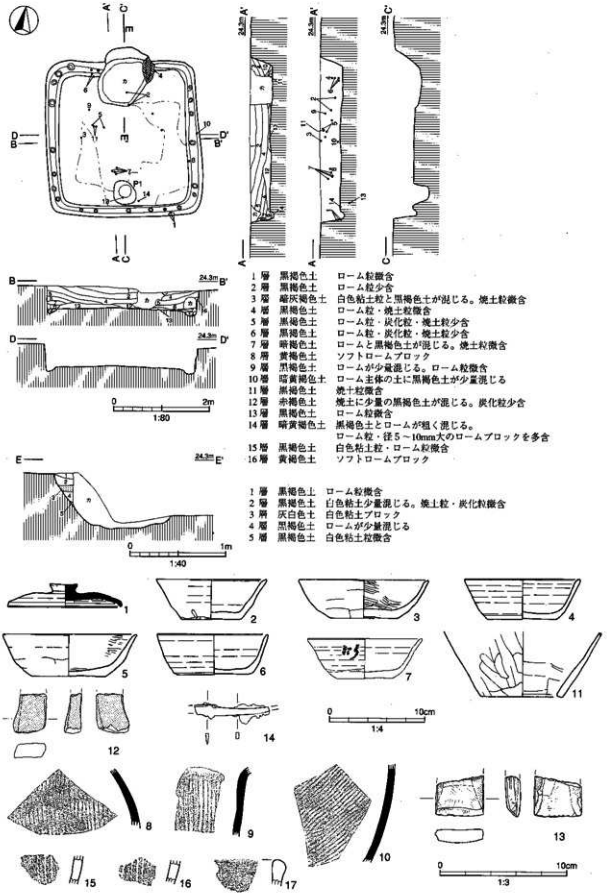

1 層 黒褐色土 ローム粒微含
2 層 黒褐色土 ローム粒少含
3 層 暗灰褐色土 白色粘土粒と黒褐色土が混じる。焼土粒微含
4 層 黒褐色土 ローム粒・焼土粒微含
5 層 黒褐色土 ローム粒・炭化粒・焼土粒少含
6 層 黒褐色土 ローム粒・炭化粒・焼土粒少含
7 層 暗褐色土 ロームと黒褐色土が混じる。焼土粒微含
8 層 黄褐色土 ソフトロームブロック
9 層 黒褐色土 ロームが少量混じる。ローム粒微含
10 層 暗黄褐色土 ローム主体の土に黒褐色土が少量混じる
11 層 黒褐色土 焼土粒微含
12 層 赤褐色土 焼土に少量の黒褐色土が混じる。炭化粒少含
13 層 黒褐色土 ローム粒微含
14 層 暗黄褐色土 黒褐色土とロームが粗く混じる。
ローム粒・径5～10mm大のロームブロックを多含
15 層 黒褐色土 白色粘土粒・ローム粒微含
16 層 黄褐色土 ソフトロームブロック
1 層 黒褐色土 ローム粒微含
2 層 黒褐色土 白色粘土少量混じる。焼土粒・炭化粒微含
3 層 灰白色土 白色粘土ブロック
4 層 黒褐色土 ロームが少量混じる
5 層 黒褐色土 白色粘土粒微含

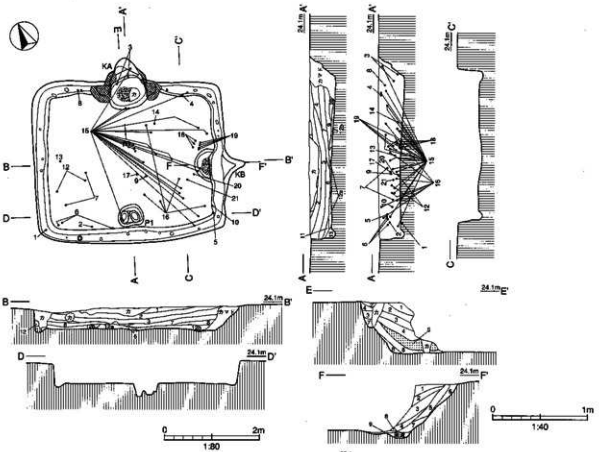
図95 A155

表35　A155遺物観察表　　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 壺	壺径120×かえり径110×つまみ径24　ロクロ成形 外面　口縁・天井部回転ヘラ削り　天井部稜をもつ 内面　口縁ナデ	灰褐 普	粗砂粒含	完形	
2	土師器 坏	(116)×62×43　ロクロ成形　底部回転糸切り後ヘラ削り 口縁やや外反　体部外傾　下半やや丸みをもつ 外面　口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り　内面　体部ナデ	橙褐 普	砂粒 赤色粒含	1/4	
3	土師器 坏	(136)×(70)×41　ロクロ成形　体部やや丸みをもつ 底部回転糸切り後外周ヘラ削り 外面　口縁～体部上半ナデ　体部下半ヘラ削り 内面　口縁・体部ヘラ磨き	暗橙褐 良	砂粒 赤色粒含	1/4	
4	土師器 坏	122×72×43　ロクロ成形　体部直線に開く　器高深め 底部回転ヘラ削り 外面　口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り 内面　口縁・体部ナデ	暗赤褐 良	砂粒 白色粒含	1/2	内外面スス付着
5	土師器 坏	140×74×45　ロクロ成形　大きめの坏　体部外傾 底部回転糸切り後ヘラ削り 外面　口縁～体部上半ナデ　体部下半ヘラ削り　内面　体部ヘラ磨き	暗橙褐 普	砂粒 赤色粒含	1/2	
6	土師器 坏	116×76×44　ロクロ成形　体部直線的に立ち上がる　底部ヘラ削り 外面　口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り 内面　体部・口縁ナデ	暗橙褐 普	砂粒含	完形	
7	土師器 坏	121×60×42　ロクロ成形　口縁外反　体部下端にやや丸みをもつ 底部小さめ　回転ヘラ削り 外面　口縁～体部下半ナデ　下端ヘラ削り　内面　口縁ナデ	㊙橙褐 ㊙明褐 普	砂粒 雲母含	略完形	墨書「竹」 体部外面
8	須恵器 甕	―×―×― 外面　胴上半タタキ 内面　頸部ナデ　指頭圧痕	灰黒褐 普	砂粒 白色粒含	胴部片	
9	須恵器 甕	―×―×― 外面　頸部ナデ　上半タタキ 内面　頸部ナデ　指頭圧痕	灰褐 普	粗砂粒 赤色粒含	頸部～ 胴部片	
10	須恵器 甕	―×―×― 外面　胴下半タタキ 内面　胴下半ヘラナデ	灰 良	黒色粒 白色粒含	胴部片	
11	土師器 甑	―×(86)×(69)　単孔 外面　胴部下半・下端ヘラ削り 内面　胴部下半ヘラナデ　下端ヘラ削り	暗橙褐 普	砂粒 白色粒 赤色粒含	胴部片	黒斑
12	石器 砥石	長軸42×短軸35×器高15　重量35.4g 一端を欠損するか？4砥面と思われる。4面とも研磨痕が残される。			1/2	
13	石器 磨製石斧	長軸32×短軸38×器高11　重量26.8g 中形の扁平片刃石斧の一種と思われる。全面に研磨が施されており、刃部には使用による刃こぼれがみられる。			刃部片	
14	鉄器 刀子	長さ(78)×幅11.5(茎幅3)×厚さ3　重量9.1g			刃部～ 茎	

によって住居跡中央の床面が損壊したと考えられる。しかし火の使用後、自然堆積によって埋没したということは、本住居跡が「穴」として放置された住居跡でもあった。

上谷遺跡Ⅱ地区においても住居廃絶後の不用材の焼却が行われた竪穴住居跡は多かったが、本地区においてもその傾向は引き継がれているようである。しかしⅡ地区においては焼却後に投入土によって、住居跡をほぼ埋戻しているのに対して、本地区ではあまり埋戻さず、「穴」として放置した例が多いようである。



1 層　黒褐色土　ローム粒・白色粘土粒微含
2 層　黒褐色土　ローム粒・白色粘土粒少含。炭化粒微含
3 層　黒褐色土　ロームが少量混じる。ローム粒・白色粘土粒含
炭化粒・焼土粒微含
4 層　暗灰褐色土　黒褐色土と白色粘土が混じる。焼土粒微含
5 層　黒褐色土　ローム粒微含
6 層　黒褐色土　ロームが少量混じる。ローム粒・焼土少含
7 層　黒褐色土　ロームと白色粘土が少量混じる。ローム粒・焼土粒少含
8 層　暗灰褐色土　黒褐色土と白色粘土が混じる。ローム粒微含
9 層　黒褐色土　ローム粒・炭化粒微含
10 層　暗灰褐色土　黒褐色土と白色粘土が混じる。ローム粒・焼土粒微含
11 層　黒色土　ローム粒が少量混じる。ローム粒微含
12a 層　黒褐色土　ローム粒・炭化粒を多含。焼土粒少含
12b 層　暗赤褐色土　黒褐色土と焼土が粗く混合
部分的に径5mm大のロームブロックを少含
13 層　暗褐色土　黒褐色土ロームが混じる。

KA
1 層　黒褐色土　白色粘土粒・焼土粒少含
2 層　明灰褐色土　黒褐色土と白色粘土が混じる。焼土粒少含
3 層　灰白色土　焼土粒少含
4 層　明灰褐色土　黒褐色土と白色粘土が混じる。焼土粒少含
5 層　暗赤褐色土　黒褐色土と焼土が混じる
焼土粒少含・白色粘土粒微含
6 層　暗黄褐色土　黒褐色土とロームが混じる。焼土粒微含
7 層　黒褐色土　白色粘土と焼土粒微含
8 層　暗黄褐色土　黒褐色土とロームが混じる
9 層　赤褐色土　焼土層。径5mm大の焼土ブロック含有

KB
1 層　黒褐色土　ローム粒少含
2 層　黒褐色土　ローム粒・焼土粒少含
3 層　黒褐色土　ローム粒・焼土粒・白色粘土少含
4 層　黒褐色土　焼土粒・白色粘土少含
5 層　灰白色土　焼土粒少含
6 層　灰赤褐色土　白色粘土と焼土が混じる
7 層　黄褐色土　ソフトロームブロック
8 層　暗黄褐色土　ロームと暗褐色土が混じる。焼土粒微含

図96　A156

A156

検出地区　　L6-90-2g、M6-81-1gにて検出した。

遺　構　　長軸3.96m×短軸3.42m×壁高0.53m、主軸方位は竈KAにおいてはN-27°-Eを示し、竈KBにおいてはN-70°-Wを示している。平面形は隅丸方形であり、竈がその改替にともなって、2基検出された竪穴住居跡である。床はハードロームの踏み固められた地床であり、住居跡中央部に硬化面を残している。主柱穴は検出されず、周溝には21基の壁柱穴が確認された。KAの対面の南東壁中央壁際に出入口施設に伴うP1を検出した。周溝はKA袖下から住居跡壁下を全周している。竈は2基検出した。KAは北西壁中央に設けられ、粘土主体の竈袖は、一部煙道部まで続いている。この煙道部に続くものは竈天井部と思われる。竈ピット内は一部撹乱を被っているが、坑底に赤化した火床を検出した。煙道部はややオムスビ状に壁を掘込んでいる。KBは竈ピットと煙道部だけの検出であった。竈ピット内に火床を検出

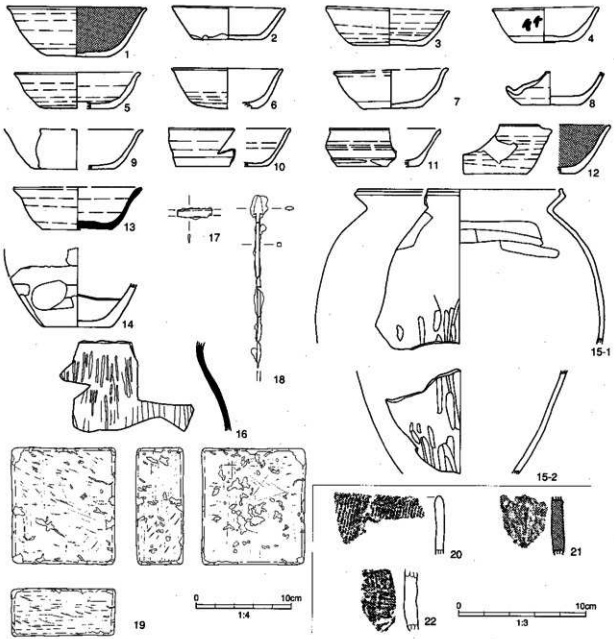


図97　A156（2）

したが、KA構築時に伴う周溝によって1/2程度失われていた。煙道部は三角形状に、壁を掘込んでいた。炭化材と焼土が住居跡中央から西コーナーに向けて、床に層厚10cm程に堆積していた。このため住居跡中央に、火床化した床面が認められた。覆土もこれを映し出し、住居廃絶後の不用材の焼却層と、その後の黒褐色土を主体とした自然堆積となっていた。

遺　物　　覆土中層から上層を中心に、出土遺物が比較的多い住居跡である。実測可能遺物は土師器坏が中心であったが、須恵器は少ない傾向が窺えた。4は「竹」が記された墨書土器であり、本地区では釈文できる文字のうち、やや出土が多い文字である。19は温石である。KB脇の床面に斜めにささった状態で出土していた。また、縄文時代早期の撚糸文及び条痕文の流れ込みも認められた。

所　見　　竈の改替が行われた住居跡である。竈の遺存状態及び周溝等との関係から、KBが古く、KAが新しいものと捉えられた。また、住居の建替・拡張とは周溝や壁の整然性から認められず、竈のみの改替と捉えた。温石の出土は、上谷遺跡Ⅱ地区で検出したA100についで２例目である。

表36　A156遺物観察表　　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	146×70×52　ロクロ成形　体部下端ヘラ削り 底部回転糸切り後周辺ヘラ切り	㋐淡褐 ㋑黒 良	緻密	2/3	内黒
2	土師器 坏	118×74×34　ロクロ成形　体部下端ヘラ削り 底部回転糸切り後周辺ヘラ切り	淡褐 良	緻密	完形	
3	土師器 坏	131×70×39　ロクロ成形　体部下端ヘラ削り	橙褐 普	普 砂粒少量含	1/2	
4	土師器 坏	111×60×46　ロクロ成形　体部下端ヘラ削り　底部静止ヘラ削り	淡褐 良	緻密	2/3	黒書「竹」 体部外面正位
5	土師器 坏	132×75×38　ロクロ成形　体部下端ヘラ削り　底部静止ヘラ削り	黒褐 普	普 砂粒少量含	1/3	
6	土師器 坏	117×68×43　ロクロ成形　体部下端ヘラ削り	淡褐 良	緻密	4/5	
7	土師器 坏	(120)×62×41　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り　底部回転糸切り後ヘラ削り	淡褐 普	普	1/4	
8	土師器 坏	－×62×(35)　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り　底部回転ヘラ削り	淡褐 普	普	底部	
9	土師器 坏	(152)×90×41　ロクロ成形　底部回転糸切り後回転ヘラ削り	黒褐 普	普	口縁～ 底部	
10	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形　体部下端ヘラ削り	褐 普	普	口縁～ 底部	
11	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形　体部下端ヘラ削り後ナデ	橙褐 普	普	口縁～ 底部	
12	土師器 坏	－×－×53　ロクロ成形　体部下端ヘラ削り	㋐淡褐 ㋑黒 良	緻密	口縁～ 底部	内黒
13	須恵器 坏	134×72×45　ロクロ成形　体部下端ヘラ削り　底部静止ヘラ削り	黒褐 普	普	1/3	
14	土師器 小型甕	－×69×(84)　輪積み成形　底部木葉痕 胴部下半横位ヘラ削り　下端縦位ヘラ削り　内面輪積み痕	㋐褐 ㋑橙褐 普	普	胴部～ 底部	
15	土師器 甕	(220)×－×－　ロクロ成形　口唇が上部につまみ上げられる 胴部縦位のヘラ削り	褐 普	普	口縁～ 胴部	
16	須恵器 甕	－×－×－　胴部タタキ目	㋐灰褐 ㋑褐 普	普	胴部片	
17	鉄器 刀子	長さ(37)×幅9×厚さ2　重量2.4g			刃部	
18	鉄器 鏃	長さ(170)×刃支幅9×厚さ4　重量14.7g			略完形	

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
19	石器 温石	長軸169×短軸104×厚88　重量1430.0g 直方体の板状石製品　表面には被熱による大小の剥落がみられるが 6面全て平滑に研磨され、後部分には面取り、全体に使用に伴う 線痕が残る			完形	蛇紋岩

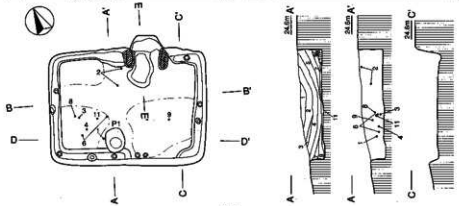


図98　A157

A157

検出地区　　M695-4g、M6-96-3g、M7-5-2g、M7-6-1gにて検出した。台地斜面部に立地する。

遺　　構　　長軸3.30m×短軸2.40m×壁高0.56m、主軸方位はN-27°-Eを示している。平面形は隅丸方形である。床面はハードロームの地床で、中央から3コーナーにかけては硬化している。しかし住居跡中央から十文字に、そして東コーナーは軟弱であった。主柱穴は検出されなかったが、周溝内に10基の壁柱穴が確認された。竈の対面する南西壁中央壁際に、竈に対してはやや斜行して出入口施設に伴うと捉えられたP1を検出した。この覆土はロームと褐色土が主体となっており、本地区の他の住居跡とは大差ないものであった。周溝は2条に分かれ、南東壁側は竈右袖脇から南コーナーを経て南西壁に入って中断する。一方、北西壁側は竈左袖下から南西壁中央間で巡っており、この2条の周溝はちょうど竈の対面で途切れた状態であった。

竈は北西壁中央から東コーナー寄りに設けられ、竈袖は粘土を主体として積み上げられていた。また、竈袖の内壁は部分的に赤化していた。竈ピットは竈主軸方向に歪んだ楕円状に掘込み、坑底に明確な火床は認められなかったが、火熱を被った痕を認めた。煙道部は壁をやや幅広く、奥行きは浅く台形状に掘込んでいた。

覆土は色調的に大きく2分され、下層は暗黄褐色土が、上層は黒褐色土・黒色土が主体となった自然

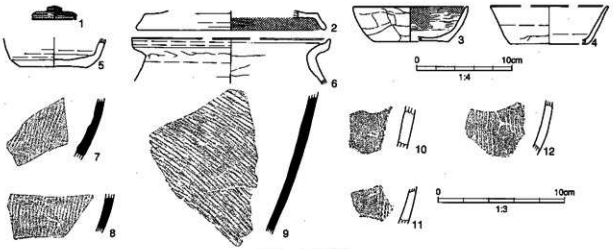


図99　A157（2）

表37　A157遺物観察表

（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	三彩 壺蓋	蓋径(45)×かえり径(41)×つまみ径15　ロクロ成形　つまみ頂部尖る かえり内側に屈曲し端部で外反　緑釉を中心に白・褐の三彩を施す つまみ部は釉の溜落がみられる	普		1/2	
2	土師器 蓋	(200)×－×(20) 外面　口縁ナデ 内面　ヘラ磨き	橙褐 普	粗砂粒含	口縁片	内黒
3	土師器 坏	(120)×(80)×38　体部丸みをおびつつ立ち上がる　平底 口縁ナデ　体部ヘラ削り　体部内面ヘラ磨き　底部ヘラ磨き	㈮赤褐 ㈯橙褐 普	砂粒 赤色粒含	1/4	タール付着
4	土師器 坏	(123)×(82)×40　ロクロ成形　体部直線的に開く 外面　口縁～体部下半ナデ　体部下端ヘラ削り 内面　体部・口縁ナデ	暗赤褐 普	粗砂粒 多含	口縁～ 底部片	
5	土師器 坏	－×70×(31)　ロクロ成形　底部回転ヘラ削り 外面　体部下半ナデ　下端ヘラ削り 内面　体部下半ナデ	暗赤褐 良	粗砂粒 雲母 赤色粒含	底部片	
6	土師器 甕	(210)×－×(48)　口縁外反　端部つまみ上げ　外面凹線状に調整 内外面　口縁～頸部ナデ　胴上半ヘラ削り	橙褐	粗砂粒 雲母多含	口縁片	
7	須恵器 甕	－×－×－ 外面　胴上半タタキ 内面　胴下半ナデ及び指頭圧痕	灰褐 良	砂粒 白色粒含	胴部片	
8	須恵器 甕	－×－×－ 外面　胴上半タタキ 内面　胴下半ナデ及び指頭圧痕	灰褐 普	砂粒 白色粒 黒色粒含	胴部片	
9	須恵器 甕	－×－×－ 外面　胴上半タタキ 内面　胴下半ナデ及び指頭圧痕	暗茶褐 普	小石 白色粒 多含	胴部片	

堆積であった。

遺　物　　出土遺物は少なく、出土層は覆土中層から上層が中心であった。また、住居跡内では点在して出土している状況である。また、破片が多く図示したものは意識的に実測したものが多い遺物である。1は三彩小壺のであり、覆土中層下部の出土であった。また、10～12は縄文時代早期の撚糸文土器片であり、本住居跡への流れ込みであるが奈良・平安時代以前の遺構状況を示唆しているかもしれない。

所　見　　発掘調査当初の本住居跡は、土坑として調査を始めた遺構である。遺構確認面においては、竪穴住居跡とは判断しにくい遺構でもあった。

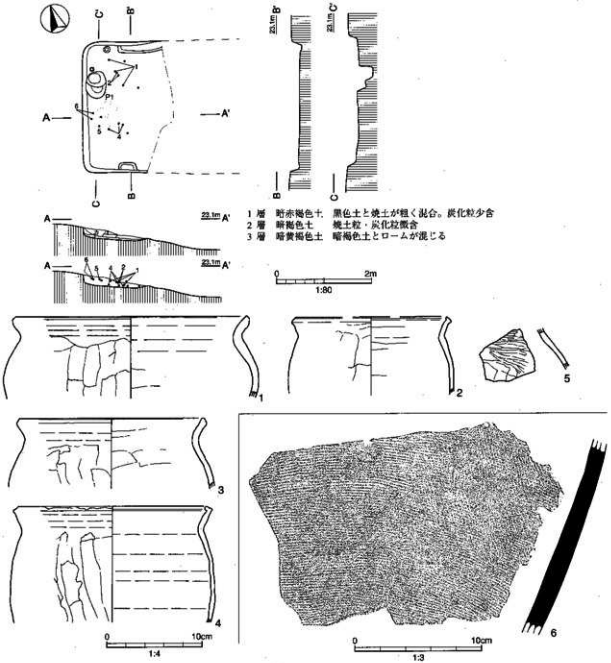


図100　A158

A158

検出地区　M7-61-1・3gにて検出した。台地斜面部に立地している。

遺　構　長軸(1.92)m×短軸2.76m×壁高0.19m、主軸方位は不明である。平面形は隅丸方形であろう。燃焼施設側が失われた竪穴住居跡と判断した。このため現存の南北間の方位を示すと、N-18°-Eとなっている。床はソフトロームの地床で、硬化面は認められなかった。主柱穴は検出されず、壁下に２基の壁柱穴を認めた。P1は中軸線からずれているが、出入口の伴うものと捉えた。周溝も不明瞭であるが、断続的に存在していたと考えられる。西壁中央にやや床面より浮いて、P1南側に黒褐色土と焼土が混合した、層厚10cmの焼土層を検出した。そしてP1の上にのるように堆積していた。

覆土は暗褐色土が主体の自然堆積であり、埋没過程で火の使用が認められている。

遺　物　住居跡の1/3程度が失われているため、出土する遺物は少ないが、大型の破片が目立つ遺構である。

所　見　斜面部に立地する住居跡のためか、南北の壁間距離である短軸から推定すると、東側が1/3程度失われている遺構である。形状等から竪穴住居跡と判断したが、燃焼施設は竈であったろうと想定している。

表38　A158遺物観察表　（単位mm）

No.	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	(242)×－×(108)　口縁受け口状　頸部「く」の字状 外面　口縁～頸部ナデ　胴上半ヘラ削り 内面　口縁ナデ	㊀橙褐 ㊁暗褐 普	砂粒 白色粒 橙色粒含	口縁～胴部片	
2	土師器 甕	(140)×－×(83)　口縁受け口状　頸部緩やかな「く」の字状 外面　口縁～頸部ナデ　胴上半縦ヘラ削り 内面　口縁ナデ	㊀橙褐 ㊁褐 普	砂粒 赤色粒含	口縁～胴部片	
3	土師器 甕	(190)×－×(75)　口縁受け口状 外面　口縁～頸部ナデ　胴上半ヘラ削り 内面　ヘラ削り	暗赤褐 普	砂粒 白色粒含	口縁～胴部片	被熱のため器面剥離著しい
4	土師器 甕	(200)×－×(122)　口縁内沔　口縁上端の粘土　頸部緩やかな「く」の字状　外面　口縁～頸部ナデ　胴上半ヘラ削り　内面　口縁ナデ	暗赤褐 普	砂粒 橙色粒含	口縁～胴部片	
5	土師器 甕	－×－×－ 外面　胴上半ヘラ削り後下半ヘラ削り 内面　胴上半ヘラナデ	暗赤褐 普	砂粒 白色粒	胴部片	
6	須恵器 甕	－×－×－ 外面　胴部下半タタキ 内面　胴下半ナデ及び指頭圧痕	灰褐 良	白色粒	胴部片	内外面スス付着

A159

検出地区　L6-100-2・4g、M6-91-3gにて検出した。

遺　構　長軸3.32m×短軸3.07m×壁高0.51m、主軸方位はN-28°-Eを示している。平面形は隅丸方形である。床はハードロームの地床であるが、住居跡中央の床面はロームと暗褐色土が混合し、アメーバ状に軟弱化していた。床面にピット4基を検出したが、主柱穴はP2であり、P1・P3は支柱穴と捉えている。壁柱穴は周溝内に7基をみとめたが、南西壁下の周溝内に多く確認した。P1～P3は覆土から柱が引抜かれているものと捉えられた。P4は出入口施設に伴うもピットであるが、これもまた引抜かれていた。周溝は竈袖脇から壁下を巡っていた。また、北コーナーでは周溝と壁の間にテラス状に平坦面が検出されている。

竈は北東壁中央に設けていた。竈袖は住居の壁のロームを一部掘り残して一部利用し、粘土を主体とした袖を積み上げていた。竈袖内壁は一部赤化しており、竈の使用状態を窺わせている。煙道部は壁を三角形状に掘込み、この中にまで入り込む楕円形の竈ピットも床から掘込まれていた。火床はこの竈ピット内に検出されたが、赤化には至っていなかった。

P2脇に、床に密着するように焼土と炭化粒が認められた。また、覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　住居跡としては出土遺物は少なかった。出土層は大半が、覆土中層から上層にかけてであった。2は竈周辺を主体とした出土の大きく接合した土師器甕であるが、一部は床面に横倒した状態であり、また、竈火床付近から伏せたような状態で出土している。なお、破片であるが墨書土器が出土していた。

所　見　ハードロームの地床ながら、硬化面が認められなかった竪穴住居跡である。また、竈も火

床が赤化していない等、本住居跡の使用期間を窺えるものとなっていた。住居跡北コーナーが壁より周溝が内側に入ることについては、住居跡の拡張等の様子は窺えなかった。また、床に密着した様に点在した焼土と炭化粒であるが、覆土等からも大きな火の使用の痕跡は認められなかった。

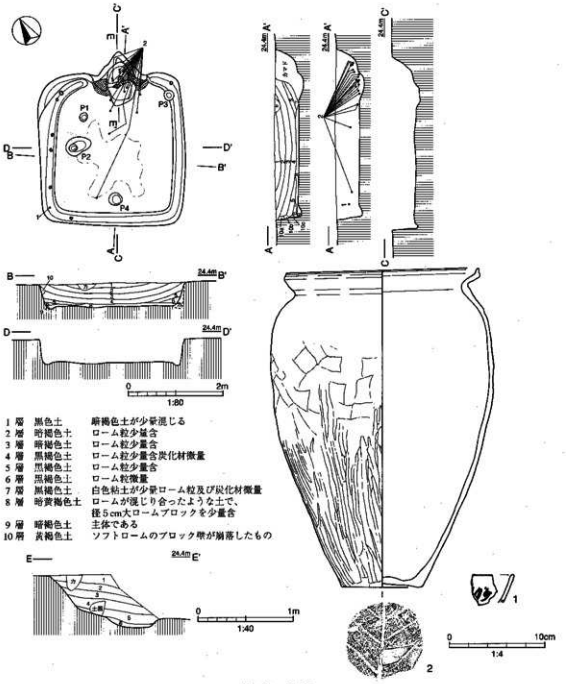


図101　A159

表39　A159遺物観察表

（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	－×－×－ ロクロ成形	褐 普	普	口縁片	墨書「竹」 体部外面
2	土師器 甕	204×84×339　最大径235 外面　口縁～肩部～ヨコナデ　胴下半～縦位ヘラ磨き 胴上半～ヘラナデ　　口縁～受け口状 内面　ヨコナデ　頸部～強い「く」の字状	明褐 普	粗 粗砂粒 雲母　多	完形	外面スス付着 底部木葉痕

A160

検出地区　L7-20-3・4gにて検出した。

遺　構　長軸3.92m×短軸3.80m×壁高0.51m、主軸方位はN-1°-Wを示している。平面形は、横軸に長軸を有する隅丸方形である。床の大半はハードロームの地床であるが、南西コーナーと竈前から北東コーナーにかけてはハードロームとソフトロームの地床であり、ハードロームの最上部が床面となっていた。南西と北西の各コーナーは床面が軟弱であったが、他は全体的に硬化している床面であった。主柱穴は検出されず、周溝内には15基の壁柱穴を確認している。P1は出入口施設に伴うピットであり、覆土から引抜かれていることが捉えられた。周溝は、竈袖下から壁下を全周するものであった。

竈は、住居跡北壁のほぼ中央に設けられていた。竈袖は太く粘土を積み上げているものであり、その内壁は一部赤化していた。竈ピットは浅く掘込まれ、ピットの中央に赤化した火床が検出された。煙道部は壁を丸みを帯びた三角形状に掘込んでいるが、更に煙道部の坑底を掘込み、深く細長くなる煙道となっていた。

覆土は、下層は暗黄褐色土が、中層と上層は暗褐色土と黒褐色土か主体となった自然堆積層であった。

遺　物　出土遺物は多かったが、その出土層は覆土中層から上層が中心であった。図示できたものは土師器坏が中心となるが、大きく接合できる須恵器は少なかった。

墨書土器は８点出土しているが、「竹」の墨書が４点と多い住居跡であった。石帯の巡方も出土している。また、砥石は折れているが、よく使い込まれたものであった。

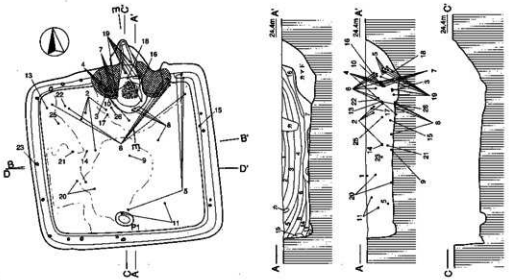
所　見　竈の煙道部は奥行きがないが、一見、細長くなる煙道をもつ住居跡となっている。本地区のA154でも、同じ傾向が見られる竈煙道部の構造を有している。検出状態では壁の掘込みはやや幅があるものであるが、煙道部坑底を更に掘込んでおり、その部分を煙道の主体として捉えるならば、煙道は細く突出した形状と捉えることもできるものであった。

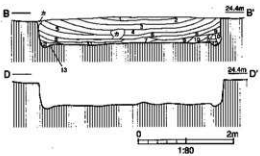
本住居跡からは８点の墨書土器が出土している。Ⅱ地区での墨書土器等の出土文字資料は400点を超えていたが、本地区では100点余であり極端に減少していると言えよう。Ⅱ地区のA102の様に30点を超える出土点数ではないが、全体的に墨書土器等の出土点数が少ない本地区では９点と、その点数が多い住居跡である。

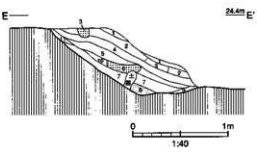
本地区の墨書土器でも様々な文字が記されているが、「竹」「竹野」と記されるものが多く、Ⅲ地区の中心となる文字となっているようでもあった。Ⅱ地区では「得」と「万」の出土点数が多く、その地区の主体となる文字となっていたが、その文字の傾向は変化してきているようである。

そして本住居跡から出土した判読できる墨書土器のうち記された文字は「竹」が多かったが、その出土点数から本地区の中心となる竪穴住居跡であるかもしれない。13・14は土師は坏の破片であり、「竹」の１文字であるのか、「竹野」となるのかは判断できないが、その出土が多いことは指摘しておきたい。

また、本地区の「竹」が上谷遺跡全体の中でどのような位置づけとなり、集落内の分布としてもどのような傾向が把握できるかは、Ⅳ地区及びⅤ地区がどのような傾向なのか把握できないなかでは詳らかにすることができなかった。







1 層	黒色土	極少量の褐色土が混じる
2 層	黒褐色土	褐色土が混じった土。極少量の粘土粒含
3 層	黒褐色土	褐色土が混じった土。ローム粒含
4 層	黒褐色土	褐色土が混じった土。径10cm前後のローム ブロックと炭化材粒が極少量含 ローム粒、焼土粒も含
5 層	暗褐色土	黒色土が混じった土。ローム粒・焼土粒も多含
6 層	暗褐色土	褐色土が混じった土。ローム粒・焼土粒も含 炭化粒が少量含
7 層	暗灰褐色土	黒色土、白色粘土が混じる
8 層	暗褐色土	褐色土が混じった土。ローム粒・焼土粒も多含 径10cm前後のロームブロックが極少量含 炭化材も若干含
9 層	黒色土	褐色土が極少量混じった土。ローム粒含 焼土粒も極少量含
10 層	黄色土	ソフトロームを主体の土。黒色土が少量混じる 壁崩壊層
11 層	暗黄褐色土	褐色土が混じった土。ローム粒、焼土粒も少量含
12 層	暗黄褐色土	ソフトロームが混じる。壁から崩壊している
13 層	暗黄褐色土	ソフトロームを主体の上。黒色土が混じる ソフトロームは壁から崩壊
14 層	黒褐色土	黒色土を主体の土に褐色土が混じる ローム粒、焼土粒を多含
15 層	暗黄褐色土	ソフトロームを主体とした土。黒色土が混じる 壁崩壊層
16 層	暗灰褐色土	黒色土を主体の上に白色粘土が混じる 焼土粒・白色粘土粒多含

1 層	褐色土	白色粘土含まない
2 層	暗褐色土	白色粘土含まない
3 層	灰褐色土	白色粘土と少量の褐色土が混じる
4 層	暗褐色土	白色粘土含まない
5 層	暗灰褐色土	暗褐色土と少量の白色粘土がほぼ均一に混じる
6 層	灰褐色土	白色粘土ブロック
7 層	暗褐色土	そで内側などの焼土や煤や白色粘土が混じる
8 層	暗赤褐色土	暗褐色土と焼土がほぼ均一に混じる
9 層	暗褐色土	極少量の薄ったロームが混じる
10 層	暗灰褐色土	暗褐色土と薄った白色粘土がほぼ均一に混じる
11 層	暗黄灰褐色土	薄ったロームと白色粘土と煤が ほぼ均一に混じる。自然堆積層

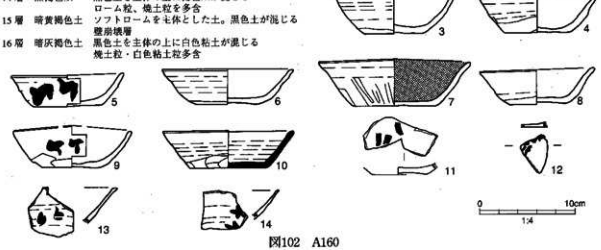


図102　A160

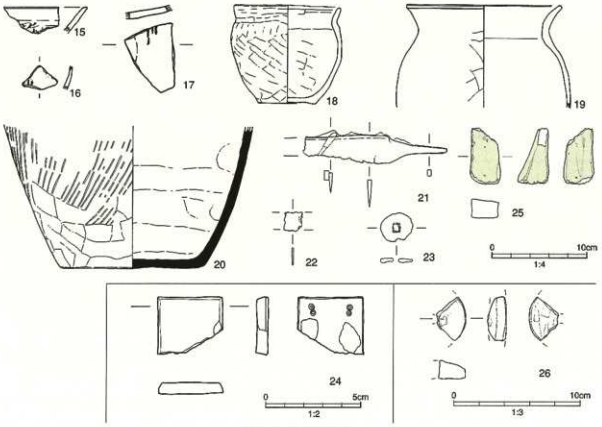
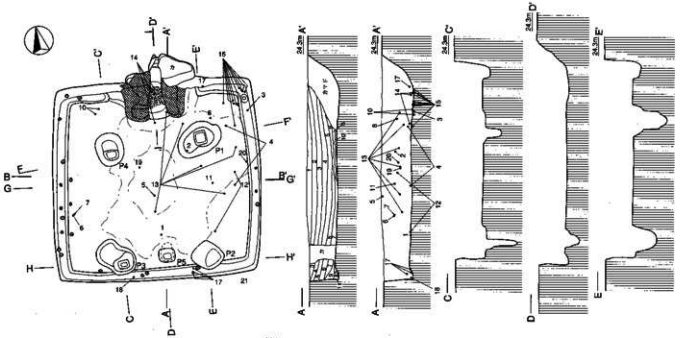


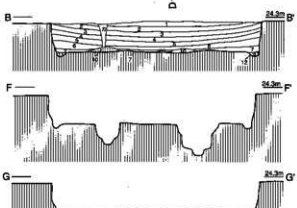
図103　A160（2）

表40　A160遺物観察表　（単位mm）

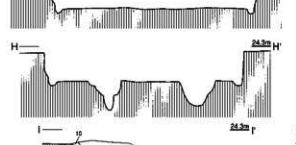
No.	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高台付皿	(101)×台部径56×24　ロクロ成形 体部内面は丁寧な磨きを施す。	㊱赤褐 ㊲淡褐 普	緻密	底部片	
2	土師器 坏	(120)×70×41　ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	褐 普	普	口縁～底部	
3	土師器 坏	(140)×60×52　ロクロ成形 底部回転糸切り 体部下半ヘラ削り調整　内面磨き	淡褐 普	普	1/4	
4	土師器 坏	122×67×40　ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下半ヘラ削り	褐 普	普	略完形	
5	土師器 坏	118×72×33　ロクロ成形 底部回転ヘラ切りの後、ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	淡褐 普	普	完形	墨書「竹」 体部外面正位
6	土師器 坏	136×63×37　ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下半ヘラ削り　全体的にやや歪んでいる。	褐 普	普	略完形	
7	土師器 坏	158×88×50　ロクロ成形 底部静止ヘラ切り　体部内面は丁寧な磨きを施し黒色処理している。 体部横位のヘラ削りと縦位のヘラ削り	㊱褐 ㊲黒 普	普	1/2	内黒
8	土師器 坏	120×60×37　ロクロ成形 底部回転糸切り　体部下端ヘラ削り	淡褐 普	普	4/5	

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
9	土師器 坏	124×62×44　ロクロ成形 底部回転糸切りの後ヘラ削り 体部下半に小刻みのヘラ削り	褐 普	普	略完形	墨書「竹」 体部外面正位
10	須恵器 坏	137×80×40　ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	灰 普	普 砂粒若干	3/4	
11	土師器 坏	－×(55)×(8)　ロクロ成形	褐 普	普	底部片	墨書「□」 底部内面
12	土師器 坏	－×－×－	褐 普	普	体部片	墨書「□」 体部外面
13	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	淡褐 普	普	口縁片	墨書「竹」 体部外面逆位
14	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り	褐 普	普	口縁片	墨書「竹」 体部外面横位
15	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	淡褐 普	普	口縁片	墨書「□」 体部外面
16	土師器 坏	－×－×－	淡褐 普	普	体部片	墨書「□」 体部外面
17	土師器 皿	－×－×－　ロクロ成形 内面丁寧な磨きを施し、内黒処理をしている。	㊙褐 ㊙黒 普	普	底部片	墨書「□」 体部外面 内黒
18	土師器 小型甕	112×60×105　輪積 外面　口縁部～ヨコナデ、胴部～ヘラ削り　胴部上部がやや膨らむ 内面　ヨコナデ～ナデ　口縁やや外反　頸部弱い「く」の字状	褐 普	普 砂粒多	完形	
19	土師器 甕	164×－×(108)　輪積 外面　口縁部～ヨコナデ、胴部～ヘラ削り　斜位～横位 内面　ナデ　口縁～外反　頸部～「く」の字状	赤褐 普	普 砂粒	1/4	
20	須恵器 甕	－×152×(152)　輪積 外面　胴部～平行タタキ　下端ヘラ削り 内面　ナデ	褐灰色 普	普 砂粒少 小石微	1/4	
21	鉄器 刀子	長さ(151)×幅(28.5)×厚さ4　重量35.2g			刃部～茎	刃部破損か？
22	鉄器 穂摘具	長さ(19)×幅19×厚さ1.5　重量1.9g			断片	小鎌か？
23	鉄器 紡錘車	径(34)×厚さ4×孔径7　重量4.8g				軸部欠損
24	石器 石帯 巡方	長さ31×幅35×厚さ7　重量13.5g 1/3ほどを欠くが、方形な石帯具。丁寧に研磨され側縁にも丁寧に面取りされる。表面には、帯に取り付けがされる為のくぐり孔がみられる。			1/2	
25	石器 砥石	長さ69×幅32×厚さ33　重量61.8g 4砥面　上下欠損			1/2	
26	石器 紡錘車	径(53)×孔径8×厚さ15　重量9.7g 3/4ほどを欠落するが、全体的にナデ調整が加えられる穿孔部は表面がわずかに盛り上がる			1/3	





1 層	黒色土	極少量の暗褐色土が混じる
2 層	黒色土	極少量の暗褐色土がほぼ均一に混じる ロームの微粒が極少量混じる
3 層	黒色土	極少量の暗褐色土がほぼ均一に混じる ロームの微粒が極少量混じる
4 層	黒褐色土	少量の暗褐色土がほぼ均一に混じる ロームの微粒が極少量混じる
5 層	黒褐色土	少量の暗褐色土がほぼ均一に混じる ロームの微粒がやや多く混じる
6 層	黒褐色土	少量の暗褐色土がほぼ均一に混じる ロームの微粒が混じる
7 層	黒褐色土	極少量の暗褐色土がほぼ均一に混じる ロームの微粒が混じる
8 層	黒灰色土	薄った白色粘土が混じる
9 層	黒黄色土	薄ったロームと少量の暗褐色土が混じる
10 層	灰黒色土	白色粘土のブロックと黒色土少量が混じる
11 層	暗黄褐色土	薄ったロームと少量の暗褐色土が混じる
12 層	暗黄褐色土	薄ったロームが主体の土



1 層	暗褐色土	白色粘土微粒含
2 層	暗灰褐色土	薄った白色粘土がほぼ均一に混じる
3 層	灰色土	白色粘土ブロック
4 層	灰褐色土	白色粘土と山砂をこねたもの
5 層	赤灰褐色土	白色粘土と山砂が火熱を受けて赤色したもの
6 層	暗灰褐色土	暗褐色土と薄った白色粘土がほぼ均一に混じる
7 層	暗褐色土	少量の薄った白色粘土が混じる
8 層	暗褐色土	白色粘土が殆どない
9 層	暗赤灰褐色土	火熱受けて赤色化した白色粘土と白色砂土が混じる
10 層	暗黄褐色土	薄ったロームが主体。白色粘土が少量混む

図104　A161

A161

検出地区　　L7-8-1・2・3・4gにて検出した。

遺　　構　　長軸4.20m×短軸4.38m×壁高0.64m、主軸方位はN-11°-Eを示している。平面形は隅丸方形である。床は、全体としてハードロームの地床である。しかし住居跡の３コーナーはソフトロームとハードロームの地床で、北コーナーはハードロームの地床となる等、ハードローム最上部を床面としていることが捉えられた。主柱穴間にドーナツ状に硬化面を検出し、その環の中は被熱により淡く赤変しており、やや凹んだ床となっている。主柱穴はP1～P4の４基が検出され、周溝内に17基の壁柱穴を確認し

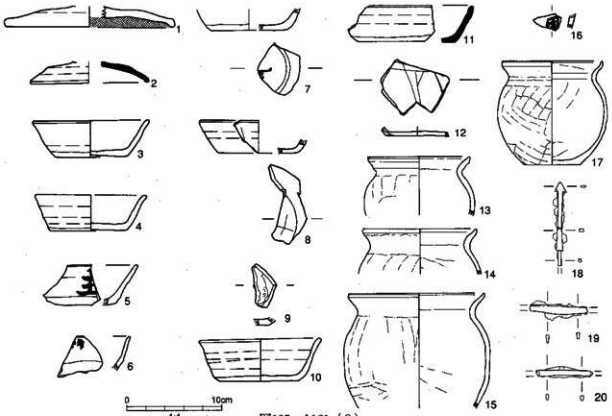


図105　A161（2）

た。また、西壁周溝外に4基の小さなピットを検出した。主柱穴の覆土は暗褐色土または黒褐色土で、堆積状況から引抜きと捉えられた。P2・P3は、周溝にかかって掘込まれていた。P6は出入口施設に伴うピットである。周溝は竈手前より巡っており、竈左袖側は竈ピットが周溝と繋がっていた。

竈は北壁中央に設けられ、竈全体が床に対して一段低くなっていた。竈袖は粘土を主体として積み上げ、袖の内壁は一部赤化していた。浅く竈ピットが掘込まれ、ほぼ中央に極めて強く赤化した火床を検出した。煙道部は、壁を細長く掘込んでいた。

覆土は下層は暗黄褐色土を、中層は黒褐色土、上層は黒色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　住居跡全体から出土しているが、出土層に偏りはなかった。17は、周溝上から床面にわって横倒した状態で出土している。出土遺物のうち実測できたものは小型甕が多く、甕の大形接合片はなかった。墨書土器が4点出土しており、「万」と「竹」が出土している。

所　見　4点ではあるが、本地区では墨書土器等の出土点数が多い住居跡である。なお、主柱穴の坑底が方形となっているが、発掘調査における掘り過ぎであったかもしれない。

表41　A161遺物観察表　（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	(180)×－×(22)　ロクロ成形 外面ヘラ削り 内面黒色処理	淡褐 普	普	1/5	内黒
2	須恵器 甕	(120)×－×(23)　ロクロ成形	青灰 普	普	1/6	
3	土師器 坏	123×74×38　ロクロ成形 底部静止糸切り後ヘラ削り 体部下端ヘラ削り　体部直線的に立ち上がる。	褐 普	普	完形	外面全体にススス付着

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
4	土師器 坏	(118)×80×32　ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部は直線的に立ち上がってゆく。	褐 普	普	1/4	内面にスス付着
5	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り	褐 普	普	口縁片	墨書「田」 体部外面正位
6	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 体部下端ヘラ磨き	褐 普	普	体部片	墨書「竹」 体部外面正位
7	土師器 坏	－×(84)×(23)　ロクロ成形 底部静止糸切り後 ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	褐 普	普	底部片	墨書「万」？ 底部外面
8	土師器 坏	(124)×(84)×35　ロクロ成形	明橙褐 普	普	口縁片	線刻「[illegible]」 体部外面 線刻「[illegible]」 底部外面
9	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	橙褐 普	普	底部片	底部内面にスス付着
10	土師器 坏	128×84×45　ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	黒褐 普	普	2/3	
11	須恵器 坏	－×－×38　ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	灰 普	普	口縁～ 底部	
12	土師器 坏	－×－×(9)　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り	黒褐 普	普	底部片	線刻「□」 底部内面
13	土師器 小型甕	107×－×(62)　輪積 外面　口縁～頸部－ヨコナデ、胴部～ヘラ削り 内面　ナデ　口縁～受け口状　頸部～「く」の字状	橙褐 普	普 砂粒多 雲母多	1/4以下 口縁～ 胴部片	
14	土師器 小型甕	120×－×(48)　輪積 外面　口縁～頸部～ヨコナデ　胴部～ヘラ削り　口縁～受け口状 内面　口縁～頸部～ヨコナデ　胴部～斜位のナデ	赤褐 普	普 砂粒多 雲母多	1/4以下 口縁～ 胴部片	
15	土師器 小型甕	144×－×(121)　輪積 外面　口縁～頸部～ヨコナデ　胴部上半～縦位ヘラ削り 下半～斜位ヘラ削り　口縁～受け口状 内面　口縁～胴上半～ヨコナデ　下半～斜位のナデ	褐 普	普 砂粒多 雲母多	1/4 口縁～ 胴部片	
16	土師器 甕	－×－×－	褐 普	普 砂粒若干	胴部片	墨書「□」 胴部外面
17	土師器 小型甕	105×58×(110)　輪積 外面　口縁～頸部～ヨコナデ　胴部～斜位ヘラ削り 内面　口縁～頸部～ヨコナデ　胴部～斜位ナデ　口縁～受け口状 胴部～やや上半に膨らみを持つ	橙褐 普	普 砂粒多 雲母多	2/3	内外面にスス付着
18	鉄器 鎌	長さ(8.8)×幅(0.6)×厚さ(0.3)　重量(8.5g)				
19	鉄器 刀子	長さ(6.0)×幅(0.85)×厚さ(0.3)　重量(6.1g)				
20	鉄器 刀子	長さ(5.5)×幅(0.6)×厚さ(0.3)　重さ(3.7g)			茎子	

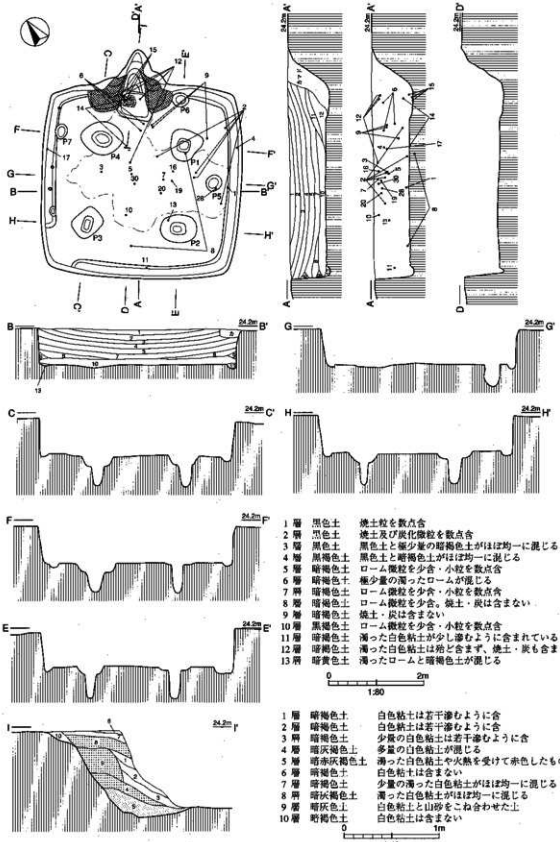


図106 A162

A162

検出地区　L7-7-2・4g、L7-8-1gにて検出した。

遺　構　長軸4.12m×短軸4.21m×壁高0.81m、主軸方位はN-45°-Eを示している。平面形は隅丸方形である。床はハードロームの地床で、竈前から住居跡中央、そして出入り口施設のP5へ斜めに硬化面を

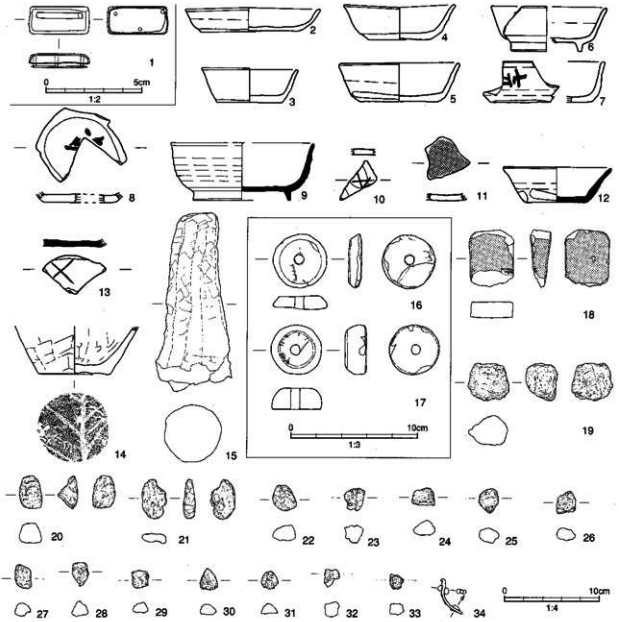


図107　A162（2）

検出した。主柱穴はP1～P4であったが、壁柱穴は明確にできなかった。P7は支柱穴である。P5は竈方向ではないが、出入口施設に伴うピット捉えた。周溝は竈袖下から始まり、住居跡西コーナーにて途切れるものであった。　竈は北西壁中央に設けられており、粘土を主体に太く竈袖を積み上げていた。浅くやや方形に掘込まれた竈ピットの竈左袖寄りに火床を検出した。煙道部は壁を丸みを持つ三角形状に掘込んでいた。

覆土は下層が黒褐色土であり、中層が暗褐色土、上層が黒褐色土の自然堆積であった。

遺　　物　　遺物の出土は多い住居跡であり、このため特に出土傾向はなかった。

1の巡方は覆土下層の出土であり、床から10cmほど浮いて出土している。出土位置から本住居跡には直接伴わないと考えられる。15の支脚は竈内の左袖寄りに火床より5cm程浮いて出土している。墨書土器は2点、線刻土器2点が出土している。

本住居跡の出土遺物の特徴は定形化されない、軽石が多量に出土していることである。15点を図示したが、研磨痕が認められた。また、18は砥石であるが減りが大きいものであった。

所　見　掘込みの深い竪穴住居跡であり、そのためか主柱穴の掘込みも大きく深いものである。遺物は全体から出土しており、出土傾向を把握できるものではなかった。

出土遺物については、軽石が多量に出土していることが特徴としてあげられよう。いずれも小さなもので、定形化した器形はなかった。加工痕が不明瞭であり、当初から定形化したものではなかったかもしれない。本住居跡からは出土していないが、細く溝状に数条の裂目状の研磨痕があるものが出土しており、金属器、特に刀子等の刃研ぎの砥石としての利用ではないかとされている。

表42　A162遺物観察表　(単位mm)

No.	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	鋼製品 鉈	64×29×厚さ15			完形	
2	土師器 整状坏	142×(100)×26　ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	橙褐 普	普	4/5	
3	土師器 坏	100×68×37　ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラ削り　体部は直線的に立ち上がる。	褐 普	普	略完形	
4	土師器 坏	118×65×34　ロクロ成形 底部回転糸切りののち、ヘラ削り	灰褐 普	普	2/3	
5	土師器 坏	(128)×84×42　ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部は直線的に立ち上がる。	褐 普	普	1/3	
6	土師器 高台付坏	(116)×台部径(76)×47　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り	橙褐 普	普	1/5	
7	土師器 坏	－×－×43　ロクロ成形 底部静止糸切りののち、ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	淡褐 普	普	口縁～ 底部	墨書「七万」 体部外面横位
8	土師器 坏	－×(74)×(11) 底部静止ヘラ切り	淡褐 普	普	底部片	墨書「宿聞」？ 底部外面
9	須恵器 高台付坏	(150)×台部径(102)×61　ロクロ成形 体部回転ヘラ切り　後高台部を取りつける。高台部ナデ調整 体部下端一部ヘラ削り	灰 普	普	1/4	
10	土師器 坏	－×－×－	褐 普	普	底部片	線刻「図」 底部外面
11	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	黒褐 普	普	底部片	内外面スス付着
12	須恵器 坏	114×66×37　ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	褐 普	普 砂粒若干	3/4	
13	須恵器 坏	－×－×－	青灰 普	普	底部片	墨書「×」 底部外面
14	土師器 甕	－×75×(51)　輪積 外面ヘラ削り　内面ヘラナデ 底部　木葉痕　やや「上げ」底	橙褐 普	普 粗砂粒 雲母多	1/4 以下 胴～底 部	

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
15	土製品 支脚	残存長－190　幅－40～78 円錐状を呈し、外面はヘラ削り調整される。 下部欠損	橙褐 普	普 砂粒多	略完形	
16	石器 紡錘車	径42×孔径8×厚さ11　重量23.9g 薄手で粗雑な作りであり、繊状痕なども残されていることから、 紡錘車ではなく、発火具の鍐ないしは加工用の舞錐のはずみ車であった可能性も考えられる。孔はやや片寄って穿たれている。			略完形	滑石
17	石器 紡錘車	径39×孔径7×厚さ17　重量46.2g 全体的に丁寧な作りで平滑。上面を中心に放射状の線状痕を残す。			完形	蛇紋岩
18	石器 砥石	長さ66×幅47×厚さ22　重量77.7g 5砥面。一端が欠損。1面に溝状痕。1面に穿孔			3/1	凝灰石
19	石器 軽石	長さ39×幅47×厚さ33　重量16.1g 不整な円形　一部凹凸が明瞭な加工痕はみられない			断片	砥石か？
20	石器 軽石	長さ34×幅24×厚さ21　重量5.0g 断面三角形　全体に研磨痕を有す			断片	砥石か？
21	石器 軽石	長さ42×幅31×厚さ13　重量5.5g 一部が欠落するが平板な楕円形を呈する 両面に弱い摩擦痕			断片	砥石か？
22	石器 軽石	長さ28×幅25×厚さ16　重量1.9g 不整楕円形、側面を中心に弱い磨痕			断片	砥石か？
23	石器 軽石	長さ24×幅22×厚さ18　重量1.8g 不整形、全体に剥離あり、加工痕は不明瞭			断片	砥石か？
24	石器 軽石	長さ19×幅24×厚さ16　重量2.5g 半欠、一部が凹むが明瞭な 加工痕はみられない			断片	砥石か？
25	石器 軽石	長さ26×幅21×厚さ16　重量2.8g おむすび形を呈する　一部が凹むが加工痕は不明瞭			断片	砥石か？
26	石器 軽石	長さ24×幅20×厚さ13　重量2.1g 不整な方形を呈する　加工痕は不明瞭			断片	砥石か？
27	石器 軽石	長さ25×幅17×厚さ14　重量2.4g 不整な方形を呈する　加工痕は不明瞭			断片	砥石か？
28	石器 軽石	長さ25×幅22×厚さ17　重量1.4g 一部が弱い研磨痕がみられるが加工痕は不明瞭、不整形			断片	砥石か？
29	石器 軽石	長さ18×幅18×厚さ11　重量0.7g 不整な方形、明瞭な加工痕みられず			断片	砥石か？
30	石器 軽石	長さ2.3×幅19×厚さ11　重量1.4g おむすび状（三角形）を呈する 一部が弱い研磨痕			断片	砥石か？
31	石器 軽石	長さ19×幅18×厚さ11　重量1.1g 半欠、略円形か？　加工痕は不明瞭			断片	砥石か？

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
32	石器 砥石	長さ19×幅17×厚さ16　重量1.7g 一部が凹むが全体的に剥落があり不整形			断片	砥石か？
33	石器 砥石	長さ16×幅15×厚さ12　重量1.0g 加工痕は不明瞭であり、形状も不整形			断片	砥石か？
34	鉄器 角釘	長さ(42)×幅７×厚さ7　重量2g 屈曲が著しく長さは直線的に計測			1/2	

A163

検出地区　L6-87-3g、L6-96-2g、L6-97-1gにて検出した。

遺　構　長軸3.80m×短軸3.53m×壁高0.49m、主軸方位はN-40°-Eを示している。平面形は隅丸方形である。床はハードロームの上部を使用した地床であるが、このため部分的にソフトロームが混在している。また、竈前は強く硬化しているが、住居跡中央から北コーナーにかけては軟弱な床であった。主柱穴は検出されなかったが、周溝内に５基、南コーナーの床面に１基の合わせて６基の壁柱穴を確認した。しかし北西壁下の周溝には、壁柱穴は確認できなかった。P1は出入施設に伴うピットであり、壁側には突固められた痕跡が認められた。周溝は、それぞれの方向に竈ピットから壁下を巡り、共に北コーナーで途切れるものであった。

竈は、北東壁中央に設けられていた。竈袖は左袖のみの遺存であり、右袖は残っていなかった。袖は粘土を主体として積み上げられ、焚き口辺りで回り込む様に壁に続いていた。また、内壁から残存した天井の赤化の範囲は広かった。竈ピットは不整形なもので、床から深く掘込んでいる。坑底にはある火床は、火熱痕を認めたが赤化には至っていなかった。煙道部は壁を浅く三角形状に掘込んでいる。また、竈は、人為的に壊したことを窺わせている。

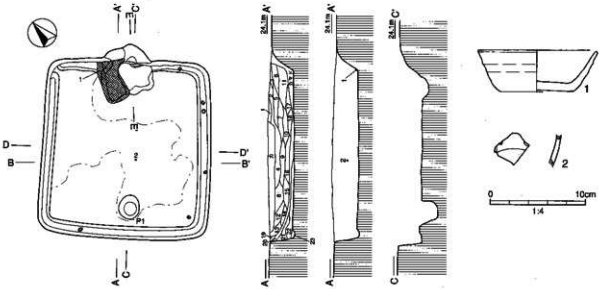
竈西側の北西壁から、竈前の床に流れ込んだように粘土が検出された。覆土は20層以下が自然堆積であり、住居埋没後に掘返され、その後は様々な土による、人為堆積であった。

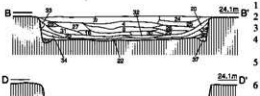
遺　物　出土遺物は少なかった。また、実測可能土器は更に少なく、図示したものだけであった。１は竈左脇の床から、粘土範囲に伏せて置かれた様な出土であった。２は割れ口に僅かに墨書の一部を認めている。

所　見　住居廃絶後に自然堆積によって埋没し、その後、掘返した竪穴住居跡である。掘返した後には、土砂投入による人為堆積で再び埋没したものである。床面及び掘返しの後の面には、火の使用跡等が認められないので、人為的投入の目的は不明である。

表43　A163遺物観察表　（単位mm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	125×78×43　ロクロ成形 底部回転糸切り 体部は直線的に立ち上がる	褐 普	普	略完形	
2	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 体部下端ヘラ削り	㊀褐 ㊁淡褐 普	普	体部片	墨書「□」 体部外面

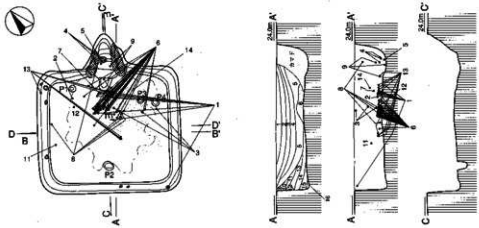


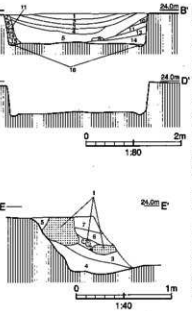


1 層　暗褐色土　若干の白色粘土が微粒含
2 層　暗褐色土　暗褐色土主体
3 層　暗褐色土　一部分に白色粘土少含
4 層　暗褐色土　白色粘土を微粒含
5 層　暗褐色土　濁ったロームがほぼ均一に混じる
6 層　暗褐色土　暗褐色土主体
7 層　赤灰褐色土　火熱を受けて赤色した白色粘土
8 層　暗赤褐色土　焼土やロームや濁った白色粘土混じる

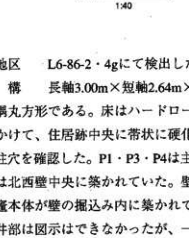
1 層　黒褐色土　褐色土が混じる。ローム粒含
2 層　黒褐色土　褐色土が混じる。ローム粒が極微粒含
3 層　暗褐色土　褐色土を主体とした土に黒色土が混じる。ローム粒含
4 層　暗黄褐色土　褐色土を主体とした土に黒色土が混じる。多量にローム粒と径20cm前後のロームブロック含
5 層　暗褐色土　褐色土を主体とした土に少量の黒色土が混じる。ローム粒と径８cm前後のロームブロック含
6 層　暗黄褐色土　褐色土を主体とした土に少量の黒色土が混じる。ローム粒と径５～10cm前後のロームブロックやや多含
7 層　暗黄褐色土　褐色土を主体とした土に少量の黒色土が混じる。ローム粒と少量の焼土粒含。径10～15cm前後のロームブロック含
8 層　黄褐色土　褐色土を主体とした土に径５cm前後のロームブロック多含
9 層　暗黄褐色土　黒色土を主体とした土に褐色土が混じる
ローム粒、ロームブロック多含
10 層　黒褐色土　黒色土を主体とした土に褐色土が混じる
径20mm前後のロームブロック含
11 層　黒褐色土　黒色土を主体とした土に褐色土が混じる。炭化粒・粘土粒・ローム粒含。径20mm前後のロームブロック含
12 層　暗黄褐色土　黒色土を主体とした土に褐色土が混じる
ローム粒・ロームブロック多含
13 層　暗黄褐色土　褐色土を主体とした土に黒色土が少量混じる。ローム少含
ローム粒多含。径20mm前後のロームブロック含
14 層　暗黄褐色土　褐色土を主体とした土に黒色土が少量混じる。ローム粒多含
15 層　黒褐色土　黒色土を主体とした土に褐色土が混じる
ローム粒・ロームブロック多含
16 層　暗黄褐色土　褐色土を主体とした土に黒色土が少量混じる
ローム粒・ブロック含
17 層　暗灰褐色土　褐色土を主体とした土に黒色土と白色粘土が少量混じる
ローム粒・焼土粒含
18 層　暗灰褐色土　黒色土を主体とした土に白色粘土が少量混じる
ローム粒・粘土粒含
19 層　黒褐色土　黒色土を主体とした土。
20 層　暗褐色土　黒色土を主体とした土に褐色土が混じる。ローム多含
21 層　暗黄褐色土　ソフトローム主体とした土に黒色土が混じる
22 層　暗黄褐色土　黒色土を主体とした土に床面のソフトロームが混じる
23 層　黄色土　ソフトローム主体とした土
24 層　暗褐色土　褐色土を主体とした土に黒色土が混じる。ローム多含
25 層　暗黄褐色土　褐色土を主体とした土に黒色土と
径30mm前後のロームブロックが混じる
26 層　暗灰褐色土　褐色土を主体とした土に黒色土と少量の粘土粒が混じる
ローム多含
27 層　暗黄褐色土　褐色土を主体とした土に黒色土が混じる
径10mm前後ロームブロック含
28 層　褐色土　褐色土を主体とした土
ローム粒・径10mm前後のロームブロック含
29 層　暗黄褐色土　褐色土を主体とした土。ローム粒・ロームブロック多含
30 層　暗褐色土　黒色土を主体とした土に褐色土が混じる。ローム粒多含
31 層　黄褐色土　褐色土を主体とした土。ローム粒多含。黒色土も斑少混じる
32 層　暗褐色土　黒色土を主体とした土に褐色土が混じる。ローム粒多含
33 層　黄色土　ソフトローム主体とした土
34 層　黒色土　黒色土を主体とした土
35 層　黄色土　ソフトローム主体とした土
36 層　黒色土　黒色土を主体とした土
37 層　黒色土　黒色土を主体とした土にローム粒含

図108　A163





1 層	黒色土	ローム微粒がパラパラと少し含まれる
2 層	黒色土	部分的に少し白色粘土粒が滲むように極少量混じる ところがある。ローム微粒がパラパラ含む
3 層	黒色土	部分的に薄ったロームと滲むようなローム粒がパラパラと少量混じる
4 層	黒褐色土	黒色土と暗褐色土がほぼ均一に混じ合った土
5 層	暗黄褐色土	暗褐色土と薄ったロームが粗く混じる土
6 層	暗赤褐色土	焼土と暗褐色土が混じり合った土
7 層	暗褐色土	主体である
8 層	暗黄色土	薄ったロームが主体となる土
9 層	暗褐色土	主体である
10 層	黒色土	少量量の暗褐色土が混じり合った土
11 層	黒褐色土	暗褐色土がほぼ均一混じり合った土
12 層	黒黄色土	薄ったロームが主体となった土
13 層	黒褐色土	暗褐色土がほぼ均一に混じり合った土
14 層	黒褐色土	黒色土と褐色土がほぼ均一に混じり合った土に薄った ロームが極少量滲むようにある
15 層	黒褐色土	暗褐色土と薄った褐色土が均一に混じり合った土
16 層	暗黄褐色土	薄ったロームが主体となる



1 層	灰褐色土	白色粘土と山砂がこね合わされた土
2 層	暗褐色土	少し白色粘土が混じっている
3 層	暗褐色土	若干白色粘土が部分的に混じり合っている
4 層	暗赤灰褐色土	白色粘土や山砂が中心となる土
5 層	暗褐色土	暗褐色土と褐色土がほぼ均一の混じり合っている土
6 層	暗褐色土	白色粘土が微粒に少し含まれる土
7 層	暗黄褐色土	薄ったロームが均一に混じり合った土

図109　A164

A164

検出地区　L6-86-2・4gにて検出した。

遺　構　長軸3.00m×短軸2.64m×壁高0.65m、主軸方位はN-42°-Eを示している。平面形は、横軸の長い隅丸方形である。床はハードロームの上部で、ソフトロームもみられる地床である。竈前から出入口にかけて、住居跡中央に帯状に硬化面を検出地区を検出した。主柱穴は不明であったが周溝内に7基の壁柱穴を確認した。P1・P3・P4は主柱穴とは捉えられなかった。周溝は竈袖下から壁下を巡っている。

竈は北西壁中央に築かれていた。壁をやや深く掘込み、煙道部と共に竈袖もその中に殆どが残っており、竈本体が壁の掘込み内に築かれていたようである。竈袖は、粘土を主体として積み上げていた。竈の天井部は図示はできなかったが、一部崩落を免れ残っていた。また、土器の掛け穴も確認することができた竈である。焚き口から竈内にかけて、掘込みの浅い竈ピットを検出した。火床は壁の掘込み内に確認することができたが、火熱跡を認めるだけで、赤化には至っていなかった。また、竈袖内壁及び残存した天井部では広い範囲にわたって赤化していた。

竈前から住居跡中を経て南東壁脇にかけて、黒色土に焼土が混合した範囲が捉えられた。その範囲は覆土5層中であり、床から10cmほど高い位置であった。炭化材は検出されなかった。

覆土は、住居廃絶後の黒褐色土を主体とした自然堆積を示していた。しかし掘返され焼却行為が行われた後の、黒褐色土と黒色土を主体とした自然堆積も示している。

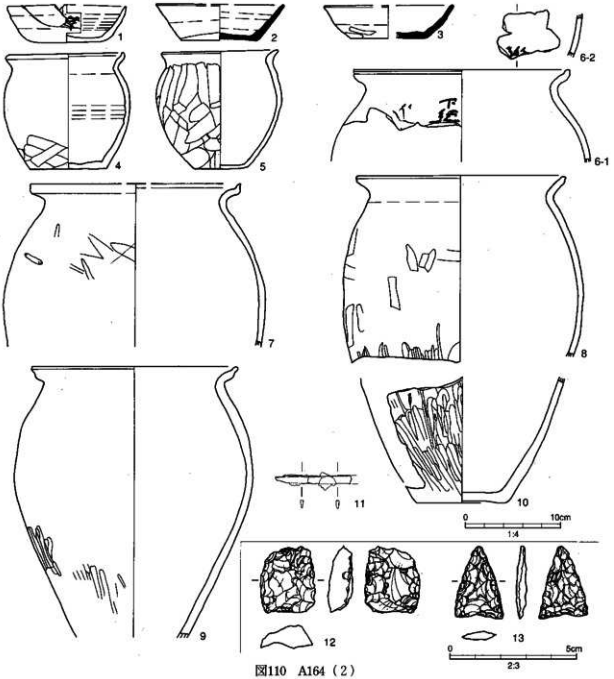


図110　A164（2）

遺　　物　　出土する遺物は、全体的に少ない竪穴住居跡であった。竈前では大形の破片の出土が多い傾向があったが、図示した遺物の殆どが覆土中層であった。4・5は竈内の火床上にやや浮いて、2点が逆さまに重なって出土したものである。5が下になり、4が倒立した5の小型甕の底部に乗るように、重ねられて出土した。

墨書土器は2点出土しているが、覆土中層の出土である。土師器坏と土師器甕に墨書されたものであるが、6は所謂「人面墨書土器」であった。

所　　見　　本住居跡は自然堆積の埋没の後、掘り返され、その穿たれた坑で焼却行為が行われた遺構と捉えた。炭化材が殆ど検出されていないので、他の類例の竪穴住居跡と異なるものであるが、焼却と投入土による消火行為、その後の再度の自然堆積と覆土は複雑な堆積状況を示していた。上谷遺跡に地区とやや異なり、本地区では焼却行為の後に人為堆積によって埋没させる遺構が少ないことを指摘しておきたい。

6の土師器甕の墨書は所謂「長文」の墨書土器である。口縁から胴部上半の遺存であるため、全文がどのように記されていたか不明であるが、「下総□/進□/(人面)」と釈文できるものであった。文字は2行に渉っているものである。そのほぼ反対側に人面の髻の一部が遺存していた。上谷遺跡の類例から各文の後に、郡名・郷名・部姓・名・目的が記され、また、年号・(月日)が記されているものと考えている。延命長寿の祈願の土器と捉えられよう。

表44　A164遺物観察表　(単位mm)

No.	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(124)×40　ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	褐 普	普	2/3	黒書「家」 体部外面横位
2	須恵器 坏	(124)×(80)×38　ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	灰 普	普 砂粒若干	1/3	
3	須恵器 坏	(136)×(80)×38　ロクロ成形 底部静止ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	灰 普	普 砂粒若干	1/3	
4	土師器 小型甕	125×78×122　ロクロ成形 胴部下端ヘラ削り	㊙橙褐 ㊙淡褐 普	普	完形	
5	土師器 小型甕	122×78×(124)　ロクロ成形 底部ヘラ切り　口縁頸部ナデ 胴部上半　縦位のヘラ削り　胴部下半斜位のヘラ削り	褐 普	普	完形	
6-1	土師器 甕	227×－×(97)　口唇をつまみ上げる（常総型） 胴部上半　細かなヘラ削り	橙褐 普	普 砂粒若干	口縁～ 胴部片	墨書「下総口」 胴部外面
6-2	土師器 甕	220×－×172　口唇をつまみ上げる（常総型） 口縁～頸部ナデ 胴部上半　斜位のへら状工具による削痕あり	暗赤褐 普	普 砂粒若干	口縁～ 胴部片	墨書「延」 胴部外面
7	土師器 甕	220×－×(198)　口唇をつまみ上げる（常総型） 口縁～頸部ナデ　頸部と胴部の境に稜をつくる 胴部上半ヘラケズリ　一部に横位の削痕あり　胴部下半ヘラ磨き	㊙褐 ㊙黒褐 普	普	1/2	
8	土師器 甕	220×(198)×－　口唇をつまみ上げる（常総型） 口縁～頸部ナデ 胴部上半ヘラケズリ　胴部下半ヘラ磨き	褐 普	砂粒若干	1/2	
9	土師器 甕	(215)×－×(198)　口唇をつまみ上げる（常総型） 口縁～頸部ナデ　胴部下半縦位の細かいヘラ削り	褐 普	普 砂粒若干	4/5	
10	土師器 甕	－×95×(131)　輪積み 底部木葉痕　胴部下半縦位の細かいヘラ削り	暗赤褐 普	普 砂粒若干	胴下半	
11	鉄器 刀子	長さ(20)×幅8.5×厚さ3　重量6.5g			刃先	
12	石器 未製品	長さ25×最大幅(21)×厚さ7.5 石鏃未製品？　縁辺に押圧剥離　右側縁はスクレーパーのエッジを思わせる角度			未製品	黒曜石
13	石器 石鏃	長さ29×最大幅(19)×厚さ3.5 剥離痕　薄い　無茎凹基石鏃　凹みは浅い			一部欠	チャート
14	土製品 鞴羽口	先端部一部残存　鉄の付着あり			破片	未掲示

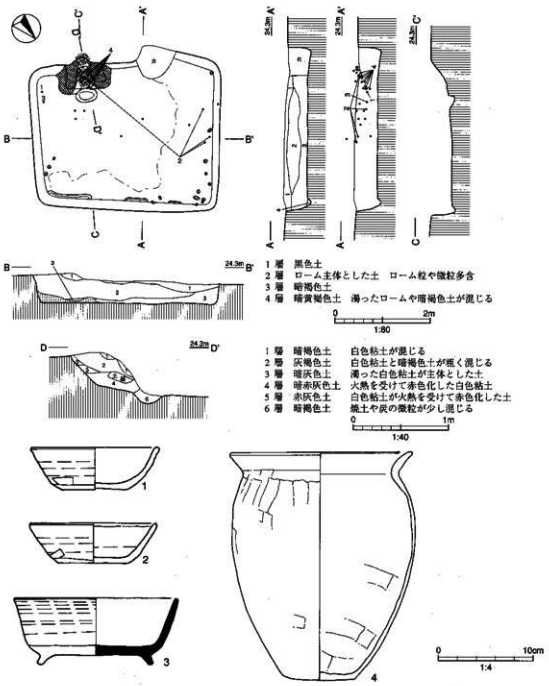


図111　A165

A165

検出地区　L6-89-3・4g、L6-96-1・2gにて検出した。

遺　構　長軸3.92m×短軸3.13m×壁高0.62m、主軸方位はN-39°-Eを示している。平面形は横軸の長い隅丸方形である。床はハードロームの地床で、住居跡北西側から北東コーナー付近まで広く硬化面を検出した。主柱穴は検出できなかったが、壁脇に不明瞭であるが、壁柱穴を14基認めている。竈直角方向の壁下に多いものである。また、出入口施設のピットも検出されなかった。また、竈前に竈ピットと一部重なるようにピットを検出している。周溝は、北西コーナーのみに断続的に掘込まれていた。

竈は南西壁の南コーナー近くに設けられており、粘土主体の竈袖を積み上げていた。煙道部は壁を浅く掘込み、竈ピット内にある火床から煙道部にかけて赤化乃至赤変しており、竈全体が火熱により赤色となる状態であった。

覆土は住居廃絶後の投入土による人為堆積と捉えられたが、複雑な堆積ではなかった。

遺　　物　　出土した遺物は極めて少なかった。床面からの出土はなく、覆土中層から上層の出土であった。1・3は、壁際に置かれた様な状態で出土していた。4は竈袖の中の赤化した内壁と天井部粘土に、挟まれた状態で出土している。横倒しとなり、押しつぶされた状態であった。

所　　見　　焼土や炭化粒がなかったということから、住居廃絶後に火の使用を伴う行為は行われなかったと捉えられた。人為的に住居跡を埋戻す行為は、上谷遺跡Ⅱ地区において顕著に捉えられた傾向であったが、本地区ではその検出数は少なくなっている。掘返しによる再堆積や人為的投入に比べて、投入土が分層できないこともあるが、瞬時に埋めていったことが窺われる竪穴住居跡である。

表45　A165遺物観察表　　(単位mm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(124)×－×40　ロクロ成形 底部静止糸切り　体部下端ヘラケズリ 体部内外面スス付着	暗赤褐 普	普	4/5	
2	土師器 坏	132×75×42　ロクロ成形 体部下端ヘラケズリ　体部内外面スス付着 底部外面スス付着	暗赤褐 普	普	略完形	
3	須恵器 高台付坏	170×台部径120×70　ロクロ成形 体部下端ヘラケズリ　ほぼ直線的に立ち上がる　高台部ナデ	灰 普	普	略完形	
4	土師器 甕	192×75×243　輪積 口縁横ナデ　胴上半縦ヘラケズリ　胴下半横ヘラケズリ 胴内部ヘラナデ	暗褐 普	粗 砂粒多	略完形	全面に 被熱痕が みられる

A166

検出地区　　L6-96-2・4gにて検出した。

遺　　構　　長軸2.98m×短軸2.80m×壁高0.57m、主軸方位はN-39°-Eを示している。平面形は、横軸の長い隅丸方形である。床はハードロームの地床であり、竈前から出入口のP1及び南コーナー付近まで硬化面を検出した。主柱穴はP2と考えられるが、1基のみの検出であった。周溝内には7基の壁柱穴を確認した。P1は出入口施設に伴うものである。周溝は竈袖下から、住居跡壁下を巡っている。

竈は北西壁中央に設けられ、竈袖は粘土を主体として積み上げられていた。竈内壁は赤変していたが、赤化には至っていなかった。竈ピット浅く掘込まれ、坑底中央に更に凹み状のピットが掘込まれていた。火床は、赤化している範囲は小さかった。煙道部は壁を凹んだ三角形状に掘込んでいた。

覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　　物　　床面から覆土下層にかけての出土が多いが、出土遺物点数としては少なかった。7の砥石は床より少し浮いて出土している。また、墨書土器が3点、線刻土器が1点出土している。3は「竹野」であり、5は墨書痕が確認できるのみであった。また、6は判読できなかった。同一住居跡から2点の土師器甕の墨書土器の出土であった。

所　　見　　出土層から本住居跡に伴うかは判然としないが、土師器甕の墨書土器が2点も出土したことは、墨書土器の出土が多い上谷遺跡でも類例が少ないことである。文字が判然としないが、文字の位置等から長文墨書の可能性は低いと考えている。